

第6章 中里見原遺跡

10-01401	須恵器瓶	16-A-20 Ⅲ層破片	口(28.6)	還・締・灰・並・夾雑物微	器厚は薄い。紐作り後轆轤整形(右回転)。付高台。	秋間産
10-01402	須恵器瓶	道東 Ⅲ層破片	底(10.0)	還・硬・灰・並・夾雑物微	紐作り後轆轤整形(右回転)。付高台。	秋間産
10-01403	須恵器瓶	14-T-19 Ⅲ層破片	底(10.0)	還・硬・灰・並・黒色粒子	紐作り後轆轤回転の篋撫で整形。付高台。	秋間産
10-01404	須恵器 把手付瓶	15-O-16 Ⅲ層破片	幅4.3 厚2.7	還・並・灰・並・夾雑物微	器内面側は平坦。大型器種か。器面は篋撫で整形。	秋間産
10-01405	須恵器 把手付瓶	25-Q-3 Ⅲ層破片	幅2.2 厚1.6	還・締・灰・並・白色微粒子	厚めの粘土板を成形し、篋撫で整形を施す。	秋間産
10-01406	須恵器 広口瓶	調査区内 Ⅲ層破片	口(26.0)・頸(17.0) ・胴(28.6)	還・締・灰白・並・夾雑物微	肩部に凸帯と4箇所一對の紐通しの耳を付す。紐作り後叩き整形。外面-平行叩き、内面宛-青海波文。	秋間産
10-01407	須恵器瓶	25-L-4 Ⅲ層破片	底(17.2)	還・軟・灰・並・夾雑物微	紐作り後轆轤整形(右回転)後器外面は縦位の篋削り。器内面は篋撫で。	秋間産

遺構外出土遺物(19)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01408	須恵器瓶	道東 表土破片	厚0.8	還・硬・灰・やや粗・シルト粗粒子	口縁部は短く外反。器外面に平行叩きか認められる。紐作り後叩き整形。器内面宛て具は不明。	秋間産
10-01409	須恵器瓶	15-R-19 Ⅲ層破片	口(20.0) 頸(19.2)	中・並・灰黄・やや粗・黒色粒子	口縁部は中位まで直立し、上半は外反する。轆轤整形右回転。	秋間産
10-01410 154	須恵器瓶	道東 Ⅲ層破片	口(18.2) 頸(16.0)	還・並・灰・並・白色粒子	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01411	須恵器 広口瓶	道東 Ⅲ層破片	口(34.4) 頸(32.0)	還・硬・灰・並・黒色粒子・白色微 粒子	口縁部は直立気味に外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01412	須恵器瓶	道東 Ⅲ層破片	口(24.8)	還・硬・灰・並・黒色粒子	口縁部は外傾する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01413	須恵器瓶	25-L-4 Ⅲ層破片	口(22.2)	還・締・灰・並・黒色粒子	口縁部は外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01414	須恵器瓶	25-Q-1 Ⅲ層破片	口(28.2) 頸(8.4)	還・並・灰・並・黒色粒子	口縁部は強く外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01415 154	須恵器瓶	25-K-4 Ⅲ層破片	口(28.2) 頸(15.6)	還・並・灰・並・夾雑物微	口縁部は外反し轆轤整形(右回転)。紐作り後叩き整形。叩き具、宛て具は不明。	秋間産

遺構外出土遺物(20)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01416 154	須恵器瓶	道東 Ⅲ層破片	底(16.0)	還・締・灰・並・黒色粒子	紐作り後轆轤整形(右回転)。底部は回転篋起こし。	秋間産
10-01417	須恵器 大甕	26-D-E-1 Ⅲ層破片	厚0.8	還・並・灰・並・夾雑物微	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き(特殊)、器内面宛て具は素文。	秋間産
10-01418	須恵器 大甕	道東 Ⅲ層破片	厚1.1	還・硬・暗灰・密・黒色粒子	外傾する口縁部。口唇部直下に凸帯と8本一単位の波状文を巡らす。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間か乗 附系
10-01419	須恵器 瓶か	16-C-19 Ⅲ層破片	厚0.5	還・締・灰・並・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。	秋間産
10-01420	須恵器 瓶か	16-C-19 Ⅲ層破片	厚0.6	還・締・灰・並・白色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文、轆轤再整形。	秋間産
10-01421	須恵器 瓶か	15-M-20 Ⅲ層破片	厚0.5	還・並・灰・並・夾雑物微	細片のため詳細不分明。戯画か。	秋間産
10-01422	須恵器 大甕	道東 Ⅲ層破片	口(42.0)	還・並・灰・並・夾雑物微	外反する口縁部に5本一単位の波状文を4段に施す。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01423	須恵器 大甕	25-Q-5 Ⅲ層破片	口(59.0)	還・並・暗灰・並・黒色粒子・白色 粒子	外反する口縁部に5本一単位の波状文を二条で2段に施す。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産

遺構外出土遺物(21)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01424	須恵器 大甕	25-L-3 Ⅲ層破片	厚0.8	還・並・灰・並・夾雑物微	紐作り後叩き整形。器外面は叩き具は不詳、器内面宛て具は素文。轆轤再整形。	秋間産
10-01425	須恵器 大甕	道西斜面 表土破片	厚1.0	還・硬・灰・並・黒色粒子	紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01426	須恵器 大甕	24-Q-5 Ⅲ層破片	厚1.5	還・並・灰・並・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。器内外面撫で再整形。	秋間産
10-01427	須恵器 大甕	25-R-4 Ⅲ層破片	厚1.1	還・並・灰・並・夾雑物微	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。	秋間産
10-01428	須恵器 横瓶か	道西 表土破片	厚0.7	還・並・灰・並・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産
10-01429	須恵器 大甕	道東 Ⅲ層破片	厚1.7	還・硬・灰・並・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。	秋間産
10-01430	須恵器 横瓶	道東 Ⅲ層破片	厚0.8	還・締・灰・並・シルト粒子・シル ト粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産

第2節 発見された遺構・遺物

遺構外出土遺物(2)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01431	須恵器 大甕	道西 表土破片	厚1.4	還・硬・灰・並・白色粒子・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。	秋間か乗 附系
10-01432	須恵器 大甕	道東 III層破片	厚1.0	還・締・灰・並・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は細かな目の平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産
10-01433	須恵器 大甕	道西 表土破片	厚1.2	還・硬・灰・並・白色粒子・黒色粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産
10-01434	須恵器 大甕	道東 III層破片	厚1.4	還・硬・暗灰・並・黒色粒子・シルト粗粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。青海波文は、樹木の小口部分だけで作られている。比較的樹齢の経ったものを使用している。	秋間産
10-01435						

遺構外出土遺物(3)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01436	須恵器 大甕	道東 III層破片	厚1.5	還・並・灰白・並・シルト粗粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産
10-01437	須恵器 転用円盤	25-L-4 III層破片	厚0.9	還・硬・灰・並・シルト質	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩きの方向を変えている(正格子状)、器内面宛て具は素文か。	秋間産
10-01438	須恵器 大甕	26-D-E-1 III層破片	厚1.1	還・硬・灰・並・白色鉍物粒子	紐作り後叩き整形。器外面は細かな目の平行叩き、器内面宛て具は大きく素文。	秋間産
10-01439	須恵器 大甕	24-R-1 III層破片	厚1.0	還・並・灰・並・夾雑物微	紐作り後叩き整形。器外面は正格子叩き、器内面宛て具は青海波文、導管方向に亀裂か。	秋間産

遺構外出土遺物(4)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01440	須恵器 鉢	26-D-E-1 III層破片	口(18.0)	還・硬・灰・並・白色微粒子	口唇部は折れ口状になっている。轆轤成整形右回転。	秋間産
10-01441	須恵器 甕	15-I-18 III層破片	口(22.0)・頸(20.2) ・胴(25.2)	還・硬・灰・並・夾雑物微	肩部は張り、口縁部は「く」の字状に外反する紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01442	須恵器 鉢	24-N-3 III層破片	口(20.6)	還・締・灰・並・黒色粒子	器厚は薄い。緩やかに立ち上がる胴部から口縁部は短く外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01443	須恵器 甕	第1号道跡 覆土破片	口(24.0)・頸(19.8) ・肩(23.6)	還・硬・灰・並・黒色粒子	肩部は張り、口縁部は「く」の字状に外反する紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01444 154	須恵器 鉢	25区内 III層破片	口(29.4)・頸(26.0) ・胴(28.0)	還・並・灰・並・黒色粒子	胴部の丸味は強い。口縁部は折れ口状で「く」の字状に外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01445	須恵器 鉢	25-T-4 III層破片	口(31.2)・頸(28.8) ・肩(30.2)	還・並・灰白・並・夾雑物微	口縁部は「く」の字状に外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01446	須恵器 広口甕	25-S-4 III層破片	口(36.0) 頸(33.8)	還・並・外-黒灰・内-灰・並・夾雑物微(器外面の黒色燻し焼成)	口縁部は「く」の字状に外反する。紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は素文。	秋間産

遺構外出土遺物(5)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01447 154	須恵器 鉢	25-K-4 III層破片	口(41.8)・頸(39.6) ・胴(43.4)	還・締・灰・並・黒色粒子	口縁部は「く」の字状に外反。紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は青海波文。	秋間産
10-01448	須恵器 鉢	道東 表土破片	肩(37.4)	還・硬・灰・並・黒色粒子・白色微粒子	口縁部は直立気味に外反する。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01449	須恵器 鉢	道東 III層破片	頸(38.4) 胴最(44.2)	還・並・オリーブ灰・並・シルト粗粒子	紐作り後叩き整形。器外面は平行叩き、器内面宛て具は不詳。器内面は荒い刷毛状の撫で再整形。	秋間産
10-01450 154	須恵器 鉢か	第1号道跡 覆土破片	底(9.0)	還・締・灰・並・白色粒子	立ち上がり腰部の丸味は強い。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01451	須恵器 羽釜	26-C-3 III層破片	口(19.4) 鏝(23.0)	中・並・灰黄・並・夾雑物微	鏝直下から縦位の腕削り。鏝は貼り付け。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01452	須恵器 羽釜	道西 表土破片	口(.22.0) 鏝(27.6)	酸・硬・鈍黄橙・並・白色粒子	器厚は薄い。極度に球形の胴部。鏝は貼り付け。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-01453	須恵器 羽釜	15-K-15 III層破片	鏝(30.0)	還・並・灰白・並・白色微粒子	埴輪の籠状の鏝を有する。轆轤成整形右回転。	秋間産

遺構外出土遺物(6)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01454 154	施釉陶器 灰釉 碗	遺跡周辺 III層1/2残	口(16.6)・高5.3・底 8.0	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗りか。	東海系
10-01455 154	施釉陶器 灰釉 碗	15-K-18 III層破片	口(15.6)・高4.7・底 (8.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01456 154	施釉陶器 灰釉 碗	道西 表土破片	口(14.8)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛け。	東海系
10-01457 154	施釉陶器 灰釉 碗	調査区内 III層破片	底(8.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系

第6章 中里見原遺跡

10-01458 154	施釉陶器 灰釉 碗	14-Q-20 III層破片	底(8.2)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。器内外面に釉が認められる。	東海系
10-01459	施釉陶器 灰釉 碗	道東 III層破片	底(7.6)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01460 154	施釉陶器 灰釉 碗	24-M-2 III層破片	底(8.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01461 154	施釉陶器 灰釉 碗	15-P-17 III層破片	底(7.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗りか。	東海系
10-01462	施釉陶器 灰釉 碗	道東 表土破片	底(7.3)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。釉の付着が認められない。	東海系
10-01463	施釉陶器 灰釉段皿	14-Q-20 III層破片	口(13.6)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01464	施釉陶器 灰釉 碗	道東 表土破片	底(6.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01465 154	施釉陶器 灰釉 皿	26-A-3 III層破片	底(7.2)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。所謂K-14か。	東海系
10-01466 154	施釉陶器 灰釉 皿	第1号道跡 覆土破片	口(15.6)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01467	施釉陶器 灰釉段皿	15-P-20 III層破片	口(17.8)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	東海系
10-01468	施釉陶器 灰釉 皿	26-D-E-1 III層破片	厚0.5	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	東海系

遺構外出土遺物(7)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01469	施釉陶器 灰釉 皿	25-E-3 III層破片	底7.0	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は刷毛塗り。	東海系
10-01470	施釉陶器 灰釉耳皿	16-C-20 III層破片	底(5.2)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	東海系
10-01471	施陶 灰 釉長頸瓶	24区西側 III層破片	口(11.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01472	施陶 灰 釉長頸瓶	第1号道跡 覆土破片	口(12.0)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01473	施陶 灰 釉長頸瓶	15区内 III層破片	頸(5.8)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01474	施陶 灰 釉長頸瓶	24区西側 III層破片	底(13.2)	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01475	施釉陶器 灰釉 瓶	15-P-18 III層破片	厚0.5	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01476	施陶 灰 釉長頸瓶	25-R-1 III層破片	厚0.35	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉は浸掛けか。	東海系
10-01477	施釉陶器 灰釉蓋か	14-R-20 III層破片	厚0.8	還・締・白灰・密・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	東海系
10-01478	施釉陶器 緑釉 皿	14-S-19 III層破片	口(12.0)・高2.5・底(4.0)	還・締・黄灰・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	美濃産か
10-01479	須恵器 羽釜か	東斜面 表土破片	厚0.7	酸・並・鈍橙・並・石英雲母片岩	紐作り後轆轤整形(右回転か)。器内面有機質が付着する。	吉井・藤岡産
10-01480	施釉陶器 緑釉 碗	道東 表土破片	厚0.4	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01481	施釉陶器 緑釉 碗	15-O-20 III層破片	厚0.45	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01482	施釉陶器 緑釉 碗	24-S-1 III層破片	厚0.35	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01483	施釉陶器 緑釉 碗	25-N-2 III層破片	厚0.4	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01484	施釉陶器 緑釉 碗	第1号道跡 覆土破片	厚0.3	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01485	施釉陶器 緑釉 碗	15-L-17 III層破片	厚0.4	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01486	施釉陶器 緑釉 碗	道東 表土破片	底(7.2)	還・軟・灰白・並・夾雑物微	轆轤成整形(右回転)。施釉方法は不明。	洛北産
10-01487	土製品 土錘	24-R-4 III層破片	長3.6・幅2.0・厚1.9	酸・並・鈍橙・並・黒色鈹物粒子	器形は歪んでいる。	産不詳
10-01488	土製品 土錘	25-S-3 III層破片	長4.2・幅1.9・厚1.9	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鈹物粒子	両端の口径は小さいが、中央部は膨れている。	産不詳
10-01489	土製品 土錘	24-Q-4 III層破片	長4.3・幅1.4・厚1.5	酸・並・鈍橙・並・黒色鈹物粒子	10-01488に形状が類似する。	産不詳
10-01490	土製品 土錘	道東 III層破片	長5.9・幅1.7・厚1.6	酸・並・鈍橙・並・黒色鈹物粒子	細長く紡錘状を呈する。	産不詳
10-01491	土製品 不詳	14-S-19 III層破片	残存長5.5・幅2.7・底3.9	酸・並・浅黄橙・並・黒色鈹物粒子	細かい刷毛目の痕跡が認められる。何らかの脚か蓋等の摘みと思われる。	産不詳

遺構外出土遺物(28)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01492	瓦 鎧瓦	15-M-15 III層破片	計測不能	還・締・灰・並・夾雑物微	周縁部の細片。瓦当面意匠は単弁5葉文か。	秋間産
10-01493 154	瓦 男瓦	調査区内 表土破片	厚2.0	還・並・灰・並・シルト粗粒子	半裁作り。凸面は縄叩き(単軸絡状帯)後轆轤整形。縄叩きは痕跡程度に認められる。	秋間産
10-01494	瓦 男瓦	北東斜面 III層破片	厚1.7	還・硬・灰白・並・白色粒子	半裁作り。凸面は縄叩き(単軸絡状帯)後轆轤整形。縄叩きは痕跡程度に認められる。	秋間産
10-01495 154	瓦 男瓦	道東 表土破片	厚2.1	還・締・暗灰・並・シルト粒子	半裁作り。凸面は縄叩き(単軸絡状帯)後轆轤整形。縄叩きは痕跡程度に認められる。	秋間産
10-01496	瓦 男瓦	道東 III層破片	厚1.8	還・硬・灰・並・シルト粒子	半裁作り。凸面は縄叩き(単軸絡状帯)後轆轤整形。縄叩きは痕跡程度に認められる。	秋間産
10-01497	瓦 女瓦	24-O-2 III層破片	厚1.3	還・硬・灰白・並・シルト粒子・黒色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の「T」字状縄叩き。側部は寛撫で。端面面取り1回。	秋間産
10-01498	瓦 女瓦	15-Q-19 III層破片	厚1.8	還・締・灰・並・黒色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の「T」字状縄叩き。凹面模骨痕・粘土板剥ぎ取り痕。側部は寛撫で。	秋間産
10-01499	瓦 女瓦	調査区内 III層破片	厚1.8	還・締・灰・並・黒色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の「T」字状縄叩き。凹面模骨痕・粘土板剥ぎ取り痕。端面面取り1回。	秋間産
10-01500	瓦 女瓦	道東 III層破片	厚2.1	還・並・灰・並・白色粒子・砂質	一枚作り。凸面は単軸絡条体の「T」字状縄叩き。側部は寛撫で。端面に布の圧痕が認められる。	秋間産
10-01501	瓦 女瓦	道西 表土破片	厚2.0	還・並・灰・並・白色粒子・砂質	一枚作り。凸面は単軸絡条体の縄叩き施文。側部に布圧痕。端面には植物圧痕。粘土板剥ぎ取り痕。	秋間産
10-01502	瓦 女瓦	24区西側 III層破片	厚2.1	還・硬・灰・並・白色粒子・シルト粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の縄叩き施文。側部面取り3回。	秋間産

遺構外出土遺物(29)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01503 154	瓦 女瓦	道東 III層破片	厚1.8	還・締・暗灰・並・夾雑物微	一枚作り。縄叩き施文。側部には布圧痕・寛撫で。凹面模骨痕・粘土板剥ぎ取り痕。凸面離砂。	秋間産
10-01504	瓦 女瓦	道東 III層破片	厚1.7	還・締・灰・並・黒色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の縄叩き施文。側部・凸面に布の圧痕。側部は寛撫で。	秋間産
10-01505	瓦 女瓦	14区内 表土破片	厚2.4	還・硬・暗灰・並・白色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の縄叩き施文。側部に布の圧痕。側部は寛撫で。	秋間産
10-01506	瓦 女瓦	15-P-19 III層破片	厚2.0	還・硬・灰・並・白色粒子	一枚作り。凸面は単軸絡条体の縄叩き施文。側部は寛撫で。布圧痕の糸密度は濃い。	秋間産
10-01507	瓦 女瓦	14区内 III層破片	厚1.8	還・締・暗灰・並・黒色粒子・白色粒子・シルト粗粒子	桶巻造り。凸面轆轤整形(右回転)。凹面粘土板剥ぎ取り痕・模骨痕。側部面取り3回。	秋間産
10-01508	瓦 女瓦	第1号道跡 覆土破片	厚1.2	還・硬・灰白・並・白色鉱物粒子・黒色粒子	凸面不整正格子叩き整形。造りは不分明。	秋間産
10-01509	瓦 女瓦	25-R-4 III層破片	厚1.7	還・並・灰白・並・シルト粗粒子・白色粒子	凸面不整正格子叩き整形。造りは不分明。	秋間産
10-01510	瓦 女瓦	道東 表土破片	厚1.0+α	還・並・灰白・並・黒色粒子	凸面不整正格子叩き整形。造りは不分明。	秋間産
10-01511	土製品 羽口	1墳周7区 覆土破片	残存長9.5	スサは多い。素地土は粗く可塑性も少ない。夾雑物が多い。	両端を欠損する。器面の熱反応から、40度位の挿入角度が推定される。	産不詳
10-01512	土製品 羽口	1墳周7区 覆土破片	残存長4.3 厚2.5	僅かにスサを含む。素地土は可塑性が少ない。夾雑物は少ない。	先側は下端側に鉄分主体の溶解物、先端面は珪酸主体の溶解物が顕著に付着する。	産不詳
40-00127	銅製品 椀	24-K-7 III層破片	口(13.0)・重0.9g		口唇部器内面に僅かに凸帯状に肥厚する。細片のため詳細不分明。	
40-00128	鉄器 刀子	第1号道跡 覆土破片	重ね0.3・茎幅0.9・重11.2g		錆化が顕著。茎の元側と鋒側を欠損する。	
40-00129	鉄器 不詳	調査区内 III層破片	重ね0.5・重5.7g		錆化が顕著。茎と思われるが詳細不分明。	
40-00130 160	鉄器 刀子	道西 表土破片	残存長13.5・重ね0.3 ~0.4・重22.8g		錆化が顕著。研ぎ減りが顕著。茎の元側を欠損する。	
40-00131	鉄器 刀子か	15-M-15 III層破片	重ね0.2~0.4・重4.9g		錆化が顕著。茎の関側と思われる。	
40-00132	鉄器 刀子か	14-Q-20 III層破片	重ね0.4・重3.2g		錆化が顕著。詳細不分明。	
40-00133	鉄器 刀子か	14-R-20 III層破片	重ね0.25・重6.4g		錆化が顕著。関周辺の破片と思われる。詳細不分明。	
40-00134	鉄器 不詳	道東 III層破片	重ね0.25・重12.1g		錆化が顕著。板状の破片。詳細不分明。	
40-00135	鉄器 火打ち鎌	第1号道跡 覆土破片	残存長4.7・重ね0.25 ・重5.7g		錆化が顕著。三つの端部を欠損。比較的角が明瞭に残る。	
40-00136	銅塊	24区東側 III層破片	長2.5・幅2.5・厚1.2 ・重9.9g		錆化が顕著ヒビ状に膨張している。銅塊か。	
40-00137	鉄器 鎌	24-R-4 III層破片	重ね0.3・茎幅0.9・ 重18.7g		錆化が顕著。身の中央部分と考えられる。	
40-00138	鉄器 不詳	15-I-18 III層破片	残存長12.8・幅0.4・ 重13.2g		錆化が顕著。先細りする棒状製品。詳細不分明。	

第6章 中里見原遺跡

遺構外出土遺物(30)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01513	縄文土器 深鉢	15区内 表土破片	厚0.5	酸・硬・含繊維・黒・並・微粒高温 石英	RL 原体の横転施文。	産不詳
10-01514	縄文土器 深鉢	15-N-2 表土破片	厚0.8	酸・硬・含繊維・黒・並・夾雑物微	多条 LR 原体の横転施文。	産不詳
10-01515	縄文土器 深鉢	道東 表土破片	厚0.7	酸・硬・含繊維・明赤褐・並・夾雑 物微	半裁竹管の斜格子状の綾杉文。	産不詳
10-01516	縄文土器 深鉢	15-C-19 表土破片	厚0.9	酸・硬・暗赤褐・密・微粒高温石英・ 石英・白色粒子	口唇部は平坦。口唇部直下に押し引き文を左→右 に施文する。	産不詳
10-01517	縄文土器 深鉢	15-L-17 表土破片	厚0.9	酸・硬・明赤褐・密・黒色鉱物粒子・ 透明鉱物粒子・微粒高温石英	押し引き文を左←右に施文する。10-01518と同一 固体。	産不詳
10-01518	縄文土器 深鉢	14-R-19 表土破片	厚0.9	酸・硬・明赤褐・密・黒色鉱物粒子・ 透明鉱物粒子・微粒高温石英	押し引き文を施文する。10-01517と同一固体。	産不詳
10-01519	縄文土器 深鉢	15-L-17 表土破片	厚1.1	酸・並・鈍褐・並・透明鉱物粒子・ 白色粒子	押し引き文を施文する。	産不詳
10-01520	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.1	酸・並・明赤褐・並・石英雲母片岩	刻み隆帯を施文する。10-01521と同一固体。	甘菜郡域
10-01521	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.0	酸・並・明赤褐・並・石英雲母片岩	刻み隆帯を施文する。10-01522と同一固体。	甘菜郡域
10-01522	縄文土器 深鉢	25-A-2 V層破片	厚0.8	酸・並・橙・並・透明鉱物粒子・黒 色鉱物粒子	刻み隆帯と隆帯沿に列点刺突を配する。	産不詳
10-01523	縄文土器 深鉢	15-B-18 V層破片	厚0.7	酸・硬・橙・密・黒色鉱物粒子・微 粒石英	櫛描文の横位施文。生土は10-01517と同一か。	産不詳
10-01524	縄文土器 深鉢	15-P-20 V層破片	厚1.0	酸・並・橙・並・微粒高温石英・黒 色鉱物粒子	外面は櫛描文の縦位施文。内面は斜格子状に櫛描 文を施文する。	産不詳
10-01525	縄文土器 深鉢	225土坑 覆土破片	厚0.9	酸・硬・橙・密・黒色鉱物粒子・微 粒石英	櫛描文を交差状に施文する。生土は10-01517と同 一か。	産不詳
10-01526	縄文土器 深鉢	15-L-17 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍褐・並・微粒高温石英・ 黒色鉱物粒子・透明鉱物粒子	半裁竹管の縦位分割に斜位の櫛描文施文する。	産不詳
10-01527	縄文土器 深鉢	24-L-4 V層破片	厚0.6	酸・軟・橙・並・多量の石英粒	横位と綾杉状に櫛描文を施文する。10-01528と同 一固体。	吉井・藤 岡産か
10-01528	縄文土器 深鉢	24-L-4 V層破片	厚0.7	酸・軟・橙・並・多量の石英粒	横位と綾杉状に櫛描文を施文する。10-01527と同 一固体。	吉井・藤 岡産か
10-01529	縄文土器 深鉢	24区内 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・多量の石英粒	櫛描文を横位に綾杉状に施文する。10-01531と同 一固体。	吉井・藤 岡産か
10-01530	縄文土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.8	酸・並・鈍橙・並・多量の石英粒・ 黒色鉱物粒子	櫛描文を縦位に綾杉状に施文する。	吉井・藤 岡産か
10-01531	縄文土器 深鉢	24区内 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・多量の石英粒	櫛描文を横位に綾杉状に施文する。10-01529と同 一固体。	吉井・藤 岡産か
10-01532	縄文土器 深鉢	24-L-4 V層破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・多量の石英粒・ 黒色鉱物粒子	櫛描文を横位に綾杉状に施文する。	吉井・藤 岡産か
10-01533	縄文土器 深鉢	道東 III層破片	厚1.2	酸・軟・鈍黄橙・粗・多量の黒色鉱 物粒子・微粒高温石英	隆帯文の区画内に、半裁竹管縦位に沈線施文する。	産不詳
10-01534	縄文土器 深鉢	45住 覆土破片	厚0.7	酸・硬・鈍黄橙・緻密・赤褐色粒子・ 綿状シルト(軽い)	隆帯文の区画内に、半裁竹管縦位に沈線施文する。 10-01541~01543と同一固体。	秋間産
10-01535	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.6	酸・並・鈍橙・やや密・夾雑物微・ 黒色鉱物粒子(10-01536に類似)	地紋は RL 原体の縦転施文。無紋帯・懸垂文を施文 する。	産不詳
10-01536	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.6	酸・並・鈍橙・やや密・夾雑物微・ 黒色鉱物粒子(10-01535に類似)	地紋は RL 原体の縦転施文。懸垂文を施文する。	産不詳
10-01537	縄文土器 深鉢	道西 表土破片	厚1.1	酸・並・橙・やや粗・黒色鉱物粒子・ 白色粒子(軽い)	地紋は RL 原体の縦転施文。懸垂文を施文する。	秋間産か
10-01538	縄文土器 深鉢	25住 覆土破片	厚1.3	酸・硬・鈍橙・並・黒色鉱物粒子・ 白色粒子	地紋は RL 原体の縦転施文。懸垂文を施文する。	産不詳
10-01539	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.5	酸・並・鈍橙・やや密・夾雑物微・ 黒色鉱物粒子(10-01535に類似)	地紋は RL 原体の縦転施文。無紋帯・懸垂文を施文 する。	産不詳
10-01540	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.6	酸・並・鈍橙・やや密・夾雑物微・ 黒色鉱物粒子(10-01536に類似)	地紋は RL 原体の縦転施文。無紋帯・懸垂文を施文 する。	産不詳
10-01541	縄文土器 深鉢	25-A-3 V層破片	厚0.8	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・赤 褐色粒子・微粒高温石英(軽い)	地紋は多条 RL 原体の縦転施文。無紋帯・懸垂文を 施文する。10-01534・01542・3と同一固体。	秋間産か
10-01542	縄文土器 深鉢	48住 表土破片	厚1.0	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・赤 褐色粒子・微粒高温石英(軽い)	地紋は多条 RL 原体の縦転施文。3条一単位の沈線 で連弧施文する。10-01534・41・43と同一固体。	秋間産か
10-01543	縄文土器 深鉢	24-N-3 V層破片	厚1.0	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・赤 褐色粒子・微粒高温石英(軽い)	地紋は多条 RL 原体の縦転施文。3条一単位の沈線 で連弧施文する。10-01534・41・442と同一固体。	秋間産か
10-01544	縄文土器 深鉢	15-I-20 V層破片	厚1.5	酸・並・鈍黄橙・やや粗・微粒高温 石英・白色粒子	地紋に無節 L 原体の横転施文。	産不詳
10-01545	縄文土器 深鉢	25-A-3 V層破片	厚0.9	酸・並・橙・並・微粒高温石英・微 粒長石・黒色鉱物粒子	地紋は RL 原体の横転施文。附加結節(?)の横転 施文。	産不詳
10-01546	縄文土器 深鉢	15-L-17 表土破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・微粒高温石英・ 微粒石英・黒色鉱物粒子	浅く軽い刷毛撫で状の条痕文を施文する。	産不詳
10-01547	縄文土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚1.2	酸・並・明赤褐・並・黒色鉱物粒子・ 白色粒子・微粒石英	内湾する口縁部。口唇部は尖り下端が隆帯状に肥 厚する。LR 原体の充填施文。	産不詳
10-01548	縄文土器 深鉢	25-G-3 V層破片	厚1.1	酸・硬・鈍赤褐・並・黒色鉱物粒子・ 白色粒子(10-01549に類似)	内湾する口縁部。深い沈線の連弧文の上位に LR 原体の充填施文。	産不詳
10-01549	縄文土器 深鉢	15-J-19 表土破片	厚1.2	酸・硬・鈍赤褐・並・黒色鉱物粒子・ 白色粒子(10-01548に類似)	双耳の片側の基部。	産不詳

遺構外出土遺物(31)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01550	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.1	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・赤褐色粒子・白色粒子(軽い)	口縁部に列点刺突を伴う隆帯を施す	秋間産か
10-01551	縄文土器 深鉢	14-T-19 表土破片	厚1.2	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・赤褐色粒子・白色粒子(軽い)	口縁部に列点刺突を伴う隆帯を施す。隆帯直下にRL原体の横転施文。	秋間産か
10-01552	縄文土器 深鉢	道西 表土破片	厚1.0	酸・並・鈍橙・並・黒色鈷物粒子・高温石英・赤褐色粒子	口縁部直下に、刻みを施す太い隆帯を廻らす。補修孔が認められる。	産不詳
10-01553	縄文土器 深鉢	調査区内 V層破片	厚1.3	酸・並・鈍橙・並・黒色鈷物粒子・赤褐色粒子透明鈷物粒子	太く深い沈線を伴う帯縄文を幾何学構成する。原体はLR。	産不詳
10-01554	縄文土器 深鉢	25-J-5 VI層破片	厚0.9	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・黒色鈷物粒子(軽い)	沈線の幾何学構成。	産不詳
10-01555	縄文土器 深鉢	25-J-5 VI層破片	厚1.2	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・黒色鈷物粒子・白色微粒子	深い沈線を伴う弧線帯縄文。原体はLR。	産不詳
10-01556	縄文土器 深鉢	26-B-1 V層破片	厚1.5	酸・並・浅黄橙・並・黒色鈷物粒子・白色粒子	無紋部分が広い。弧線状の帯縄文を施す。	産不詳
10-01557	縄文土器 深鉢	15-B-19 V層破片	厚1.0	酸・並・鈍橙・並・黒色鈷物粒子・赤褐色粒子	無紋帯が狭い。原体はLR。	産不詳
10-01558	縄文土器 深鉢	調査区内 V層破片	厚1.0	酸・並・橙・並・赤褐色粒子・白色粒子・黒色鈷物粒子	無紋部分が広い。弧線状の帯縄文を施す。	産不詳
10-01559	縄文土器 深鉢	25-J-5 VI層破片	厚1.2	酸・並・浅黄橙・並・黒色鈷物粒子・白色粒子	無紋帯が狭い。原体はLR。	産不詳
10-01560	縄文土器 深鉢	25-J-5 VI層破片	厚1.2	酸・並・浅黄橙・並・赤褐色粒子・白色粒子	弧状沈線3条が認められる。	産不詳
10-01561	縄文土器 深鉢	15-C-20 V層破片	厚1.1	酸・並・S・鈍橙・粗・白色粒子・黒色鈷物粒子	狭長な楕円区画文にRL原体の縦転施文。	産不詳
10-01562	縄文土器 深鉢	25-R-5 V層破片	厚1.1	酸・軟・鈍橙・並・赤褐色粒子・黒色鈷物粒子・白色微粒子・透明鈷物粒子	縦位の沈線区画が認められる。	産不詳
10-01563	縄文土器 深鉢	25-Q-5 V層破片	厚1.0	酸・軟・鈍褐・並・白色微粒子・微粒石英・透明鈷物粒子	直線と曲線の沈線区画が認められる。	産不詳
10-01564	縄文土器 深鉢	第1号竪穴 覆土破片	厚0.8	酸・軟・鈍黄橙・並・黒色鈷物粒子・白色粒子	粗い横位の撫での器面に所々に沈線による文様状のものが認められる。	産不詳
10-01565	縄文土器 深鉢	318号土坑 覆土破片	厚1.2	酸・硬・浅黄橙・並・黒色鈷物粒子・白色粒子	太く深い沈線区画内にLR原体を縦転施文する。焼成前の未完通孔が2個認められる。	産不詳
10-01566	縄文土器 深鉢	218号土坑 覆土破片	厚1.0	酸・硬・鈍黄橙・並・黒色鈷物粒子・白色微粒子	無紋部分が広い。沈線文の一部が認められる。	産不詳
10-01567	縄文土器 深鉢	道東 表土破片	厚0.8	酸・硬・鈍黄橙・並・夾雑物微・黒色鈷物粒子・透明鈷物粒子	山形状の波状口縁部。口唇部直下に沈線区画の帯縄文を廻らす。原体はLRか。	産不詳
10-01568	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚1.0	酸・並・褐・並・白色粒子・黒色鈷物粒子・白色微粒子	沈線による台形状の区画文が構成される。	産不詳
10-01569	縄文土器 深鉢	第3号竪穴 覆土破片	厚1.0	酸・硬・鈍黄橙・緻密・赤褐色粒子・縞状シルト(軽い)	地紋にLR原体を施文。横位に弧線沈線文が認められる。	産不詳
10-01570	縄文土器 深鉢	25-R-4 V層破片	厚0.8	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・白色微粒子・黒色鈷物粒子	「く」の字状に屈曲して立ち上がる口縁部。横位の沈線を擦痕状に認められる。	産不詳
10-01571	縄文土器 深鉢	25-P-3 V層破片	厚0.8	酸・並・鈍橙・並・白色微粒子・黒色鈷物粒子	沈線を斜格子構成に施文する。10-01572と同一固体。	産不詳
10-01572	縄文土器 深鉢	25-P-3 V層破片	厚0.8	酸・並・鈍橙・並・白色微粒子・黒色鈷物粒子	沈線を斜格子構成に施文する。10-01571と同一固体。	産不詳
10-01573	縄文土器 深鉢	25-O-3 V層破片	厚0.8	酸・並・鈍褐・並・白色微粒子・黒色鈷物粒子	粗雑な整形面に、「8」の字状貼付文と沈線区画文を施文する。10-01574・5と同一固体。	産不詳
10-01574	縄文土器 深鉢	25-O-3 V層破片	厚0.8	酸・並・鈍褐・並・白色微粒子・黒色鈷物粒子	粗雑な整形面に、「8」の字状貼付文と沈線区画文を施文する。10-01573・5と同一固体。	産不詳
10-01575	縄文土器 深鉢	18号住 掘方破片				産不詳
10-01576	縄文土器 深鉢	15-J-19 V層破片	厚1.0	酸・並・鈍褐・並・赤褐色粒子・白色微粒子・黒色鈷物粒子	地紋に無節R原体を縦転施文する。縦位の直線沈線と斜位の沈線を施文する。	産不詳
10-01577 10-01579	縄文土器 深鉢	4号住 覆土破片	厚0.5	酸・並・鈍橙・並白色微粒子・黒色鈷物粒子	口唇部は、器内側面に屈曲し、外面には平行する紐線文と「8」の字状貼付文を施文する。	
10-01580	縄文土器 深鉢	19号住 覆土破片	厚0.5	酸・並・鈍褐・並・白色粒子・黒色鈷物粒子	口唇部直下に紐線文を2段に施文する。	産不詳
10-01581	縄文土器 深鉢	15-J-18 V層破片	厚0.6	酸・並・鈍褐・並・白色粒子・黒色鈷物粒子	紐線文と沈線に区画された内部にLR原体の横転施文する。	産不詳

遺構外出土遺物(32)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01582 155	縄文土器 深鉢	15-L-17 V層破片	厚0.6	酸・並・明赤褐・並白色粒子・黒色鈷物粒子	比較的幅の広い紐線文を施す。	産不詳
10-01583 155	縄文土器 深鉢	11号住 覆土破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子・黒色鈷物粒子	紐線文の下位に帯縄渦巻文を施す。原体はLR原体の横転施文。	産不詳
10-01584 155	縄文土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・硬・オリブ黒・並・夾雑物微・黒色鈷物粒子・白色微粒子	帯縄渦巻文の部分と思われる。LR原体の横転施文。	産不詳
10-01585 155	縄文土器 深鉢	18号住 掘方破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・黒色鈷物粒子・白色微粒子・凝灰岩片	三角形に区画された内側にLR原体を施文。	産不詳

第6章 中里見原遺跡

10-01586 155	縄文土器 深鉢	18号住 掘方破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・白色粒子・黒色 鉍物粒子・微粒高温石英	横位の帯縄文。LR 原体の横転施文。	産不詳
10-01587 155	縄文土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・橙・並・夾雑物微・凝灰岩 片	ラッパ状に外反する。横位の帯縄文。LR 原体の横 転施文。	産不詳
10-01588 155	縄文土器 深鉢	24-J-5 V層破片	厚0.5	酸・並・鈍橙・並・白色微粒子・透 明鉍物粒子	外傾する胴部。横位の帯縄文。LR 原体の横転施 文。	産不詳
10-01589 155	縄文土器 深鉢	15-L-18 表土破片	厚1.0	酸・並・赤褐・並・黒色鉍物粒子・ 透明鉍物粒子	底面は網代。1本送り1本越え2本潜り。	産不詳
10-01590 155	縄文土器 深鉢	218号土坑 覆土破片	厚0.9	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子・ 黒色鉍物粒子	地紋のない胴部に深いしっかりした沈線を窓枠状 に配する。	産不詳
10-01591 155	縄文土器 深鉢	15-C-19 V層破片	厚0.5	酸・硬・オリーブ黒・並・微粒高温石 英・白色微粒子	波状口縁部の把手部。外面から孔を穿つ。側面に 「8」の字状の加飾をする。	産不詳
10-01592 155	縄文土器 深鉢	調査区内 表土破片	厚0.6	酸・硬・鈍黄橙・並・夾雑物微・微 粒石英	細片のため、詳細不分明。	産不詳
10-01593 155	縄文土器 浅鉢	24区西側 III層破片	厚0.6	酸・硬・オリーブ黒・並・夾雑物微・ 白色微粒子	波状口縁部。LR 原体を横転施文し、平行沈線を施 し、波頂部直下に「の」の字文を配する。	産不詳
10-01594 155	縄文土器 深鉢	51号住 覆土破片	厚0.5	酸・並・オリーブ黒・並・夾雑物微・ 白色微粒子	浅い沈線が弧状に配している。口唇部は尖る。	産不詳
10-01595 155	縄文土器 深鉢	26-D-E-1 V層破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・赤褐 色粒子	内湾気味の口縁部。口唇部は横位の撫で、直下は 横位の篋削り。粗製土器か。	産不詳
10-01596 155	縄文土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・硬・オリーブ黒・並・夾雑物微・ 白色微粒子	口唇部に RL 原体の縦転施文帯縄文を施文する。 下位に渦巻文状の文様が認められる。	産不詳
10-01597 155	縄文土器 浅鉢	27号住 覆土破片	厚0.7	酸・硬・赤褐・並・黒色鉍物粒子・ 微粒高温石英	無紋の体部が外傾しながら立ち上がり、口縁部は 「く」の字に外傾して立ち上がる。文様は不分明。	産不詳
10-01598 155	縄文土器 深鉢	1号墳6区 覆土破片	厚0.7	酸・硬・鈍赤褐・並・白色粒子黒色 鉍物粒子	地紋に無節 R 原体を施し、櫛櫛で無紋帯と分け、 無紋帯直上に波状沈線区画を施す。	産不詳
10-01599 155	縄文土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・赤褐 色粒子	波状の帯縄文を施す。10-01596・01601と同一固体 か。	産不詳
10-01600 155	縄文土器 深鉢	25-L-3 V層破片	厚0.8	酸・硬・鈍黄橙・並・夾雑物微・微 粒高温石英	胴中に帯縄文を施し、特化に蛇行沈線を施す。 底面には、底部の区画沈線が認められる。	産不詳
10-01601 155	縄文土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.3	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・赤褐 色粒子	平行する波状弧線を施している。帯縄文の両端。 10-01596・9と同一固体。	産不詳
10-01602 155	弥生土器 深鉢	26-C-3 V層破片	厚0.6	酸・硬・鈍橙・並・白色鉍物粒子	斜位に浅い条痕文を施し、変形「工」字状文を沈線 表現している。	産不詳
10-01603 155	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・硬・鈍赤褐・並・夾雑物微	変形「工」字状文を沈線表現している。縄文施文と 無紋(研磨)を交互に施文する。	産不詳
10-01604 155	弥生土器 壺	1号墳丘 下VI層破 片	厚0.6	酸・並・橙・並・透明鉍物粒子シル ト粗粒子(軽い)	地紋に LR 原体の横転施文。し、横位の沈線・山形 沈線で区画する。10-01604～6は同一固体。	秋間産か
10-01607 155	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・透 明鉍物粒子・微粒石英(軽い)	LR 原体の横転施文後波状沈線を施文する。	秋間産か
10-01608 155	弥生土器 壺	第5号竪穴 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・白 色鉍物粒子・透明鉍物粒子(軽い)	蛇行沈線区画内に無節 L 原体の充填施文。	秋間産か
10-01609 155	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・透明鉍物粒子・ 白色鉍物粒子	沈線による菱形区画を構成し、LR 原体を充填施 文する。10-01612～5と同一固体。	産不詳
10-01610 155	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6			
10-01611 155	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・白色 微粒子	地紋に LR 原体の横転施文し、2条の沈線で横位 帯縄文とし、直下に綾杉文を施文する。	産不詳
10-01612 155	弥生土器 壺	1号墳丘 下VI層破 片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・透明鉍物粒子・ 白色鉍物粒子	10-01609・01610と同一固体。	
10-01616 155	弥生土器 壺	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・並・オリーブ黒・並・微粒高温 石英・透明鉍物粒子	沈線区画がみられる。LR 原体の横転施文。	産不詳
10-01617 155	弥生土器 壺	第1号基壇 地盤破片	厚0.7	酸・並・鈍褐・並・微粒高温石英・ 透明鉍物粒子・黒色鉍物粒子	帯縄文の区画内に押し引き状の列点刺突文を施文 する。	産不詳
10-01618 155	弥生土器 壺	26-A-2 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・黒 色鉍物粒子・透明鉍物粒子	帯縄文の区画内に列点刺突文を施文する。下位は 刷毛撫でを施す。	産不詳

遺構外出土遺物(33)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01619 156	弥生土器 壺	1号墳6区 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・微粒石英多	地紋に LR 原体の横転施文し、2条の沈線で横位 帯縄文とする。	産不詳
10-01620 156	弥生土器 壺	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子	地紋に LR 原体の横転施文し、3条の沈線で横位 帯縄文とする。	産不詳
10-01621 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微	地紋に LR 原体の横転施文し、4条の沈線を回ら せ、上段に沈線で山形文を表出する。	産不詳
10-01622 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微	地紋に LR 原体の横転施文し、沈線による山形文 を表出し、2条の横線を施す。	産不詳
10-01623 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.4～0.5	酸・並・橙・並・夾雑物微	雷文状の沈線を施すが詳細不分明。	産不詳
10-01624 156	弥生土器 壺	25-T-3 V層破片	厚0.7	酸・並・橙・並・夾雑物微・白色微 粒子	地紋に LR 原体の横転施文し、横線の区画内に沈 線による山形文を施文する。	産不詳

第2節 発見された遺構・遺物

10-01625 10-01632 156	弥生土器 壺	1号墳丘 下VI層破 片	厚0.4~0.5	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微	器厚は薄い。肩～頸部片。山形文を回らせ、上位に列点刺突文を施す。頸部には、LR 原体の帯状文を施す。	産不詳
10-01633 156	弥生土器 壺	道西 表土破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子	地紋に LR 原体の横転施文し、横線の区画内に沈線による山形文を施文する。	
10-01634 10-01641 156	弥生土器 壺	調査区内 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・白色微粒子	地紋に LR 原体の横転施文し、2条の沈線で横位帯縄文とし、直下に綾杉文を施文する。	産不詳
10-01642 156	弥生土器 壺	東側斜面 表土破片	厚0.6	酸・並・オリープ黒・並・微粒石英・白色鉍物粒子	3本+ α の横線による区画沈線。	産不詳
10-01643 156	弥生土器 壺	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・並・オリープ黒・並・夾雑物微	3+ α 本の横線による区画沈線。	産不詳
10-01644 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微	口唇部縄文帯部分は肥厚する。LR 原体の横転施文後沈線施文。	産不詳
10-01645 156	弥生土器 壺	1号墳6区 覆土破片	厚0.5	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・白色微粒子	口唇部縄文帯部分は肥厚する。LR 原体の横転施文。	産不詳
10-01646 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VII層破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・白色微粒子	横線区画による口唇部文様は無節Lを横転施文するが、撫での再調整に消されている。10-01647と同一個体。	産不詳
10-01647 156	弥生土器 壺	1号墳6区 覆土破片	厚0.5		10-01646と同一個体。	産不詳
10-01648 156	弥生土器 壺	1号墳丘下 VII層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微	口唇部縄文帯部分は肥厚する。LR 原体(?)の横転施文後沈線施文。器面の摩滅顕著。	産不詳
10-01649 156	弥生土器 壺	25-R-1 V層破片	厚0.6	酸・並・鈍褐・並・白色微粒子・微粒高温石英	受け口状口縁。LR 原体の横転施文に山形文を沈線施文する。	産不詳
10-01650 156	弥生土器 壺	1号墳8区 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・微粒石英・赤褐色粒子・黒色鉍物粒子	単軸絡条体Rの縦転施文。口唇部は平坦。	産不詳
10-01651 156	弥生土器 壺	11号住 覆土破片	厚0.7	酸・並・鈍橙・並・白色粒子・黒色鉍物粒子	単軸絡条体Rの横転施文。	産不詳
10-01652 156	弥生土器 壺	26-C-3 III層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・微粒高温石英・黒色鉍物粒子	RL 原体の縦転施文。一部に擬似羽状施文が見られる。	産不詳
10-01653 156	弥生土器 壺	26-C-3 III層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・微粒高温石英・黒色鉍物粒子	RL 原体の縦転し擬似羽状施文。	産不詳
10-01654 156	弥生土器 壺	26-C-3 III層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・微粒高温石英・黒色鉍物粒子	RL 原体の縦転施文。	産不詳
10-01655 156	弥生土器 壺	15-D-10 III層破片	厚0.7	酸・並・明赤褐・並・微粒高温石英・微粒石英	無節L 原体の横転施文。	産不詳
10-01656 156	弥生土器 甕	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・微粒高温石英	口唇部は丸く、粗い刻みを施し波状口縁を表出する。LR 原体の横転施文。	産不詳
10-01657 156	弥生土器 甕	1号墳2区 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・微粒高温石英	口唇部は丸く、小刻みに刻みを施し波状口縁を表出する。口唇部直下から横位に櫛描文を施す。	産不詳
10-01658 156	弥生土器 甕	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・暗赤褐・並・夾雑物微・白色粒子	口唇部は丸く、刻みを施し波状口縁を表出する。口唇部直下から横位に条痕文を施す。	産不詳
10-01659 156	弥生土器 甕	1号墳2区 VI層破片	厚0.8	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・黒色鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、横位に条痕文施文する。	産不詳
10-01660 156	弥生土器 甕	24-I-7 表土破片	厚0.8	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微	横位に櫛描文を施す。10-01662と同一個体。	産不詳
10-01661 156	弥生土器 甕	1号墳丘下 VI層破片	厚0.8	酸・並・黒褐・並・夾雑物微・透明鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、横位に条痕文施文する。	吉井・藤岡産か
10-01662 156	弥生土器 甕	1号墳9区 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微	横位に櫛描文を施す。10-01660と同一個体。	産不詳
10-01663 156	弥生土器 甕	1号墳9区 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍赤褐・並・微粒高温石英	半裁竹管状の工具により、横位に条痕文施文する。	産不詳

遺構外出土遺物(34)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 目 (cm) 量 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01664 157	弥生土器 甕	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍橙・並・白色粒子・黒色鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01665 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・微粒石英・黒色鉍物粒子	横位の刷毛撫でを施す。	産不詳
10-01666 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・並・暗赤褐・並・微粒石英・黒色鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01667 157	弥生土器 深鉢	1号墳9区 VI層破片	厚0.5	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01668 157	弥生土器 深鉢	1号墳9区 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・微粒石英	竹管による円形文を施し、これを避けるように半裁竹管状の工具により、横位に条痕文施文する。	産不詳
10-01669 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・黒色鉍物粒子・微粒石英	半裁竹管状の工具により、斜位に擦痕状に施文する。	産不詳
10-01670 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 III層破片	厚0.5	酸・並・鈍橙・並・微粒石英・微細岩片	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01671 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 V層破片	厚0.4	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・微粒石英・透明鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01672 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・微粒石英・透明鉍物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳

第6章 中里見原遺跡

10-01673 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子・ 透明鈳物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01674 157	弥生土器 深鉢	24区東側 III層破片	厚0.4	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・微粒 石英・透明鈳物粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01675 157	弥生土器 深鉢	891号土坑 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並白色鈳物粒子・ 微粒石英・微細岩片	刷毛状工具による横位の撫で。	産不詳
10-01676 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.8	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・白色 粒子・	半裁竹管状の工具により、横位に櫛描文施文をする。	産不詳
10-01677 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子・	半裁竹管状の工具により、横位に櫛描文施文をする。	産不詳
10-01678 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒子・	半裁竹管状の工具により、横位に櫛描文施文をする。	産不詳
10-01679 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微	半裁竹管状の工具により、交差施文後、横位に櫛描文を施文する。	産不詳
10-01680 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・硬・赤褐・並・白色粒子・透明 鈳物粒子	半裁竹管状の工具により、横位に櫛描文施文をする。	産不詳
10-01681 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 III層破片	厚0.7	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・白色 粒子	櫛描文と3本一単位の波状文を横位施文する。	産不詳
10-01682 157	弥生土器 深鉢	1号墳9区 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・透 明鈳物粒子	半裁竹管状の工具により、頸部に櫛描文と波状文を施文し、口縁部には山形文を配している。	産不詳
10-01683 157	弥生土器 深鉢	1号墳2区 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・白 色粒子	半裁竹管状の工具により、波状文を施文する。施文はなぞる様に施す。	産不詳
10-01684 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍赤褐・並・微粒石英・細 粒岩片	3本1単位の櫛描により山形文を施文する。	産不詳
10-01685 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚0.5	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・白色 微粒子・細粒岩片	5本一単位の波状文を施文する。	産不詳
10-01686 157	弥生土器 深鉢	55号住 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・白色 微粒子・細粒岩片	4本一単位の波状文を2段に施文する。	産不詳
10-01687 157	弥生土器 深鉢	東側斜面 表土破片	厚0.6	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・黒 色鈳物粒子	4本一単位の波状文を施文する。	産不詳
10-01688 157	弥生土器 深鉢	55号住 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・夾雑物微・白色 微粒子・細粒岩片	3 + α 本一単位の波状文を施文する。	産不詳
10-01689 157	弥生土器 壺	15-O-15 V層破片	厚0.7	酸・並・オリープ黒・並・夾雑物微・ 白色微粒子	4本一単位の山形文を施文する。	産不詳
10-01690 157	弥生土器 壺	34号住 覆土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄褐・並・夾雑物微・白 色微粒子	半裁竹管状の工具により、斜位に条痕文を施文する。	産不詳
10-01691 157	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・白色粒子・白 色微粒子微粒高温石英	櫛描による山形施文。	産不詳
10-01692 157	弥生土器 壺	900号土坑 覆土破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・微 粒高温石英	5本一単位の山形文を施文する。	産不詳
10-01693 157	弥生土器 壺	25-T-3 V層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鈳物粒子・ 透明鈳物粒子・微粒高温石英	沈線による「コ」の字状重ね文か。10-01695と同一固体。	産不詳
10-01694 157	弥生土器 壺	東側斜面 III層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・白色粒子・白 色鈳物粒子・微粒高温石英	4 + α 本一単位の櫛描施文。	産不詳
10-01695 157	弥生土器 壺	1号基壇 地業破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鈳物粒子・ 透明鈳物粒子・微粒高温石英	10-01693と同一固体。	産不詳
10-01696 157	弥生土器 壺	調査区内 表土破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・白 色微粒子	沈線区画による文様構成。細片のため詳細不分明。縄文土器の可能性もある。	産不詳
10-01697 157	弥生土器 壺	964号土坑 表土破片	厚0.6	酸・並・黄灰・並・夾雑物微・白色 微粒子・	複合口縁。口縁部に列点刺突を施文する。	産不詳
10-01698 157	弥生土器 壺	1号墳9区 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・白色 粒子	口唇部に刻みを施し波状口縁部を表出し、列点刺突を施文する。口縁部直下に2条の横線を施す。	産不詳
10-01699 157	弥生土器 壺	1号墳4区 VI層破片	厚0.6	酸・並・橙・並・白色鈳物粒子・透 明鈳物粒子	列点刺突を施す。割れ口に有機質が付着する(漆か)。	産不詳
10-01700 157	弥生土器 深鉢	55号住 覆土破片	厚0.5	酸・並・灰黄褐・並・白色微粒子	縦位の条痕文施文。条痕文の単位数は不分明。	産不詳
10-01701 157	弥生土器 深鉢	道東 表土破片	厚0.8	酸・硬・鈍黄橙・並・黒色鈳物粒子・ 細粒岩片	縦位の条痕文施文。条痕文の単位数は不分明。	吉井・藤岡産か
10-01702 157	弥生土器 深鉢	1号基壇 地業破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鈳物粒子・ 礫片・	横位の条痕文施文。条痕文の単位数は不分明。	産不詳
10-01703 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘 下VI層破片	厚0.6	酸・並・浅黄橙・並・白色微粒子・ 微粒高温石英	縦位の条痕文の末端部分か。条痕文の単位数は不分明。	産不詳
10-01704 157	弥生土器 深鉢	142号土坑 覆土破片	厚0.6	酸・並・灰黄褐・並・微粒高温石英・ 黒色鈳物粒子	頸部周辺。頸部は横位、下半は斜位の条痕文を施文する。	産不詳
10-01705 157	弥生土器 深鉢	968号土坑 覆土破片	厚0.6	酸・並・褐灰・並・夾雑物微・白色 微粒子	7本一単位の綾杉施文の条痕文。	産不詳
10-01706 157	弥生土器 深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・白色粒子・黒 色鈳物粒子・透明鈳物粒子	13本 + α 本一単位の条痕文を施文する。	産不詳
10-01707 157	弥生土器 深鉢	1号墳6区 VI層破片	厚0.8	酸・並・浅黄橙・並・夾雑物微・細 粒岩片	横位の刷毛撫で。	産不詳

遺構外出土遺物(35)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
10-01708	弥生土器 壺	25-R-3 III層破片	厚0.6	酸・並・浅黄橙・並・黒色鈳物粒子	肩～頸部片。5本 + α 一単位の波状文の横位施文。	産不詳

第2節 発見された遺構・遺物

10-01709	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並黒色鉱物粒子	肩～頸部片か。斜位の篋撫でを施す。	産不詳
10-01710	弥生土器 壺	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・微粒長石・微 粒雲母・微粒石英	肩～頸部片。斜位の篋撫でを施す。器内面は横位 の篋撫で、靱圧痕。	吉井・藤 岡産
10-01711	弥生土器 壺	25-P-2 III層破片	厚0.6	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鉱物粒子・ 微粒石英	肩～頸部片。7本+α一単位の波状文の横位施 文。	産不詳
10-01712	弥生土器 壺	910号土坑 覆土破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鉱物粒子・ 微粒石英	肩～頸部片。6本+α一単位の波状文の横位施 文。	産不詳
10-01713	弥生土器 壺か深鉢	東側斜面 III層破片	厚0.5	酸・並・鈍黄橙・並・黒色鉱物粒子・ 微粒長石・微粒石英	肩～頸部片か。斜位の篋撫でを施す。	産不詳
10-01714	弥生土器 壺か深鉢	1号墳5区 VI層破片	厚0.5	酸・並・浅黄橙・並・微粒石英・白 色鉱物粒子	半裁竹管による斜位の条痕文を施す。	乗附産か
10-01715	弥生土器 壺か深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7 底(7.4)	酸・並・鈍褐・並・夾雑物微・白色 粒子	底面に木葉圧痕、立ち上がり部分には指頭痕が認 められる。	産不詳
10-01716	弥生土器 壺か深鉢	1号墳丘下 VI層破片	厚0.7 底(6.4)	酸・並・鈍黄橙・並・夾雑物微・黒 色鉱物粒子	器面の風化が顕著。無紋。底面の圧痕は木葉圧痕 とは異なる。正体は不分明。	産不詳
10-01717	弥生土器 壺か深鉢	15-T-20 III層破片	厚0.5 底(8.0)	酸・並・橙・並・黒色鉱物粒子・透 明鉱物粒子	底面に木葉圧痕。器外面は無紋。	吉井・藤 岡産
10-01718	弥生土器 甕	24区南端 表土1/4残	口(23.0)・頸(20.0) ・胴(26.2)	酸・並・鈍黄橙・並・シルト粗粒子・ 粗砂粒	器厚は薄い。複合口縁にLR原体の横転施文。肩 ～頸部はLR原体横転施文の帯状変形「工」字文。 胴部は半裁竹管の条痕文。	産不詳
20-00076	磨製石器 垂飾	14-Q-20 III層完形	長2.7・幅1.7・厚0.2 ・重1g	珪質準片岩	隅丸三角形状を呈する。縁辺に鑿状に側面取り が認められる。	
20-00077	石製品 石帯巡方	25-Q-2 III層破片	幅(3.7)	蛇紋岩(搬入品)	外面は丁寧に磨き仕上げされている。裏面は粗い 擦痕が残る。	
20-00078	石製品 砥石	東側斜面 表土破片	残存長10.0・幅3.2・ 厚3.0・重127g	砥沢石	小口に鋸目が残る。手持砥。中央が極度に窪み、 他面も中央寄りの部分が使い減りが認められる。	
20-00079	打製石器 石鏃	道東 III層完形	長1.5・幅1.5・厚0.3	黒曜石	無茎平根三角形抉式。鋒先側の刃部調整は細かい。	
20-00080	打製石器 石鏃	24-R-5 V層部欠	長1.7・幅1.7・厚0.4	黒曜石	無茎平根三角形抉式。鋒を欠損する。	
20-00081	打製石器 石鏃	25-R-2 V層完形	長2.2・幅1.4・厚0.3	チャート	無茎平根三角形抉式。細身で抉は浅い。	
20-00082	打製石器 石鏃	16号住 掘方完形	長2.7・幅2.0・厚0.4	黒色安山岩	無茎平根三角形抉式。鋒先側の刃部調整は細かい。	
20-00083	打製石器 石鏃	12号住 覆土完形	長2.5・幅1.6・厚0.3	黒曜石	無茎平根三角形抉式。鋒先側の刃部調整は細かい。	
20-00084	打製石器 石鏃	15-L-16 III層部欠	長2.3・幅1.5・厚0.5	黒曜石	有茎平根三角形抉式。片側の抉を欠損する	

遺構外出土遺物(36)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 目(cm) 量 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
20-00085	打製石器 石鏃	15-P-20 III層完形	長4.3・幅2.3・厚0.7 ・重6.0g	珪質頁岩	2側縁に刃部加工を施す。	
20-00086	打製石器 削器	道西 表土完形	長5.3・幅7.2・厚1.5 ・重40.0g	黒色頁岩	長辺に刃部加工を施し、部分的な調整を施す。	
20-00087	打製石器 削器	24-A-6 表土完形	長2.6・幅4.0・厚0.8 ・重9.0g	チャート	長辺に刃部加工を施す。	
20-00088	打製石器 削器	11号住 覆土完形	長3.4・幅1.8・厚0.6 ・重4.0g	黒曜石	部分的な刃部加工が認められる。	
20-00089	打製石器 削器	25-O-5 III層完形	長2.7・幅2.0・厚0.6 ・重4.0g	珪質頁岩	部分的な刃部加工が認められる。	
20-00090	打製石器 削器	25-L-4 V層完形	長2.3・幅2.3・厚0.8 ・重4.0g	黒曜石	表裏面を全方向から加工を施す。ピエスカ。	
20-00091	打製石器 火打ち石	16号住 覆土完形	長1.9・幅1.3・厚0.9 ・重2.0g	瑪瑙	4ヶ所に使用部分が認められる。	
20-00092	打製石器 石斧	25-R-4 III層2/3残	残存長9.8・幅5.6・ 厚2.2・重152.0g	粗粒輝石安山岩	短冊形。上端を欠損する・刃部側は摩滅が認めら れ、再調整剝離が摩滅面を切る。	
20-00093	打製石器 石斧	道東 III層部欠	残存長9.3・幅5.7・ 厚1.6・重128.0g	粗粒輝石安山岩	短冊形。両端を欠損する。摩滅等は認められない。	
20-00094	打製石器 石斧	15-A-19 III層破片	残存長7.7・幅5.2・ 厚1.5・重64.0g	変質玄武岩	上半を欠損する。残存部分は使用に伴う摩滅が認 められる。	
20-00095	打製石器 石斧	1号墳3区 VI層完形	長9.3・幅5.3・厚1.5 ・重191.0g	珪質頁岩	短冊形。基部はやや中心より俯く。先端は使用に 伴う欠損と考えられる。	

遺構外出土遺物(37)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 目(cm) 量 目(g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度目値)	形状・技法等の特徴	摘要
20-00096	打製石器 石斧	25-R-3 III層1/2残	残存長7.5・幅5.0・ 厚2.1・重60.0g	珪質頁岩	撥形。刃部側を一撃で欠損している。	
20-00097	打製石器 石斧	25-T-3 III層1/2残	残存長8.2・幅5.7・ 厚2.6・重134.0g	粗粒輝石安山岩	撥形。刃部側を一撃で欠損している。	
20-00098	打製石器 石斧	道東 表土部欠	長9.7・幅8.0・厚2.4 ・重200.0g	粗粒輝石安山岩	片面に礫面を残す。	

第6章 中里見原遺跡

20-00099	打製石器 石鏃	25-T-4 V層部欠	残存長14.7・幅8.2・ 厚2.5・重366.0g	変質玄武岩	撥形。礫面を残す刃部側を一撃で欠損している。	
20-00100	打製石器 石鏃	15-M-20 III層破片	残存長12.4・幅10.6 ・厚2.5・重324.0g	粗粒輝石安山岩	両端を欠損。両端共に一撃により欠損してゐる。	
20-00101	打製石器 石鏃	石組土坑 覆土完形	長16.9・幅10.5・厚 2.9・重557.0g	粗粒輝石安山岩	撥形。形状調整の加工は粗い。刃部側等修正の痕跡は認められない。	
20-00102	打製石器 石鏃	1号墳周辺 表土1/2残	残存長11.8・幅10.3 ・厚2.8・重462.0g	粗粒輝石安山岩	撥形。上半部を欠損している。刃部は丸味を帯びる。	

遺構外出土遺物(38)

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土 (石素材は度量値)	形状・技法等の特徴	摘要
20-00103	打製石器 石鏃	23号住 覆土部欠	残存長15.7・幅11.5 ・厚2.4・重515.0g	粗粒輝石安山岩	撥形。刃部側を欠損。礫面を残す	
20-00104	打製石器 石鏃	24-I-6 V層完形	長16.0・幅10.9・厚 2.7・重509.0g	珩質頁岩	撥形。刃部側は丸く、一部を欠損する。礫面を残す。	
20-00105	打製石器 石鏃	石組土坑 覆土完形	残存長14.2・幅12.3 ・厚3.1・重438.0g	粗粒輝石安山岩	撥形。上端の一部を欠損する。礫面を残す。	

第7章

上里見井ノ下遺跡



井ノ下第3号住居跡出土

第7章 上里見井ノ下遺跡

第1節 発掘調査

第1項 遺跡名称に就いて

上里見井ノ下遺跡は原遺跡の西側に当り、秋間丘陵に穿たれたトンネルの開口部までの区間である。

当遺跡名称であるが、元来当遺跡の調査区は、上里見・中里見の両者に跨る状態である。「井ノ下」の字名称は中里見にはあるが、上里見には見当たらない。しかし、上里見側の字名に「猪ノ下」・「猪ノ毛山」が認められる。

当団の遺跡名称の命名は「大字・小字」の原則があり、当北陸新幹線の遺跡名称は団の方針に基づき決定している。

当該上里見井ノ下遺跡は上述の名称の付け方からすれば齟齬をきたしている。元来、上里見側はトンネルの東側部分が「上里見猪ノ下遺跡」の遺跡認定がされていた。そして、公道を挟んで大字名称が変わることから、調査現場の方針は「中里見井ノ下遺跡」であったが、しかし、遺跡名称変更指示により「上里見井ノ下遺跡」と変更した。

この「中里見井ノ下遺跡」と「上里見猪ノ下」双方併記が正確である。調査区では1区～2区が中里見、3区が上里見に当たっている。

第2項 試掘調査の概要

当遺跡は、第1章でも記したが、当遺跡の中里見地区は当初段階から遺跡認定がなされてなかった。確かに、原遺跡の西斜面が急激に降り、そこにテラス状に開けた暖斜面であったことから、開墾等に原因する人工的な地形と判断されたことに、当初の段階で除外されたのかもしれない。しかし、原遺跡の調査を進める中、このテラス部分が自然地形であることが判断できた。そしてこのことにより、試掘調査実施に向けての調整が開始され、原遺跡の調査に併行して平成5年1月25日から試掘調査を実施した。調査はトレンチにより遺構・遺物の存否の確認を目的とした。

しかし、1区は重機の搬入路が狭く、用水路の橋も軽車両程度の通行しか出来なかったため、小形の重機で表土掘削を行った。更に、袋小路の調査区からの残土処理等物理的障害も多かった。

トレンチは第1～4号トレンチを設定した。第1トレンチは暖斜面部から低地に伸ばし、第2トレンチは第1トレンチの低地部分で「T」字状に延ばし、第3・4トレンチは、暖斜面部に設定した。

調査の結果、第1トレンチでは、地形に沿う溝状遺構を確認した。第2トレンチでは、トレンチに直行する状態でAs-Bに被覆された溝状遺構が確認された。第3・4トレンチでは、トレンチの中ほどから、極度に深度が深くなり、最下面のIV層土相当面まで-3mを超えていた。また、As-B降下以降の土壌は砂質土壌で、調査の壁も崩落が激しかった。

この両トレンチの台地側法面部分には、木炭の出土が多かったことと、土器類の出土も多かったこと、また第1・2トレンチの所見を併せ、本調査の必要を最終所見として、調査結果を群馬県教育委員会教育長宛具申した。

この結果、当該部分の本調査決定が下され、調査を本調査に切り替えた。だが、用地内には、まだ未収用部分があったため(2区)、その部分に就いては用地取得後の実施と決定された。

第3項 本調査の概要

本調査は、地形・字名称を加味し、調査の便宜を図り、1～3区の調査区を設定した。

1区は、原遺跡の台地西斜面部分(中里見井ノ下)。

2区は、低地部に当る里見川までとし、南北に通過する町道を境に東西に分けた(東側・中里見井ノ下)(西側・上里見猪ノ下)。

3区は、里見川とトンネル開口部の秋間丘陵東麓部分とした(上里見猪ノ下)。

1区の本調査対象面積は1,484㎡であった。表土層の除去は、小型重機を用いたため、低地部を含め約1ヶ月を要し、平成5年3月2日に終了した。

この表土層掘削と並行して、第1・3号炭窯跡、屋敷跡、住居跡等の調査を終了させたが、第2・4・

6号炭窯跡の窯底面までの深度が2m以上見込まれていたことから、安全確保・調査効率に勘案して、遺構調査面を重機で約1m掘削し調査を実施した。この掘削には同年3月9日から同月17日までかかり、安全確保が叶った炭窯跡から調査着手し、3月30日に調査を終了した。発掘調査終了後直ちに埋め戻しを行い、同31日に埋め戻しも完了した。

1区内には墓地部分が原遺跡の斜面直下に存在した。当該部分は45m²であった。周囲は耕作・道による削平が著しかった。調査は、墓地移転を待ち調査を実施した。発掘調査期間は、平成5年6月4日から同月15日まで実施した。調査の結果、撤去した墓石部分の直下から、遺存の非常に良好な埋葬人骨が10体以上出土したが、地権者の要望により、調査直後に人骨は引き渡した。

2区道東部分の調査対象面積は680m²であるが、同部分は、用地取得の都合上187m²と493m²に分けて実施した。

この内後者は、平成6年10月3日から着手した。As-B降下面を露呈させ溝状遺構を発見している。As-B降下面下はIV層・V層土で、下位からは遺構・遺物の出土は認められなかった。調査は同月20日に埋め戻しを終了させた。前者は後述する。

3区は1,472m²で、平成6年3月1日より表土層掘削を着手した。確認遺構は、住居跡1基、炭窯跡1基、土坑11基、土器溜り一ヶ所であった。これらの遺構の調査と並行して、遺構がない部分にトレンチをA～Fの6本を設定し、下位層から縄文時代に疑せる落ち込みを数箇所確認した。平成5年度事業は3月末日で一旦打ち切り、次年度当初に継続することとした。

平成6年度は、年度当初から上位遺構面の一部を調査継続し、前年度の調査所見に基づき、下位遺構面との2面調査となった。第2遺構面では縄文時代の土坑20基と埋甕1基を発見した。

この調査の間、2区の一部（道東部187m²・道西部258m²）に用地解決を得た部分が調査可能になり、同部分を今回の調査に取り込んだ。調査の結果、道西

部では、幾度も改修を受けた溝状遺構と土壙墓3基を発見した。

道東部（前述部の西接部分）では、前述2区道東部同様、As-B降下面を露呈させ溝状遺構を発見している。As-B降下面下はIV層・V層土で、下位からは遺構・遺物の出土は認められなかった。そして、平成6年5月12日埋め戻しを終了させ、井ノ下遺跡の発掘調査は完了した。

第2節 発見された遺構・遺物

第1項 1区で発見された遺構・遺物の概要

調査は表土層直下のIV層・V層土面を第1回確認面とし、暖斜面部で近世の屋敷跡、平安時代の住居跡2基、掘立柱建物跡1棟。低地部では、溝状遺構3条。斜面法面で炭窯跡6基が発見された。

これらの遺構の中で、第2・4・6号炭窯跡は、暖斜面下-2～-3m下位に窯底面が見込まれたため、安全確保を最優先として、表土層直下の確認面をローム土層上面まで掘削して調査を実施した（前述）。

屋敷跡（付図-8・第416～419図）

屋敷跡は、巨大な礎石を伴う建物をであったが、礎石の出土数が少ないことと、礎石間の距離などに規則性が認められなかったことから、建物規模を復元するには至らなかった。また、礎石の発見されなかつた部分には、浅い溝状遺構に拳大の礫を敷き込む状況が発見されている。

出土遺物は、第417～419図に掲載した軟質陶器・陶磁器・石製品・金属器が出土している。出土遺物には磁器製品が多く、五客揃い（10-00011～00015）も出土している。陶器では播鉢10-00009は、口縁直下の部分を、銅による補強が認められる。金属器では、鍋の釣り手・小柄の穂先が出土している。

当該の屋敷跡は、地権者の方の先々代が子供時分に、現在の谷の反対側の居住地に移したと聞いていると言う。時期ははっきりとはしていないが、概ねの時期は合致していると思われる。

この屋敷の造成は、背後側で1mを削平している。全体には、この削平段上に建物を構築したと考えられる。この削平段の面積は、800㎡程である。一方、調査期間中、当該部分は冬季の強風も僅かしか受けない、陽だまりの好所であった。このことが屋敷の占地理由に大きく影響している可能性が考えられる。

住居跡 (第423・424図)

住居跡は2基発見された。2基とも暖斜面部の原遺跡よりの部分であった。1号住は全面露呈出来たが、2号住大半が調査区外に延びるため、部分的な露呈にしか至らず、また、出土遺物も少なかった。

住居跡の時期は出土遺物から、1号住は9世紀末～10世紀初頭、2号住は10世紀前半頃と考えられる。

掘立柱建物跡 (第430図)

掘立柱建物跡は1棟発見されている。柱間は、1間×2間であるものの、梁長と桁行共に210cm(7尺)の正方形建物が推定される。時期は炭窯跡と大きな異なりはないと思われる。また、発見位置が7号炭窯跡の煙道の傍らであったことから、双方には何らかの意図の元での配置関係も考慮される。時期の査証は覆土でしか判断できなかった。

炭窯跡跡 (第431～440図)

炭窯跡跡は5基が発見された。これらの炭窯跡は地山ローム土を天井とするトンネル式であった。

第1調査面上では、屋敷跡にに伴う井戸跡として確認名称を付与した落ち込みは、調査進行により下位部分の地山土が被熱による焼土化が認められた。調査途中でのこの状況に困惑したが、第2・4号炭窯跡を斜面下で確認した段階で、井戸跡とした落ち込みが煙道部分であることを察知し、遺構名称を改めた。しかし、窯体が完全に地下式であったため、窯体位置・形状が不明であった。そして、窯体位置を確認するため、窯体推定位置にトレンチを設定し確認したが、2号炭窯跡の窯体位置は当初推定した位置からは著しく異なっていた。これは、2号炭窯跡が焚口から1.8mほど入った部分で70度ほど北へ方向を変換していたことが原因で、煙道と窯体の

位置を錯覚してしまっていた。ともあれ、調査面を下げることにより、安全確保と確実な窯体位置を確認し調査に臨んだ。

発見された5基の炭窯跡は、2種類の形態が認められる。斜面に対して並行に窯体を構築する第1～3号(3号は未焼成窯)。斜面に対して直角に窯体を構築する第4・6号炭窯跡に分別される。また、前者の一群は、斜面法面側に作業坑を複数穿ち作業場に通じている。後者の一群は、窯底面の勾配が急になれば、須恵器窯の構造と同一になる構造であった。

低地部 (付図・第413～415・468～467図)

低地部では3条の溝状遺構が発見されている。

1号溝は試掘調査のトレンチ内で確認された遺構であった、調査は排土場所の確保もあり、トレンチを拡張する形でしか調査し得なかった。

2号溝は、台地の縁に沿いに発見されている。1・2号溝共にAs-B直下の水田耕土状の土壌直下で、2号炭窯跡を切る状態で確認されている。この層位関係から、平安時代の所産であることが窺え、おそらく10世紀を前後する頃と思われる。

3号溝はIII層土直下のIV層相当土層面で確認されている。この土層面は黒灰色を呈する粘性を有する土層で確認面のあやや下位から第467図に示した10-00100～00104が出土している。土器が示す時期は古墳時代後期である。

第2項 2区で発見された遺構・遺物の概要

2区は里見川の開析した低地部分である。東西双方の調査区からは、溝状遺構が発見されている。

東側調査区 (第413・420・421図)

東側調査区は勾配率が9%以上あり、短時間での降雨等があれば、雨水は勢い良く流下するであろうことは想像に易い。発見された溝状遺構も計画性の認められない状態で、蛇行状態である。この状況は前述の2区1号溝にも認められる。

このことから、当該溝状遺構は、自然流路の可能性も考慮される。

西側調査区（付図-4・第422図）

西側調査区は、町道と里見川に挟まれた非常に狭い範囲であった。当該用地部分は、用地取得直前まで近世末期から近代初期の墓地であった。調査により、当該部分からは、近世土墳墓3基・幾重にも重複する溝状遺構が発見されている。

この溝状遺構は個別の名称設定が困難であったので、総括的に6号溝として扱った。この6号溝は、谷頭方向から流下してきて、当該部分で里見川に合流するような状況で方向西側に変えている。土墳墓はこの方向を変えた部分の下手の上で発見されている。時期は明確ではないが、土墳墓が6号溝の規制により構築されているなら、下限として近世末期から近代初期以前には構築されていたことが判断される。

第3項 3区で発見された遺構・遺物の概要

3区は里見トンネルの開口部分の、秋間丘陵東麓に当たり、雉ヶ尾峠を形成する沢が里見川に合流する部分の辺に当たっている。

3区では、住居跡1基・土坑31基（古代11基・縄文20基）・土器溜まり1・埋甕1基であった。

住居跡（第425～429図）

住居跡は3号住1基だけであったが、比較的良好な土器類を得ることが出来た。土器からは、9世紀前半頃の住居跡と考えられる。また、出土した土師器甕は、所謂「コ」の字状口縁に変化を見せる時期であり、「く」・「コ」の字状口縁の両者が共存している。この様相に呼応して、須恵器坏も回転篋起こし・回転糸切処理のものが共存が認められるものの、前者は非常に客体されたそんざいである。

また、この3号住の掘方を埋設した造床土には、非常に多量の鉄片（鍛造薄片か）が含まれていた。しかし、当住居は、小鍛冶等の製鉄・製鉄器に直接係る遺構としての査証は発見出来なかった。周辺での状況は、土器溜まり部分では出土が認められなかった。この鉄片は、造床土を水洗滌して種子等の炭化物を得ようとしての作業中に発見出来た。能動的に鉄片等を得ようとしての成果ではなかった。

現状では、何に起因しての行為なのかは判明出来ていない。

土器溜まり（第457～460図）

土器溜まりは3号住の南東5m程の位置で出土している。出土した土器類は、須恵器坏・埴・長頸瓶・大甕であった。このうち坏・埴を見る限りでは、住居跡と土器溜まりには、時期的齟齬は認められない。

土坑（古代）（第463・464図）

古代の土坑10基は、住居跡周辺に集中する傾向が窺える。だが、双方の関係を明確に得る説明し得る調査所見は得られなかった。

土坑（縄文）（第461・462・465・465図）

縄文時代の土坑は20基が発見されている。これらの土坑は、暖斜面部の基部に寄った位置に集中する傾向が窺えるものの、詳細な所見は得られなかった。時期は、殆どの土坑からは出土遺物が得られなかったが、遺構外遺物の縄文土器が前期黒浜式に比定出来るのと、1号埋甕の土器形式に矛盾が認められないことから、恐らくは、この時期の所産であろうことが推定される。

炭窯跡（第441図）

炭窯跡は1基（8号炭窯跡）が発見されている。当該炭窯跡からは、大正・昭和期の陶磁器類等が出土している。

発見された炭窯跡は、窯底面周辺まで攪乱（？）が達していたため、遺存は不良で、壁の構造等は殆ど所見が得られなかった。煙道部分では、礫を多用する構造と考えられるが、底面周辺状況であり、石組みの煙道であったかは不明である。掘方の観察所見では、掘方を切る状態で窯体構築がされており、数次に亘る改築がなされたことが推定できた。

また、窯の築造の計画性には、第441図に示した如く、重複する円弧による設計と考えられ、「三浦式」の窯体構造であると推定できる。

上里見井ノ下遺跡遺構諸元一覧（規模・土層説明）

溝状遺構

第1号溝状遺構

層序(基準線標高値185.90m) 1. 表土(現耕土)。 2~7. 砂質黒褐色~暗褐色。 8~22. 灰褐色~灰暗褐色砂層と黒色粘質土の互層。
23. 暗灰色砂層 ラミナー形成・底面鉄分の凝集も認められる。

第2号溝状遺構

層序(基準線標高値184.00m・183.00m)

A-A'

1. 黒 粒状ローム多。 2. 黒 塊状Ⅷ層土混。 3. 灰 砂質(鉄分の凝集も認められる)。 4. 黒灰 粒状ローム若。 5. 暗褐 砂質・粒状ローム若。 6. 黒 1近質。 7. 黒 粒状ローム・塊状Ⅷ層土多。 8. 黒 砂質・粒状Ⅸ層土少。 9. 8近質・粒状Ⅸ層土若。 10. 白灰 塊状Ⅸ層土多。 11. 8同質。 12. 9同質。 13. 黒 砂礫層・塊状ローム混。 14. 白灰 砂粒混。

B-B'

1. 黒 塊状Ⅷ層土・塊状Ⅸ層土多。 2. 灰 塊状Ⅸ層土多・塊状Ⅷ層土混。 3. 灰黄 2近質。 4. 黒 1近質。 5. 黄褐 塊状Ⅸ層土主体。 6. 暗褐 粘質土。 7. 赤褐 硬質・(鉄分の凝集も認められる)。 8. 塊状Ⅸ層土。 9. 暗褐 鉄分を吸収した砂を含む・塊状ローム若。 10. 黒 粘質土・砂少。 11. 暗褐 粘質土・粒状ローム・砂粒含。 12. 黒 粘質土・粒状炭化物若。 13. 黒色粘質土。 14. 灰褐 塊状ローム少。 15. 13同質。 16. 12近質。 17. 青黒 砂層粒状ローム微。

C-C'

1. 黒 砂質土・粒状ローム若。 2. 浅黄橙 塊状ローム主・粒状ローム多。 3. 黒色 やや砂質・粒状ローム若。 4. 鈍黄橙 塊状ローム主・黒色土若。 5. 褐灰 粒状ローム少・灰色粘質土主。 6. 黒灰 灰色粘質土主。 7. 黒灰 灰色粘質土主・砂質気味。 8. 褐灰色粘質土。 9. 塊状Ⅸ層土。 10. 暗褐色砂礫層。

D-D'

1. 茶褐 砂・シルト質。 2. 黒 粘性土・砂多。 3. 赤灰 粘性土・砂混。 4. 赤灰 粘性土・砂少。 5. 黒 塊状黒色土。 6. 赤灰 粘性土・黄褐色砂含。 7. 赤灰 粘性土・砂含・塊状ローム少。 8. 赤灰 粘性土・黄褐色砂少。 9. 暗茶褐 砂礫層。

E-E'

1. 黒 粒状ローム含。 2. 黒 砂多。 3. 黒(鉄分を多く含む) 砂層・粘質土の互層。 4. 黒 砂層赤灰粘質土・黒色砂層の互層。 5. 灰赤 砂層。 6. 黄褐色~暗褐色砂層。 7. 黒 塊状5層土含。 8. 褐灰 粘性土。 9. 明褐灰 灰白色粘質土主。 10. 黒色粘質土。 11. 赤灰 粘性土・白色細粒若。 12. 青灰色砂層 塊状ローム少。

F-F'

1. 黒 粒状ローム若。 2. 黄褐 塊状Ⅸ層土多・塊状黒色土含。 3. 黒 砂質。 4. 黒灰色砂層。 5. 黒灰 砂層・粒状ローム多。 6. 黒 砂層。 7. 黒 粘質土。

第3溝状遺構及び1区低地部

層序(基準線標高値128.50m)

(第3溝状遺構) 1. 黒褐 As-B多。 2. 黒褐 粘質土・As-B・粒状ローム混。 3. 暗灰 砂質・粒状ローム少。 4. 灰 砂層。 5. 黄褐色 塊状ローム・砂の混土。

(低地部層序) 1. 黒褐 粒状C軽石少。 2. 暗褐 粒状C軽石混。 3. 黒 粒状C軽石少。 4. 黒 粒状C軽石多。 5. 黒褐 粒状C軽石微。 6. 5同質。 7. 黒 粒状C軽石若・粒状ローム含。 8. 黒 小塊状ローム・塊状赤褐色土含・粒状炭化物混。 9. 暗褐 粘質土・植物遺存体多。

第4号溝状遺構

層序(基準線標高値186.20・184.80m)

A-A'

1. 濁黒 旧水田耕土。 2. 黒褐 旧水田耕土。 3. 暗褐 鉄分の凝集により発色は明褐色。 4. 黒褐 砂質。 5. 濁黒褐 下位層を攪乱。 6. 砂層。 7. 粗粒軽石の水性堆積(二次堆積のAs-B)。 8. As-B(追分火砕流)。 9. 水性堆積層砂層。

C-C'

1~5. 水性堆積砂層。 6. 追分火砕流。 7. As-B。 8. 黒色粘質土。 9. 濁黒褐色砂礫混土層。

第5号溝状遺構

層序(基準線標高値174.10m) 1. 追分火砕流。 2. As-B。 3. 粗粒軽石の水性堆積(二次堆積のAs-B)。 4. 水性堆積砂層。

第6号溝状遺構及び2区低地断面

層序(基準線標高値186.20m) I. 表土(黄褐色砂層)。 II. 灰色砂層(白色軽石少・粒状炭化物少)。 III b. 暗褐色砂質土(細粒軽石多)。

IV. 砂礫層 水性(河川)堆積物。 1. 暗褐 砂質・細粒白色軽石多。 2. 砂礫層。 3. 暗褐 砂質・細粒白色軽石を含むラミナー層。 4. 砂礫層黄白色軽石混。 5. 暗桃灰褐色 砂質・黄白色軽石混。 6. 砂礫層 中亜角礫少。 7. 暗桃灰褐 砂質・黄白色軽石少。 8. 暗桃灰褐 砂質・小亜角礫多。 9. 砂層 上層に粕川テフラ層が堆積。 10. 7同質。 11. 暗桃灰 砂層・中亜角礫多。 12. 二次堆積 As-B。 13. 砂礫層。 14. 同質。 15. 暗褐 砂質・細粒白色軽石多。 16. 9同質。 17. 11同質。

第7号溝状遺構

層序(基準線標高値186.20m) 1. 砂礫層 二次堆積 As-Bを含む。 2. 砂礫層。 3. 黒褐 粗粒軽石含。 4. 砂礫層。 5. 砂礫層 灰色シルト含。 6. 暗灰色 シルト質・白色軽石含。

住居跡

第1号住居跡

位置:19地区16区R・S-12・13グリッド。 形状:横長方形。 規模:4.3m×2.34m。 構築基準辺:北西壁・北東壁。 主軸方位:北-116度一東。

竈規模:軸長0.78m・燃焼部幅0.5m・前面幅0.98m。

層序(基準線標高値187.40m) 1. 黒褐 粒状C軽石混。 2. 黒褐 粒状C軽石少・粒状炭化物・粒状ローム含。 3. 黒褐 粒状C軽石若・粒状焼土少。 4. 黒褐 粒状焼土含。 5. 黒褐 粒状C軽石少・粒状焼土含・硬質。 6. 黒褐色 粒状C軽石若・粒状ローム含・塊状ローム少。

第2住居跡

位置:19地区17区E-15グリッド。 形状:不詳。 規模:3.5m×1.0+α m。 構築基準辺:不詳。 主軸方位:北-90度一東程か。 竈:未発見。

層序(基準線標高値187.20m) 1. 黒褐 粒状C軽石混・粒状炭化物含。 2. 黒褐 粒状焼土含(竈覆土)。

第3号住居跡

位置:19地区18区T-6グリッド。 形状:横長方形。 規模:3.90m×4.95m。 構築基準辺:西・南壁。 主軸方位:北-82度一東。

竈規模:軸長0.75m・燃焼部幅0.56m・前面幅1.34m。

層序(基準線標高値192.00m) 1. 黒褐 粗粒As-B含。 2. 黒褐 粗粒粒状C軽石多・As-B混(被覆土)。 3. 暗褐 粗粒粒状C軽石多・細粒粒状C軽石多。 4. 暗褐 粗粒粒状C軽石混・細粒粒状C軽石含。 5. 3近質。 6. 暗褐 粗粒粒状C軽石混・細粒粒状C軽石含・粒状焼土混・塊状焼土少。 7. 暗褐 粗粒粒状C軽石少・細粒粒状C軽石混・粒状焼土混・塊状焼土少・粒状炭化物混。 8. 暗褐 細粒粒状C軽石含・粒状炭化物多・粒状焼

第7章 上里見井ノ下遺跡

土混・塊状焼土少。 9. 暗褐色 粗粒粒状C軽石多・塊状黒褐色多。 10. 褐色 細粒粒状C軽石少。 11. 暗褐色 細粒粒状C軽石少。 12. 暗褐色 粗粒粒状C軽石少。 13. 暗褐色 粗粒粒状C軽石少・粒状炭化物微。 14. 褐色 粗粒粒状C軽石微。 15. 暗褐色 粒状炭化物多・粒状焼土多。 16. 15同質。 17. 暗褐色 塊状焼土多。 18. 暗褐色 小塊状焼土多・粒状炭化物少。 19. 17近質。 20. 暗褐色 粒状粒状C軽石少・粒状炭化物少。 21. 黒褐色 粒状C軽石多。 22. 暗褐色 粗粒粒状C軽石少・粒状焼土微。 23. 暗褐色 粗粒粒状C軽石多。 24. 黒褐色 粗粒粒状C軽石少・塊状焼土多・粒状炭化物少。

第1号掘立柱建物跡

位置：19地区17区B-3グリッド。 柱間・規模：3尺・4尺・2間(210cm)×7尺・1間(2.10m)。 主軸方位：北-19度30分一東。

層序(基準線標高値186.60m) 1. 暗褐色 粒状C軽石含。 2. 黒褐色 粒状C軽石少。 3. 1同質。 4. 2近質。 5. 2同質。 6. 粒状C軽石・粒状焼土少。 7. 1同質。 8. 2同質。 9. 1近質。 10. 黒褐色 粒状C軽石多。 11. 暗褐色 粒状C軽石混。 12. 暗褐色 粒状C軽石混・粒状焼土含。

第1号炭窯跡

位置：19地区17区H~J-11・12グリッド。 形状：横口付き。 規模：発見長11.28m・窯体長9.7m・窯体幅0.76~0.97m・窯体高0.56+ α 。煙道0.93m×1.11m・横口5箇所。 主軸方位：西-33度一北。

層序(基準線標高値174.20m) 1. 塊状VIII層土。 2. 塊状IX層土。 3. 塊状IX層土(壁の崩落・壁面煤ける)。 4. 暗褐色 粒状VIII層土・粒状炭化物含。 5. 粒状IX層土・粒状炭化物混。 6. 5近質。 7. 色 塊状IX層土が煤ける。 8. 黒 塊状ローム含。 9. 灰褐色 塊状IX層土主・粒状VIII層土混。 10. 灰褐色 塊状IX層土主・粒状炭化物・粒状焼土含。

第2号炭窯跡

位置：19地区17区C~E-11~13グリッド。 形状：横口付き。 規模：総長13.9m・窯体長12.68m・窯体幅0.95~1.23m・窯体高0.8~1.08。煙道数1・横口6。 主軸方位：北-115度一東。

層序(基準線標高値184.00・185.00m) 1. 黒 粗粒粒状C軽石多。 2. 暗褐色 黄褐色軽石含。 3. 塊状ローム。 4. 2同質。 5. 黒褐色 粗粒粒状C軽石含。 6. 黒褐色 粗粒粒状C軽石少・粒状焼土少。 7. 黒褐色 粗粒粒状C軽石含・粗粒状ローム混。 8. 暗褐色 粗粒粒状C軽石少・黄褐色軽石少。 9. 暗褐色 塊状ローム混・黄褐色軽石少。 10. 黒 粒状C軽石少。 11. 黒 粒状C軽石混・粒状ローム混。 12. 塊状VII層土。 13. 塊状ローム。 14. 被熱塊状ローム。 15. 黒。 16. 塊状焼土・塊状ロームの混土。 17. 黒。 18. 黒色土・塊状焼土・塊状ロームの混土。 19. 黒 粒状焼土・粒状ローム多。 20. 黒 粒状焼土少。 21. 黒。 22. 塊状ローム・塊状焼土の混土。 23. 黒 塊状ローム少。 24. 黒。 25. 塊状焼土。 26. 炭化物層。 27. 焼土層。 28. 炭化物層。 29. 焼土層。 30. 炭化物層。 31. 塊状ローム。 32. 塊状ローム層。 33. 黒。 34. 炭化物層。

第4号炭窯跡

位置：19地区17区F-12~14グリッド。 形状：登窯型。 規模：発見長12.9m・窯体長9.86m・窯体幅0.67~1.08m・窯体高1.07+ α 。煙道数1。

主軸方位：北-1度一東。

層序(基準線標高値184.50・185.00m) 1. 黒 粗粒粒状C軽石多・黄褐色軽石混。 2. 黒 粒状C軽石含。 3. 黒 粒状ローム混。 4. 黒灰 粒状ローム混。 5. 4同質。 6. 黒 粗粒粒状C軽石含・黄褐色軽石少。 7. 黒褐色 粗粒粒状C軽石多・塊状IX層土混。 8. 塊状IX層土。 9. 黒 塊状ローム含。 10. 塊状ローム層。 11. 塊状ローム・塊状黒色土の混土。 12. 塊状IX層土。 13. 塊状IX層土(軽石多)。 14. 黒 粒状ローム多。 15. 塊状ローム(還元変色含)。 16. 黒 粒状ローム・還元変色粒子含。 17. 黒色 粒状焼土少。 18. 黒色粒状ローム混。 19. 黒色 塊状ローム含。 20. 黒色 粒状ローム含。 21. 黒色 還元変色粒子多。 22. 黒色 粒状焼土多。 23. 塊状IX層土・粒状IX層土多。 24. 塊状IX層土主。 25. 塊状ローム・塊状IX層土。 26. 塊状IX層土。 27. 塊状IX層土・粗粒状IX層土。 28. V層近質。 29. 塊状ローム・黒色土の混土。 30. 粒状IX層土多・黒色土混。 31. 塊状ローム。 32. 灰黄色 シルト質。 33. 焼土層。 34. 塊状ローム。 35. 塊状ローム。 36. 塊状IX層土。 37. 被熱塊状ローム。 38. 炭化物層。 39. 塊状焼土。 40. 塊状焼土。 41. 炭化物層。 42. 焼土層。 43. 炭化物層。 44. 貼床 IX層土主。

6号炭窯跡

位置：19地区17区B-11・12グリッド。 形状：登窯型。 規模：発見長7.5m・窯体発見長7.0m・窯体幅0.92~1.1m・窯体高0.8~1.00m。煙道数1。

主軸方位：北-23度一東。

層序(基準線標高値185.00m) 1. 塊状ローム・塊状黒色土の混土。 2. 黒色土。 3. 黒 粒状焼土多。 4. 3同質。 5. 塊状焼土。 6. 黒色砂質土・塊状ローム・炭化物の混土。 7. 黒色土。 8. 塊状焼土。 9. 炭化物層。

第7号炭窯跡

位置：19地区17区A-11グリッド。詳細不詳。

層序(基準線標高値185.40m) 1. 黒 粒状軽石混。 2. 暗褐色 粒状軽石少。 3. 黒褐色 粒状焼土少。 4. 黒色土・黒褐色の混土。 5. 3同質。 6. 4同質。 7. 3同質。 8. 4同質。

第8号炭窯跡

位置：19地区19区A-3・4グリッド。 形状：楕円形。 規模：発見長4.54m・窯体長2.77m・窯体最大幅1.98m・窯体高不詳。煙道数1。

主軸方位：北-80度一東。

層序(基準線標高値192.60m) 1. 暗褐色 塊状焼土・軽石多・小礫含。 2. 赤褐色 塊状暗褐色・軽石少。 3. 暗褐色 塊状焼土多・粒状焼土少・軽石若。 4. 3近質。 5. 橙桃褐色 軽石微・塊状焼土混。 6. 橙褐色 塊状焼土・軽石多。 7. 暗褐色 塊状炭化物・塊状焼土多。 8. 炭化物層。 9. 黒褐色 塊状焼土・軽石・炭化物多。 10. 黒 炭化物主・塊状焼土少・塊状ローム少。 11. 褐色 ローム土主・黒褐色少。 12. 黒褐色 塊状ローム多。 13. 暗褐色 軽石少(地山か)。

土壌墓

第1号土壌墓 位置：19地区16区P・Q-13グリッド。 形状：長方形。 規模：0.57m×0.48m。 主軸方位：北-166度一東。

第2号土壌墓 位置：19地区16区P-13グリッド。 形状：縦長方形。 規模：0.69m×0.54m。 主軸方位：北-81度一西。

第3号土壌墓 位置：19地区16区Q-13グリッド。 形状：不整形。 規模：1.14m×0.96m。 主軸方位：北-159度一東。

第4号土壌墓 位置：19地区16区Q-13グリッド。 形状：正方形。 規模：0.9m×0.96m。 主軸方位：北-69度一西。

第5号土壌墓 位置：19地区16区Q-13グリッド。 形状：横長方形。 規模：0.6+ α m×0.99+ α m。 主軸方位：北-69度一西。

第6号土壌墓 位置：19地区16区Q-13グリッド。 形状：正方形。 規模：0.84m×0.90m。 主軸方位：北-69度一西。

第7号土壌墓 位置：19地区16区Q-13・14グリッド。 形状：縦長方形。 規模：0.75m×0.60m。 主軸方位：北-69度一西。

第8号土壌墓 位置：19地区16区Q-13・14グリッド。 形状：正方形。 規模：0.99m×0.96m。 主軸方位：北-20度一東。

第9号土壌墓 位置：19地区16区Q・P-14グリッド。 形状：正方形。 規模：0.69m×0.6m。 主軸方位：北一度一東。

第11号土壌墓 位置：19地区16区Q-13グリッド。 形状：横長方形?。 規模：0.36+ α m×0.88m。 主軸方位：北-69度一西。

第12号土壌墓 位置：19地区18区B-7グリッド。 形状：正方形。 規模：0.69m×0.63m。 主軸方位：北-54度一西。

第13号土壌墓 位置：19地区18区C-7グリッド。 形状：不整形。 規模：0.81m×0.78m。 主軸方位：北-38度一西。

第14号土壌墓 位置：19地区18区B-7グリッド。 形状：楕円形。 規模：1.05+ α m×0.51+ α m。 主軸方位：北-7度一東。

土坑

第1号土坑 位置：19地区16区T-2グリッド。 形状：楕円形。 規模：1.68m×1.32m。 主軸方位：北-84度一西。

層序(基準線標高値174.70m) 1. 暗褐色 粗粒状黄褐色軽石混。 2. 暗褐色 塊状黒色土・粒状黄褐色軽石混。 3. 暗褐色 塊状黒色土多・黄褐色軽石混。 4. 暗褐色 塊状ローム混・黄褐色軽石混。 5. 暗褐色 黄褐色軽石多。

第2節 発見された遺構・遺物

- 第4号土坑 位置：19地区18区R・S-10グリッド。形状：円形。規模：径1.23m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値191.80m） 1. 黒 As-B多・黄褐色軽石含有。 2. 黒褐 As-B多・黄褐理路軽石混。 3. 黒褐 As-B混・黄褐色軽石混。
4. 黒褐 As-B含有・塊状III層土混。
- 第6号土坑 位置：19地区18区T-10グリッド。形状：円形。規模：径0.80m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値192.20m） 1. 黒褐 粗粒状C軽石混。 2. 黒褐 粗粒状C軽石含有。
- 第7号土坑 位置：19地区18区T-9・10グリッド。形状：隅丸長方形。規模：0.87m×0.84m。主軸方位：北-1度-西。
層序（基準線標高値192.20m） 1. 黒褐 粗粒状C軽石多。
- 第8号土坑 位置：19地区18区R-10グリッド。形状：円形。規模：径0.72m。
層序（基準線標高値192.20m） 1. 黒褐 As-B多・黄褐色軽石含有。
- 第10号土坑 位置：19地区18区S-10グリッド。形状：隅丸胴張り長方形。規模：1.62+ α m×1.32+ α m。主軸方位：北-45度-西。
層序（基準線標高値191.80m） 1. 黒褐 粗粒状C軽石多・粒状炭化物少量。 2. 黒褐 粒状C軽石若干。 3. 黒褐 粒状C軽石少量・粒状炭化物若干。 4. 黒褐 粒状C軽石少量・粒状炭化物少量。 5. 黒褐 粒状C軽石若干・粒状炭化物少量。 6. 黒褐 粒状C軽石多。 7. 褐 粒状C軽石微量。
- 第11号土坑 位置：19地区18区T-11グリッド。形状：円形。規模：径0.93m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値192.20m） 1. 黒褐 As-B含有・細粒状C軽石少量。
- 第12号土坑 位置：19地区18区S-10グリッド。形状：円形（楕円気味）。規模：径0.78m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値191.80m） 1. 黒褐 粗粒状C軽石多。
- 第13号土坑 位置：19地区19区B-4グリッド。形状：楕円形。規模：0.63m×0.42m。主軸方位：北-90度-西。
層序（基準線標高値192.50m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石多。 2. 暗褐 粗粒状黄褐色軽石多。
- 第14号土坑 位置：19地区19区B-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.02m×0.84m。主軸方位：北-62度-西。
層序（基準線標高値192.50m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石多。 2. 暗褐 粗粒状黄褐色軽石多。 3. 黒 粗大塊状褐色土多。
- 第15号土坑 位置：19地区19区B・C-5グリッド。形状：円形。規模：径0.96m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値192.00m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。 2. 黒 粗大塊状褐色土少量。 3. 黒 粗大塊状褐色土多。
- 第16号土坑 位置：19地区19区A-3グリッド。形状：楕円形。規模：1.98m×1.08m。主軸方位：北-12度-西。
層序（基準線標高値192.60m） 1. 暗褐 黄褐色軽石少量・塊状ローム少量。
- 第17号土坑 位置：19地区19区A-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.20m×0.69m。主軸方位：北-27度-東。
層序（基準線標高値191.70m） 1. 黒褐 細粒状黄褐色軽石多。
- 第18号土坑 位置：19地区19区A-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.00m×0.84m。主軸方位：北-27度-東。
層序（基準線標高値191.70m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第19号土坑 位置：19地区19区A-4・5グリッド。形状：楕円形。規模：1.32m×1.11m。主軸方位：北-10度-東。
層序（基準線標高値191.70m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。 2. 暗褐 塊状黒色土斑状混。 3. 黒 粗粒状塊状褐色少量。 4. 黒 粗粒状褐色土多。
- 第20号土坑 位置：19地区19区A-4グリッド。形状：円形か。規模：0.6m×0.42+ α m。
層序（基準線標高値191.60m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第21号土坑 位置：19地区18・19区T・A-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.32m×1.06m。主軸方位：北-40度-東。
層序（基準線標高値191.50m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石含有。 2. 暗褐 黄褐色軽石少量・塊状ローム少量。 3. 暗褐 黄褐色軽石少量・塊状ローム含有。 4. 暗褐 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第22号土坑 位置：19地区19区A-5グリッド。形状：楕円形。規模：1.20m×0.84m。主軸方位：北-21度-東。
層序（基準線標高値191.50m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第23号土坑 位置：19地区19区A-4グリッド。形状：円形。規模：径0.94m。主軸方位：一。
層序（基準線標高値191.70m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第24号土坑 位置：19地区18・19区T・A-4グリッド。形状：隅丸方形。規模：1.02m×0.87m。主軸方位：北-30度-西。
層序（基準線標高値191.90m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第25号土坑 位置：19地区18区T-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.20m×0.99m。主軸方位：北-10度-東。
層序（基準線標高値191.40m） 1. 暗褐 小礫多。
- 第26号土坑 位置：19地区18区T-4グリッド。形状：楕円形。規模：0.90m×0.72m。主軸方位：北-60度-東。
層序（基準線標高値191.40m） 1. 黒 粗粒状黄褐色軽石少量。
- 第27号土坑 位置：19地区19区A-3グリッド。形状：楕円基調。規模：1.38m×1.32m。主軸方位：北-18度-東。
層序（基準線標高値192.60m） 1. 暗褐 粒状黄褐色軽石少量・塊状ローム少量。
- 第28号土坑 位置：19地区19区A-3グリッド。形状：楕円形。規模：2.16m×1.02m。主軸方位：北-44度-東。
層序（基準線標高値191.90m） 1. 暗褐 粒状黄褐色軽石少量・塊状ローム少量。
- 第29号土坑 位置：19地区18区R-4グリッド。形状：楕円形。規模1.14：m×0.78m。主軸方位：北-1度-東。
層序（基準線標高値191.60m） 1. 黒 粗大塊状褐色土多。
- 第30号土坑 位置：19地区18区T-4グリッド。形状：楕円形。規模：1.50m×1.03m。主軸方位：北-37度-西。
層序（基準線標高値191.50m） 1. 暗褐 灰色砂多。 2. 暗褐 粒状褐色土多。
- 第31号土坑 位置：19地区18区T-4・5グリッド。形状：楕円形。規模：0.78m×0.66m。主軸方位：北-32度-西。
層序（基準線標高値191.40m） 1. 暗褐 灰色砂多。
- 第32号土坑 位置：19地区18・19区T・A-3グリッド。形状：楕円形。規模：1.02m×0.96m。主軸方位：北-110度-西。
層序（基準線標高値192.20m） 1. 暗褐 細粒状黄褐色軽石少量・塊状ローム少量。

埋設土器

- 第1号埋設土器 位置：19地区17区A-4・5グリッド。形状：。規模：m×m。主軸方位：北-1度-東。
層序（基準線標高値192.40m） 1. 黒 細粒状C軽石微量・粒状褐色土微量・小礫含有。 2. 黒 細粒状軽石微量・粒状褐色土微量。

上里見井ノ下遺跡出土遺物観察表

屋敷跡出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00001	軟質陶器 焙烙	1/3残	口(33.6) 高5.5	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・粗粒砂	型作り成形。底部は浅く丸い。把手は3箇所と考えられる。底面に離砂。	
10-00002	軟質陶器 焙烙	破片	口(36.0)	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・粗粒砂	型作り成形。底部は浅く丸い。把手は4箇所と考えられる。底面に離砂。	
10-00003	軟質陶器 焙烙	破片	口(32.8)	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・粗粒砂	型作り成形。底部は浅く丸い。把手は5箇所と考えられる。底面に離砂。	
10-00004	軟質陶器 焙烙	破片	口(35.2)	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・粗粒砂	型作り成形。底部は浅く丸い。把手は6箇所と考えられる。底面に離砂。	
10-00005	軟質陶器 養蚕鍋	破片	口(23.0) 最幅(25.0)	還・並・黒灰・硬・白色微粒子・黒色鉱物粒子	轆轤右回転成・整形。器厚は薄い。体部下半部は回転篋削りを施す。	
10-00006	陶器 碗	口縁部欠	底(5.2)	還・並・灰白・硬	轆轤右回転成・整形。透明釉を施す。	
10-00007	陶器 蓋	部分欠損	径6.7・摘径1.5・高1.9	還・並・灰黄・硬	轆轤右回転成・整形。上面に鉄釉の三翼文と間に銅釉の朱点文を施文する。	
10-00008	陶器 土瓶	2/3残	底(7.2)	還・並・灰黄・硬	轆轤右回転成・整形。立ち上がり部は露胎。	
10-00009	焼締陶器 搦り鉢	部分欠損	口30.8・高12.4・底14.8	酸・並・黄橙・締・黒色粒子	轆轤右回転成・整形。口縁部直下に銅の補修が認められる。	
10-00010	焼締陶器 搦り鉢	破片	口(35.0)・高15.5・底13.2	酸・並・黄橙・軟・長石	轆轤右回転成・整形。器内面に丸に「大」の刻印が押捺されている。	
10-00011	染付磁器 湯呑み	1/3残	口(7.2)・高4.4・底3.7	還・並・白・締・透明釉	5脚揃いか。	
10-00012	染付磁器 湯呑み	1/4残	口(7.4)・高4.4・底(3.6)		丸味を帯びた作り。高台は太くしっかりした作りになっている。	
10-00013	染付磁器 湯呑み	破片	口(7.2)			
10-00014	染付磁器 湯呑み	破片	底3.8			
10-00015	染付磁器 湯呑み	破片	底(3.6)			
10-00016	染付磁器 湯呑み	1/3残	口(7.2)・高6.1・底(3.6)	還・並・白・締・透明釉	外面に山水図を描く。	
10-00017	染付磁器 湯呑み	1/3残	口(7.0)・高5.7・底(3.6)	還・並・白・締・透明釉	外面に秋草文(か)を描く。	
10-00018	染付磁器 湯呑み	3/4残	口6.8・高5.6・底3.5			
10-00019	染付磁器 湯呑み	破片	底3.4	還・並・白・締・透明釉	細片のため、紋様構成の詳細は不分明。	
10-00020	染付磁器 湯呑み	1/4残	口(7.4)・高6.4・底(4.4)	還・並・白・締・透明釉	図柄は六歌仙か。器内面に雷文を巡らす。高台部にも雷文を巡らす。	
10-00021	染付磁器 湯呑み	1/3残	口(7.6)・高6.2・底(4.6)			
10-00022	染付磁器 飯碗	2/3残	口13.2・高7.6・底7.0	還・並・白・締・透明釉	外面は梅花、内面は楼閣山水と老人を描いている。「浦島物語」か。	
10-00023	染付磁器 皿	部分欠損	口13.4・高3.3底8.2	還・並・白・締・透明釉	見込み及び器内面は松・竹を描く。外面は帆掛け船(か)を描く。	
10-00024	染付磁器 鉢	破片	厚0.4	還・並・白・締・透明釉	外面に唐草。器内面に梅・竹(か)、10-00024の内面には松を描く。「三友」を分割している。	
20-00001	石製品 上白	破片	厚11.7 重4650g	粗粒輝石安山岩	新旧の目が見られる。目は6分割にしてあるが目の掘り込みは精緻さが認められない。	
40-00001	鉄器 鍋釣り手	2/3残	幅0.54 厚0.15		図の右端は鍋に釣り下げる部分。盤状の延ばされた先端を90度の捻りを加え加工してる。	
40-00002	鉄器 刀子	鋒欠損	残存長16.4 幅1.7		顕著な研ぎ減りが認められる。鋒を欠損している。	
40-00003	銅銭	完形	径2.15		寛永通寶。	

2区第2号溝状遺構

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00026	須恵器 耳皿	覆土内 完形	長径11.0 底6.2	還・並・灰白・締・黒色粒子	轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。皿の両端を摘む様み再成形している。	秋間産

第1号住居跡出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00027	須恵器 碗	床直層 2/3残	口(14.2)・高4.4・底7.3	中・並・灰黄・軟・黒色鉱物粒子	立ち上がりから口唇部まで薄く均質である。轆轤右回転成整形、付高台。	秋間産か

第2号住居跡出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00028	土師器 甕	覆土内 破片	厚0.6	酸・並・浅黄橙・並・透明鉱物粒子・ 白色微粒子	胴部片。縦位の篋削りが顕著。細片のため、器形・ 紋様構成の詳細は不明。	秋間産か

第3号住居跡出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00029	土師器小 形台付甕	床直層 脚部欠損	口10.6・胴11.9・基 4.8	酸・並・鈍橙・並・白色微粒子・黒 色粒子	脚部を欠損し、欠損部を磨き調整している。下半 部は型作り成形。	吉井・藤 岡
10-00030	土師器 甕	甕内 破片	口(18.2) 胴最(22.6)	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒・黒 色鉱物粒・透明鉱物粒	胴部の張りが強く球状に近い。口縁部には「コ」の 字状口縁の兆しが認められる。	吉井・藤 岡
10-00031	土師器 甕	甕内 破片	口(20.6)	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒・黒 色鉱物粒・透明鉱物粒	口縁部は緩やかに外反する。口縁直下の一部に第 二次整形が未整形状態の部分認められる。	吉井・藤 岡
10-00032	土師器 甕	甕内 4/5残存	口(19.4) 胴最(20.6)	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒・黒 色鉱物粒・透明鉱物粒	口縁部は中・下端に篋乃至棒状工具による撫でが 施されている。初期「コ」の字状口縁部か。	吉井・藤 岡
10-00033	土師器 甕	甕内 部分欠損	口20.6・胴最21.3・ 底5.2	酸・並・浅黄橙・並・白色微粒・黒 色鉱物粒・透明鉱物粒	口縁部「く」の字状に外反する。口縁部には粘土紐 の接合痕が明瞭。胴下半部は縦位の篋撫で。	吉井・藤 岡
10-00034	土師器 甕	甕内 1/3残	口(20.8)	酸・並・鈍黄橙・並・白色微粒・黒 色鉱物粒・透明鉱物粒	口縁部は緩やかに外反する。口縁部下半部に、未 整形部分が認められる。	吉井・藤 岡
10-00035	土師器 甕	掘り方内 破片	口(21.4)	酸・並・鈍橙・並・白色微粒・黒色 鉱物粒・透明鉱物粒	器厚が薄く均質。口縁部は緩やかな外反気味。	吉井・藤 岡
10-00036	土師器 甕	甕内床直 層2/3残	口31.5・高27.4・孔 10.2	酸・並・黄橙・並・細粒雲母・白色 粒子	外傾胴部が口縁部で強く外傾する。外面胴下半は 縦位、口縁部直下は横位に篋削りを施す。	藤岡産
10-00037	須恵器 坏	覆土内 部分欠損	口11.5・高3.7・底6.0	還・締・灰白・硬・黒色粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00038	須恵器 坏	甕内 2/3残	口12.0・高3.4・底6.8	還・締・灰白・硬・黒色粒子	直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右回転成形 、底部は回転糸切り。内面有機質付着。	秋間産
10-00039	須恵器 坏	床直層 完形	口12.1・高3.3・底7.8	還・並・灰白・硬・黒色粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00040	須恵器 坏	床直層 部分欠損	口12.4・高3.9・底7.8	還・並・灰白・硬・黒色粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00041	須恵器 坏	床面直上 完形	口12.5・高6.6・底3.6	還・締・灰白・硬・白色微粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00042	須恵器 坏	覆土内 2/3残	口12.6・高6.9・底3.8	還・並・灰白・硬・黒色粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00043	須恵器 坏	覆土内 部分欠損	口12.7・高7.9・底4.2	還・並・灰白・硬・黒色粒子	底部から直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00044	須恵器 坏	覆土内 部分欠損	口12.5・高6.6・底3.6	還・締・灰白・硬・白色微粒子	体部下半部が張る。口縁部の器厚は薄い。轆轤右 回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00045	須恵器 坏	床直層 部分欠損	口13.0・高7.9・底4.1	還・並・灰白・硬・夾雑物なし	器形は歪む。直線的に立ち上がる。器厚薄い。轆 轤右回転成形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00046	須恵器 坏	覆土内 完形	口10.6・高5.5・底7.0	還・締・灰白・硬・白色微粒子	器厚が薄い口縁部は直線的で長い。轆轤右回転成 形、付高台。	秋間産
10-00047	須恵器 坏	床直層 完形	口11.4・高4.5・底6.4	還・締・灰白・硬・白色微粒子・黒 色粒子	器厚が薄い口縁部は直線的。轆轤右回転成形、 付高台。	秋間産
10-00048	須恵器 坏	床直層 2/3残	口13.5・高7.0・底5.7	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・ 透明鉱物粒子	口縁部は強く外傾しておて器厚が厚い。轆轤右回 転成形、付高台。	秋間産か
10-00049	須恵器 蓋	覆土内 破片	口14.3	還・締・灰白・硬・白色微粒子・黒 色粒子	摘み部を欠損する。天井部は回転篋削りを施す。 轆轤の回転は右回転。	秋間産
10-00050	須恵器 蓋	覆土内 2/3残	口16.3	還・締・灰白・硬・黒色粒子	摘み部を欠損する。天井部は回転篋削りを施す。 轆轤の回転は右回転。	秋間産
10-00051	須恵器 蓋	床直層 2/3残	口16.7・高4.0・摘3.7	還・締・灰白・硬・黒色粒子	摘み部リング状。天井部は回転篋削りを施す。轆 轤の回転は右回転。	秋間産
10-00052	須恵器 盤	覆土内 破片	底12.8	還・並・灰白・硬・夾雑物なし	轆轤右回転成形、付高台。体部より上位は人為 破損。	秋間産
10-00053	須恵器 瓶	覆土内 破片	厚0.9	還・並・灰白・硬・夾雑物なし	紐作り後轆轤整形(右回転)。横線の条痕文が施す。	秋間産
10-00054	須恵器 瓶	掘り方内 破片	底(15.4)	還・並・灰白・硬・夾雑物なし	紐作り後轆轤整形(右回転)。横線の条痕文が施す。	秋間産

第2号炭窯跡作業場出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00055	土師器 短頸壺	覆土内 破片	口(12.0)	酸・並・鈍褐・軟・黒色鉱物粒子・ 高温石英	型作り成形。底部は篋削り、体部に型膚を残す。 口縁部は横撫で。内面は篋撫で後布引撫で。	産不詳
10-00056	土師器 埴	覆土内 破片	口(13.2)	酸・並・橙・硬・白色微粒子・赤褐 色粒子	紐作り後回転撫で整形、内面は篋撫で再整形後縦 位に暗文を施す。	産不詳
10-00057	須恵器 坏	覆土内 破片	口(13.0)・高4.2・底 (8.4)	還・締・灰白・密・黒色粒子	器厚は薄く丸味を帯びて立ち上がる。轆轤右回 転成形、底部は回転糸切り。自然袖付着。	秋間産
10-00058	須恵器 坏	覆土内 破片	口(13.2)・高4.1・底 (6.0)	還・締・灰白・硬・夾雑物無し	腰部は丸味が強い。器厚は薄い。轆轤右回転成 形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00059	須恵器 坏	覆土内 破片	口(14.0)・高4.9・底 (8.0)	還・並・灰黄・軟・細砂粒	体部が張り、口縁部は外反する。轆轤右回転成 形、付高台。	秋間産
10-00060	須恵器 坏	覆土内 破片	底6.4	還・並・灰白・並・黒色粒子	体上がりから体部にかけて丸味を帯びる。轆轤右 回転成形、口縁部欠損、付高台。	秋間産

第7章 上里見井ノ下遺跡

10-00061	須恵器 埴	覆土内 破片	底(8.0)	完形並・灰白・並・黒色粒子・白色 微粒子	体上がりから体部にかけて丸味を帯びる。轆轤右 回転成整形、口縁部欠損、付高台。	秋間産
10-00062	須恵器 坏か	覆土内 口縁欠損	口(16.2)	還・並・灰・硬・夾雑物無し	腰部が丸味を強く帯び張った状態、口縁部は直線 的に立ち上がる。轆轤右回転成整形。	秋間産
10-00063	須恵器 埴	覆土内 破片	底(9.4)	還・並・内一白灰・外一黒灰・夾雑 物無し	幾分丸味を帯びて立ち上がる。独特な燻し焼成。 轆轤右回転成整形、口縁部欠損、付高台。	秋間産
10-00064	須恵器 高坏	覆土内 3/4残	基部5.4	還・並・灰・硬・黒色粒子	轆轤右回転成整形。各部の基部周辺は細く成形さ れている。	秋間産
10-00065	須恵器 脚付盤か	覆土内 1/4残	基部6.3	還・並・灰・硬・黒色粒子・白色微 粒子	直線的に立ち上がる脚部は太く接合部の幅は広 い。轆轤右回転成整形。	秋間産
10-00066	須恵器 高坏	覆土内 1/4残	基部4.8	還・締・灰・硬・黒色粒子	脚部は直線的に立ち上がる。轆轤右回転成整形。	秋間産
10-00067	須恵器 高坏	覆土内 破片	基部5.7	還・並・灰・硬・黒色粒子	脚部は丸味を帯びてに立ち上がる。轆轤右回転成 整形。	秋間産
10-00068	須恵器 瓶	覆土内 破片	厚0.85	還・並・灰・硬・白色微粒子	紐作り後轆轤整形(右回転)。肩部上位に平行沈線 引きし沈線間に斜位の櫛撫でを施す。	東海産か
10-00069	須恵器 甕	覆土内 破片	厚0.9	還・並・灰・硬・夾雑物無し	紐作り後叩き整形。平行叩きに宛具は青海波文。	秋間産
10-00070	須恵器 広口瓶	覆土内 破片	頸(23.1)	還・並・灰・並・白色微粒子	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面には、轆轤整 形時に刷毛状工具による撫でを施す。	秋間産
10-00071	施釉陶器 灰釉碗	覆土内 破片	口(17.0)	還・締・灰・硬 釉調は灰・オリブ～透明	口縁部は薄く直線的に立ち上がる。轆轤右回転成 整形、高台欠損(付高台)。	美濃

第2号炭窯跡(窯体被覆土)出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00072	須恵器 坏	被覆土内 1/3残	口(12.0)・高3.4・底 (6.4)	還・締・灰・硬・夾雑物無し	底部から腰部は丸味が強いが口縁部は直線的。轆 轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00073	須恵器 甕	被覆土内 1/3残	口(20.0) 頸(14.8)	還・並・灰白・並・シルト粒子	紐作り後叩き整形。叩き具は平行叩き、宛具は素 文。整形後口縁部は轆轤整形(右回転)。	秋間産

第8号炭窯跡出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00074	土製品 土管	窯底・壁 部分欠損	残存長29.1・径10.8 ・厚1.4	酸・並・黄橙・白色微粒子・赤褐色 粒子・黒色鉱物粒子	広義の型作り成形。離型時に生じる微細な粘土粒 子の溶解の皺は多数に認められる。	産不詳
10-00075	染付磁器 猪口	底直上層 破片	口5.8	還・締・乳白・密	口紅を施す。器外面に二艘の帆掛け船を描く。	産不詳
10-00076	染付磁器 湯呑み	底直上層 破片	口(7.0)	還・締・乳白・密	クローム青磁。	産不詳
10-00077	染付磁器 飯碗	底直上層 破片	底(4.0)	還・締・乳白・密	紋様部下半部しか残存しないため、紋様の詳細不 分明。	産不詳
10-00078	染付磁器 小皿	底直上層 1/2残	口(11.2)・高2.2・底 (6.0)	還・締・乳白・密	印判染め付け。銅版染め付けと考えられる。桜花 内に帆掛け船・松を刷る。山水図案。	産不詳
10-00079	陶胎染付 飯碗	底直上層 破片	口(10.9)	還・締・乳白・密	口紅を施し、内面側に須領幅に施す。	産不詳

第4号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
90-00001	服飾品 釦	埋土内 完形	径1.0 厚0.25	貝製	貝製釦。糸通しの穴は2つ。	
90-00002	服飾品 釦	埋土内 完形	径1.2 厚0.3	貝製	貝製釦。糸通しの穴は2つ。	
90-00003	服飾品 釦	埋土内 完形	径1.0 厚0.3	貝製	貝製釦。糸通しの穴は2つ。	
90-00004	服飾品 釦	埋土内 完形	径1.0 厚0.25	貝製	貝製釦。糸通しの穴は2つ。	
90-00005	服飾品 釦	埋土内 完形	径1.2 厚0.2	貝製	貝製釦。糸通しの穴は4つ。	
90-00006	硝子製品 薬瓶	埋土内 完形	口2.2・高13.0・底5.1	硝子製	外面に目盛りが6段に陽刻されている。	
90-00007	硝子製品 薬瓶	埋土内 完形	長15.2 幅9.0	硝子製	[INUISEIZOU]・[KAIRYO-IHISUIO]・ TRADEMARK]を陽刻。	
90-00008	硝子製品 ストロー	埋土内 完形	長11.7 径0.5	硝子製	出土時には吸口側が外に少しだけ出て、大半が 00006の中に入った状態であった。	
40-00004	喫煙具 雁首	埋土内 完形	長5.25 径1.2	真鍮製	反りは殆ど無い。火皿は小さく付け根は太い。	
40-00005	喫煙具 吸口	埋土内 完形	長7.5 径1.2	真鍮製	口付は幾分広い。鑢着の痕跡は認められない。	
30-00001	喫煙具 羅字	40-00004 内	長5.1 径0.8	篠竹製	篠竹を先細りに成るように削り、雁首に装着しや すく加工されている。	
30-00002	喫煙具 羅字	40-00005 内	長4.8 径0.75	篠竹製	篠竹を先細りに成るように削り、吸口に装着しや すく加工されている。	
40-00006	鉄器 釘	埋土内 完形	残存長1.8 幅0.2	鉄製	頭部は丸く平で断面も丸い。木質が錆により置換 されている。先端側を欠損する。錆化が顕著。	

第2節 発見された遺構・遺物

40-00007	鉄器釘	埋土内 完形	残存長3.9 幅0.4	鉄製	頭部は丸く平で断面も丸い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00008	鉄器釘	埋土内 完形	残存長1.9 幅0.4	鉄製	頭部は丸く平で断面も丸い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00009	鉄器釘	埋土内 完形	残存長2.85 幅0.28	鉄製	頭部側を欠損する。断面は丸い。	
40-00010	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は無紋。	
40-00011	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.7		一銭銅貨、明治17年製造。	
40-00012	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.7		一銭銅貨、明治17年製造。	

第5号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00080	磁器鉢蓋	埋土内 完形	口8.0・高3.0・筒長 3.5	還元・締・乳白・密	天井部には、鉄軸で蛇の目に石目地仕上げにしてある。合子部は露胎。	
10-00081	磁器鉢	埋土内 完形	口8.7・高4.4・底5.6	還元・締・乳白・密	口縁部直下には、鉄軸で蛇の目に石目地仕上げにし蓋と揃いの仕上げに成っている。	
90-00009	化粧具 懐中鏡	埋土内 鏡面残存	長辺7.7 短辺4.7	硝子製	四辺は面取りが施されている。裏面には水銀が一部に残存する。	
90-00010	化粧具 櫛	埋土内 完形	長8.5・幅2.2・厚0.2	人造樹脂か	平甲形。櫛の目は44本を数える。	
90-00011	硝子製品 薬瓶	埋土内 完形	口2.0・高9.1・底3.4	硝子製	口縁部の上下二段に突帯を巡らす。	
40-00013	喫煙具 吸口	埋土内 完形	長11.1 径1.2	真鍮製	口付は幾分広い。鑢着の痕跡は認められない。	
50-00001	装身具 コウガイ	埋土内 完形	長9.0・幅5.5・厚0.4	龜甲製	断面甲丸状を呈する。	
40-00014	鉄製品 釘	埋土内 完形	残存長5.7 幅0.6	鉄製	頭部は欠損する。断面も横長長方形。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00015	鉄製品 釘	埋土内 破片	残存長2.7 幅0.5	鉄製	小形の鏝か。断面も横長長方形。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00016	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.2		「宣和通寶」。背面は無紋。	
40-00017	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00018	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00019	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00020	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00021	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00022	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00023	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00024	貨幣銅銭	埋土内 完形	径2.6		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00025	貨幣銅貨	埋土内 完形	径2.2		一銭銅貨。「大正八年」製造。	
40-00026	貨幣銅貨	埋土内 完形	径2.7		一銭銅貨。「大正二年」製造。	
40-00027	貨幣銅貨	埋土内 完形	径2.7		一銭銅貨。「明治十年」製造。	

第6号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00028	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.8 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00029	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.7 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00030	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.6 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00031	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.8 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00032	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長7.4 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。先端側を欠損。	
40-00033	鉄器釘	埋土内 尖端欠損	残存長5.1 幅0.55	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00034	喫煙具 雁首	埋土内 完形	残存長6.3 雁首長3.15	真鍮製	火皿下端のくびれは明瞭。長さが短いことから、懐中用か。羅字が残存する。	

第7章 上里見井ノ下遺跡

40-00035	金属製品 不詳	埋土内 完形	径1.8	銅製	雁首銭か。	
40-00036	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00037	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00038	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00039	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00040	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径0.7		「寛永通寶」。背面は青海波文。	
40-00041	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「文久永寶」。背面は青海波文。	

第7号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00042	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。	
40-00043	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.1		「寛永通寶」。	
40-00044	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.7		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00045	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.7		「文久永寶」。背面は青海波文。	
40-00046	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」。背面は青海波文。	

第8号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00047	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長2.9 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換する。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00048	鉄器 釘	埋土内 頭部欠損	残存長4.35 幅0.3	鉄製	断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00049	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.15 幅0.45	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質は錆が置換する。先端側を欠損する。錆化が顕著。	
40-00050	鉄器 釘	埋土内 完形	長7.8 幅0.5	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00051	鉄器 釘	埋土内 頭部欠損	残存長2.7 幅0.75	鉄製	断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00052	金属製品 不詳	埋土内 完形	長2.4 幅1.5		錆の塊か。	
40-00053	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00054	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00055	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00056	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00057	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00058	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00059	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00060	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00061	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.6		「寛永通寶」か。錆化が顕著なため判読不能。	
40-00062	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.6		複数(2枚)が錆により貼り付いている。	

第9号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目(cm) 目(g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00063	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長2.25 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。	
40-00064	鉄器 釘	埋土内 完形	長5.1 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00065	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長2.85 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。	
40-00066	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長4.2 幅0.3	鉄製	小形の鏝か。断面も横長長方形。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	

第2節 発見された遺構・遺物

40-00067	鉄器 釘	埋土内 頭部欠損	残存長4.65 幅0.45	鉄製	断面も四角い。木質が錆により置換されている。錆化が顕著。	
40-00068	喫煙具 雁首	埋土内 完形	長4.35 幅1.35	真鍮製	火皿下端のくびれは明瞭。長さが短いことから、懐中用か。羅字が残存する。	
40-00069	喫煙具 吸口	埋土内 完形	長5.8 幅1.35	真鍮製	吸口は肥厚させている。長さが短いことから、懐中用か。羅字が残存する。	
40-00070	金属製品 不詳	埋土内 完形	長3.9 径2.55		雁首銭か。	
40-00071	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		銭種は錆化が顕著なため判読不能。	
40-00072	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径(2.4)		銭種は錆化が顕著なため判読不能。	
40-00073	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径(2.6)		銭種は錆化が顕著なため判読不能。	
40-00074	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		銭種は錆化が顕著なため判読不能。	

第10号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00075	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.1		5円硬貨。昭和27年製造。	
40-00076	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.1		5円硬貨。昭和37年製造。	

第11号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00077	喫煙具 雁首	埋土内 完形	長4.8 幅1.2	真鍮製	火皿下端のくびれは顕著にはくびれない。長さが短いことから、懐中用か。羅字が残存する。	
40-00078	喫煙具 吸口	埋土内 完形	長6.3 幅1.2	真鍮製	吸口は肥厚させている。長さが短いことから、懐中用か。羅字が残存する。	

第12号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
90-00009	硝子製品 瓶	埋土内 破片	厚0.4	硝子製	瓶の底部片。細片のため詳細は不分明。	
40-00079	鉄器 釘	覆土内 完形	長5.0 幅0.45	鉄製	頭部は四角く平。断面も四角形。全体に錆化が顕著。	
40-00080	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長6.9 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。	
40-00081	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長6.75 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。	
40-00082	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長4.5 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆により置換されている。先端側を欠損する。	
40-00083	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長5.4 幅0.4	鉄製	断面は四角い。木質が錆により置換されている。両端を欠損する。複数が錆化が顕著により付着。	
40-00084	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長4.5 幅0.4	鉄製	断面は四角い。木質が錆により置換されている。両端を欠損する。	
40-00085	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長5.4 幅0.3	鉄製	断面は四角い。木質が錆により置換されている。両端を欠損する。	
40-00086	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長5.4 幅0.45	鉄製	断面は四角い。木質が錆により置換されている。両端を欠損する。	
40-00087	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.7		「寛永通寶」。背面は青海波文。	
40-00088	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.7		「寛永通寶」。背面は青海波文。	
40-00089	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.8		「寛永通寶」。背面は青海波文。	

第13号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00090	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長3.9 幅0.4	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著。先端側を欠損。	
40-00091	鉄器 釘	埋土内 尖端欠損	残存長4.5 幅(0.6)	鉄製	頭部側を欠損する。断面は四角形。錆化が顕著。	
40-00092	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00093	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径(2.4)		錆化が顕著なため、銭種判読は不能。	

第7章 上里見井ノ下遺跡

第14号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00082	灰釉陶器 德利	埋土内 完形	口3.6・高23.0・底7.0	還元・締・灰・密	轆轤右回転成形。器外面中位にコバルトで「志なのや」を書く。	
10-00083	染付磁器 湯呑み	埋土内 完形	口6.8・高8.1・底4.2	還元・締・灰・密	唐子5人の鳳上げの風景を描く。高台には雷文を描く。	
40-00094	喫煙具 雁首	埋土内 完形	長4.8 幅1.2	真鍮製	火皿の基部のくびれは顕著ではないが、肩は明瞭に作り出している。大ききから携帯用か。	
40-00095	喫煙具 吸口	埋土内 完形	長6.0 幅1.2	真鍮製	口付側は短い。肩は明瞭には認められる。大ききから携帯用か。	
40-00096	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面に「文」の字が認められる。古寛永通寶。	
40-00097	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.0		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00098	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00099	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00100	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00101	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00102	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」。背面に「文」の字が認められる。古寛永通寶。	
40-00103	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00104	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.3		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00105	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00106	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00107	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	
40-00108	貨幣 銅銭	埋土内 完形	径2.2		「寛永通寶」。背面は無紋。	

第3号墓出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
40-00109	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長2.4 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00110	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長1.95 幅0.2	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00111	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長2.1 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00112	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.9 幅0.2	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00113	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	長4.5 幅0.5	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著。	
40-00114	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長2.3 幅0.25	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00115	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.9 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00116	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.9 幅0.2	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00117	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.3 幅0.2	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00118	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.3 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。木質が錆に置換されている。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00119	鉄器 釘	埋土内 先端欠損	残存長3.6 幅0.3	鉄製	頭部は四角く平で断面も四角い。錆化が顕著で先端側を欠損。	
40-00120	金属製品 コハゼ	埋土内 完形	長1.95 幅1.8	真鍮製	錆化が顕著なため、文字刀の判読は不能。	
40-00121	金属製品 コハゼ	埋土内 完形	長1.95 幅1.8	真鍮製	錆化が顕著なため、文字刀の判読は不能。	
40-00122	貨幣 硬貨	埋土内 完形	径2.7		1銭銅貨。明治19年製造。	
40-00123	貨幣 硬貨	埋土内 完形	径2.2		1銭銅貨。大正8年製造。	
40-00124	貨幣 硬貨	埋土内 完形	径2.2		1銭銅貨。大正11年製造。	
40-00125	貨幣 硬貨	埋土内 完形	径2.2		1銭銅貨。大正12年製造。	
40-00126	喫煙具 雁首	埋土内 完形	残存長4.2 幅1.05	真鍮製	反りは殆ど無い。火皿は小さく付け根は太い。	

第2節 発見された遺構・遺物

40-00127	喫煙具 吸口	埋土内 完形	残存長5.4 幅1.05	真鍮製	口付は幾分広い。鍍着の痕跡は認められない。	
----------	-----------	-----------	-----------------	-----	-----------------------	--

3区土器だまり出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00084	須恵器 坏	被覆土 破片	口(11.8)・高3.7・底 (7.2)	還・硬・灰白・並・黒色粒子	全体に器厚は薄い。底部から直線的に立ち上がる。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00085	須恵器 坏か	被覆土 破片	口(15.7)	還・硬・灰白・並・黒色粒子・白色 微粒子	器厚は薄い。丸味を帯びて立ち上がる。轆轤右回 転成整形。底部は欠損。	秋間産
10-00086	須恵器 坏	被覆土 口縁欠損	底(7.5)	還・硬・灰白・並・黒色粒子・白色 微粒子	底部は厚いが立ち上がりは薄い。轆轤右回転成整 形、回転糸切り。口縁部欠損。	秋間産
10-00087	須恵器 瓶	被覆土 破片	口(13.8)・高49.2・ 底14.0	還・並・灰・並・黒色粒子・白色微 粒子	紐作り後轆轤整形(右回転)。図は破片からの復元 図。胴部が大きいのが特徴。	秋間産
10-00088	須恵器 甕	被覆土 破片	頸(26.4) 胴(58.2)	還・並・灰・硬・シルト粒子	紐作り後叩き整形。平行叩きに宛具は青海波文。	秋間産
10-00089	須恵器 甕	被覆土 破片	口(40.6) 胴(79.8)	還・並・灰・硬・黒色粒子多	紐作り後叩き整形。平行叩きに宛具は素文。器外 面に一部発泡が認められる。	秋間産

第12号土坑出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00090	須恵器 坏	覆土内 破片	口(12.4)・高4.0・底 (7.3)	還・軟・灰白・並・シルト粒子	底部は厚めで、口唇部に向かい先細りで立ち上が る。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産

第1号埋設土器出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00091	縄紋土器 深鉢	埋土内 破片	厚0.6	酸・並・鈍橙・並・砂粒多・黄褐色 粒子	胴部中位のみが出土。RL 原体を横転施文する。	

1区低地部出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00092	須恵器 坏	包含層中 1/4残	口(11.4)・高3.8・底 (3.2)	還・締・灰・並・白色微粒子	器厚は全体に薄い。口縁部は非常に薄い。轆轤 右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00093	須恵器 坏	包含層中 破片	底(7.2)	還・締・灰白・最良・白色微粒子	秋間古窯跡群中では最良の生地土を使用してい る。轆轤右回転成整形、回転麗起こし。	秋間産
10-00094	須恵器 坏	包含層中 1/4残	口(11.5)・高3.7・底 (7.2)	還・締・灰・並・白色微粒子・黒色 粒子	底部から丸味を帯びて立ち上がる。轆轤右回転成 整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00095	須恵器 坏	包含層中 口縁欠損	底(6.8)	還・並・外黒褐・内白灰・並・白色 微粒子・黒色粒子	轆轤右回転成整形、回転糸切り。口縁部欠損。	秋間産
10-00096	須恵器 坏	包含層中 破片	口(15.6)・高8.1・底 (4.3)	還・硬・灰・並・白色微粒子	器厚は薄い。全体に直線的に立ち上がる。轆轤右 回転成整形、付高台。	秋間産
10-00097	須恵器 甕	包含層中 破片	厚0.9	還・締・黄灰・夾雑物無し	紐作り後叩き整形。平行叩きに宛具は青海波文。	秋間産
10-00098	須恵器 甕	包含層中 破片	厚0.9	還・締・灰・並・白色微粒子・黒色 粒子	紐作り後叩き整形。平行叩きに宛具不詳(素文)。	秋間産
10-00099	須恵器 瓶	包含層中 破片	厚0.8	還・硬・灰・並・白色鈹物粒子	器内面に横撫での整形痕が明瞭に認められる。	乗附産
40-00125	鉄製品 不詳	包含層中 破片	残存長3.1 残存幅2.7	鑄鉄片	小単位に亀裂が認められる。	
40-00126	鉄製品 不詳	包含層中 破片	遺存長2.7 遺存幅2.4	鑄鉄片	亀裂は40-00125程顕著ではない。	

1区低地部黒灰色粘質土層出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00100	土師器 坏	包含層中 破片	口(13.4)	酸・並・灰黄・並・白色微粒子・黒 色鈹物粒子	口縁部は直立して立ち上がり、緩やかに外反する。 体部は篋削り口縁部直下に型腐を残す。	産不詳
10-00101	土師器 坏か鉢	包含層中 破片	口(15.8)	酸・並・灰黄・並・白色微粒子・黒 色鈹物粒子	器厚は厚い。口縁部は内湾気味に立ち上がる。外 面は篋削り、口縁部・内面は横撫でを施す。	産不詳
10-00102	土師器 高坏か	包含層中 破片	口(16.0)	酸・並・灰黄・並・赤褐色粒子・黒 色鈹物粒子	やや丸味を帯びる。口唇部は尖り気味。外面は摩 滅気味。内面は研磨を施す。	産不詳
10-00103	土師器 小形壺	包含層中 破片	胴13.2	酸・並・鈍赤褐・並・白色微粒子・ 黒色鈹物粒子	球状を呈する胴部。外面は篋削りを施す。内面は 撫でを施す。	産不詳
10-00104	土師器 坏か	包含層中 破片	厚0.75	酸・並・灰黄・並・白色微粒子・黒 色鈹物粒子	10-00100と同一個体の可能性が有る。	産不詳

遺構外出土遺物

遺物番号 図版番号	遺物種 器種	出土層位 遺存度	度 量 目 (cm) 目 (g)	焼成・色調・胎土	形状・技法等の特徴	摘要
10-00105	軟質陶器 火鉢	表土層 破片	口(38.5) 底(23.0)	還・硬・黒褐・並・夾雑物無し	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面全体に研磨を 施し、「黒光り」を意図した仕上げ。	産不詳
10-00106	軟質陶器 甕	表土層 破片	厚1.0	還・軟・灰黄・並・黒色鈹物粒子・ 石英雲母片岩粒	紐作り後轆轤整形(右回転)。器外面は横位の刷毛 撫でを施す。	藤岡産

第7章 上里見井ノ下遺跡

10-00107	染付磁器 湯呑み	表土層 破片	口4.8・高5.5・底2.9	還・締・乳白・密	印判染め付け。ベロ藍の銅板による紋様絵付け。	
10-00108	青磁 鎗 手蓮弁文	表土層 破片	口(12.8)	還・締・白・密	蓮弁は膨らみが強く弁間は殆ど隙間の無い。弁単は口唇部に達している。間弁の弁単は丸い。	龍泉窯系
20-00125	貨幣 銅銭	表土層 完形	径2.4		「寛永通寶」。背面は無紋。	
10-00109	須恵器 瓶か	表面採集 破片	口(3.0)	酸・並・黄橙・細粒雲母	内湾する小形の器種。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	藤岡産
10-00110	須恵器 耳皿	Aトレン チ破片	底(6.2)	還・締(重い)・灰・並・密白色微粒子	自然釉が付着する。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	乗附か秋 間産
10-00111	須恵器 内黒環	表土層 破片	厚0.4	酸・並・黒褐・並・赤褐色粒子・黒色鉍物粒子	器内面に磨きを施す。轆轤右回転成整形、回転糸切り。口縁部欠損。	秋間産
10-00112	須恵器 環	表土層 3/4残	口10.6・高3.3・底5.0	還・並・黄灰・並・白色粒子	小形環。器厚は全体に薄作り。直線的に立ち上がる。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00113	須恵器 環	表土層 1/2残	口(12.0)・高3.8・底(6.4)	還・並・灰白・並・夾雑物無し	体部から口縁部が丸味を帯びる。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00114	須恵器 環	表土層 1/2残	口(12.3)・高3.5・底(8.2)	還・締・灰・並・黒色粒子	口縁部はやや丸味を帯びる。轆轤右回転成整形、底部は回転糸切り。	秋間産
10-00115	須恵器 環	表土層 口縁欠損	底(7.2)	還・締・灰・並・黒色粒子	腰部がやや張る。轆轤右回転成整形、回転糸切り。口縁部欠損。	秋間産
10-00116	須恵器 壺	表土層 1/3残	口(15.0)・高6.3・底(8.8)	還・締・灰・並・黒色粒子・シルト粒子	器厚は大形の割に薄作り。口縁部は底部から直線的に立ち上がる。	秋間産
10-00117	須恵器 蓋	Fトレン チ内	口(13.6)	還・締・灰・密・黒色粒子	外面に自然釉が付着する。内面側に返りを具備する。轆轤右回転成整形。	秋間産
10-00118	須恵器か 箱物	表土層 破片	厚0.8	還・並・灰・並・細粒雲母	板状成形した粘土を会わせて成形している。近世の所産の可能性ある。	藤岡産
10-00119	須恵器 羽釜	表土層 破片	口(18.8) 鏝(22.0)	還・並・灰黄・並・高温石英・黒色鉍物粒子	器厚は薄く作りは丁寧。紐作り後轆轤整形(右回転)。鏝は貼付け。	秋間産
10-00120	須恵器 高環	表土層 破片	厚0.8	還・並・灰・硬・白色微粒子・白色粒子	脚中位まで絞気味。接合面に回転掻き破りが認められる。紐作り後轆轤整形(右回転)。	秋間産
10-00121	施釉陶器 碗	表土層 破片	口(14.0)	還・締・灰・密	、口縁部端部が外反する。轆轤右回転成整形。底部は欠損。施釉は刷毛塗りか。	
10-00122	瓦 男瓦	4 墓埋土 破片	厚1.1	還・締・黒褐・密・シルト粒子	半載作り。外面に轆轤成形痕を残す。	秋間産
10-00123	瓦 男瓦	屋敷跡内 破片	厚1.0	還・締・暗灰・密・シルト粒子	半載作り。外面は縄叩き後再度轆轤整形を施す。	秋間産
10-00124	瓦 男瓦	屋敷跡内 破片	厚1.7	還・締・灰・密・シルト粒子	半載作り。外面は縄叩き後再度轆轤整形を施す。	秋間産
10-00125	瓦 男瓦	表土層 破片	厚1.5	還・締・灰・密・夾雑物無し	半載作り。外縁に轆轤成形痕を残す。端面面取りは3回。	秋間産
10-00126	瓦 女瓦	表土層 破片	厚1.4+ α	酸・並・橙・粗・赤褐色粒子・白色粒子	細片のため、詳細は不分明。	秋間産
10-00127	瓦 女瓦	屋敷跡内 破片	厚1.8	還・締・灰・密・白色粒子	一枚作り。凸面には単軸絡条体の回転整形を施す。	秋間産
10-00128	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.6	酸・並・暗褐・並・含繊維・石英・白色粒・透明鉍物粒	口唇部は尖り気味。羽状縄紋 RL 原体の縦転と多条縄紋による施文。	
10-00129	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.9	酸・並・明褐・並・含繊維・白色鉍物粒子・石英	口唇部は内斜し加飾する。多条原体の還部押捺を3段と、多条 LR 原体の横転施文。	
10-00130	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・赤褐・並・含繊維・粗粒砂・石英・黒色鉍物粒子	附加条2種(LR+r \times r)の横転施文とループ文の横位施文。	
10-00131	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・赤褐・並・含繊維・粗粒砂・石英・黒色鉍物粒子	上位に原体還部の押捺を2段に施文し、直下にループ文、更に、羽状縄紋を施文する。	
10-00132	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.8	酸・並・褐・並・含繊維・白色鉍物粒子・チャート片	原体還部押捺を伴う RL 原体の横転施文。	
10-00133	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚1.0	酸・並・赤褐・並・含繊維・白色鉍物粒子	原体還部押捺が3段と、多条原体の羽状縄紋を施文する。	
10-00134	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.9	酸・並・赤褐・並・白色鉍物粒子・黒色鉍物粒子	附加条1種(RL+r+r 原体)の横転施文。	
10-00135	縄紋土器 深鉢	3 住覆土 破片	厚0.8	酸・並・暗褐・並・含繊維・高温石英・黒色鉍物粒子	単節 RL 原体横転施文と、半載竹管の押し引きを施文する。	
10-00136	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・明褐・並・赤褐色粒子・黒色鉍物粒子・高温石英	附加条1種(RL+r+r 原体)の横転施文。	
10-00137	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.7	酸・並・褐・並・高温石英・白色粒子・黒色鉍物粒子	単節 LR 原体の横転施文。	
10-00138	縄紋土器 深鉢	1 住覆土	厚0.6	酸・並・暗褐・並・黒色鉍物粒・白色粒子	多条縄紋 LR 原体の横転施文。	
10-00139	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・黒褐・並・黒色鉍物粒子・角閃石・透明鉍物粒子	多条縄紋 LR 原体の横転施文。	
10-00140	縄紋土器 深鉢	2 炭窯 破片	厚0.7	酸・並・鈍黄橙・並・赤褐色粒子・細砂粒	多条縄紋 LR 原体の横転施文。	
10-00141	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	底(13.0)	酸・並・明褐・並・黒色鉍物粒子・赤褐色粒子	底面は上げ底気味。附加条1種(RL+r+r 原体)の横転施文。	
10-00142	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.1	酸・並・明褐・並・高温石英・白色粒子	平坦な口唇部直下に半載竹管の押し引きを施し、縦位の半載竹管による平行沈線を施文。	
10-00143	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.6	酸・並・黒褐・並・高温石英・白色微粒子	半載竹管による肋骨文か。	
10-00144	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・明褐・並・赤褐色粒子・黒色鉍物粒子	口唇部は外面側に肥厚。半載竹管押し引き文を施す。	

第2節 発見された遺構・遺物

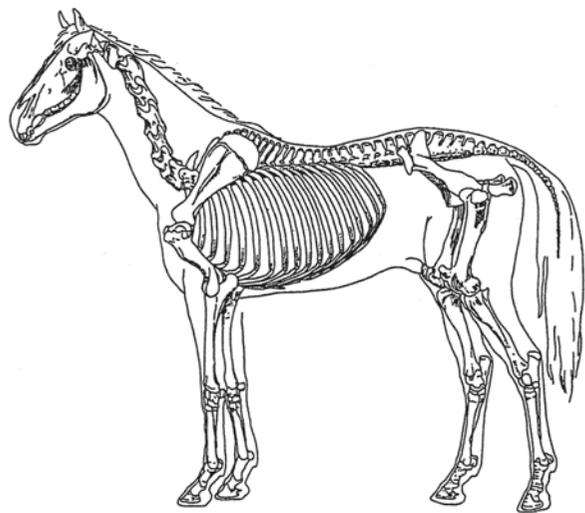
10-00145	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.8	酸・並・黒褐・並・高温石英・白色 微粒子・粗粒砂	口唇部に列点刺突文を施し、口唇部直下に半截竹 管の押し引き文を施文する。
10-00146	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.7	酸・並・黒褐・並・粗粒砂	口唇部は平坦。斜行の押し引き文を施文する。
10-00147	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・暗褐・並・白色鈳物粒子・ 赤褐色粒子	平行する押し引き文を施文する。
10-00148	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.1	酸・並・赤褐・並・粗粒砂・黒色鈳 物粒子	平行する押し引き文を施文する。
10-00149	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.2	酸・並・暗褐・赤褐色粒子・黒色鈳 物粒子・石英	木の葉文(?)と下位に平行する押し引き文を施文 する。
10-00150	縄紋土器 深鉢	2炭窯 破片	厚1.0	酸・並・暗褐・並・石英・高温石英・ 白色粒子	3条に横走させた押し引き文の直下に押し引き文 のモチーフ文を施文する
10-00151	縄紋土器 深鉢	2炭窯 破片	厚1.2	酸・並・赤褐・並・礫片・夾雑物少	地文に単節 LR 原体を縦軸施文しモチーフ文の 押し引き文を施文する。
10-00152	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・黒褐・並・高温石英・白色 微粒子・粗粒砂	押し引き文によるモチーフ文か。
10-00153	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・黒褐・並・白色粒子・粗粒 砂	波状口縁。地文に単節 LR 原体を横軸施文し、刻み 隆帯文を施文する。10-00159と同一個体。
10-00154	縄紋土器 深鉢	1井覆土 破片	厚0.6	酸・並・褐・並・白色微粒子・赤褐 色粒子	地文に単節 RL 原体を横軸施文し、押し引き 文と押し引き文のモチーフ文の施文か。
10-00155	縄紋土器 深鉢	調査区内 破片	厚0.7	酸・並・明赤褐・並・金雲母(黒雲母)・ 高温石英	波状口縁。口唇部沿いに押し引き文を4条施文し、 紐線文との間に山形の押し引き文を施文。
10-00156	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・鈍褐・並・礫片白色粒子	地文に単節 RL 原体を横軸施文し、押し引き 文と押し引き文のモチーフ文の施文か。
10-00157	縄紋土器 深鉢	低地粘質 層破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・石英・小礫	波状口縁。地文に単節 LR 原体を横軸施文し、刻み 隆帯文をモチーフ施文する。
10-00158	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・褐・並・白色粒子・黒色鈳 物粒子	口唇部は丸く太い隆帯文を施文後、口唇直下に波 状の刻み隆帯を貼付する。
10-00159	縄紋土器 深鉢	1住掘方 破片	厚0.7	酸・並・黒褐・並・白色粒子・粗粒 砂	太めの刻み隆帯文の上位に細い粘土紐を横位に梯 子状に施文する。10-00153と同一個体。
10-00160	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.0	酸・並・黒褐・並・黒色鈳物粒子・ 白色粒子・高温石英	地文に多条 LR 原体を施文し、刻み隆帯文を貼付 施文する。
10-00161	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・暗赤褐・並・高温石英・細 砂粒	地文に多条 RL 原体を横軸施文し刻み隆帯文 をモチーフ施文する。
10-00162	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・黒色鈳物粒子・ 高温石英・粗粒砂	地文に RL 原体を横軸施文し、横位に刻み隆帯文 を施文する。
10-00163	縄紋土器 深鉢	VI層土内 破片			10-00162と同一個体。
10-00164	縄紋土器 深鉢	調査区内 破片	底(8.1)	酸・並・鈍褐・並・赤褐色粒子・白 色粒子・粗粒砂	地文は認められない。素文の器面に刻み隆帯文 を横位に3条施文する。
10-00165	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・鈍褐・並・黒色鈳物粒子・ 高温石英	緩やかに外反する口縁部。口唇直下は横位、下位 は弧状に半截竹管による櫛描状の施文。
10-00166	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・鈍褐・並・赤褐色粒子・白 色鈳物粒子・粗粒砂	縦横の櫛描施文。
10-00167	縄紋土器 深鉢	VI層土内 破片	厚0.8	酸・並・k・並・白色微粒子・赤褐 色粒子	地文縄紋単節 LR 原体を縦軸施文後、縦位・斜位の 櫛描施文。
10-00168	縄紋土器 深鉢	1住掘方 破片	厚0.7	酸・並・暗赤褐・並・白色粒子・細 砂粒	内湾する口縁部。口唇直下には横位、下位に縦位 の櫛描施文する。
10-00169	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.8	酸・並・赤褐・並・高温石英白色鈳 物粒子・白色微粒子	横位・縦位・斜位の櫛描施文。
10-00170	縄紋土器 深鉢	調査区内 破片	厚0.7	酸・並・鈍褐・並・白色鈳物粒子・ 雲母・透明鈳物粒子	地文に単節 LR 原体の縦軸施文し、横位の櫛描施 文の区画内に、羽状に櫛描施文する。
10-00171	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.7	酸・並・赤褐・並・透明鈳物粒子・ 白色粒子	上半には縦横区画内に斜位の櫛描施文。下位に羽 状施文の櫛描文を施す。
10-00172	縄紋土器 深鉢	VI層土内 破片	厚0.8	酸・並・暗褐・並・黒色鈳物粒子・ 白色鈳物粒子	幅の広い深い山形沈線間に、半截竹管による櫛描 施文。
10-00173	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚1.2	酸・並・暗赤褐・高温石英・粗粒砂	3本一単位に沈線が綾杉状に施文されている。
10-00174	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚1.8	酸・並・鈍褐・並・赤褐色粒子・黒 色鈳物粒子	口唇平行する沈線施文に隆帯文を施す。
10-00175	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.5	酸・並・鈍黄褐・並・赤褐色粒子・ 高温石英	懸垂文内に単節 RL 原体の縦軸施文し磨きにより 擦消縄紋にしている。
10-00176	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.5	酸・並・赤褐・並・粗粒砂・黒色鈳 物粒子・白色粒子	懸垂文内に単節 RL 原体の縦軸施文。
10-00177	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚1.5	酸・並・k・並・黒色鈳物粒子・白 色粒子	懸垂文内に単節 RL 原体の縦軸施文し磨きにより 擦消縄紋にしている。
10-00178	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・明褐・並・黒色鈳物粒子・ 白色粒子	懸垂文内に単節 RL 原体の縦軸施文し磨きにより 擦消縄紋にしている。
10-00179	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.5	酸・並・暗褐・並・黒色鈳物粒子・ 赤褐色粒子	懸垂文頭部の弧線区画内に単節 RL 原体を縦軸施 文する。
10-00180	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.5	酸・並・鈍褐・並・透明鈳物粒子・ 白色微粒子	懸垂文頭部の弧線区画内に単節 LR 原体を縦軸施 文し、渦巻文を施文する。
10-00181	縄紋土器 深鉢	炭窯断面 破片	厚0.4	酸・並・褐・並・赤褐色粒子・細砂 粒	口縁部に紐線文を横位に施文する。
10-00182	縄紋土器 深鉢	5炭窯内 破片	厚0.5	酸・並・鈍褐・並・赤褐色粒子・白 色微粒子	紐線文と横位の帯縄紋を施文する。
10-00183	縄紋土器 注口土器	屋敷跡内 破片	厚0.9	酸・並・褐・並・赤褐色粒子・高温 石英	山形状の沈線区画内に単節 LR 原体を施文する。

第7章 上里見井ノ下遺跡

10-00184	縄紋土器 深鉢	5炭窯内 破片	厚0.9	酸・並・褐・並・黒色鈹物粒子・白色粒子	紐線文と帯縄紋の直線モチーフ施文。
10-00185	縄紋土器 深鉢	屋敷跡内 破片	厚0.6	酸・並・褐・並・黒色鈹物粒子・白色粒子	同心円文か曲線区画文か細片のため、紋様構成の詳細は不明。
10-00186	縄紋土器 深鉢	低地粘質 層破片	厚1.0	酸・並・赤褐・並・赤褐色粒子・粗粒砂	紐線文を沈線で区画し、下位に「ノ」字文で括る帯縄紋を施文する。原体は単節LR。
10-00187	縄紋土器 深鉢	表土層 破片	厚0.8	酸・並・暗褐・並・白色粒子・粗粒砂・黒色鈹物粒子	太い紐線文に下位に単節LR原体の横転施文施文。
10-00188	弥生土器 壺	表土層 破片	厚0.8	酸・並・褐・並・白色微粒・透明鈹物粒・黒色鈹物粒	外反する口縁部に波状文を施文する。波状文の単位数は器面の摩滅が顕著なため判然としない。
10-00189	弥生土器 壺	3区Eト レ破片	厚0.55	酸・並・褐・並・白色鈹物粒子・黒色鈹物粒子	波状文の施文。細片のため、器形・紋様構成の詳細は不明。
10-00190	弥生土器 壺	調査区内 破片	厚0.5	酸・並・褐・並・白色微粒子・黒色鈹物粒子	波状文の施文。細片のため、器形・紋様構成の詳細は不明。
10-00191	土師器 台付甕	表土層 破片	厚0.4	酸・並・褐・並・白色微粒子・黒色鈹物粒子	台付甕の肩部周辺破片。「S」字状口縁部が立ち上がったと推定される。
10-00192	土師器 台付甕	低地粘質 層破片	底(8.3)	酸・並・褐・並・白色微粒子・黒色鈹物粒子	台付甕の脚部片。端部は内面に折り返す。外面に刷毛の掻き撫でを施す。
10-00193	埴輪 円筒埴輪	表面採集 破片	厚0.9	酸・並・褐・並・黒色鈹物粒子・シルト質	円筒埴輪乃至形象埴輪の基部片と考えられる。不揃いの刷毛による縦位の撫でを施す。
20-00002	打製石器 石鏃	屋敷跡内 部分欠損	長1.6・幅1.3・厚0.3 ・重1g以下	黒曜石	平根三角形腹抉式。鋒を欠損する。素材からの剝離面を残す。
20-00003	打製石器 ドリル	屋敷跡内 完形	長4.5・幅2.7・厚0.6 ・重4g	珩質頁岩	横長剥片を加工して成形し刃部加工を施す。
20-00004	打製石器 削器	表面採集 破片	長9.6・幅5.2・厚1.2 ・重44g	輝石安山岩	横長剥片の端部側に刃部加工を施す。
20-00005	打製石器 削器	表土層 破片	長6.4・幅5.7・厚1.7 ・重65g	粗粒輝石安山岩	両端を欠損する。横長剥片の端部側に刃部加工を施す。
20-00006	打製石器 削器	屋敷跡内 完形	長10.0・幅4.7・厚1.8 ・重66g	珩質頁岩	縦長剥片の側縁に刃部加工を施す。
20-00007	打製石器 削器	4区内 完形	長6.2・幅4.5・厚2.0 ・重105g	黒色頁岩	横長剥片を素材に器厚調整の剝離を施した後に、刃部加工を施す。
20-00008	打製石器 削器	1住覆土 完形	長7.1・幅7.4・厚1.3 ・重70g	珩質頁岩	表皮を残す剥片の端部側に使用痕が認められる。
20-00009	打製石器 削器	屋敷跡内 完形	長5.9・幅9.2・厚1.6 ・重74g	珩質頁岩	縦長気味の剥片の曲面側縁に刃部加工を施す。
20-00010	磨製石器 斧	屋敷跡内 完形	長15.0・幅5.2・厚3.3 ・重473g	変輝緑岩	刃部は蛤刃。部分的な欠損が認められる。上半部には、着装を意識した加工認められる。
20-00011	石器 石皿	1区低地 破片	残存長11.0・残存幅 10.8・重575g	粗粒輝石安山岩	立ち上がりは深く底部は薄い。使用に伴う、摩滅が顕著な状態と考えられる。

第8章
まとめ

第9章
理科学分析



第8章 まとめ

第1節 出土遺物について

第1項 出土瓦に就いて

中里見遺跡群の4遺跡出土の瓦類は合計1149点がある。内訳は、中川遺跡27点・根岸遺跡8点・原遺跡1108点・井ノ下遺跡6点である。大小多少の差異はあるものの、全遺跡で出土している。特に原遺跡に集中している。この傾向は所用された寺院との位置関係として理解される。

ここでは、上述の傾向が最も強い原遺跡と、里見廃寺との傾向比較して、原遺跡出土瓦の傾向をとどめておきたい。里見廃寺の資料は文献6に上げた川原嘉久治氏の採集資料の観察所見である。

瓦種としては、鏡・男・女瓦の三種類が出土している(図表3参照)。しかし鏡瓦は、周縁部分しか残存しなかったため、主文様は不明であるが里見廃寺既出(図12)と同範と思われる。一本作りの珠点中房の単弁四葉文で、弁間には珠点を4箇所配する。時期は8世紀末から9世紀前半頃と考えられる。

男瓦は、全て半截作りである。轆轤上で、縦位に単軸絡条体1の縄叩きを施し、更に、縄圧痕を消す轆轤回転篋(コテも含む)撫でを施している。整形では、広端部の凹面側はまれに面取りが認められる

図表3 瓦組成表

	鏡瓦	男瓦	女瓦	男瓦：女瓦	計
原遺跡	1	350	533	1：2.6	883
里見廃寺	2	137	355	1：1.5	492
計	3	487	888	1：1.8	1,375
	男瓦平均厚さ		女瓦平均厚さ		
原遺跡	1.48		1.44		
里見廃寺	1.41		1.54		

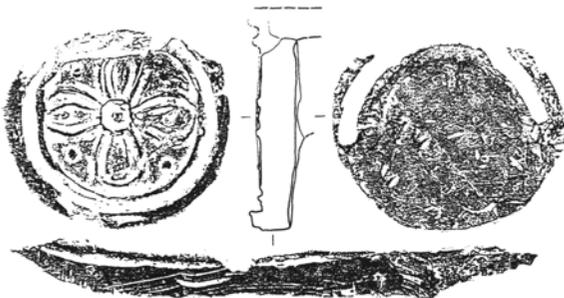


図7 里見廃寺採集鏡瓦実測図(1/5)文献6より

が、が及ぶ瓦も少数認められるが、多くの場合か側部は未調整・撫で(指・手・布)・篋撫で・篋削り(1回から3回程)を施こしている。篋削りは、喰出し段を縦位に削られている。また、未調整・軽い撫でを施す狭端部側で面取りは認められなかった。側部は半截後内外を面取りするのが殆どである。

女瓦は、全て一枚作りである。凹面は模骨痕が残るものも少量認められる。側部には型台から喰み出した粘土の「側部喰出し段」が認められ、この部分側部には、この側部喰出し部に沿って、縦位方向に従いやや太目の糸状の圧痕(?)が数条残っている。この圧痕には、横方向糸乃至糸状の痕跡はなく布とは異なる。鏡下では、同一方向に微細な砂粒が動いてる痕跡も見られる。これは、粘土タタラ成形時に、粘土塊にタタラ型を宛て糸貼張りの弓により粘土を引いた時に生じた静止糸切の条痕と考えられ、女瓦一枚分をタタラから切り取り(粘土瓦板)、台上に乗せ、側部を縦位に撫で整形を施した時の痕跡と考えられる。台上での撫で整形後は女瓦型台に布を敷き粘土瓦板を乗せ側部は未調整に終わらせた場合に生じた痕跡であろう。

凸面側は型台上で単軸絡条体1の「縄叩き」を縦位方向に施している。このため、中央部では厚さが薄く、側部がに厚みが増す傾向があり、側部喰出し段を生じさせる原因になっている。また、端部(狭端・広端部の施文分けは認められなかった)に横位に同「縄叩き」をほどこしている。所謂「T字状縄叩き」であり、秋間生産を示すメルクマールである。著名な「放光寺」篋描文字瓦は本類に属する。

男瓦・女瓦の胎土は、秋間古窯跡群での生産を示している。夾雑物では粗粒状シルトを多く混入するものがやや多い。比重は軽い(比重測定はしてないが手で持った状態)。焼成は還元焰に硬質と並質、中性焰は並質と軟質、酸化焰では軟質がそれぞれ主体をなしている。極一部に焼締焼成が認められるが、偶然の産物を考えられる。

一方、里見廃寺で採集されている瓦類は、前述三者と同様であり、固有名称を設定すれば、里見廃寺

墨書-1a	4区3・4溝	墨書-1b	4区3・4溝			墨書-1	9住	墨書-2	11住
10-00040		10-00040				10-00126		10-00195	
須恵器-坏		須恵器-坏				須恵器-内黒埴		須恵器-坏	
判読不能		判読不能				判読不能		上か	
	中川		中川						
墨書-3	11住	墨書-4	11住	墨書-5	16住	墨書-6	20住	墨書-7	21住
10-00202		10-00211		10-00368		10-00438		10-00443	
須恵器-坏		須恵器-埴		須恵器-瓶		須恵器-埴か		須恵器-坏	
判読不能		判読不能		上か		凧		不詳	
墨書-8	21住	墨書-9a	22住	墨書-9b	22住	墨書-9c	22住	墨書-10	25住
10-00444		10-00466		10-00466		10-00466		10-00524	
須恵器-坏		灰釉-皿		灰釉-皿		灰釉-皿		須恵器-坏	
全		全		全か		金ヘン		判読不能	
墨書-11	26住	墨書-12	27住	墨書-13	29住	墨書-14a b	32住	墨書-14c	32住
10-00537		10-00546		10-00557		10-00585		10-00585	
須恵器-蓋		須恵器-埴		須恵器-坏か		須恵器-埴		須恵器-埴	
上		全か		不詳		田 福		田	
墨書-15a	37住	墨書-15b	37住	墨書-16a	37住	墨書-16b	37住	墨書-17a	45住
10-00626		10-00262		10-00627		10-00627		10-00661	
須恵器-埴		須恵器-埴		須恵器-埴		須恵器-埴		須恵器-黒色土器坏	
大か		凧		主		不詳		全	

図9 墨書土器集成図1

墨書-17b 45住 10-00661 須恵器-黒色土器坏 凧 	墨書-19 50住 10-00702 須恵器-坏 凧 	墨書-20 50住 10-00704 須恵器-坏か 不詳 	墨書-21 51住 10-00730 須恵器-坏 全 	墨書-22a 2号竖穴 10-00807 灰釉-埴 凧 
墨書-22b 2号竖穴 10-00807 灰釉-埴 凧 	墨書-23 3号竖穴 10-00811 須恵器-坏 不詳 	墨書-24a 3号竖穴 10-00812 須恵器-坏 全 	墨書-24b 3号竖穴 10-00812 須恵器-坏 全 	墨書-25 3号竖穴 10-00815 須恵器-内黒埴 不詳・上か 
墨書-26 3号竖穴 10-00821 須恵器-皿 全か 	墨書-27 1号柵 10-00900 須恵器-坏 墨痕か 	墨書-28 748土坑 10-00985 須恵器-埴 凧 	墨書-29a 819土坑 10-00996 須恵器-内黒埴 全 	墨書-29b 819土坑 10-00996 須恵器-内黒埴 凧 
墨書-30 206土坑 10-01061 土師器-坏 上 	墨書-31 15-J-18 10-01178 土師器-坏 上  遺構外	墨書-32 1号道跡 10-01186 土師器-坏 全か  遺構外	墨書-33 24-S-7 10-01261 須恵器-坏 判読不能  遺構外	墨書-34 25-R-1 10-01263 須恵器-坏 全か  遺構外
墨書-35 25区内 10-01264 須恵器-坏 全  遺構外	墨書-36 15-K-17 10-01270 須恵器-坏 凧か  遺構外	墨書-37 15-N-17 10-01273 須恵器-坏 判読不能  遺構外	墨書-39 15-J-18 10-01295 須恵器-坏か 凧か 全か  遺構外	墨書-40 25-L-4 10-01350 須恵器-盖 上  遺構外

図10 墨書土器集成図2

第3項 「秋間型甕」に就いて 秋間型甕

今回の発掘調査・報告に至る間に於いて、これまでに観察してきた土師器甕とは胎土・色調・整形技法が異なる土師器意甕が多く観察された。結果として、これらに「秋間型甕」の固有名称を設定した。ここでは、この「秋間型甕」に就いて記しておく。

9世紀の土師器甕は、「コ」の字状口縁に代表される。原遺跡では、吉井・藤岡産と非吉井・藤岡産の胎土の土師器甕が認められた。そして、この非なる一群の胎土は、秋間古窯跡乃至秋間古窯跡群の近隣の碓氷郡内で生産された「土器」であることが観察所見として得られ、非なる一群の「土器」が吉井・藤岡産の「土器」を凌駕することも所見として得られた。

これまでの類例としては、榛名神社遺跡の「巖殿寺跡」で採集されている資料に見ることが出来る。当時は轆轤整形の仕立ての実測図には困惑したが、実見した結果あらためて感嘆した記憶が新しい。

図12には、器形・整形等の状況から段階設定を試み整理してみた。今回は図を説明する程度にとどめ、類例の増加を待ち、稿を改めたい。

各段階の要件は以下のとおりである。

- I段階：**吉井・藤岡産の「コ」の字状口縁甕の器形を模倣している。整形も横位の篋使い（広義の篋削り、実態は篋撫でも多い）が主である。器内面は轆轤回を使用して整形する個体も認められる。
- II段階：**口縁部は、「コ」の字指向が認められるが、轆轤回転を利用しての整形が多く、器外面は縦位の篋使いが主体。
- III段階：**口径値が大きくなる。器形は鉢形に近づく。土師器甕の終焉頃の器形に似る。
- IV段階：**口縁部が短くなる。所謂「土釜」の器形。II段階を除いては、「コ」の字状口縁から所謂「土釜」に至る「平安時代の甕形土器の変遷過程」を踏襲している。

この「甕形土器」は、第I段階を除けば、轆轤使用と縦位の篋使いが最大の特徴であり、通有の土師

器甕・吉井・藤岡産土師器甕には認められない整形技法である。

上述の技法特徴と、胎土から推定される秋間古窯跡で生産された可能性が大きい。このことからすれば、生産工人は須恵器工人による蓋然性が高いと言い得る。そしてこれらのことから、当該の一群に対して、「土師器」「須恵器」のどちらかを冠するのか判断に苦慮するが、推定される製作工人・成形技法・整形技法からは、馴染めないが「須恵器」なのであろう。

この4段階の時期は、土師器「コ」の字状口縁甕の盛期以降所謂「土釜」物出現頃までが存続期間と考えられ、9世紀前半頃から10世紀後半での所産と考えられる。

疑秋間産羽釜

秋間型甕と同様に、今回の遺物観察を通じて、秋間古窯跡群生産乃至は秋間古窯跡群生産と疑われる羽釜を多く観察した。そして、これらの多くは、吉井型羽釜とやや異なる様相が認められたが、明らかに異なる様相も認められている。しかし、これらの様相が中里見原遺跡だけの状況なのか、広域に渡り認められる状況なのか、現段階では未確認事項も多いことから、固有名称の設定は今回は避け、今後の資料増加を待ち改めて考えたい。

今回は、頁数の関係上掲載した図13・14を補う程度の概要説明に留めておく。

中里見4遺跡、取り分け中川・根岸・原遺跡では多くの羽釜が出土している。特に中川・根岸遺跡は原遺跡の廃絶後に住居の構築が開始されている。この状況から、中川・根岸遺跡と原遺跡出土の羽釜に分別して説明したい、図13・14はこの意図の元に作成してある。

原遺跡出土の羽釜は、9世紀後半の第3群の22号住からの出土が最も古く、これまでに出土例の無い器形を呈している。時期的にも羽釜の出現期の例として第I段階を冠した。以下各段階の要件を列記する。

第I段階：出現期。弾頭状の器形に口縁部を長く取る位置に、長い鐔を備える。

第II段階：量産体制に向かう前段階。長い口縁部

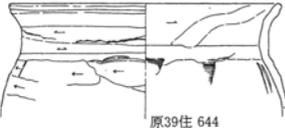
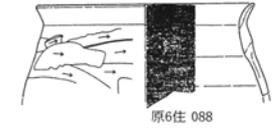
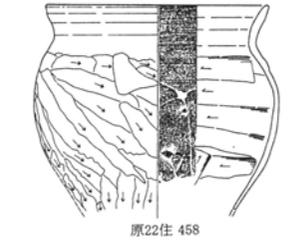
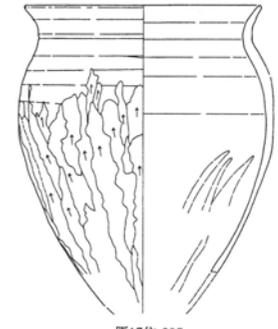
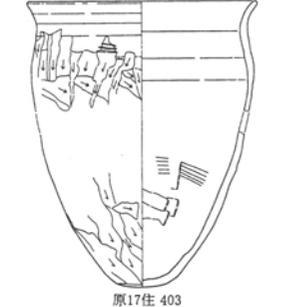
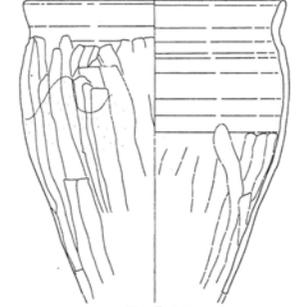
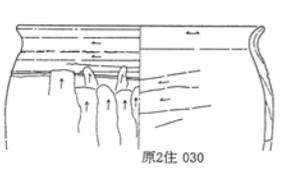
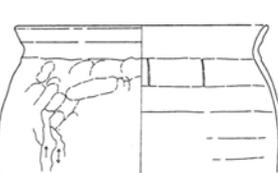
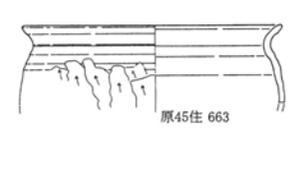
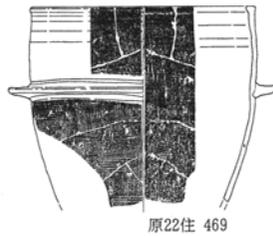
<p>第Ⅰ段階</p>	<p>土師器甕「コ」の字状口縁の模倣段階。</p>	 <p>原39住 644</p> <p>外見上は吉井・藤岡産のとの違いは明瞭ではない。</p>	 <p>原6住 088</p> <p>器内面い轆轤整形痕を残す。器外面は横位の筥削りを施す。</p>	 <p>原22住 458</p> <p>口縁部に轆轤整形痕を顕著に残す。斜位の筥削りは、吉井・藤岡産とはやや異なる。</p>
<p>第Ⅱ段階</p>	<p>口縁部には「コ」の字状口縁指向が認められるが、殆ど轆轤条痕程度で「コ」の字を表出しているとは言えない。轆轤回転整形が顕著で轆轤目を残す。器外面は縦位の筥削りを多用するが、整形終盤には筥削りが、筥撫で整形に変わることが多い。器内面は、上半部が轆轤整形で終わらず、下半部は筥使いによる撫で整形が多い。</p>	 <p>原19住 426</p> <p>原19住 432</p> <p>口縁部は轆轤整形により「コ」の表出意識があるのか？肩が張り縦位の筥削りの動きは早い。</p>	 <p>原49住 682</p> <p>器内面に轆轤整形痕を残す。器外面は頸部直下から斜位の筥削りを施す。</p> <p>原17住 395</p> <p>口縁部は外反しながら立ち上がる。縦位の筥削りが顕著。</p>	 <p>原6住 090</p> <p>口縁部は「コ」の字を模倣しているが、器外面は縦位の筥削りが顕著。器内面は轆轤整形に「コテ」=筥(?)を用いている。紐作りの痕跡が明瞭である。削りより撫でが主体。</p> <p>原2住 029</p> <p>「く」の字に外傾する口縁部。胴部上半は轆轤目が顕著。胴部下半は斜位の筥削り。須恵器か。頸部より下位の形は、羽釜(秋間産)に類似器形がある。</p>
<p>第Ⅲ段階</p>	<p>口径値が大きくなり、肩の張りが落ちる。器形は鉢形に似る。器内面・外面の整形には変化は認められない。</p>	 <p>原17住 403</p> <p>胴部上半は轆轤目を顕著に残す。器外面は縦位の筥削り、器内面下半部は筥撫で整形。</p>	 <p>原22住 461</p> <p>胴部上半から口縁部は轆轤目が顕著。筥削りの単位は器形に比較して細かい。</p> <p>原53住 748</p> <p>口縁部は短く直立気味。肩部器内面はコテ使いの轆轤整形。</p>	 <p>原32住 591</p> <p>口縁部は短く開く。器内面下半部は縦位の筥撫で。</p>
<p>第Ⅳ段階</p>	<p>口縁部が短くなり、胴部上半部が丸みを強く帯びる。所謂「土釜」の器形である。</p>	 <p>原2住 030</p> <p>口縁部は短く外反。器厚は厚め。器内面は上半まで筥撫で。</p>	 <p>原55住 779</p> <p>口縁部は短く外傾。器外面は撫で。器内面は横位の筥撫で。</p>	 <p>原45住 663</p> <p>口縁部直下まで轆轤目を顕著に残す。器外面は縦位の筥削り。</p>

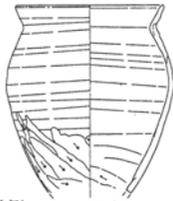
図11 秋間型甕の各様

中里見原遺跡出土の羽釜は、実線で区切った4段階の変遷が推定される。第Ⅲ段階は、最も多様性に富んだ器形揃えである。同段最左列及び月夜野型羽釜を除く羽釜群は、細部を除けば吉井型羽釜甲種にも認められる形態である。また、同段最左列は、吉井・月夜野・乗附型羽釜に見られない器形を呈する羽釜で、029の口縁部以下の器形に類似する。



中里見原遺跡22号住出土の羽釜である。22号住は、第3群9世紀後半頃の住居跡で、羽釜出土住居跡では最古の住居跡である。秋間型甕も共存する。469の羽釜は、胴部が丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は銜部上位で垂直に長く立ち上がる。銜部は幅が広く水平に廻っている。胴部器外面には、刷毛撫で整形を縦横に施している。刷毛撫でを施す羽釜は当該品一点のみである。器種として、羽釜は完成された形で唐突に出現することは、やはり、金属製鍋乃至釜等の写しであったと考えられる。

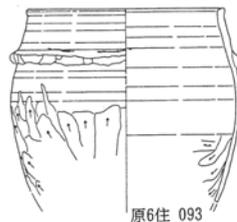
参考例 原2住 029
器形はやや小形である。口縁部以下が032と酷似する。篋使いは斜位の削り。秋間型甕とは趣きはやや異なる。



第Ⅰ段階(出現期)



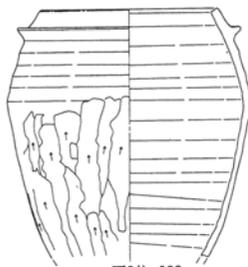
口縁部長が長い二者。013は上段469の形状の踏襲か？胴部上半から口唇部迄直線的に立ち上がる。093は、銜部の



銜部の位置が、胴部最大径部と口唇部間との位置に設けるかにより形状の細分類が出来る。この段階は口縁部長が長い点を指標にしたが、次の段階では、様々な様相に見られるが、五者の基本形状と銜部の位置の違いにより分別した。

やや下位に最大径を備える。胴部上半・口縁部は内傾し、口唇部はやや反り気味。

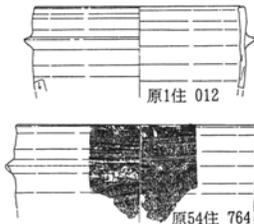
第Ⅱ段階



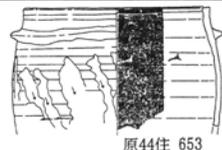
原2住 032

秋間産の固有器形か？胴部最大径部からの立ち上がりは直線的。

胴部からの立ち上がりは直線的。前段階からの継承か。



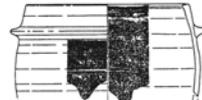
原1住 012
原54住 764



口唇部が立ち吉井型に類似。



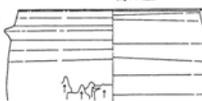
原1住 007



原20住 439



原1住 008



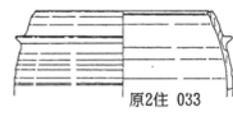
原2住 037

内湾口縁部群の多様さは、最大径部の位置が、胴部か銜部で分別される。

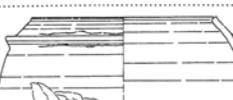
第Ⅲ段階



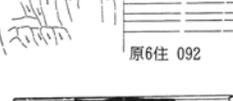
原20住 440



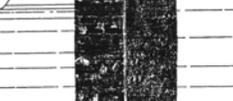
原2住 033



原6住 092



原4住 065



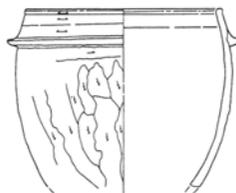
原11住 250



原外 1452

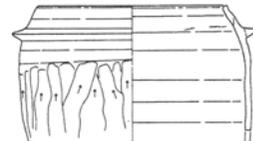
第Ⅳ段階

中央左列は銜部に最大径を備える内湾形の一群で、銜部の位置により二者(007・439と008・037)に分類される。中央右列は胴部に最大径を備える内湾形の一群で口縁部形状で三者(440・033と092・065と250・1452)。内後二者は、銜部の取り付け位置の違いである。最右列は銜部に重複して胴部最大径を備えている。やはり、銜部の位置で二者(009・010と011・574)に分類される。第3段階の多様さは、羽釜生産の増大を意味しており、需給関係の成立により成り立つ状況である。

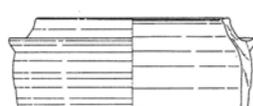


原5住 075

中里見原遺跡では最終段階にあたる。器形全体に丸味を帯びた器形に銜部に最大径を備えさせ、胴部は縦位の篋使いにより整形を施している。この段階以降、住居の構築が停止する。



原1住 009



原1住 010



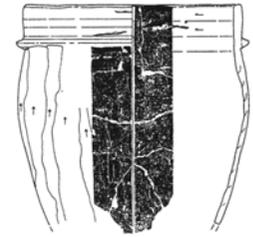
原1住 011



原31住 574



原39住 645

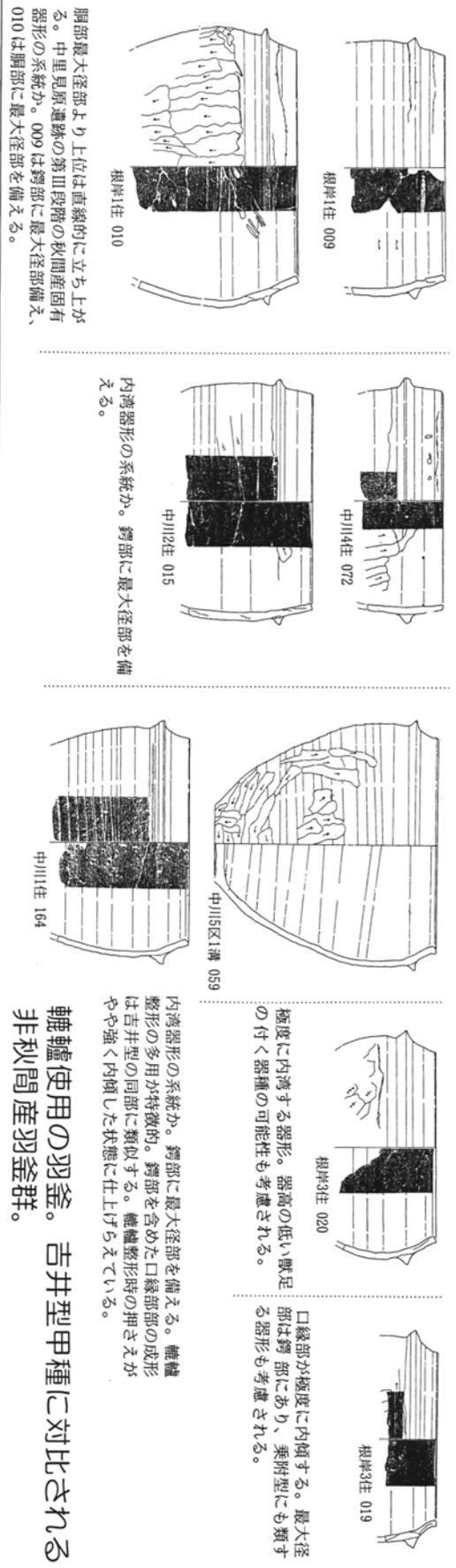


原6住 096

月夜野型羽釜

βqtを含む月夜野産の羽釜。

図12 疑秋間産羽釜の各様



直線的に立ち上がる系譜か。

胴部最大径部より上位は直線的に立ち上がる。中里見原遺跡の第Ⅲ段階の秋間産固有器形の系統か。009は肩部に最大径部備え、010は胴部に最大径部を備える。

内湾器形の系統か。肩部に最大径部を備える。

極度に内湾する器形。器高の低い獸足の付く器種の可能性も考慮される。

口縁部が極度に内傾する。最大径部は肩部にあり、乗附型にも類する器形も考慮される。

内湾器形の系統か。肩部に最大径部を備える。轆轤整形の多用が特徴的。肩部を含めた口縁部部の成形は吉井型の同部に類似する。轆轤整形時の押さえがやや強く内傾した状態に仕上げられている。

轆轤使用の羽釜。吉井型甲種に対比される非秋間産羽釜群。

内湾器形。当該の左列に類似する。口唇部も丸味が強く雑な作りの感じを受ける。

内湾器形で、胴部最大径に肩部を備える。中里見原遺跡の第Ⅲ段階最右列の系統か。

内湾器形が全体に丸味を強く帯びた状態の器形。肩部は胴部最大径部と口唇部の中間に備える。器形の外形は上段の中央群に類似するが、口縁部の作りの違いが認められる。寧ろ、中里見原遺跡の092・065の作り込みに近い。根岸・中川遺跡での出土が多いが、県内でも平野部の西毛・東毛地区に広く類似器形が認められる。

根岸・中川出土の土器類は、陶土ベーンスの生地土とは異なり、粘土ベーンスの生地土使用の製品群と考えられる。このことは、生産拠点が前代の古窯跡群から離れた場所での生産が開始されていることを示している。しかし、内黒須恵器に見られる轆轤使用の技術は、伝承乃至保持されている。この傾向は他の古窯跡群でも認められ、中世の職人が必要に応じて出職するのに同じ様な現象なのかも知れない。当該期の実態がより鮮明になれば、確実な当時の状況も明らかになると考えられる。

非轆轤製品の一類。吉井型乙種に対比される

図13 非秋間産羽釜の各様

を特徴に弾頭状と甕形の口縁部を除去した器形の二者。093は鏝の欠損が多く、大半が人為的に打ち欠かれている。鏝の長さが短くなっている。

第Ⅲ段階：形状の分化が顕著な量産段階。生産の増大化が器形の各様に具現していると判断される。

固有種の設定可能な032・667は第Ⅱ段階の093の系統と考えられ、012・764は直線的に立ち上がる器形で、013の系統と考えられる。653は吉井型に類似しており、図のみでの吉井型か秋間産かの判別は非常に困難である。内湾口縁の一群は、胴部から口唇部に至る曲率・最大径の位置・鏝部の位置により細分した。ただし、これらが変遷経過を辿るかは考慮していない。

第Ⅳ段階：当該段階は極度に類例がない。これは、羽釜自体の減少とは異なり、住居の構築が停止段階に達したことに原因して

いると判断される。内湾器形に縦位の篋使いを多用する。中川・根岸遺跡の後半段階に比較される。

以上が原遺跡での段階別の要件である。

中川・根岸遺跡の羽釜は、原遺跡の出土の羽釜とは胎土が異なり、陶土ベースの秋間産を推定させる胎土ではなく、沖積地等の粘土ベースが生地土と判断さされる。確実に生産拠点の変更が認められる状況である。

中川・根岸遺跡出土羽釜は原遺跡の第Ⅲ段階の形状を保持した羽釜が多く、生産が継続的に行われていたことを暗示させている。これは、工人が拠点移動しのか、工人が移動しながらの

状況なのかは不明だが、生産活動を継続・技術伝承を行っていたことに他ならない。

秋間古窯跡での須恵器生産活動の動向は、9世紀後半段階から供給の減少という側面がある。これは、国府周辺域では、9世紀後半を境頃に、主要供給元が秋間古窯跡から次第に藤岡古窯跡群へ、そして吉井古窯跡群と推移する傾向が認められ、10世紀に至ると秋間古窯跡の製品は供給が停止されたかの状況になり、吉井古窯跡群を主体とする供給に変質している。一般的には「須恵器杯・埴類の外反化」と解釈している（吉井古窯跡群の製品は外反が一特徴）（秋間古窯跡の製品は器厚の薄い直線的な器形が一特徴）が、現象面だけの解釈に終始している。

この時期に秋間古窯跡が新たな展開をすることは、上野国内での窯業生産及び生産体制が再三にわたり変質期を迎えたと解釈できる。このように秋間古窯跡での土師器甕模倣から発した需給関係の変質が、「秋間型甕」出現の背景と考えられ、秋間古窯跡での「羽釜」生産もこうした状況下での開始されたと考えられる。



図14 原遺跡・里見廃寺遺跡位置図（1：5,000）

第2節 里見廃寺と中里見遺跡群

第2項 里見廃寺と中里見遺跡群

今次の里見地区の発掘調査は、これまで新田氏の一族としての出自の地として著名であったが、具体的な遺構の存在はおろか、前代どのような地区なのかすら不分明であった。

当該4遺跡からは、発掘調査により69基の住居跡及び諸遺構が発見されている。これらは、それぞれの遺跡の状況を反映しており、中川・根岸遺跡（中川遺跡で住居跡が発見されている部分は小字根岸で、元来は根岸遺跡である）では、10世紀後半を中心として、11世紀初頭頃迄短時的に住居が構築されている。原遺跡では、8世紀後半から10世紀前半頃まで住居が構築されている。特にこの原遺跡では、3時期5群の住居跡群の存在が捉えられている。井ノ下遺跡では、3基の住居跡が発見されているが、谷地を挟み8世紀末～9世紀前半と9世紀末～10世紀前半頃と時間的に差異がある。

これら8世紀末から11世紀初頭に至る間の住居跡には、原・井ノ下遺跡と中川・根岸遺跡の関係になる。単純には台地上から低地への集落占地の変更とも考えられようが、両者の周辺での遺跡内容が不分明な状況では判断は出来得ない。

原遺跡では、基壇建物跡が発見されており、南東200mの瓦葺建物の存在が確実にされる周知の里見廃寺の寺院地の一部と考えられるものの、双方には距離があり過ぎる。この里見廃寺は、出土している瓦から8世紀末から9世紀前半の瓦葺建物が建立されていることが判明している。

基壇建物跡の周辺での住居跡は、第1・2群の住居跡がやや夾雑するような状況を呈するが、住居と基壇建物跡が切りあう状況は認められず、第2群と伴うと考えられる2号掘立との切り合い関係がある。これは、基壇建物跡が第1群かそれ以前での構築と考えられるもの、基壇建物跡と住居が、結界も無く並存することは考え難い。また、里見廃寺の瓦葺建物建立時期と第1・2群の住居の構築時期が重

複することから、基壇建物跡は住居群に先行して建立されている可能性も考えられ、寺院建物が里見廃寺側に伽藍地を改めた結果という状況が推測される。しかし、現状では、第1・2群の住居跡と基壇建物跡の関係と、里見廃寺の瓦葺建物の関係を如何に推量するかであるが、具体的状況の欠如は否めない。

他方、この基壇建物跡と里見廃寺は、台地稜線より井ノ下遺跡側寄りに建立するという特徴がある。このことは、当時の里見地区は、中川・根岸遺跡側より井ノ下遺跡側に重要性があったことが窺われる。この井ノ下遺跡側とは、秋間丘陵側に向かってのことであり、秋間地区に対する意識の具現と言い得る。

当時、現実的に須恵器の供給はほぼ全てが秋間古窯跡群からの供給であり、9世紀後半段階でも、県中央部まで大量の吉井・藤岡産の土師器甕が供給されるが、当遺跡では、吉井・藤岡産の土師器甕は一切姿を消し、秋間古窯跡で生産された代用品が供給されている状況である。そして、秋間丘陵を越える峠道は、原・井ノ下遺跡の眼前であることから、秋間古窯跡（秋間郷）との関係は、烏川対岸の本郷地区より、寄り強固な関係であったことが窺知される。これに裏打ちされるのが、当該地域が碓氷郡であったことに他ならないと考えられる。

里見地区には治安三年（1023）明慶上人開基と縁起に伝える光明寺が在り、また同縁起には、「嘉応二年（1169）十一月五日逝 三十四才 中里見村阿弥陀院光明時に葬る」ともある。中川・根岸遺跡の住居が廃棄される時期にも重複するが、「縁起」と言う性格上その信憑性自体に疑念があるものの、烏川流域の微高地に、開発の拠点が置かれる時期が重複することが注意される。

原遺跡では、9世紀と10世紀には住居跡の占地に変化が生じ、11世紀には、根岸地区での占地に変容している。この現象は今回の調査所見だけでは解決しえないが、低地部の開発が想起され、住居跡廃絶後の水田（As-B下）耕作の実態は、寺院を媒介としての墾田開発等の経済活動が背景なのかもしれない。まだまだ今後の調査に託されることが多い。

第9章 理科学分析

第1節 理科学分析にあたって

第1項 理科学分析と発掘調査事業

当該遺跡群の発掘調査は、縄文時代から近世に至る多種多様の遺構・遺物の発見が続いた。この中で、発掘調査段階では、以下の理科学分析を行った。

中川遺跡 1. テフラの同定 2. 種実の同定
3. プラント・オパール分析
4. 花粉分析

根岸遺跡 1. テフラの同定 2. 花粉分析

原遺跡 分析未実施

井ノ下遺跡 1. テフラの同定 2. 花粉分析

この上記八者四種の理科学分析の目的は、調査精度の確認が主たる目的であり、遺構出土の自然遺物は、その種別を明らかにする目的であった。特に後者は、人間による採集活動による結果として、食用種実だけであるのか、また、自然の作用により堆積蓄積された種実種類か否かを判定し、遺構の調査に資する目的であった。

堆積テフラの同定は、テフラによる層序の年代観の確認と、の年代観との正合性を確認する目的で、「テフラの同定」を実施した。その結果、調査所見による遺構(As-B 下水田跡等)の年代観は確認された。

このテフラ同定と同様に、水田跡と判断した土層の被覆土層を「プラント・オパール分析」により追証を試みた。この目的として、調査所見として得られた水田跡の遺構が、実際に稲作栽培を行った遺構か否かを判定する目的であった。結果は、後段の詳細を参照されたいが、概して、水田跡を即断し得る結果と即断しかねる結果の二者の在り様が分明になった。

これらの発掘調査際に行った自然化学分析の結果は後節に掲載した。分析は、各分野の専門業者に業務委託した。

第2項 理科化学分析と整理事業

発掘調査終了後に実施になった整理事業では、記録資料・出土資料を整理し、当該報告書を編んだ。この間追川佳子により遺構図面・遺物実測が行われた。この間に、以下の理科学分析を実施した。

中川遺跡 1. 樹種同定 2. 鉄分析
3. 石材鑑定

根岸遺跡 1. 鉄分析 2. 石材鑑定

原遺跡 1. 鉄分析 2. 動物遺存体の鑑定
3. ヒト遺存体の鑑定 4. 石材鑑定

井ノ下遺跡 1. 樹種同定 ヒトの遺存体の鑑定
3年次年度目は、追川の後任として木津が遺物の観察を行った。この遺物観察結果に就いては観察表等として掲載した。この対象には、木器類・土器類・石器類等が含まれ、特に加工された樹木の材質を判断する観察目的があり、これにより木器類に就いては、「樹種同定」を委託した。木器類は樹種判定のため当団でプレパラートを作成し、大別分類を試みたが正確を期するため、上記の通り委託に拠った。

動物遺存体に就いては、原遺跡で良好な馬1体分の骨格が出土していたため、長年にわたり当団の調査で得られた動物遺存体、特に「ウマ」の鑑定をされてこられた大江正直先生に鑑定をお願いし玉稿を賜った。

ヒト遺存体に就いては、原遺跡で限られた範囲内で良好な人骨が複数個体出土したので、人類学では高名な檜崎修一郎氏(群馬県立自然史博物館)をお願いし分析・鑑定をお願いした。

そして、縄文時代以降の石器・石製品・石造品に就いて安易な判断がしかねる部分があるので「石材鑑定」を実施した。鑑定は飯島静雄氏をお願いした。氏は、当団の石器・石製品の石材を長年にわたり観察されて来ている。同一の観察眼で各時代に亘る石材鑑定を行っておられるので、その蓄積には、石材と雖も貴重な資料と言い得る。これらの石材鑑定の成果に就いては観察表中に記載した。

第2節 動物遺存体

第1項 中里見原遺跡出土の獣歯・獣骨観察について

大江正直（元 群馬県家畜登録協会常任理事）

はじめに

群馬県における遺跡から出土する馬歯・馬骨は現在迄にその数は多数にのぼっていて上野国における馬の具体像は次第に明らかになりつつあるが、時代的に見ると近世・近代に属するものは誠に少ない。日高遺跡^{註1}、三ツ寺III遺跡^{註2}、下東西遺跡^{註3}、田端遺跡^{註4}、国分境遺跡^{註5}、上野国分僧寺・尼寺中間地域^{註6}、三ツ寺II遺跡^{註7}、小角田前I遺跡^{註8}、下田中川久保遺跡^{註9}から馬歯656点、馬骨260点計916点、馬の個体数にして340個体が出土している時代的に見ると附表1のとおりであるが、そのうち近世・近代に属するものは点数で22、個体数で僅か3個体である。時代的に一番多く出土しているのは中世で点数にして32.3%、個体数で39.1%である。次に多いのが平安時代で点数にして30.2%、個体数で30.9%である。近世・近代に属するものは僅かに点数で2.4%、個体数で0.9%に過ぎない。上野国の馬の具体像を知るには近世・近代に属する馬の出土が待たれるが、幸い中里見原遺跡から近世～近代に属する馬の一体分の歯

附表1 時代別馬歯・骨の出土状況

時代	馬歯	馬骨	計	%	個体数	%	摘要
古墳時代	14	7	21	2.3	8	2.4	集計に用いた遺跡名は日高遺跡、三ツ寺III遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、国分境遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、三ツ寺II遺跡、小角田前I遺跡、下田中川久保遺跡
古墳時代～平安時代	3	1	4	0.4	4	1.2	
奈良時代	9	0	9	1.0	1	0.3	
奈良時代～平安時代	14	0	14	1.5	10	2.9	
平安時代	247	30	277	30.2	105	30.9	
平安時代～中世	39	1	40	4.4	5	1.5	
中世	140	156	296	32.3	133	39.1	
中世～近世	37	22	59	6.4	2	0.6	
中世～近代	20	19	39	4.3	21	6.2	
近世	12	9	21	2.3	2	0.6	
近代	1	0	1	0.1	1	0.3	
不明	120	15	135	14.7	48	14.1	
計	656	260	916	100.0	340	100.0	

・骨が出土した。この馬骨は遺存状態が極めて良く近世～近代における上野国の馬の具体像を知る標品とし誠に貴重なもので標式馬の意義がある。また犬については群馬県では出土例が極めて少なく、高崎市西島遺跡より中世～近代に属する犬の歯・骨が出土しているが上野国における犬の具体像を明らかにするには程遠いものである。中

里見原遺跡より犬の肢骨が1点出土している。今回これらの歯・骨の調査を依頼されたので以下その検討を行った。

(1) 依頼内容

① 獣の種類 ② 性 ③ 年令 ④大きさを明らかにすること。

(2) 調査方法

① 出土獣歯・獣骨を有する獣の種類を検討を行う。

② 出土獣歯・獣骨を有する獣の性の検討を行う。馬については犬歯の有無と寛骨について、犬については陰茎骨及び寛骨について夫々性的特徴を調べて性別を検討する。

③ 出土獣歯・獣骨を有する獣の年令を検討する。

④ 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさ及び改良度を検討する。出土馬歯については既往の中世及び中世以降の出土馬歯の計測値^{註2}及び現代小格馬の計測値^{註1}と夫々対比して検討する。出土獣骨については既往の近世の出土獣骨の計測値と対比出来るものは勉めて対比し、馬骨については直良信夫^{註10}の近世の出土馬骨の計測値及び林田重幸^{註11}、西中川駿^{註12}の現代の在来馬の計測値と夫々対比して検討する。また犬骨については直良信夫^{註13}及び茂原信生^{註14}の古代及び中世の犬の計測値を参考にして検討する。

使用した基準

(1) 獣歯・獣骨の部位、記号、各部の名称及び測定部位

註15、16、17参照

(2) 獣の大きさの表現

- ① 馬の大きさは林田重幸^{註18}の体高区分による中形馬、小形馬の表現を用いた。
- ② 犬の大きさは現代犬の大きさと比較し、日本犬保存会の「日本犬の標準(審査規格)」^{註19}の体高区分により小型犬、中型犬の表現を用いた。

(3) 獣の年令の表現方法

- ① 馬の年令については市井正次^{註20}の幼令馬、壮令馬、老令馬の区分を用いた。
- ② 犬の年令については、犬骨は骨端線の化骨状態により幼犬、成犬の区分を用いた。

(4) 単位

獣歯・獣骨の計測値は特別に記載のない限りmmを表わし、比率は%を表わす。

(5) 番号

図中の通番は本文、写真及び附表中の通番と一致する。また明らかに番号の記載されている歯・骨より分離したと思われる小歯・骨片は除外した。本文中の出土状況の図及び歯・骨の実測図及び写真は中里見原遺跡整理班によって作成された。

結果

(1) 獣歯・獣骨の出土状況

調査所見によれば奈良時代の終わりから平安時代にかけて創建された遺跡地の東斜面にある2つの土坑のうち西側の2.1m×0.97m、深さ0.64m^{註21}の土坑の中から附図1～2及び附写真1に示すとおり、馬のほぼ完全に近い歯・骨が出土したとすることである。この馬は有機質の強い土壤に覆われ、右側を下にして、頭部を南西の方向に向け、頸をS字状に曲げ、四肢を腹下に組んだ状態で埋葬されている。馬の体格に比し土坑の幅が小さいので前肢は腕関節より下を、また後肢は飛節より下を土坑の側壁にもたせて埋葬されている。馬体が土坑中に落下する際に死後硬直状態にあった頸が前の壁に当たり、その衝撃で第4、第5頸椎をとりまく靭帯が切れたと想像されるため第4、第5頸椎の間の下側が大きく開口し、また土坑の幅の不足もあって頸をS字状に湾曲しており埋葬時の衝撃が大きかったことを物語っている。この馬歯・馬骨の遺存状態は極めて良好であるが、左鼻梁の一部、肩甲骨の上縁、左右の前肢の末節骨、後肢の右中足骨、中節骨を失い、また寛骨は数片に分かれて脱落し、尾骨等は不明であった。

表層採取の犬の脛骨1を入れて附表2に見られるとおりに計182の歯・骨が出土している。これだけ多数の獣歯・骨を小さな骨に至るまで順序正しく採取された遺跡調査担当、並びに作業員の皆さんの努力は賞賛に値するものである。これらの遺存体の出土状況は附表2～3のとおりである。

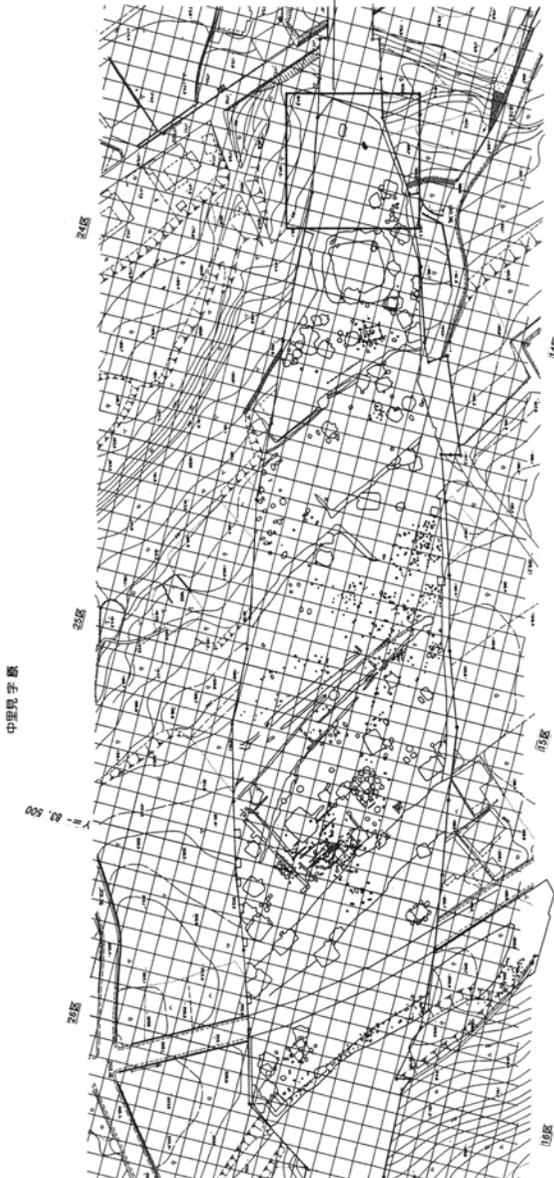
(2) 出土獣歯・獣骨を有する獣の個体数

出土獣歯・獣骨中馬歯・馬骨については遺存状態も良好で、出土状態の附写真1にも見られるとおりに右側を下にした一匹の骨格として出土している。犬の脛骨については他に犬の歯・骨が出土してない土で1個体とする。

B 馬歯・馬骨出土遺構位置図(1:1,000)



A 遺構全体図(1:2,000)



附表2 中里見原遺跡出土獣歯・獣骨部位別数

種類	部位	点数	摘要
馬	頭蓋	3	馬骨は1個体分。 頭蓋は右側を土中に埋没のまま保存処理されている。3点は部位不明の骨片を含む。 馬下顎骨は切歯部1下顎枝2。 馬前指骨8は種子骨を、馬足根骨12は距骨、踵骨を馬後指骨6は種子骨を含んでいる。
馬	上顎歯	21	
馬	下顎骨	3	
馬	下顎歯	22	
馬	舌骨	2	
馬	頸椎	7	
馬	胸椎	18	
馬	腰椎	6	
馬	仙骨	1	
馬	肋骨	33	
馬	肩甲骨	2	
馬	上腕骨	2	
馬	前腕骨	2	
馬	手根骨	11	
馬	中手骨	6	
馬	前指骨	8	
馬	寛骨	2	
馬	大腿骨	2	
馬	膝蓋骨	2	
馬	脛骨	2	
馬	足根骨	12	
馬	中足骨	3	
馬	後指骨	6	
馬	不明骨片	5	
馬	小計	181	
犬	脛骨	1	
犬	小計	1	
	合計	182	

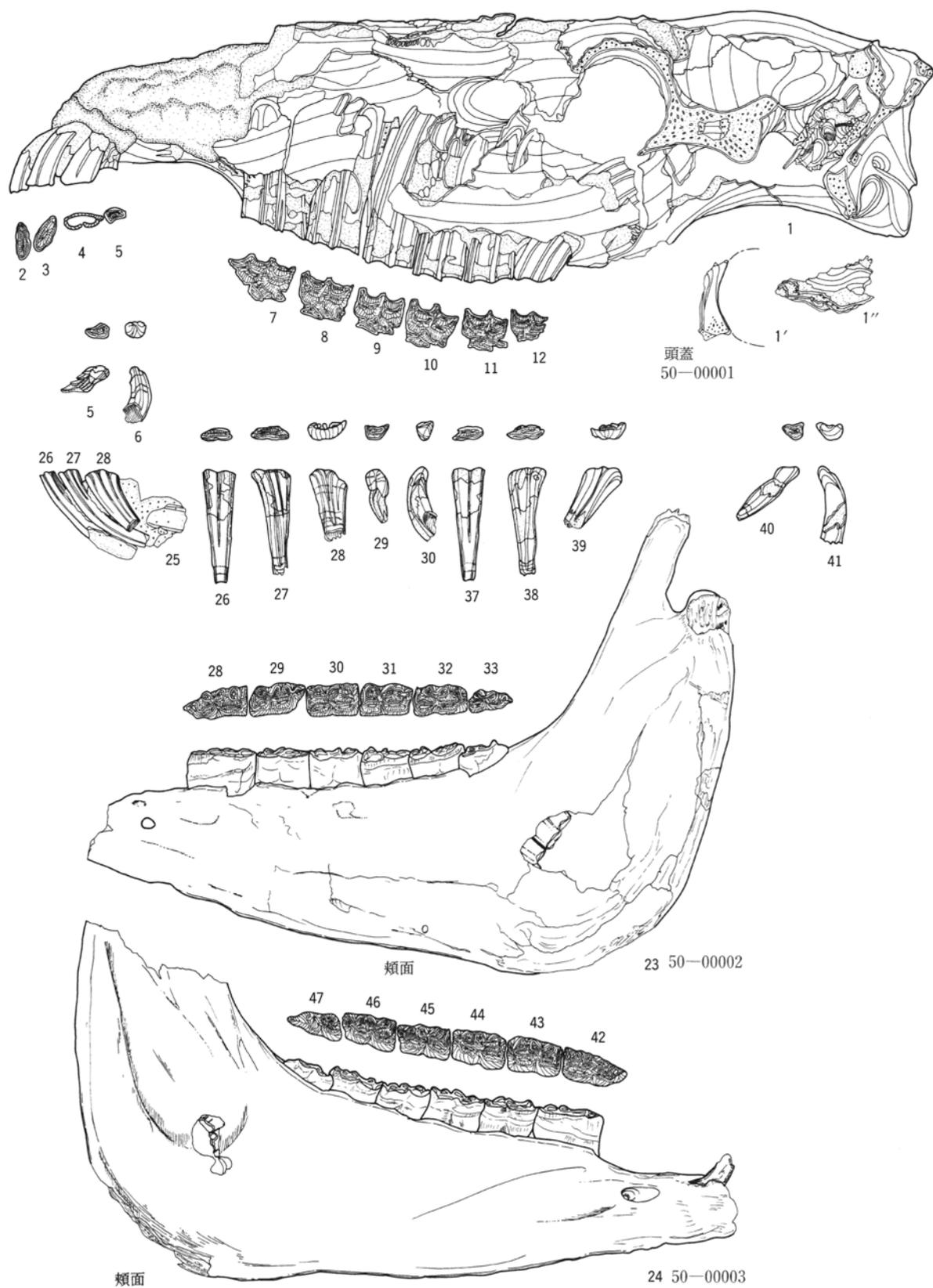
1 中里見原遺跡出土の馬歯・馬骨の特徴

- (1) 時代 江戸時代～明治時代
- (2) 馬歯・馬骨の依存状態は良好であって末端の骨や関節部の小さな骨まで出土していることは非常に珍しいことである。この馬の生前の体全体の歯・骨の推定数は、歯44(乳歯・犬歯を含む)、骨149、計193で、このうち風化して出土しなかった歯・骨は、歯1、骨28、計29。(出土しなかった歯・骨の比率は15%)
- (3) 埋葬の仕方は現代とほぼ同じ
- (4) 死亡から埋葬まで、死後3～10.5時間

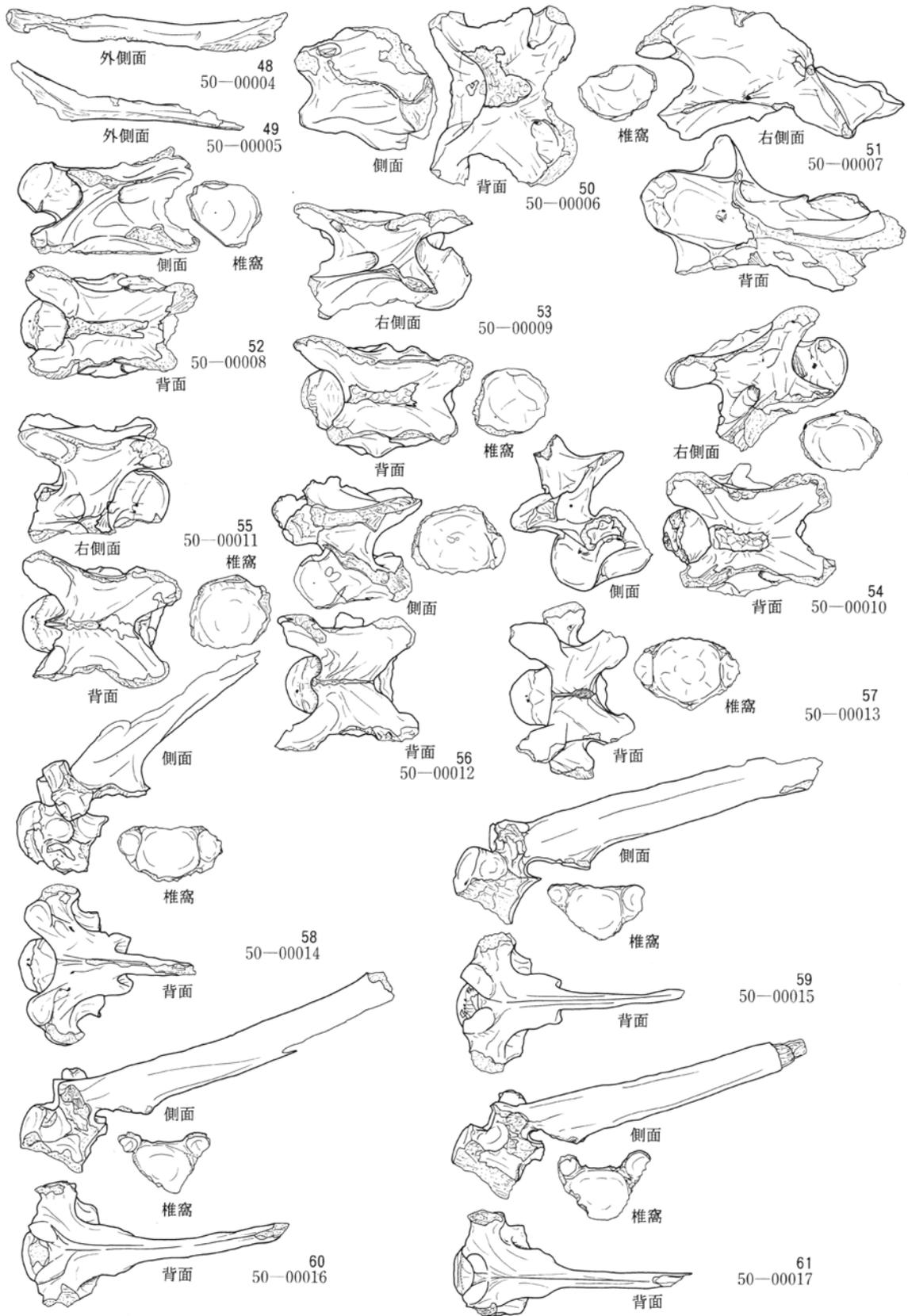
2 発掘現場と馬歯・馬骨出土状態

調査所見によれば奈良時代の終りから平安時代にかけて創建された里見廃寺の境内を新幹線が横ぎっている。発掘現場は烏川に沿った室田街道を眼下に眺め、北方に浅間隠しを遠望する見晴らしの良い東斜面にあり、そこに2つの土坑が出土している。東側の土坑は浅く出土物はなかったと言うことであるが、西側の土坑から馬のほぼ完全に近い一体分の歯・骨が出土したと言うことである。馬歯・馬骨の依存状態は良好であり、末端の骨や肢の関節部の極めて小さな骨に至るまで出土している。この馬の推定年令は、4.5才であるために体各部の関節面の骨端線は軟骨が未だ化骨を完了していないので関節面が骨端線から脱落しているものが各部で見られた。その中でも特記すべきは椎骨であって、各椎骨の後端にある椎窩は骨端線が未だ化骨完了していないため骨端線から脱落していた。その小さな薄い貨幣状の椎窩が頸椎から腰椎に至るまで一つ残らず出土しているのを見て驚いたが、このことを見てもこの馬歯・馬骨の依存状態の良いことと、発掘に携わった方々の努力とが伺われよう。

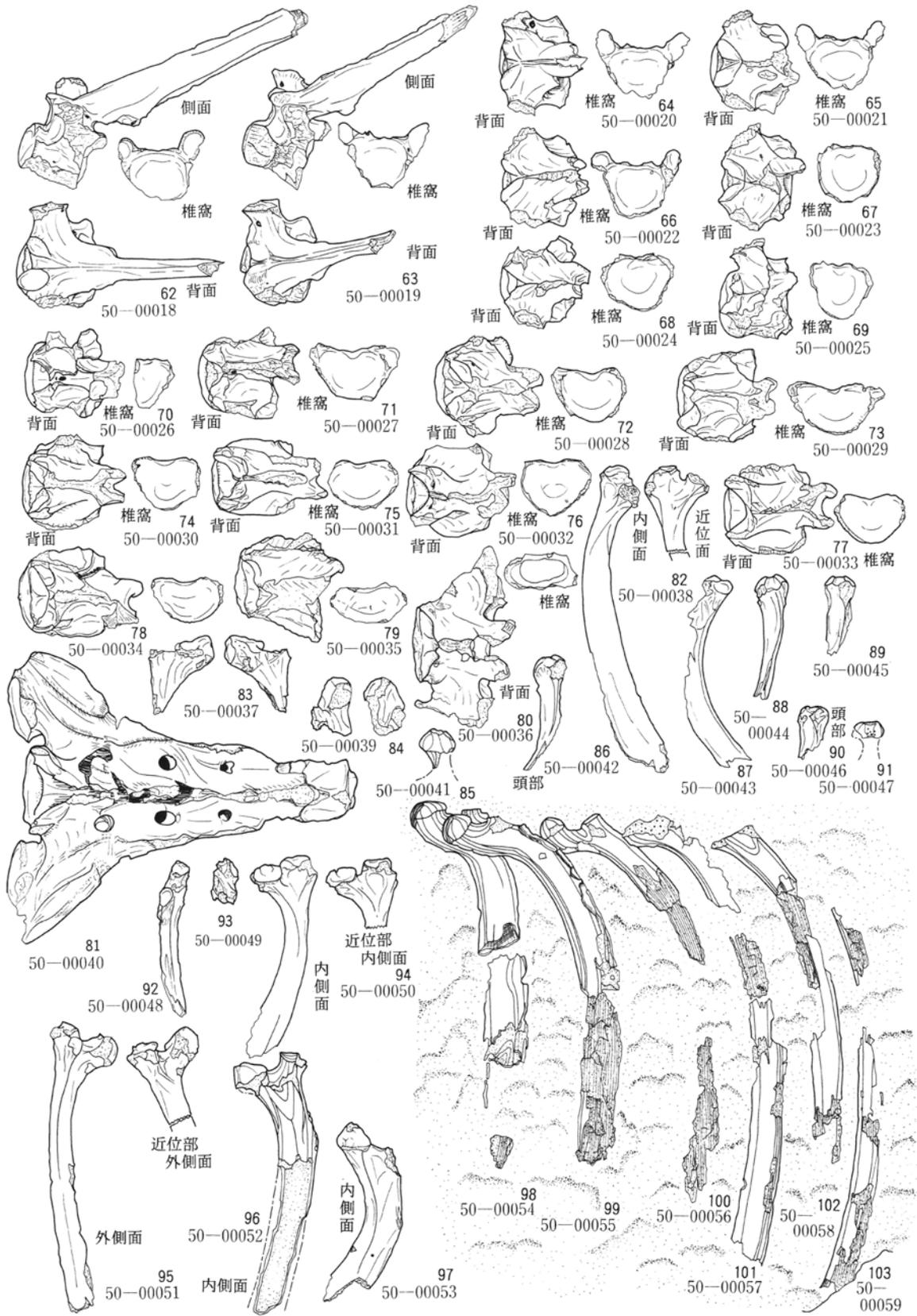
附図1 中里見原遺跡全体図(1:2,000)



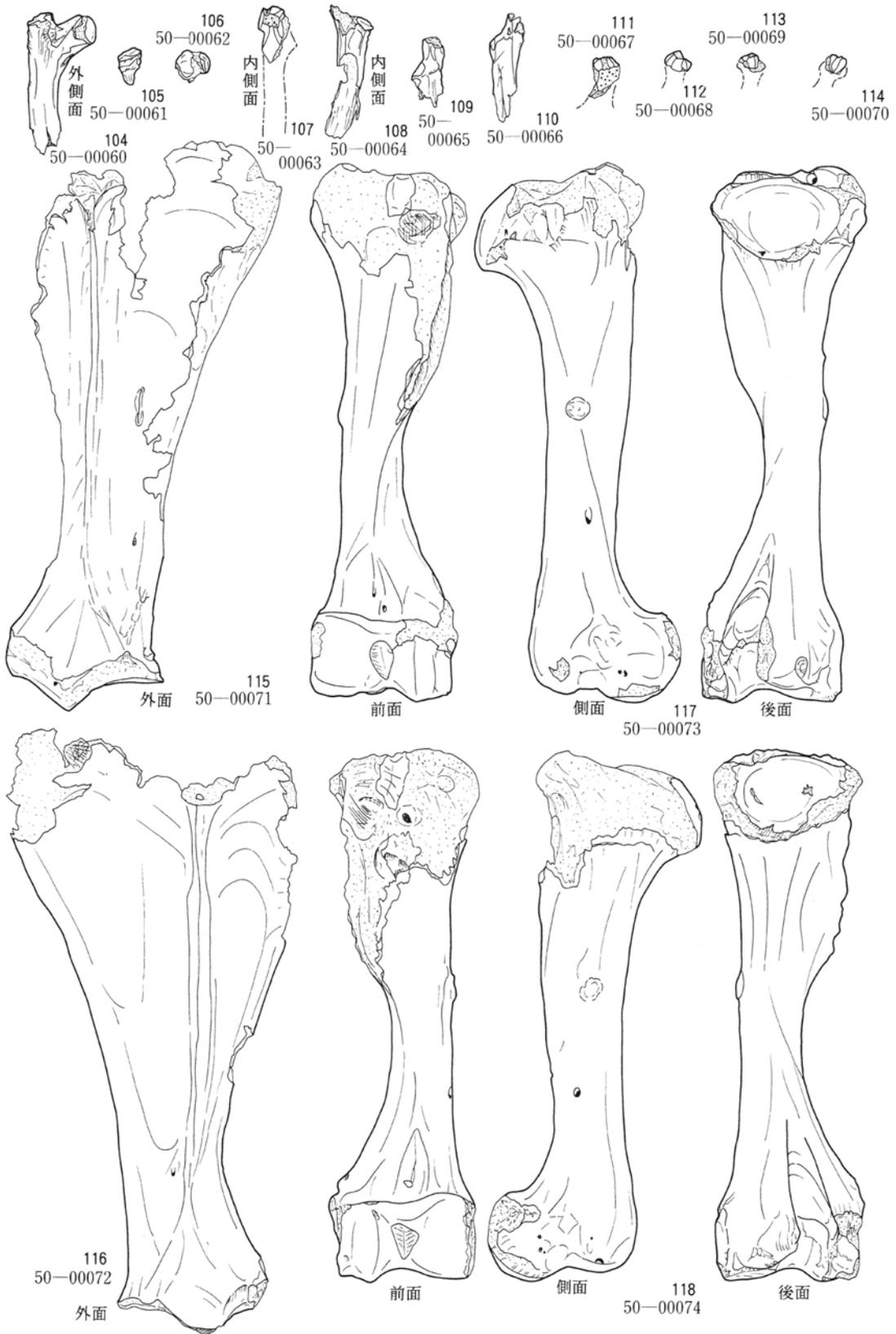
附圖3 獸齒·獸骨實測圖(1)(1:3)



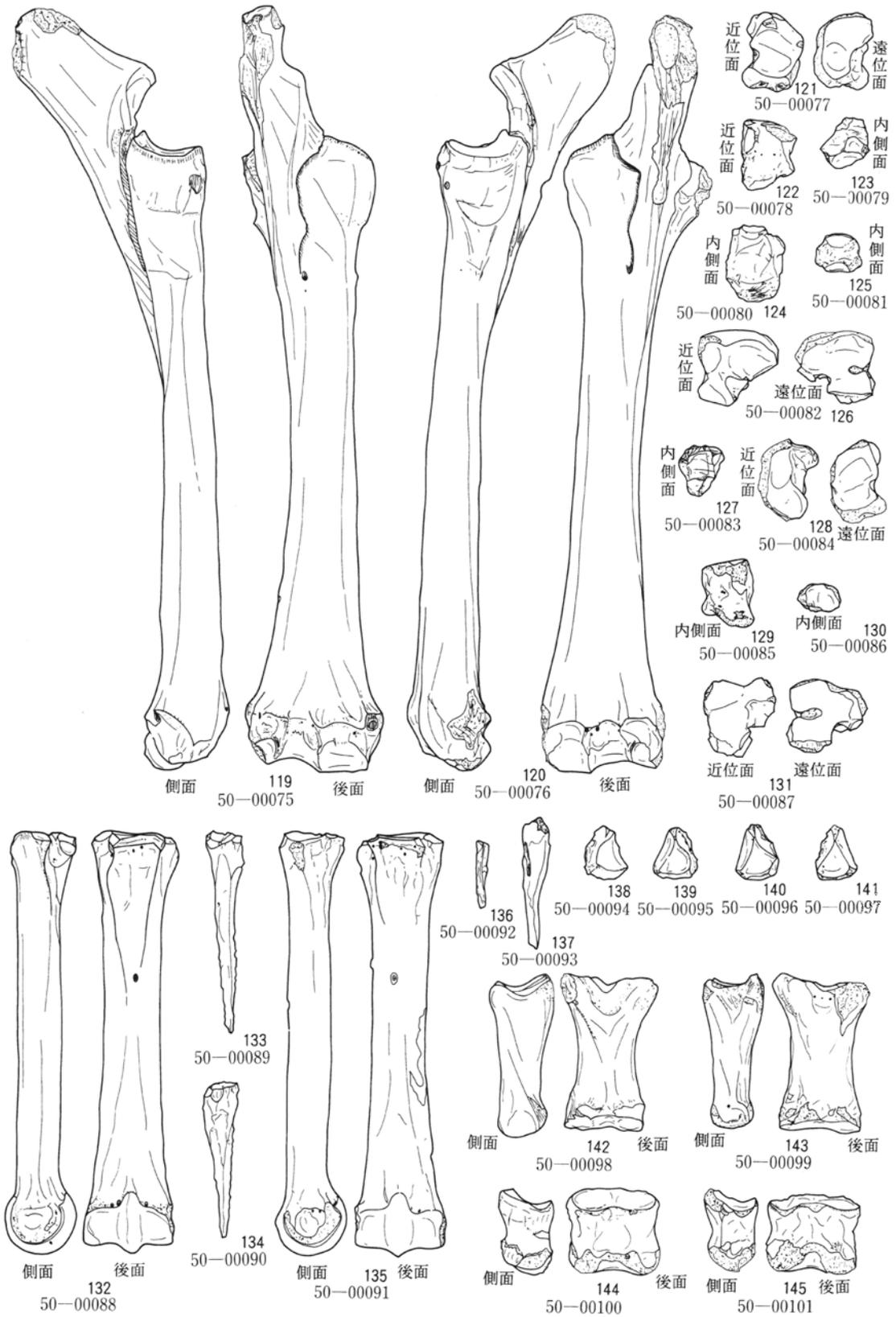
附圖4 獸齒・獸骨實測圖(2)(1:3)



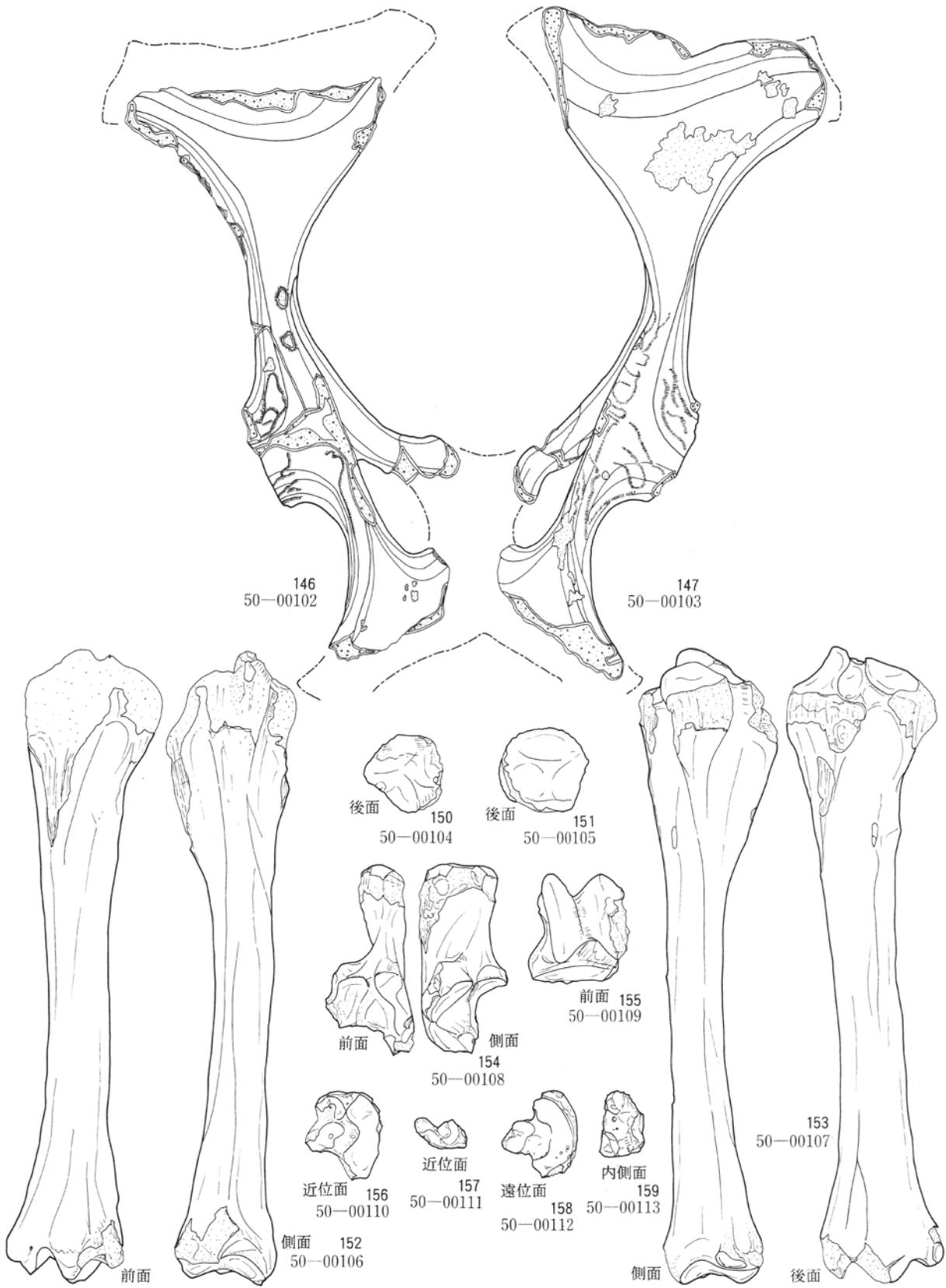
附圖5 獸齒・獸骨實測圖(3)(1:3)



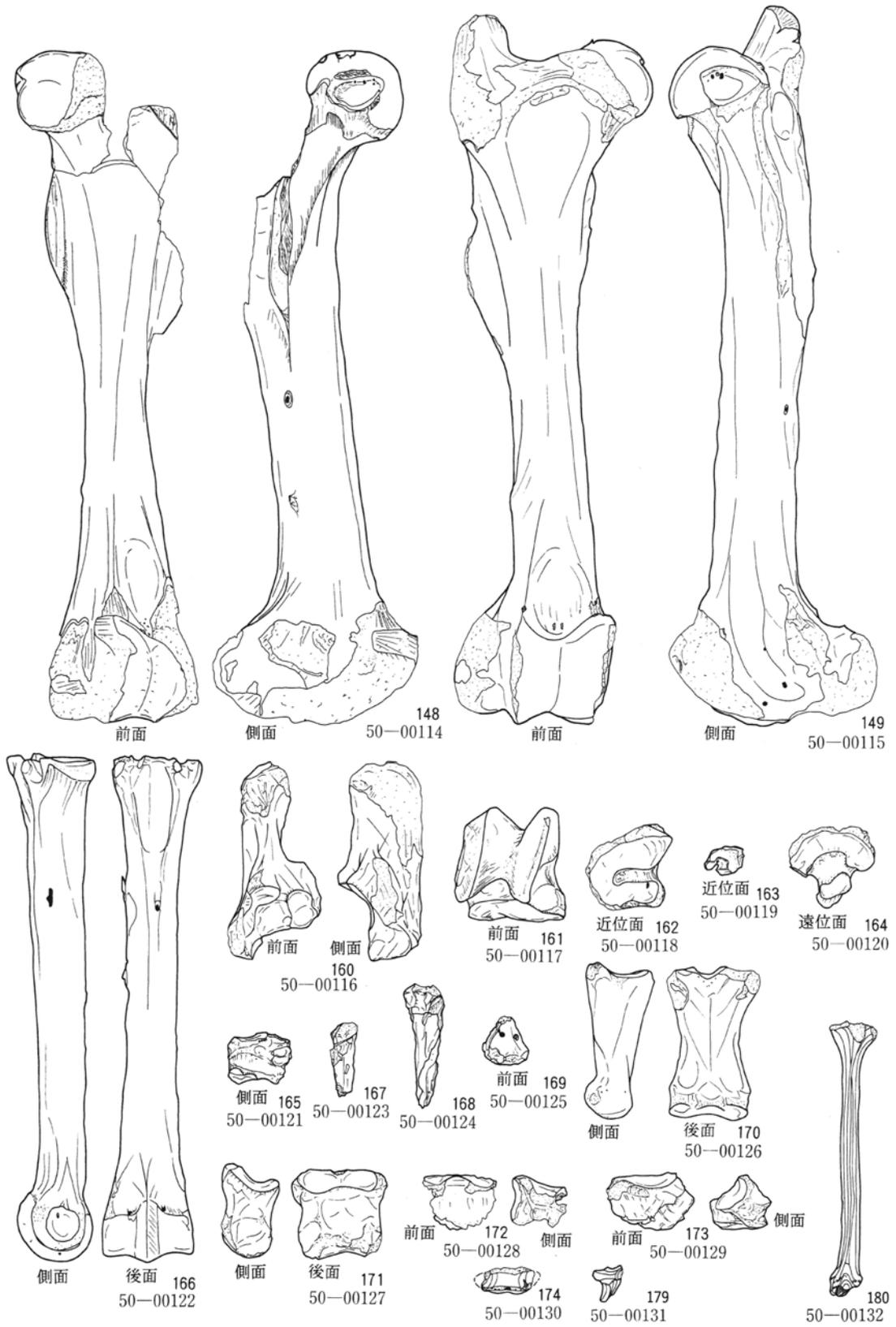
附図6 獣歯・獣骨実測図(4)(1:3)



附圖 7 獸齒・獸骨実測図(5)(1 : 3)



附圖8 獸齒・獸骨実測図(6)(1:3)



附圖9 獸齒・獸骨實測圖(7)(1 : 3)

(3) 出土獣歯・獣骨の遺存状態とその形態並びに大きさ

① 馬歯・馬骨

i 遺存状態

馬歯・馬骨の遺存状態は概ね良好であって、この馬の生前の馬歯数は44(馬歯は上・下顎歯とも乳歯2、犬歯2を含む)、馬骨は149計193と推定されるが、そのうち風化して出土しなかった馬歯は1、馬骨は28計29であった。風化した歯・骨が15.0%に過ぎないところを見ても遺存状態の良いことが推測される。通常小さい手根骨、種子骨や薄い舌骨等は風化しがちであるがそれらの小さい骨迄出土していることに驚きを感じる。ただ軀幹骨のうち左右の肋骨が頭部、結節部を除き肋骨体部の大部分を風化で失い、また椎骨の棘上突起、横突起等の大部分が半ば失なわれていることが惜しまれる点である。

ii 形態並びに大きさ

全般的に馬骨は淡黄褐色であって、表面は粗ぞうで脆く、また軽い。全体を通じて関節部の発達は良好であるのに骨体はやや細目できゃしゃに見え、一見雌を思わすものがあつた。例えば、下顎骨等は厚みに乏しく、また下顎枝の外縁は凹凸に乏しく、血管切痕や下顎体臼歯部の下方への張り出し、咬筋窩の凹み等不鮮明で全体として輪郭不鮮明な感じであつた。また椎骨等は椎頭、椎孔、椎窩等基本的な部分の発達は良好であるのに対し、棘上突起は低く、後関節突起も小さかつた。肢骨等の関節部は発達良好であるにも拘らず骨体部は細くてきゃしゃな感じであつた。また特に目立っている点は、腰椎の椎体が現代馬では椎体の両側面が内側に凹こみ、椎体の断面が逆三角形であるのにこの馬の椎体はやや扁平で椎体の高さが低いので椎体の断面は横長の楕円形を示していたことである。

② 犬骨

犬の左脛骨1が出土しているが遺存状態は極めて良好で良く原相を保っている。ただ、骨の重量が14.2gもあってやや重く、加えて表層採取でもあるので現代のものと考えられる。その他No.1～No.180の獣類遺存体の遺存状態並びに形態及び大きさは附表4～7の通りである。

(4) 出土獣歯・獣骨を有する獣の性別

① 馬歯・馬骨

上・下顎骨に良く発達した犬歯を有しているのでこの馬歯・馬骨を有する馬は雄である。

② 犬骨

脛骨以外出土していないので性別は不明である。

(5) 出土獣歯・獣骨を有する獣の年齢

① 馬歯・馬骨

① 馬歯

加藤嘉太郎^{註22}によると馬歯の永久歯の萌出時期は、㉞下顎第3切歯=2～4才、遅いもので6才、㉟犬歯=4～5才、㊱下顎第3後臼歯=3.5～4才、とすることであるが、この馬は、㊲右下顎第3乳切歯が永久歯と共存していること、㊳上・下顎犬歯が萌出を完了していること、㊴左右下顎第3後臼歯が萌出中であることが認められる。右下顎第3乳切歯が永久歯と共存しているが犬歯の萌出が完了していることにより4.5才前後と判断しても大きな誤はないものと考えられる。

② 馬骨

北昂^{註23}によれば骨端軟骨の化骨の順序は、㊵1才=末節骨近位端、㊶2才末=中節骨近位端、基節骨近位端、中手骨、中足骨遠位端、寛骨の一部、㊷3才末=橈骨近位端、上腕骨遠位端、肩甲骨結節、脛骨遠位端、㊸4

第9章 理科学分析

附表3 遺存体の出土状況

注1 馬歯・馬骨は1個体に属す。動物の種類名の記載がないものは馬である。

注2 馬歯・馬骨は近世～近代に属し、犬骨は現代に属す。

注3 馬歯・馬骨は5号土壌墓中より出土し、犬骨は表層採取。

通番	整理番号	部位	摘要	通番	整理番号	部位	摘要
1	158-1	頭蓋	頭蓋・後頭骨底部・岩様部・後頭骨後頭顆	56	98・97	第7頸椎	
	124			57	96・95	第1胸椎	
	158-2			58	94・93	第2胸椎	
	158-3			59	92・91	第3胸椎	
1'	158-25	前頭骨の一部	頬骨突起の一部	60	90・89	第4胸椎	
1''	171	部位不明頭骨の一部		61	88・87	第5胸椎	
2	158-4	LI ¹	歯槽に植立	62	86・85	第6胸椎	
3	158-5	LI ²	同上	63	84・83	第7胸椎	
4	158-6	LI ³	同上	64	82・81	第8胸椎	
5	158-7	Ldi ³	歯槽より脱落	65	80・79	第9胸椎	
6	158-8	LC	同上	66	78・77	第10胸椎	
7	158-9	LP ²	歯槽に植立	67	74・73	第11胸椎	
8	158-10	LP ³	同上	68	72・66	第12胸椎	
9	158-11	LP ⁴	同上	69	65・64	第13胸椎	
10	158-12	LM ¹	同上	70	63・62	第14胸椎	
11	158-13	LM ²	同上	71	61・60	第15胸椎	
12	158-14	LM ³	同上	72	59・58	第16胸椎	
13	158-15	RI ¹	土中に半ば埋没のまま保存処理	73	57・56	第17胸椎	
				74	55・54	第18胸椎	
14	158-16	RI ²	同上	75	53・52	第1腰椎	
15	158-17	Rdi ³	同上	76	51・50	第2腰椎	
16	158-18	RC	同上	77	49・48	第3腰椎	
17	158-19	RP ²	同上	78	47・46	第4腰椎	
18	158-20	RP ³	同上	79	45・44	第5腰椎	
19	158-21	RP ⁴	同上	80	43・42 ¹	第6腰椎	
20	158-22	RM ¹	同上	81	42	仙骨	
21	158-23	RM ²	同上	82	110	左第1肋骨	肋骨頭・結節・体
22	158-24	RM ³	同上	83	111	左第2肋骨の一部	肋骨頭・結節
23	120	左下顎骨		84	112	左第3肋骨の一部	肋骨頭
24	121	右下顎骨		85	164	左第4肋骨の一部	肋骨頭
25	151-9	下顎体切歯部		86	69	左第9肋骨の一部	肋骨頭・体
26	151-1	LI ₁	歯槽に植立	87	70	左第10肋骨の一部	肋骨頭・体
27	151-2	LI ₂	同上	88	71	左第11肋骨の一部	肋骨頭・体
28	151-3	LI ₃	同上	89	68	左第12肋骨の一部	肋骨頭
29	151-10	Ldi ₃	歯槽より脱落	90	67	左第13肋骨の一部	肋骨頭
30	151-4	LC	同上	91	165	左第14肋骨の一部	肋骨頭
31	120-1	LP ₂	歯槽に植立	92	135	左第15肋骨の一部	肋骨頭・体
32	120-2	LP ₃	同上	93	140	左第16肋骨の一部	肋骨頭
33	120-3	RP ₄	同上	94	113	右第1肋骨	肋骨頭・結節・体
34	120-4	LM ₁	同上	95	114	右第2肋骨	肋骨頭・結節・体
35	120-5	LM ₂	同上	96	116・143	右第3肋骨の一部	肋骨頭・結節・体
36	120-6	LM ₃	同上	97	117	右第4肋骨の一部	肋骨頭・体
37	151-5	R I ₁	同上	98	152	右第5肋骨	頭・結節・体・土中に半ば埋没、保存処理
38	151-6	RI ₂	同上				
39	151-7	RI ₃	同上	99	153・150	右第6肋骨の一部	同上
40	151-8	Rdi ₃	同上	100	154	右第7肋骨の一部	同上
41	121-1	RC	同上	101	155	右第8肋骨の一部	肋骨頭・土中に半ば埋没、保存処理
42	121-2	RP ₂	同上				
43	121-3	RP ₃	同上	102	156	右第9肋骨の一部	同上
44	121-4	RP ₄	同上	103	157	右第10肋骨の一部	同上
45	121-5	RM ₁	同上	104	115	右第11肋骨	肋骨頭・結節・体
46	121-6	RM ₂	同上	105	141	右第12肋骨の一部	肋骨結節
47	121-7	RM ₃	同上	106	142	右第13肋骨の一部	肋骨頭
48	123	左茎状舌骨		107	72'	右第14肋骨の一部	肋骨頭
49	122	右茎状舌骨		108	118	右第15肋骨の一部	肋骨結節・体
50	109	環椎(第1頸椎)		109	76	右第16肋骨の一部	肋骨結節・体
51	108・107	軸椎(第2頸椎)		110	75	右第17肋骨の一部	肋骨結節・体
52	106・105	第3頸椎		111	166	部位不明肋骨頭	肋骨頭
53	104・103	第4頸椎		112	167	部位不明肋骨頭	肋骨頭
54	102・101	第5頸椎		113	168	部位不明肋骨頭	肋骨頭
55	100・99	第6頸椎		114	169	部位不明肋骨頭	肋骨頭

通番	整理番号	部 位	摘 要	通番	整理番号	部 位	摘 要
115	41	左骨甲骨		147	5・144	寛骨右側部	
116	119	右骨甲骨		148	3・ 1	左大腿骨	
117	34	左上腕骨		149	6	右大腿骨	
118	35	右上腕骨		150	131	左膝蓋骨	
119	31	左前腕骨		151	40	右膝蓋骨	
120	15	右前腕骨		152	39	左脛骨	
121	27	左橈側手根骨R		153	7	右脛骨	
122	28	左中間手根骨 I		154	37	左踵骨	
123	133	左尺側手根骨U		155	38	左距骨	
124	146	左副手根骨A		156	36A	左後中心足根骨	
125	33	左第2手根骨		157	36D	左第1+2足根骨	
126	26	左第3手根骨		158	36B	左第3足根骨	
127	139	左第4手根骨		159	36C	左第4足根骨	
128	14	右橈側手根骨R		160	125	右踵骨	
129	32	右中間手根骨 I		161	8	右距骨	
130	30	右第2手根骨		162	9	右後中心足根骨	
131	13	右第3手根骨		163	138	右第1+2足根骨	
132	23	左中手骨		164	10	右第3足根骨	
133	29	左第2中手骨		165	130	右第4足根骨	
134	17	左第4中手骨		166	18	左中足骨	
135	12	右中手骨		167	137	右第2中足骨の一部	
136	24	右第2中手骨		168	136	右第4中足骨	
137	19	右第4中手骨		169	132	右後基節骨種子骨 (外側)	
138	25	左前基節骨種子骨 (内側)		170	16	左後基節骨	
139	21	左前基節骨種子骨 (外側)		171	128	左後中節骨	
				172	129	左後末節骨	
140	20	右前基節骨種子骨 (内側)		173	134	右後末節骨	
				174	162	部位不明遠位種子骨	
141	22	右前基節骨種子骨 (外側)		175	159	部位不明小骨片	
				176	160	部位不明小骨片	
142	11	左前基節骨		177	161	部位不明小骨片	
143	145	右前基節骨		178	163	部位不明小骨片	
144	126	左前中節骨		179	170	部位不明小骨片	
145	127	右前中節骨		180	172	犬左脛骨	
146	4・ 2	寛骨左側部					

附表4 中里見原遺跡出土の獣歯の形態

(注) 獣の種類名の記載のないものは馬歯である。

No.	獣歯の 部 位	特 徴		欠損状態その他
		大きさ及全体の形	咬合状態 エナメル嚢の特徴	
2	LI ¹	やや大きい撥状をしている。	咬耗は軽く咬合面は平らである。 唇面の弧状湾曲は強く、唇面には2本のやや太い縦溝が走っている。内部エナメル質輪は大きく左右に伸び、両側の外部エナメル嚢に接す。	良く原相を保っている。
3	LI ²	やや大きい撥状をしている。	咬耗は軽く咬合面は後に傾いているが平らである。 内部エナメル質輪は大きく左右に伸び、前後の外部エナメル嚢に接している。	良く原相を保っている。
4	LI ³	短い撥状をしている。	咬耗は軽い。 外部エナメル嚢は咬合面で僅かに内部に湾曲し咬耗開始後余り時間が経過していないことを示している。	良く原相を保っている。
5	Ldi ³	小さくて短い馬の蹄のような形をしている。	咬合面は平らで咬耗は進んでいる。 咬合面はほぼ半円状をしており近心面は丸味が強い。外部エナメル嚢は薄く、内部エナメル嚢は不明瞭で外部エナメル嚢と同一円心状をなす。	歯根中央より先を失っている。
6	LC	短い牙状をなしている。	咬耗はやや進み先端の刃状をしている部分が咬耗し先端が鋭い。 歯冠の上部断面はほぼ半円形をなし、遠・近心両面の縁は刃のようになっている。歯冠唇面には数条の細かくて浅い縦溝が走っている。	唇面の歯根部を欠いている。

第9章 理科学分析

No	獣歯の部位	特 徴		欠損状態その他	
		大きさ及全体の形	咬合状態		エナメル嚢の特徴
7	LP ²	大きな三角柱状をなしている。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	中附錐、後附錐は太く、中附錐にはやや太い縦溝が走っている。前錐、後錐は広くて深く、力強さに満ちている。内部エナメル嚢はやや複雑である。前小窩、後小窩は大きくて前後に長く伸びている。原錐後谷は太くて長い。次錐の後展は顕著である。	外部セメント質の遺残はやや良好で良く原相を保っている。歯根は閉鎖していない。
8	LP ³	太い四角柱状をしている。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	前附錐、中附錐は太くて力強く、はっきりした縦溝が走っている。前錐、後錐の湾曲は強くて深い。前小窩、後小窩は大きく、耳状部は頰面に向かって伸びている。次錐の後展が強く、原錐はほぼ三角形をしていて前後に伸びている。	外部セメント質の遺残はやや良好で良く原相を保っている。歯根は閉鎖していない。
9	LP ⁴	長い四角柱状である。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	前附錐、中附錐は太くて力強い。前附錐にはやや太い縦溝が走っている。前錐の湾曲は強くて深い。前小窩、後小窩は大きく、耳状部は頰面に向かってU字状に伸びている。原錐の後展は顕著である。	外部セメント質の遺残はやや良好で良く原相を保っている。歯根は閉鎖していない。
10	LM ¹	四角柱状である。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	前附錐、中附錐の発達は良好であり、前錐の湾曲は強くて深い。前小窩、後小窩はやや細くて前後に伸びている。原錐は長く前後に伸びている。	外部セメント質の遺残はやや良好で良く原相を保っている。
11	LM ²	長い四角柱状である。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	前附錐、中附錐の発達は良好である。各錐は小さいけれども発達良好ある。原錐後谷は長く深く進入している。原錐は前後に長く伸びている。	外部セメント質の遺残はやや良好で良く原相を保っている。
12	LM ³	太くて美しい弧状湾曲を示している。	咬耗は軽い。	前附錐の発達は良好である。萌出後余り時間が経っていないので咬合面がつままっている。頭蓋が土中に埋没のまま保存処理がしてあり良く観察することができなかった。	良く原相を保っている。歯根は閉鎖していない。
13	RI ¹	やや大きい撥状をしている。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	唇面の弧状湾曲は強く、唇面にはやや太い2本の縦溝が走っている。内部エナメル質輪は大きく、長く左右に伸び両側の外部エナメル嚢に接している。	良く原相を保っている。
14	RI ²	やや大きい撥状をしている。	咬耗は軽く咬合面は後に傾いているが平らである。	内部エナメル質輪は大きく左右に伸び両側の外部エナメル嚢に接している。	良く原相を保っている。
15	Rdi ³	小さな馬蹄状をなしている。	咬耗はやや進んでいる。	咬合面は半円形をしているが近心面は円の張り出しが強く、遠心面は弱い。保存処理のため内部エナメル嚢の状態は良く観察することが出来なかった。	良く原相を保っている。
16	RC	短い牙状をしている。	咬耗は軽い。	歯冠の上部断面はほぼ半円形をなしており、遠心、近心両面の縁は刃のようにとがっている。保存処理のため頰面を見ることは出来ない。	良く原相を保っている。
17	RP ²	やや大きい三角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各錐は大きくて力強い。前小窩、後小窩は大きく前後に伸びている。原錐後谷は太い。土壌と共に保存処理がしてあるので頰面を見る事が出来ない。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。
18	RP ³	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各錐は良く発達している大きくて力強い。前・後小窩は大きい。原錐後谷は太くて深く内部に進入している。原錐及び次錐の後展は顕著である。保存処理のため頰面を観察することは出来ない。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。
19	RP ⁴	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	次錐、原錐の後展は顕著である。土壌に半ば埋没のまま保存処理がしてあるため、細部の観察が出来なかった。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。
20	RM ¹	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	原錐が大きく良く発達していることが目立っている。保存処理のため、細部にわたる観察が出来なかった。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。
21	RM ²	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	原錐の前後に長いことが目立っている。保存処理のため、細部の観察が出来なかった。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。

No	獣歯の部位	特 徴		欠損状態その他	
		大きさ及全体の形	咬合状態		エナメル嚢の特徴
22	RM ^a	やや小さく遠心面がつぼまっている。	咬耗は軽い。	保存処理のため頬面及び咬合面を良く観察することは出来ないが、萌出後時間的経過が少なく遠心面がつぼまった感じである。	外部セメント質は良く遺残し、良く原相を保っている。
26	LI ₁	やや大きくて長く半月状の美しい反りを示す。	咬耗は軽く咬合面はほぼ平らである。	唇面には太い1本の縦溝が走っている。内部エナメル質輪は左右に細長く伸びて外部エナメル嚢と接し、舌面では外部エナメル嚢と融合して外部に開口している。	咬合面附近と側面に僅かな薄い外部セメント質が遺残している良く原相を保っている。
27	LI ₂	やや大きくて長く軽い半月状の美しい反りを示す。	咬耗は軽く咬合面は遠心側と舌側に傾く。	唇面にはやや太い2本の縦溝が走っている。内部エナメル質輪は細長く左右に伸び外部エナメル嚢に接している。	咬合面附近と側面に僅かな薄い外部セメント質が遺残しており良く原相を保っている。
28	LI ₃	やや太くて短い撥状をしている。	咬合面は遠心側と舌側に傾き咬耗は僅かである。	内部エナメル質輪及び内部象牙質を欠き、外部エナメル嚢は咬合面に於いて内方に曲がり萌出後間もないことを示している。	外部エナメル嚢は良く原相を保っている。
29	Ldi ₃	小さな馬の蹄の形をしている。	咬合面は平らで咬耗は進んでいる。	歯冠部は乳歯としては大きい。咬合面はほぼ半円状をなし、近心面は丸味が強くて太く、遠心面は丸味が少なくて薄い。外部エナメル壁は薄く内部エナメル質輪は菌状で舌面エナメル嚢に接している。	歯根部の先端を欠いている。
30	LC	やや短い牙状をなしている。	咬耗は認められない。	頬面エナメル嚢は牙状に湾曲し先端部は舌面エナメル嚢の方が小さく、頬面エナメル嚢の縁は刃のように鋭くなっている。	良く原相を保っている。
31	LP ₂	やや平たい三角柱状をしていて大きい。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下前隆起及び下内錐谷、下次小歯の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
32	LP ₃	四角柱状で大きい。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下原錐、下前隆起下次小歯の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
33	LP ₄	四角柱状で大きい。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下原錐、下次小歯の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
34	LM ₁	四角柱状で大きい。	咬耗は軽く咬合面はほぼ平らである。	下原錐、下次小歯、下次小歯の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
35	LM ₂	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面はほぼ平らである。	下原錐、下次小歯、下次小歯は大きくて力強い。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
36	LM ₃	薄い三角柱状をしている。	咬耗は軽く、咬合面は平らである。	歯槽面より上に行くに従って歯冠が細くなり萌出後間もないことを示している。各歯は小さくこじんまりとしている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
37	RI ₁	やや大きくて長く半月状の美しい反りを示す。	咬耗は軽く咬合面はほぼ平らである。	唇面には1本の太い縦溝が走っている。内部エナメル質輪は左右に細長く伸びて外部エナメル嚢に接し、舌面では外部エナメル嚢と融合して外部に開口している。	咬合面附近と側面に僅かな薄い外部セメント質が遺残している良く原相を保っている。
38	RI ₂	やや大きくて長く軽い半月状の美しい反りを示す。	咬耗は軽く咬合面は遠心側と舌側に傾く。	唇面にはやや太い2本の縦溝が走っている。内部エナメル質輪は細長く左右に伸び外部エナメル嚢に接している。	咬合面附近と両側面に僅かな薄い外部セメント質が遺残している良く原相を保っている。
39	RI ₃	やや太くて短い撥状をしている。	咬耗は軽く咬合面は遠心側と舌側に傾く。	内部エナメル質輪及び内部象牙質を欠き、外部エナメル嚢は咬合面に於いて内方に曲がり萌出後間もないことを示している。	良く原相を保っている。
40	Rdi ₃	三角錐状でやや細い楔状をしている。	遠心側に強く傾斜し咬耗は進んでいる。	歯冠部の外部エナメル嚢は薄く三角形をなしており舌面は細かく波打っている。	歯頸部における外部エナメル嚢を欠いている全体として良く原相を保っている。
41	RC	牙状をしている。	咬耗は軽い。	歯冠の上部の断面はほぼ半円形で遠心側の縁は刃のようになっている。歯冠頬面には数条の細くて浅い縦溝が走っている。	良く原相を保っている。
42	RP ₂	三角柱状で大きい。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下前隆起、下内錐谷の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
43	RP ₃	四角柱状で大きい。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下前隆起、下内錐谷の大きいことが目立っている。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
44	RP ₄	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各歯は大きくて力強い。特に下原錐と下内錐谷は大きい。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。

第9章 理科学分析

No	獣歯の部位	特 徴			欠損状態その他
		大きさ及全体の形	咬合状態	エナメル嚢の特徴	
45	RM ₁	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	下原錐、下次錐は大きくて長い。下次小錐は大きくて乳房状を呈している。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
46	RM ₂	四角柱状である。	咬耗は軽く咬合面は平らである。	各錐は小さいけれども充実している。下次小錐が大きく、下内錐とほぼ同じ大きさで乳房の形をしており、乳頭部は大きい。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。
47	RM ₃	三角柱状である。	咬耗は進んでいない。	歯冠は歯槽より上に行くに従ってつぶまっており、咬合面は小さく萌出後余り時間が経っていない。咬耗が進んでいないため前・後葉の内部エナメル嚢は不明瞭である。	外部セメント質が全体を覆い良く原相を保っている。

附表5 中里見原遺跡出土の獣骨の形態

(注) 獣の種類名の記載のないものは馬骨である。

No	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
1	頭蓋	この頭蓋は風化著しいため右側を下にして半ば土に埋没したままの状態に保存処理がしてある。色は淡黄褐色で全体として褐色が強くなっている。この頭蓋の大きさは普通である。外側面が風化のため遺残状態が悪いにも拘わらず口蓋底は意外に良く遺残しているため切歯部及び臼歯列の遺残状態は良好である。表面の緻密骨は脱落している箇所が多く、左側第4前臼歯及び後臼歯は歯根部迄露出している。緻密骨が遺残している部分も保存処理のため表面がべっとりした感じで緻密骨か或いは各洞内の緻密骨か判断し難いものが多い。 左側頭骨岩様部の緻密骨は内側面では良く遺残しているが、外側面では僅かに錐体に小骨片として残っているのみである。大部分が海綿骨であるのにしっかりして遺残状態は比較的良好である。外耳道は大きく開口し、その下方に丸い筒状の茎状突起が見られる。骨胞及び乳様突起の外側を欠き内をのぞかせている。下端にはやや細い筋突起が突出している。内側面の中央にやや大きなラセン孔が開孔し、内側面の表面に輪郭鮮明な指圧痕が見られる。 後頭骨は後稜から上を失い、また頭頂骨との接続部は海綿骨が露出している。後頭骨の後側面は全体に凸凹に富み、特に頂稜及び後頭隆起の附近の凸凹が目立っている。後頭骨の両側は頸静脈突起が下方に伸びており後頭骨と滑らかな腹顎窩の凹みを形成している。後頭骨の下側には2つのラッキョーのような美しい後頭顆が大孔を形成し、三角柱のような形の後頭骨底部へと伸びている。	切歯部より後方の眼窩下孔までの左側上顎骨、左側眼窩口の下側及び顔稜から下の上顎骨、頭頂骨の後部及び左側頸静脈突起を失っている。
1'	前頭骨頬骨突起の一部	灰白色で、表面は堅い緻密骨で覆われ、内側面は海綿骨が露出している。骨は薄くて細長く、一辺は眼窩口を示す美しい弧状を示しているが位置が判然としない。	眼窩口をとりまく細かい一骨片である。
1''	部位不明頭骨の小骨片	淡黄褐色で、表面極めて粗ざうである。一端はやや厚く一端は薄い。厚めの一端には髓小室のやや大きい海綿骨が見られ、裏面には輪郭鮮明な指圧痕が見られる。	約5.0×2.5cmの小骨片である。
23	左下顎骨	淡褐色で、表面は粗ざうで脆い。全体的に厚みに乏しい感じである。下顎枝の外縁は凸凹に乏しく、血管切痕や下顎体臼歯部の下方への張り出し、咬筋窩等不鮮明で全体として「のっぺり」した感じである。内側面の翼突筋窩は大きくて深い。歯槽には6箇の頬歯が植立している。	下顎連合基部より前を失っている。また咬筋窩の中央及び下顎角の外縁の一部を失っている。
24	右下顎骨	淡褐色で、表面は粗ざうで極めて脆い。下顎体の外側面はふくらみが殆どなく咬筋窩は内側に大きく窪み、内外の厚みは薄くなっている。下顎角下縁は角ばっていて幅が広い。内側面は平らで翼突筋窩は大きくて深い。歯槽には1箇の犬歯と6箇の頬歯とが植立している。	前側は下顎間軟骨結合の犬歯部から前を破損し、下顎枝はその中程から上部が失われている。また咬筋窩中央と下顎角下縁を欠いている。
25	下顎体切歯部	淡黄褐色で、風化のため表面は極めて粗ざうでありまた極めて脆い。舌面の方が唇面より風化が進んでいる。緻密骨は薄く、唇面には僅かの緻密骨があるのみで、切歯は唇面側は殆ど露出している。舌面の表面はしゃもじのように凹んでいて周囲に切歯、犬歯が植立している。	切歯、犬歯が植立する範囲の下顎体切歯部である。
48	左茎状舌骨	淡黄褐色で、風化のため表面は極めて粗ざうでありまた極めて脆い。全体に細く長く薄く。前側は細く、後側は幅が広がって「へら」状をなしている。内面は平らで外面は下縁が多少厚くやや丸味を帯びている。	前側の上下縁及び後部の上縁及び筋角を欠いている。
49	右茎状舌骨	淡黄褐色で、風化のため表面は極めて粗ざうでありまた極めて脆い。全体に細く長く薄く。前側は細く、後側は幅が広がって「へら」状をなしている。外面は下縁が多少厚くやや丸味を帯びている。	前側及び骨体上縁部及び筋角を欠いている。

第2節 動物遺存体

No	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
50	環椎(第1頸椎)	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。背結節及び環椎翼の縁を欠いており海綿骨が露出している。椎体、椎孔及び外側椎孔は大きい。環椎翼は翼孔部において大きくびれ翼は乳頭関節突起と横突起に分かれるかのように見える。	背結節及び環椎翼の縁を欠いている。
51	第2頸椎	淡黄褐色で、極めて脆く著しく軽い。椎体腹面その他を欠いており海綿骨が露出している。椎頭部は比較的遺存状態良好で歯突起は幅が広く、外側関節面はエリマキトカゲのように拡がり美しい湾曲を示している。外側椎孔は大きい。棘突起は平滑で広いが高さが低い感じである。後関節突起は小さく関節は狭い。横突起は薄くて小さく、横突孔は見当たらない。	椎体腹面及び棘突起、右横突起の一部を欠いている。椎頭は化石しているが椎窩は骨端線より関節面が脱落している。
52	第3頸椎	淡黄褐色で、極めて脆くまた軽い。背面はやや細長く、前・後関節突起の横への張り出しは少ない。関節突起はやや細く関節面は小さい。椎頭はやや大きく、また椎窩関節面は広くて大きい。	棘上突起、横突起、椎体腹面及び関節突起先端を欠き海綿骨が露出している。
53	第4頸椎	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。椎体及び諸突起の所々の緻密骨が脱落して細かい海綿骨を露出している。椎体の上面は細長く棘上突起は極めて小さい。前・後関節突起は細く関節面は小さくて輪郭不鮮明である。椎頭椎窩、椎孔、横突孔は大きい。	椎頭は化石し、椎窩は骨端線より関節面が脱落している。棘上突起及び横突起を欠いている。
54	第5頸椎	淡褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。椎体及び諸突起の所々の緻密骨が脱落して細かい海綿骨を露出している。椎体の上面は広く、棘上突起は欠けているが極めて小さい。前・後関節突起はやや小さく関節面も小さくて輪郭不鮮明である。椎頭、椎窩、椎孔、横突孔の大きいことに比較して横突起頸肋部の発達極めて悪い。	棘上突起及び横突起先端を欠いている。椎頭は化石し、椎窩は骨端線より関節面が脱落している。
55	第6頸椎	淡黄褐色で、やや大きいが極めて脆くまた極めて軽い。背面は四角形で広く前・後関節突起は大きく前、後に張り出し亀を思わすものがある。椎体、椎孔、横突孔の大きいことが目立っている。	棘上突起、左右横突起、椎体下面を失っている。椎頭は化石し、椎窩は骨端線より関節面が脱落している。
56	第7頸椎	淡黄褐色でやや短い。極めて脆くまた極めて軽い。背面はやや短く、棘上突起は短くて小さいが上方に突出している。前・後関節突起は大きくて前・後に張り出している。椎孔は大きく開口し、横突孔は痕跡をとどめるのみである。	棘上突起上縁、左右横突起、椎体下面を失っている。椎頭は化石し、椎窩関節面は骨端線より脱落している。
57	第1胸椎	淡黄褐色で、著しく短く横に平たい感じである。極めて脆くまた極めて軽い。背面は著しく短く、また棘上突起も短くて小さいけれども上方に突出している。前・後関節突起はやや大きく前、後に張り出している。横突起は太く短く横に張りだしている。椎孔は丸くて大きいけれども横突孔はない。	棘上突起の上縁、横突起の先端を欠く。椎頭は化石し、椎窩関節面は骨端線より脱落している。
58	第2胸椎	淡黄褐色を呈し、極めて脆く極めて軽い。全体的に大きいが特に棘突起、椎体、椎窩関節面の大きいことが目立っている。棘突起は太く、遠位部に於いて大きく湾曲し、後関節突起は後方に突出している。椎窩関節面は広くて深い。前関節突起は不明瞭で関節面は狭い。	棘突起近位部後縁より遠位部前縁にかけて斜に欠損し、上部を失っている。
59	第3胸椎	淡黄褐色を呈し、極めて脆く極めて軽い。棘上突起はやや太く長く全体としてはやや大きい感じである。前関節突起は軽く前方に展出し関節面は広い後関節突起の後展はややおだやかである。	棘上突起の近位部を欠いている横突起先端及び椎体腹面を欠いている。
60	第4胸椎	淡黄褐色を呈し、極めて脆く極めて軽い。棘上突起は長く斜上に伸びている前関節突起は小さく僅かに前方に突出し、関節面は狭い。後関節突起の後展は少ない。前肋骨窩は大きく凹みは深い。	棘上突起先端と左横突起及び椎体腹面を欠いている。
61	第5胸椎	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。全体として幅が狭くなっているが小じんまりとしている。棘上突起は細くやや長く斜上方に伸びている。前関節突起は小さく不明瞭であり、後関節突起の後展はやや少ない。前肋骨窩はやや小さいけれども深い。	棘上突起先端と左横突起及び椎体腹面を欠いている。
62	第6胸椎	淡黄褐色で、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体として細く縦長の感じである。棘上突起は細くやや長く斜上方に伸びている。前関節突起は右側が斜右に少しそれているため右側の前方への張りだしが少なく狭いが、左右とも関節面は明瞭である。後関節突起の後展はやや少ない。前・後肋骨窩はやや細いけれども凹みは深く輪郭鮮明である。	棘上突起の上端と左横突起及び椎体腹面を欠いている。
63	第7胸椎	淡黄褐色で、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体として細く、特に棘上突起が急に細く短くなったことが目立っている。前関節突起は不明瞭で関節面は僅かに認められる程度である。後関節突起の後展は少ない。前・後の肋骨窩は小さいけれども凹みは深く輪郭鮮明である。	棘上突起の上端と左横突起及び椎体の左側並びに腹面を欠いている。
64	第8胸椎	淡黄褐色で、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体として細く小さくなっている。特に棘上突起の細くて短いことが目立っている。前関節突起は関節面が認められるだけで前方への張りだしは殆どない。前・後の肋骨窩は小さいけれども凹みは深く輪郭鮮明である。	棘上突起の大部分と左・右横突起の先端、椎体の左側並びに腹面及び左後関節突起先端を欠いている。

第9章 理科学分析

№	獣骨の部位	特徴	欠損状態その他
65	第9胸椎	淡黄褐色で、風化のため極めて脆くまた極めて軽い。全体として細くて小さい。棘上突起は大部分が欠損しているがその断面は小さい。前関節突起は大変小さくて狭いが、関節面は明瞭である。前・後肋骨窩は小さいけれども凹みは深く輪郭鮮明である。	棘上突起の後関節突起より上、左横突起と椎体腹面を欠いている。
66	第10胸椎	淡黄褐色で、風化のため極めて脆くまた極めて軽い。全体として小さい。棘上突起は大部分欠損しているがその断面は小さくて細い。前関節突起は大変小さくて細いが関節面は明瞭である。前・後肋骨窩は小さいけれども凹みは深く輪郭鮮明である。	棘上突起の後関節突起より上、左・右横突起先端、椎体腹面を欠いている。
67	第11胸椎	淡黄褐色で、風化のため極めて脆くまた極めて軽い。全体としてはやや小さい棘上突起は大部分欠損しているがその断面は小さくて細い。前関節突起は小さく僅かに前方に張り出している。前・後肋骨窩は小さいけれども輪郭鮮明である。	棘上突起の大部分、左・右横突起の先端、椎体腹面を失っている。
68	第12胸椎	淡黄褐色で、風化のため極めて脆くまた極めて軽い。全体としてはやや小さい棘上突起は大部分欠損しているがその断面は小さくて細い。前関節突起は小さく僅かに前方に張り出している。前・後肋骨窩は小さいけれども輪郭鮮明である。	棘上突起の大部分、左横突起の先端、右横突起全体、椎体腹面を失っている。
69	第13胸椎	淡黄褐色を呈し、風化のため極めて脆くまた極めて軽い。全体的に幅が少なく椎孔等細い感じであるが椎頭の大きいことが目立っている。前関節突起は小さく僅かに小さな三角形に前方に張り出している。	棘上突起の大部分、左横突起、椎体腹面を欠いている。椎頭関節面化骨完了。椎窩関節面骨端線より脱落。
70	第14胸椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体的に幅が細くなっているが椎頭の大きいことが目立っている。前関節突起は小さく僅かに前方に張り出している。	棘上突起の大部分、左・右横突起の大部分、椎体の左側及び腹面を欠いている。椎頭関節面化骨完了。椎窩関節面骨端線より脱落。
71	第15胸椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体的に細い感じがするが、椎頭の大きいことと椎体が扁平なことが目立っている。前関節突起は小さく僅かに前方に張り出している。	棘上突起の大部分、左・右横突起、椎体腹面を失っている。椎窩関節面骨端線より脱落。
72	第16胸椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体的に細く、椎頭のやや大きいことと椎体がやや扁平なことが目立っている。前肋骨窩は小さく、また前関節突起も極めて小さい。	棘上突起の大部分、左・右横突起、椎体腹面を欠いている。椎窩関節面骨端線より脱落。
73	第17胸椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体的に細いことと椎頭のやや大きいこと、椎体の扁平なことが目立っている。また椎体に対し椎孔及び横突起、棘上突起が左側に傾き、左側の椎孔の壁が厚くなっている。前関節突起は極めて小さい。	棘上突起の大部分、左・右横突起、椎体腹面を欠いている。椎窩関節面骨端線より脱落。
74	第18胸椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。全体的に細く、椎頭のやや大きいこと、椎体の扁平なことをなすことが目立っている。前関節突起の前方への張り出しは全くない。	棘上突起の大部分、左・右横突起、椎体の左側及び腹面を欠いている。椎窩関節面は骨端線より脱落している。
75	第1腰椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体はやや長く、扁平な感じがして、椎頭側は丸く後に行くに従って扁平になっている。乳頭関節突起並びに後関節突起はやや大きく前・後に張り出している。横突起は失われているが基部は横に長く腰椎であることを示している。	棘上突起の大部分と左・右横突起並びに椎体の左・右側面及び腹面を失っている。椎頭関節面の化骨はほぼ終わりに近く、僅かに腹側に骨端線が残っており、椎窩関節面は骨端線から脱落している。
76	第2腰椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体はやや長く扁平である。椎頭は扁平であるが椎窩に近づくにつれて丸味を帯びているが全体としては扁平な感じである。乳頭関節突起並びに後関節突起は比較的大きく厚く前・後に張り出している。横突起は失われているが基部は横に長く腰椎であることを示している。	棘上突起の大部分と、左・右横突起、及び椎体の左・右側面並びに腹面を失っている。椎頭関節面の化骨はほぼ完了している。椎窩関節面は骨端線から脱落している。
77	第3腰椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体は比較的長く椎体の右側面中央が多少こけてるのが認められ全体的には扁平であるが椎体の高さが低いので多少丸味を帯びているように見える。乳頭突起並びに後関節突起はやや大きく厚く前・後に張り出している。横突起は失われているが基部は横に長い。	棘上突起の大部分と左・右横突起及び椎体の左・右側面並びに腹面を失っている。椎頭関節面の化骨は完了し、椎窩関節面は骨端線から脱落している。
78	第4腰椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体は比較的長いが高さが少なくやや丸味を帯びている。乳頭関節突起並びに後関節突起は前・後に張り出している。	棘上突起の大部分、左・右横突起、椎体の左・右側面及び腹面を欠いている。椎頭の化骨は完了しているが椎窩関節面は骨端線より脱落している。

第2節 動物遺存体

No.	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
79	第5腰椎	淡黄褐色を呈し、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体は比較的長い が椎体の高さが少なくて扁平で椎体の断面は両側面が丸味を帯びている。 乳頭関節突起、後関節突起は前・後に張り出している。	棘上突起の大部分、左・右横突起、 左乳頭関節突起、椎体左・右両側 面及び腹面を失っている。椎窩関 節面は骨端線より脱落している。
80	第6腰椎	淡黄褐色をしていて、風化により極めて脆くまた極めて軽い。椎体は比較的 長い。乳頭関節突起及び後関節突起の発達は良好である。横突起は大部分失 われているが右横突起基部は厚く、第6腰椎特有の仙骨と関節する大きな三 角形の関節面が残存している。	棘上突起の大部分、左・右横突起 の大部分、椎体の左・右両側面並 びに腹面を欠いている。椎頭関節 面の化骨はほぼ完了し椎窩関節面 は骨端線から脱落している。
81	仙骨	淡黄褐色をしていて、風化により極めて脆くまた極めて軽い。仙骨の長さは やや長目で全体としてやや大きい。横突起は力強く左・右に張り出していて 腰椎との関節面は三角形で大きい。横突起の先端より仙骨尖にかけてゴツゴ ツとした外側仙骨が走っている。また、横突起の外側にはゴツゴツとした粗 面状の隆起が走っている。5つの椎体と椎体の境には合計4つの背側仙骨孔 が開口していて椎孔と連絡している。	棘上突起の大部分、左・右横突起 先端を欠いている。
82	左第1肋骨	淡黄褐色を呈し、表面極めて粗ざうである。体部の中央より下は緻密骨が極 めて薄く内部海綿骨の凸凹が浮き出ている。肋骨結節は大きく関節面は前側 に傾いている。体部の表面は丸味を帯び肋骨溝は認められない。体部は下方 に行くに従って太さを増し、内面は平らに近い。	肋骨頭が骨端線より脱落して おり、肋骨体は遠位部が欠けている。
83	左第2肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた軽い。外側面の頭部と結節部との間の凹みは軽 い。肋骨頭部は大きく、前肋関節面は垂直に前方に向かい、後肋関節面は斜 上方に向かって展開し、関節面は共に広い。関節頭稜は丸味を帯びている。 内側面は頭部より体部への移行部は殆ど平らで、頭部及び結末部の間は軽く 凹んでいる。	肋骨頭より下側と肋骨結節を失っ ている。
84	左第3肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。外側面の頭部と結節部との間の凹 みは大きくて深い。肋骨頭部の前肋関節面はほぼ垂直で比較的広く、後肋関 節面は斜下方に向かっていてやや狭い。関節頭稜は丸くて不鮮明である。	肋骨頭より下側と肋骨結節を失っ ている。
85	左第4肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、表面は硬い緻密骨で覆われ、頭部は比較的大きくて広く特 に内側の関節面は広くて傾斜が強く頭稜は比較的精明である。	頭部の前側及び頸部以下を失っ ている。
86	左第9肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。肋骨頭部は比較的大きく、前・ 後の関節面は丸くて大きい。肋骨頭稜は台形をなし輪郭鮮明である。肋骨頭 から後側面への移行部は約2.0cmの長さで丸い槌状に凹んでいて内側面との 境は鋭利な稜線を作っている。	肋骨頭より肋骨溝に沿って割れ肋 骨体は内側及び後側面の約6.0cm を残すのみである。肋骨頭関節面 の化骨は完了している。
87	左第10肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。肋骨頭部は比較的大きく、前・ 後肋関節面は丸くて大きく、肋骨頭稜は台形をなし輪郭鮮明である。肋骨 体の内側面は平らで後側面は丸味を帯びているが、肋骨頭からの移行部は約 2.0cmの長さで丸い槌状に凹んでいて、内側面との角は鋭利な刃物のように鋭 くなっている。	肋骨頭より肋骨溝に沿って縦に割 れ、肋骨体は内側及び後側面の約 10.0cmを残すのみである。肋骨頭 関節面の化骨は完了している。
88	左第11肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。肋骨頭部は比較的大きく、前・ 後肋関節面は丸くて大きい。肋骨頭稜は台形をなし輪郭鮮明である。肋骨 体の内側面は平らで肋骨頭部との境は両側に僅かな粗面の存在が見られる。	肋骨頭より肋骨溝に沿って縦に割 れ、肋骨頭及び肋骨体の内側面の 上部約5.0cmを残すのみである。肋 骨頭関節面の化骨は完了してい る。
89	左第12肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。前・後肋骨頭関節面は丸く、 肋骨頭稜は台形をなし輪郭極めて鮮明である。	肋骨頭より肋骨溝に沿って縦に割 れ、肋骨体は内側面及び後側面の 約4.0cmを残すのみである。
90	左第13肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆くまた極めて軽い。前・後肋骨頭関節面は丸く、 肋骨頭稜は台形をなし輪郭極めて鮮明である。	肋骨頭より肋骨溝に沿って縦に割 れ、肋骨体は内側面及び後側面の 約2.5cmを残すのみである。
91	左第14肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、表面は硬い緻密骨に覆われている。前・後部及び下部を欠 いている。頭部はやや大きく、関節面の内側は傾斜が強く、頭稜は明瞭であ る。	頭部の厚さ0.9cmの小骨片である。
92	左第15肋骨の一部	淡黄褐色を呈し、極めて脆い。肋骨頭は殆ど認められず、肋骨結節の傾斜は 強く、頭及び結節は一塊になっていて匙状をなしている。肋骨体の内側は平 らで外側に湾曲しており、前・後の線はほぼ直角に切り立っている。骨体の 外側はやや丸味を帯びている。	肋骨頭の内外側、肋骨結節外側及 び肋骨体の3/4を失っている。
93	左第16肋骨頭部	淡黄褐色を呈して小さい。頭部関節面は小さく傾斜は強い。	肋骨頭部以外を失っている。

第9章 理科学分析

No.	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
94	右第1肋骨	淡黄褐色を呈し、表面は粗ぞうで軽くて極めて脆い。体中央部より下は緻密骨が極めて薄く、内部海綿骨の凸凹が浮き出ている。体部の上から1/3以下は圧迫によって表面が平らになっていて一見内側と見誤る程である。頭部関節面は前側の傾斜少なく、面積は狭い。結節部関節面は小さくて狭い。内側の頭部は拇指頭大に大きく凹み、肋骨溝は殆ど見当らない。	体中央より下及び結節の一部を欠いている。頭部及び結末部の骨端線の化骨完了している。
95	右第2肋骨	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。肋骨頭は大きく前後肋骨関節面は広い。肋骨結節は良く発達し関節面は広い。体の外側は丸味を帯び、結節の前側より斜後下方に向かって低くて小さな骨稜が走っている。内側は平らで肋骨頭より斜前下方に向かって低い骨稜が走っているが肋骨溝は不明瞭である。	体遠位部(体の約1/4)を失っている。頭及び結節部の骨端線の化骨完了している。
96	右第3肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。頭部は大きく肋骨頭稜は二等辺三角形に凹んでいる。体部内側の上部より外側中央にかけて欠損している。体部、結節部の間の凹みが狭いや深い。また外側面には頭部及び結節部から体部の後側に沿って幅約1.0cmの広い溝が走っている。体部の内側面は体部の前・後側が平らになっていて、その両面は鈍角となって交じっているがその交線は鋭い骨稜をなしており両刃の剣の峰を思わせるものがある。	頭部の上面・下面が刃物でそくように欠けている。体部外側の中央より下及び体部内側上部より下を失っている。
97	右第4肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。結節部及び体部の上部より下を失っている。頭部は大きく肋骨頭稜は二等辺三角形に大きく凹んでいる。外側面の頭部、結節部の間の凹みは広く深く、そのまま体部後縁に沿って約1.0cmの幅のやや深い溝となって走っている。頭部に接する体部の後縁及び結節部の下側はやや大きな粗面を形成している。内側面の体部は結節部より下方が平らになっていて、角部より下は体部の前・後側が平らになっているがその交線が骨稜をなして鋭い両刃の剣の峰を思わせるものがある。肋骨角の内側は小さな粗面状に突出し、後縁は角ばっている。	結節部及び体部の上部より下を失っている。
98	右第5肋骨	右第5肋骨から第10肋骨に至る6本の右肋骨が内側を上にして半ば土中に埋没したまま保存処理がなされている。右第5肋骨は淡黄褐色で、風化のため遺存状態は極めて悪く、肋骨角の中央より下は土中に僅かに外側面の痕跡を残すのみである。また肋骨体の上半分も肋骨角のやや下で2つに割れている。2つに割れた下半分は海綿骨を失い、僅かに内外側の緻密骨を残すのみである。肋骨角より上は比較的遺存状態が良好で肋骨頭は大きく、また肋骨結節は平らで大きい。第5肋骨としては肋骨頭より肋骨体への湾曲が強く、且つ広く、内側面との境はくっきりとして稜線状をなしている。内側面は平らでむしろ浅い溝状をなしているように見える。肋骨角の突出は明瞭で、肋骨体の幅はやや広い。	肋骨体の下半分は痕跡的に土の表面に附着している。遺存している上半分も2つに割れ、下半分は海綿骨を失い、内外の緻密骨を残すのみである。
99	右第6肋骨の一部	内側面を上にして肋骨体の下半分を半ば土中に埋めている。淡黄褐色で、風化のため極めて脆く、肋骨体の下半分は海綿骨を失い、僅かにボロボロの状態を外側面を残すのみである。肋骨頭は比較的大きく、肋骨結節の上面を失っている。肋骨頭より肋骨体への湾曲はやや強く、側面への移行部は稜線をなしている。	肋骨体の下半分はボロボロの状態を外側面を残すのみである。
100	右第7肋骨の一部	内側面を上にして半ば土中に埋まっている。風化激しく僅かに肋骨角より上部を遺残し、肋骨体の大部分は失われ僅かに外側面の一部を土中に残すのみである。肋骨頭は丸く、肋骨結節の上部は平らで肋骨頭の溝は深く、肋骨頭より肋骨体への移行部は前側面と内側面の境が切り立っていて骨稜状に尖がっている。	肋骨角より下を失っていて僅かに外側面の一部を土中に残すのみである。
101	右第8肋骨の一部	内側面を上にして半ば土中に埋もれている。肋骨角より上部と肋骨体の下半分が遺存しているが、風化激しく肋骨体の下半分は緻密骨のみで内部の海綿骨を失っているように思われる。肋骨体はやや長く、下部は平らでやや広くなっている。肋骨頭、肋骨結節も風化のため緻密骨を失って海面骨が露出している。	肋骨角より上部と、肋骨体の下半分が遺残しているが肋骨体の下半分は内部の海綿骨を失っている。
102	右第9肋骨の一部	内側面を上にして半ば土中に埋もれている。肋骨角より上部と肋骨体の中央部が遺残している。肋骨体の遺残状態は極めて悪くボロボロになった緻密骨を残すのみである。肋骨頭及び肋骨結節の上部を失っている。肋骨体は細目である。	肋骨角より上部と、肋骨体の中央部が遺残している。肋骨体の遺残状態は極めて悪くボロボロになった緻密骨を残すのみである。肋骨頭及び肋骨結節の上部を失っている。
103	右第10肋骨の一部	内側面を上にして半ば土中に埋もれている。風化のため肋骨角より上部を失い、肋骨角より下の肋骨体はボロボロで僅かに肋骨体であることを判別し得る程度である。肋骨体はやや細くて長い。	肋骨角より上部を失い、肋骨角より下の肋骨体はボロボロであり、僅かに肋骨体であることを判別し得るのみである。

第2節 動物遺存体

No	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
104	右第11肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。体部の肋骨角より下を失っている。肋骨頭は大きい。頭部と結節部との間の凹みは深い。肋骨頭部と結節部の外側面の下部には粗面状の凸凹が見られ、結節部より斜下方に近い骨稜状の粗面が見られる。内側面には肋骨溝の内側の骨稜が鋭い線を示している。頭部の前肋間節面はほぼ垂直に立ち、後肋間節面は広くて大きい。関節頭稜は丸くて不鮮明である。	体部の肋骨角より下を失っている。
105	右第12肋骨結節	淡黄褐色で小さい。結節関節面は平滑でやや広く、関節面の下側がくびれていてその下が盛り上がっている。	肋骨結節以外を失っている。
106	右第13肋骨頭	淡黄褐色でやや大きい。関節面はやや大きく前肋骨頭関節面は小さく、後肋骨関節面は大きい。肋骨頭稜は三角形に凹んでいる。	肋骨結節以外を失っている。
107	右第14肋骨頭部	淡黄褐色を呈し、頭部の内側面は平らである。外側面は球状で外側中央が三角形に凹んでいる。結節への移行部は三角形に鋭い稜線を形成している。	肋骨頭部の基部以下を失っている。
108	右第15肋骨の一部	淡黄褐色で、極めて脆くまた極めて軽い。頭部関節部及び体角より下を失う結節部は小さく、関節面は平らである。骨体外側面は後縁に沿って幅約0.5cmの浅い溝が走っており、また頭部後縁に沿って底辺約0.5cm、高1.5cmの逆二等辺三角形の浅いけれども鮮明な溝が走っている。内側面の頭部と結節部との間の凹みはやや深く明瞭である。	頭部関節面及び体部外側面の角部より下、内側面は頭部関節部より下を失っている。
109	右第16肋骨の一部	淡黄褐色で著しく脆い。肋骨結節の関節面の傾斜は強く、肋骨頭からの移行線とはほぼ一致している。	肋骨頭の一部及び体部の大部分を失っている。
110	右第17肋骨の一部	淡黄褐色を呈している。内側壁を失っているので良くわからないが、肋骨結節は小さい。外側面は肋骨頭を失っているが肋骨頭より肋骨体にかけて丸い鋭匙ですくいといったような鋭い槌状の凹みが見られ、境目の骨稜は切り立っている。	肋骨頭、肋骨結節を除く内側壁肋骨頭より約5.5cm以下の肋骨体を欠いている。
111	部位不明肋骨頭	淡黄褐色を呈し、風化のため極めて脆い。緻密骨は薄く所々に海綿骨が露出している。関節面は丸く頭稜は比較的明瞭である。	頭部及び頸部の一部である。
112	部位不明肋骨頭	淡黄褐色で、風化のため極めて脆い。小さいので僅かに関節面の球形と頭稜が認められる。	頭部の小骨片である。
113	部位不明肋骨頭	淡黄褐色で、肋骨頭部の小骨片である。僅かに関節面の球形と頭稜が認められる。	頭部の小骨片である。
114	部位不明肋骨頭	淡黄褐色で、肋骨頭部の小骨片である。僅かに関節面の球形と頭稜が認められる。	頭部の小骨片である。
115	左肩甲骨	淡黄褐色で、風化により近位部を欠損し極めて脆い。前縁の欠損がひどいので関節部が大きいにも拘わらず全体としては余り大きく感じられない。肩甲棘結節も低く、棘上窩、棘下窩の凹みも少なく、血管走路の窪みも少ないことに加えて筋線も不明稜なため全体としてはのっぺりした感じである。関節窩は大きい。内面の肩甲下窩は大きくて長く凹んでいる。関節上結節の突端は軽く内側に巻き込んだ形をしている。	骨体近位部の肩甲棘結節より上部前縁を失っている。
116	右肩甲骨	淡黄褐色で、風化により近位部を欠損して極めて脆い。全体として大きく肩甲棘結節も高く先端が後側に傾いている。棘上窩、棘下窩も大きく広く凹んでいる。後縁近くに3本の細い筋線が走っているのが認められ、血管走路の窪みも僅かに認められている。関節窩はやや大きい。内側の肩甲下窩は大きくて長く凹んでいる。関節上結節の突端は軽く内側に巻き込んでいます。	近位部の上縁を欠いている。
117	左上腕骨	淡黄褐色をしていて、風化のため極めて脆い。骨体は比較的細長い感じである。上腕骨頭は大きくて丸く、大結節と小結節との境は細長く凹んでいる。大結節外縁には粗面状の三角筋線が良く発達している。上腕骨頭から骨体にかけて美しいカーブを描いて急に細くなっている。上腕骨稜は良く発達している。骨体内側面の中央には明瞭な粗面が認められる。滑車の発達は良好で内側の滑車は大きく、内外の滑車の間のくびれは大きく、肘頭窩は深くて大きい。	上腕骨頭、大結節、小結節の縁三角組面全体、滑車左側壁の一部及び右側後端を欠いている。
118	右上腕骨	淡黄褐色を呈し、風化のため極めて脆い。骨体は比較的細長い感じである。上腕骨頭は大きくて丸い。上腕骨頭から骨体にかけて美しいカーブを描いて急に細くなっている。上腕骨稜は良く発達している。骨体内側面の中央には明瞭な粗面が認められる。滑車の発達は良好で内側の滑車は大きく、内外の滑車の間のくびれは大きく、肘頭窩は深くて大きい。	上腕骨頭、大結節、小結節の縁三角粗面全体を失っている。
119	左前腕骨	淡黄褐色を呈し、橈骨体は細くて長い感じである。橈骨頭窩は広くて関節面の湾曲はやや深い。橈骨頭は大きくて幅が広く、橈骨粗面は大きく盛り上がっていて発育良好である。橈骨体は細目で長く、前方にやや湾曲している。遠位関節部は大きくて幅が広く、左右2本の臑溝が浅く広い溝を現し、内外茎状突起及び中央の突起とが橈骨特有の凸凹を示している。尺骨は大きい。滑車切痕は大きく、橈骨頭窩と共に丸い関節面を形成している。	頭部、遠位部、尺骨と橈骨の間はすべて化骨完了している。橈骨頭部外側、外側茎状突起の外側、肘頭の先端を欠いている。

第9章 理科学分析

No.	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
120	右前腕骨	淡黄褐色を呈し、橈骨体は細くて長い感じである。橈骨頭窩は広くて関節面の湾曲はやや深い。橈骨頭は大きくて幅が広く、橈骨粗面は大きく盛り上がっていて発育良好である。橈骨体は細目で長く、前方にやや湾曲している。遠位関節部は大きくて幅が広く、左右2本の腱溝が浅く広い溝を現し、内外側茎状突起及び中央の突起とが橈骨特有の凸凹を示している。尺骨は大きい。滑車切痕は大きく、橈骨頭窩と共に丸い関節面を形成している。	橈骨頭部外側、外側茎状突起の外側、肘頭の先端を欠いている。頭部、遠位部、尺骨と橈骨との間はすべて化骨が完了している。
121	左前橈側手根骨(R)	淡黄褐色を呈し、良く原相を保っている。標品は小さくて礫状をしている。近位面は滑らかで中央を左右の方向に楕状の関節面が横ざっている。側面は前後左右とも粗面状を呈し、小さな浅い孔が点在していて靭帯の発達していたことを物語っている。遠位面は滑らかで後半は丸く凹んでいる。	良く原相を保っている。
122	左前中間手根骨(I)	淡黄褐色を呈し、小さくて礫状である。近位面は滑らかで左右の方向に楕状の関節面が横ざっている。前後壁面は粗面状を呈し、前後左右壁面は小さな浅い孔が点在している。遠位面は滑らかで、前半は左右に傾斜し、その中央を低い骨稜が左右を分けていて後半は丸く凹んでいる。	前側面の上2/3の緻密骨を失っている。
123	左尺側手根骨(U)	淡黄褐色を呈し、近位関節面中央より縦に割れ外側面を失っている。近位関節は僅かに関節面としての湾曲が認められる。内側面は下側に中間手根骨との小さな関節面が認められ、後側は副手根骨との縦に長い関節面が認められる。遠位面には第4手根骨との関節面が認められる。	骨の中央より縦に割れ外側面を失っている。
124	左前副手根骨	淡黄褐色をしていて、湾曲した偏平な小骨片で、風化激しく緻密骨は細かい凸凹に富み小さな凹みが多数散在している。前側には2つの関節面が認められるが下側の関節面は輪郭不鮮明である。	外側壁が大きく欠損している。
125	左前第2手根骨	淡黄褐色で、小さな半球状の小骨片である。外側面は細かい凸凹に富み粗面状をなしている。内側面は上下に2つの半円形の関節面を持ち、その間には幅0.5~1.5cmの極めて浅い溝が走っており、その表面は小さな孔が散在し、粗面状をなしている。上面は球状をなし下面は平らである。	前・後端の一部を欠いている。
126	左前第3手根骨	淡黄褐色を呈し、良く原相を保っている。小さくて偏平な三角柱状をしている。近位面の前半は二つの凹んだ関節面で後半は盛り上がった丸味を帯びた関節面である。近位面の内側には台状の凹みを有している。前側壁面は粗面状で盛り上がり、靭帯の発達していたことを物語っている。遠位面はほぼ平らで外側部には舌状の凹みを有している。	良く原相を保っている。
127	左前第4手根骨	淡黄褐色をしていて、小さな礫状の小骨片である。全面甚だ粗ざうで一見粗面状に見える程である。内側面は粗ざうのため関節面と浅い溝がかろうじて認められる。	前端より外側面にかけて、欠けている。
128	右橈側手根骨	淡黄褐色を呈し、良く原相を保っている。小さくて礫状をしている。遠位面は滑らかで中央を左右の方向に楕状の関節面が横ざっている。前・後・左の側壁面は起伏に富んだ発達した粗面が見られ、小さな多数の浅い孔が点在している。遠位面は滑らかで後半が丸く凹んでいる。	良く原相を保っている。
129	右側中間手根骨(I)	淡黄褐色をしていて、小さな礫状をしている。前側壁の外側を大きく欠いているので遠位面は小さい。近位面は滑らかで左右の方向に楕状の関節面が横ざっている。遠位面は滑らかで前側は盛り上がり後半は丸く凹んでいる。	前側壁及び前側内外両端、並びに後側外側端を欠いている。
130	右側第2手根骨	淡黄褐色をしている小さな半球状の小骨片である。外側面は細かい凸凹に富み粗面状をなしている。遠位面は表面粗ざうで半球状をなしている。	下側の前・後端を欠いている。内側面粗面状をなし関節面の判別が付きにくく関節炎の疑いを持っている。
131	右側第3手根骨	淡黄褐色をしていて、偏平な三角柱状をしている。近位面は滑らかで前半は2つの凹んだ関節面を持ち後半は盛り上がった一つの関節面を持っている。後壁は起伏に富んだ良く発達した粗面を持っている。遠位面は滑らかで外側部に小さな舌状の凹みを持っている。	前側壁の緻密骨の大部分を失っている。
132	左側中手骨	淡黄褐色をしていて、風化により骨体緻密骨の表面は極めて粗ざうでガサガサしていて極めて脆い。近位関節面は広く、各関節面の境はくっきりしていて鮮明である。大中手骨粗面は大きく盛り上って良く発達している。骨体の背面は半円形で、腹面は第2中手骨並びに第4中手骨の附着跡がくっきりといて鮮明である。腹面中央上1/3に縦に長目の栄養孔を認む。頭部の滑車は鮮明でくっきりと縦稜を上がらせている。	近位部の外側端及び遠位関節部の両側面を欠いている。
133	左側第2中手骨	淡黄褐色を呈し、風化により緻密骨の表面は粗ざうで極めて脆い。第2手根骨との関節面は各関節面の境もくっきりといて鮮明である。近位関節面は大きく下部は急に細くなっている。	ほぼ原相を保っている。
134	左側第4中手骨	淡黄褐色を呈し、風化により緻密骨の表面は粗ざうで極めて脆い。近位関節部は大きく、下部は急に細くなっている。	近位部は腹面の緻密骨を欠いている。

No	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
135	右側中手骨	淡黄褐色をしていて、風化により骨体緻密骨の表面は極めて粗ざうでガサガサして極めて脆い。近位関節面は広く、各関節面の境はくっきりとしていて鮮明である。大中手骨粗面は大きく盛り上がっていて良く発達している。骨体の背面は半円形で、腹面は第2中手骨、第4中手骨の附着跡がくっきりしていて鮮明である。腹面中央1/3に縦に長目の栄養孔を認む。頭部の滑車は鮮明でくっきりと縦稜を浮かび上がらせている。	近位部の内側端及び遠位関節面両側の緻密骨の一部を欠いている。
136	右側第2中手骨	淡黄褐色をしていて、遠位部の約3.5cmの細い骨体の部分で後側壁を失っている。表面は粗ざうで極めて脆い。	遠位端より約3.5cmの所で後側壁を失っている。
137	右前第4中手骨	淡黄褐色をしていて、近位関節部を失っている。表面極めて粗ざうで極めて軽い。	近位関節部を失い、遠位部及び側面の緻密骨の一部を失っている。
138	左前内側種子骨	淡黄褐色で、三角形のおむすび状をしている。風化のため腹面は緻密骨が薄くて所々海綿骨が露出している。内側面は丸く挟れ中手骨の溝稜の湾曲と一致している。背面関節面は滑らかで丸く凹んでいる。下面は細かい凸凹に富んでいる。	腹面緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。
139	左前外側種子骨	淡黄褐色で、三角形のおむすび状をしている。風化のため腹面は緻密骨が薄くて所々海綿骨が露出している。内側面は丸く挟れ中手骨の溝稜の湾曲と一致している。背面関節面は滑らかで丸く凹んでいる。下面は細かい凸凹に富んでいる。	腹面緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。
140	右前内側種子骨	淡黄褐色で、三角形のおむすび状をしている。風化のため腹面は緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。内側面は丸く挟れ中手骨の溝稜の湾曲と一致している。背面の関節面は滑らかで丸く凹んでいる。下面は細かい凸凹に富んでいる。	腹面緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。
141	右前外側種子骨	淡黄褐色で、三角形のおむすび状をしている。風化のため腹面は緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。内側面は丸く挟れ中手骨の溝稜の湾曲と一致している。背面の関節面は滑らかで丸く凹んでいる。下面は細かい凸凹に富んでいる。	腹面緻密骨が所々薄くなっていて海綿骨が露出している。
142	左前基節骨	淡黄褐色をしていて、表面極めて粗ざうであるが良く原相を保っている。近位関節面は広く中央を太い縦溝が前後に走り関節面を内外に分けている。縦溝の底は丸くて中手骨の縦稜の湾曲と一致している。骨体の両側の線はなだらかで靭帯附着部は不明瞭である。遠位関節面は内外2つに分かれていて丸く盛り上がっている。	良く原相を保っている。
143	右前基節骨	淡黄褐色をしていて、表面極めて粗ざうであるが良く原相を保っている。近位関節面は広く中央を太い縦溝が前後に走り関節面を内外に分けている。縦溝の底は丸くて中手骨の縦稜の湾曲と一致している。骨体の両側の線はなだらかで靭帯附着部は不明瞭である。遠位関節面は内外2つに分かれていて丸く盛り上がっている。	内側関節面後縁の一部を欠いている。
144	左前中節骨	淡黄褐色を呈し、表面極めて粗ざうである。近位関節面は丸く凹んでいて中央を前後の方向になだらかな骨稜が走っていて関節面を内・外側に分けている。背面は細かな凸凹に富み粗面状を呈し靭帯附着部の発達も良好である。遠位関節面は丸く盛り上がり、内・外側の凸面状の関節面を形成している。	良く原相を保っている。
145	右前中節骨	淡黄褐色を呈し、表面極めて粗ざうである。近位関節面は丸く凹んでいて中央を前後の方向になだらかな骨稜が走っていて関節面を内・外側に分かっている。背面は細かな凸凹に富み粗面状を呈し靭帯附着部の発達も良好である。遠位関節面は丸く盛り上がり、内・外側の凸面状の関節面を形成している。	良く原相を保っている。
146	寛骨左側部	淡黄褐色をしていて、極めて脆く緻密骨の表面は所々剝離している。全体やや薄く細い感じであるが閉鎖孔は大きい。腸骨翼は広く、両端は上方に反っていてその上縁は薄くなっている。内側は大きな楕円形の腸骨粗面を有している。大坐骨切痕の湾曲はなだらかで段差はない。腸骨体の外側面の内側にはゴツゴツした3つの粗面状の凸凹を有し坐骨棘に連なっている。寛骨臼はやや小さく、寛骨切痕は不明瞭である。恥骨前枝は大きなコブ状の粗面を有している。	腸骨翼の前縁、坐骨棘、閉鎖孔より後の坐骨弓及び坐骨枝を失っている。
147	寛骨右側部	淡黄褐色をしていて、極めて脆く緻密骨の表面は所々剝離している。全体やや薄く細い感じであるが閉鎖孔は大きい。腸骨翼は広く、両端は上方に反っている。腸骨翼の上縁は薄くなっている。内側面は太い1本の筋線が斜に走っている。大坐骨切痕の湾曲はなだらかで段差はない。腸骨体の外側面の坐骨棘はゴツゴツとした凸凹に富み輪郭は鮮明である。寛骨臼はやや小さく寛骨切痕は深く大きい。中央に小さな2つの栄養孔が開口している。寛骨臼より恥骨前枝にかけて丸味のある美しい楕円形を示し、恥骨前枝の稜線上には小さな栄養孔を認む。	腸骨翼の前縁、恥骨後肢より下部、閉鎖孔より下の坐骨枝の大部分を欠いている。

第9章 理科学分析

No.	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
148	左大腿骨	淡黄褐色で、表面極めて粗ざうであり極めて脆くまた軽い。骨体はやや細目でやや長く、大腿骨頭も伸びやかである。大腿骨頭は大きく丸く、頭窩は大きい。骨頭より小転子にかけて美しい弧状湾曲を示している。小転子は大きく極めて細かな凸凹に富み粗面状を呈している。骨体はやや幅が狭く、顆上窩は大きくて深い。滑車は大きく前後に張りだし、顆間窩は深く大きい。	近位端、遠位端の化骨は完了している。大転子、大腿骨頭の内側、小転子及び左・右滑車の外側面を欠いている。
149	右大腿骨	淡黄褐色であって、表面極めて粗ざうで脆くまた軽い。骨体はやや細目でやや長い。大腿骨頭は大きく丸く頭窩は大きい。骨頭より小転子にかけて美しい弧状湾曲を示している。骨体はやや幅が狭く、顆上窩は大きくて深い。滑車は大きく前後に張り出し、顆間窩は深く大きい。	近位端、遠位端の化骨は完了している。大転子の前部、小転子の大部分、内側滑車の後端、外側滑車の前・後端を欠いている。
150	左膝蓋骨	淡黄褐色で、礫状をしている。前面は僅かな緻密骨が残っているが表面に細かい亀裂が遠位端に向かって放射状に走っている。後面は遠位端を中心に、膝蓋骨特有の三面の関節面が見られるが、それぞれの境界線は丸くてなだらかである。	四囲の各辺は総て欠損して主として遠位部の一部が残っている。
151	右膝蓋骨	礫状の骨片である。淡黄褐色であって、前面は粗ざうで小さな多数の孔が点散し、細かいひび状の縞が膝蓋骨尖に向かって放射状に走っており大きな粗面をなしている。腹面は3つの関節面が膝蓋尖に向かって集合している。夫々の関節面は凹形に湾曲し、その境界線は丸味を帯びている。	膝蓋骨底部及び内側上面並びに膝蓋骨尖を欠いている。
152	左脛骨	淡黄褐色で、極めて脆く関節部及び骨体部はやや細くて長い。近位関節部の内側顆、外側顆はやや狭く、後顆間区はやや広くて深い。後側面はほぼ平らで3本の膝窩筋線が上部外側より斜下内側に向かって走っているが隆起状態は低くて細く余り鮮明ではない。骨体上部外側には栄養孔が下から上に向って開口しているがやや小さい感じである。前側面上部の断面はほぼ半円形を示している。遠位関節面は深い鮮明な脛骨ラセンが走っている。	内側顆、外側顆の上縁及び外側縁並びに内・外顆外側縁を欠いている。
153	右脛骨	淡黄褐色をしていて、極めて脆く関節部、骨体部はやや細くて長い。近位関節部の内側顆及び外側顆はやや狭い。前・後顆間区は深くて鮮明である。後側面はほぼ平らで3本の膝窩筋線が外側上部より斜下内側に向かって走っているが隆起状態は低くて細く余り鮮明ではない。骨体の上部外側には栄養孔が下から上に向かって開口しているがやや小さい。前側面上部の断面は頸骨特有の三角形を呈しているが、骨体中央の断面はほぼ半円形をしている。遠位関節面は深くて鮮明な脛骨ラセンが走っている。	内・外側顆の外側縁及び内・外顆外側縁を欠いている。
154	左踵骨	淡黄褐色を呈し、風化により軽い。骨体の幅は小さいけれども載骨突起の張り出しは良好である。距骨との関節面は奥行き、幅ともに多少狭い感じである。踵骨隆起の幅及び長さが多少小さい感じである。	踵骨隆起の左右の縁、距骨との関節面の左右下端及び踵骨隆起部の骨端線の化骨は完了している。
155	左距骨	淡黄褐色を呈し、表面粗ざうで脆い。滑車及び関節面を除く表面には小さな孔が点在し一見粗面状を呈し靭帯の発達を思わせるものがある。滑車は大きく美しいラセン状を示している。後側の踵骨との関節面は鮮明で広く、遠位面の中心足根骨との関節面は広くほぼ平らである。	左側滑車の外側の一部を欠いている。
156	左中心足根骨	淡黄褐色を呈し、表面は粗ざうであり極めて軽い。ほぼ偏平なやや薄い骨片である。脛骨関節面は凹形に湾曲していて、近位面には第4足根骨の側より内側に向かって輪郭鮮明な幅約0.45cmの浅い溝が入っている。遠位面は僅かに凸形に湾曲していて、後端を中心に輪郭鮮明な幅約0.7~0.15cmの溝が半月形に走っている。	内側関節の突端を僅かに欠いている。
157	左第1+2足根骨	淡黄褐色の小さな湾曲した複雑な形をした礫状の小骨片である。近位関節面は極めて輪郭鮮明で内側にはやや深いくっきりとした半円形の溝が見られる。遠位関節面も極めて鮮明で各関節面の境はくっきりとしている。	外側の先端を欠いている。
158	左第3足根骨	淡黄褐色をした楔状の偏平な骨片である。近位関節面は僅かに凹形をしていて輪郭は極めて鮮明である。後側端を中心にやや深い幅約1.0~0.2cmの溝が半円形に走っている。遠位面は僅かに凸形をしていて輪郭は鮮明で後端を中心に約1.1~0.2cmの浅い溝が半円形に走っている。	内側端を欠いている。
159	左第4足根骨	淡黄褐色をしていて、やや複雑な形の長四角立方体の礫状をした骨片である。内側面には中程より斜下方に向かって幅約1.0~0.7cmの樋状の溝が走っている。遠位関節面は輪郭鮮明で各関節面の境はくっきりとしている。	外側面を欠いている。
160	右踵骨	淡黄褐色をしていて、極めて脆く緻密骨が風化し所々海綿骨をのぞかせている所がある。骨体の幅は少ないけれども載骨突起の張りだしは良好である。距骨との関節面は幅が少し狭い感じである。踵骨隆起の幅及び長さが小さい感じである。	踵骨隆起の左右の縁、距骨との関節面の左右の縁を欠いている踵骨隆起部の骨端線の化骨は完了している。
161	右距骨	淡黄褐色を呈し、表面粗ざうである。滑車の前側は緻密骨が化骨し一部海綿骨が露出している。滑車及び関節面を除く表面には小さな孔が点在し、一見粗面状を呈し、靭帯の発達を思わせるものがある。滑車は大きく、美しいラセン状を示している。後側の踵骨との関節面は鮮明で広く、遠位面の中心足根骨との関節面は広くほぼ平らである。	左右滑車の後端及び右滑車の後側端の一部を欠いている。

第2節 動物遺存体

No.	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
162	右中心足根骨	淡灰色をしていて、表面は粗ざうであり極めて軽い、ほぼ扁平なやや薄い骨片である。外側面は小さな孔が多数点在し粗面状をなしている。脛骨関節面は凹形に湾曲して、近位面には第4足根骨の側より内側に向かって輪郭鮮明な幅約0.45cmの浅い溝が入っている。遠位面は僅かに凸形に湾曲して後端を中心に浅い幅0.25~1.0cmの溝が走っているが、中心より第4足根骨側は溝の跡は残っているが粗ざうな骨(泡立てたクリーム状の骨の感じ)で埋まっています炎症を起こしていたことが疑われる。	内側後端を欠いている。遠位面の後端部をとりまく浅い溝が泡立てたクリーム状の粗ざうな骨で埋まっています関節炎を起こしていたことが疑われる。
163	右後第1+2足根骨	淡黄褐色をしていて、極小さな複雑な形をした小骨片である。近位面には輪郭鮮明なコの字形をした関節面があり、その中央に約0.4cm×1.0cmのやや深い溝が認められる。遠位面には輪郭鮮明な小さな関節面と、それに沿って幅約0.2cmの溝が認められ、前面にも小さな関節面が認められる。	前端より外側面にかけて、欠けている。
164	右第3足根骨	淡黄褐色をした楔状の扁平な骨片である。近位関節面は僅かに凹形をしていて輪郭は鮮明である。外側面は小さな孔が多数点在し粗面状をなしている。近位面は後側端を中心に0.2~1.0cmの浅い溝が半円形に走っているが溝の表面は小さな孔が点在し粗面状をなしている。遠位面は僅かに凸形をしていて輪郭鮮明で後端を中心に幅約0.4~1.3cmの浅い溝が半円形に走っている。	良く原相を保っている。
165	右第4足根骨	淡黄褐色をしていて、やや複雑な形の長四角立方体の礫状をしている。外側面には多数の小さな孔が点在し粗面状をなしている。内側面には斜下方に向かって幅約0.7~1.0cmの楯状の溝が走っている。脛骨関節面は輪郭鮮明で各関節面との境はくっきりとしている。	後端部を欠いている。
166	左中足骨	淡黄褐色をしていて、骨体は大変細くて長い感じである。骨体の緻密骨が所々剝離し極めて脆い。骨体は丸く僅かに後面の中央が平らである。中足骨底の関節面は半円形をなし、中央に半月形の幅約0.5~1.0cmの浅い溝が走っているが、溝の底面は小さな孔が点在し粗面の表面を見るような感じがしている。後面上部には小さな栄養孔が開いている。中足骨頭部は滑車状をなし中足骨特有のほぼ円形の美しい縦稜が見られる。	骨体から頭部にかけて外側面に浅い欠損部が散在する以外ほぼ原相を保っている。
167	右後第2中足骨の一部	淡黄褐色で細く小さな撥状の骨片である。風化激しく緻密骨の表面は極めて粗ざうでありまた極めて脆い。近位部はやや太く、骨体は僅かに湾曲して表面は丸味を帯び裏面はほぼ平らである。	近位端及び骨体の下3/4を失っている。
168	右第4中足骨	淡黄褐色を呈し、撥状をした小骨片である。表面極めて粗ざうでありまた極めて脆い。近位部の内側の両端には輪郭鮮明な小さな2つの関節面があり、その間に幅約0.5cmの浅い短い溝が認められる。	近位関節面を欠き、骨体中程より下を失っている。
169	右後基節骨種子骨(外側)	淡黄褐色を呈し、三角形の礫状の小骨片である。表面極めて粗ざうであり極めて脆い。内側及び後面は夫々凹状に湾曲し関節面であることを示している。その2つの関節面の境界は丸味を帯びている。	後面外側の緻密骨及び外側端の緻密骨を失っている。
170	左後基節骨	淡黄褐色をしていて鼓状をしている。表面極めて粗ざうであり、緻密骨が薄くなっていて無数の小さな凹みが散在している。近位関節面は広くて美しい舟底形をした縦溝が内・外2つに分けている。骨体の中央の断面は半円形をしていて後面は凸凹に富み粗面状をなしている。遠位関節面は丸く二子山状をなしている。	近位関節面後側両端を失っている。
171	左後中節骨	淡黄褐色をしていて、やや扁平な臼状をした小骨片である。表面極めて粗ざうで無数の小さな凹みが散在している。遠位部には凸凹に富んだ力強い靱帯附着部が見られる。近位関節面は広く美しい2つの凹みとなっており、遠位関節面は丸く2つの二子山状をなしている。	遠位部外側面の一部を欠いている。
172	左後末節骨	淡黄褐色をしていて、壁の側面には多数の小さな孔が点在している。近位関節面はなだらかな低い縦稜により内外に分けられている。	壁側面の床縁部を欠いている。
173	右後末節骨	淡黄褐色をしていて、壁側面及び壁底面は細かい凸凹に富んでいる。近位関節面はなだらかな低い縦稜により内外に区切られている。壁床面は後方が凹んでおり大きな栄養孔が認められる。	壁側面及び床縁を欠いていて特に外側部の欠損は大きい。
174	遠位種子骨(前後左右不明)	淡黄褐色で、風化のため表面は著しく粗ざうである。近位関節面の中央が前後にやや高く、前側がやや低く、後側がやや高くなっている。遠位面は中央がやや高く厚く、両端に行くに従って薄くなっている。	左右両端を欠き、近位面の前側のほぼ中央を欠き、海綿骨に深さ0.5cm長さ1.0cmの穴が開いている。
175	部位不明小骨片	淡黄褐色で、風化のため短冊状に細く割れた緻密骨で、肢骨の一部と考えられ極めて脆い。大きいもので約5.0×0.5cm、小さなもので約0.2×0.5cmのものである。	小骨片である。
176	部位不明小骨片	淡黄褐色で、風化のため骨の遺存状態は極めて悪く、大きいものでは約4.0×3.5×1.5cmの比較的大きい骨でありながら緻密骨は殆どなく海綿骨がむき出しの骨片が多い。僅かに緻密骨を有している約4.0×3.0×0.5cmの小骨片は比較的平らで肢骨の一部と考えられる。	小骨片である。
177	部位不明小骨片	淡黄褐色で、比較的硬い緻密骨を有している。大きなものは拇指頭大の小骨片で肢骨の一部と考えられる。	小骨片である。

第9章 理科学分析

No	獣骨の部位	特 徴	欠損状態その他
178	部位不明骨片	淡黄褐色で、風化のため緻密骨が遺残しているのは長径に平行した一つの関節面だけであり、長さ2.5cm幅1.0cm深さ0.3cmの溝が長径に平行して走っており、中央に長径0.2cm、短径0.1cmの栄養孔が開口している。他の5面は海綿骨が露出している。形状及び関節面の溝等中間手根骨に似ているが長さが短い。	一面に欠損面が見られるが詳細は不明である。
179	部位不明小骨片	淡黄褐色で、関節面の一部と思われるが緻密骨は硬く海綿骨もしっかりしている。関節面は平らで鞍状に軽く湾曲し、関節面を支える頸部は抉るように細くなっており、関節面との境は丸くて鋭利な刃物のようにになっている。海綿骨の髓小室は小さい。	小指頭大の小骨片である。
180	犬左脛骨	淡黄褐色を呈し、緻密骨は硬く保存処理も加わって表面は光沢を有している比較的重い。遠・近関節部の骨端線の化骨は完了している。近位関節面は広く輪郭は鮮明である。骨体は細く長く、また軽くS字状に湾曲し前縁は薄く前方に突出しており、伸筋溝は広くて力強い。遠位関節面は台形をしていて脛骨ラセンはやや深くて鮮明である。	良く原相を保っている。

附表 6 出土獣歯の計測値

(注) 獣の種類名の記載のないものは馬歯である。

No	獣歯の部位	歯冠長 (EGL)	歯冠幅 (EGB)	幅 率	現全歯高 Buccal TH Palatal TH	エナメル厚 (頰側-舌側)	重 量	摘 要	
2	LI ¹	20.8	9.1	43.8	59.0	1.1-1.1	——	上顎骨に植立しているので重量は1に含まれている。	
3	LI ²	20.9	9.1	43.5	56.2	1.2-1.0	——		
4	LI ³	22.7	9.7	42.7	43.7	1.6-1.5	——		
5	Ldi ³	12.8	7.7	60.2	20.5	1.1-1.2	1.2		
6	LC	10.7	8.8	82.2	29.0	1.5-1.2	2.2		
7	LP ²	38.5	28.5	74.1	70.1	1.5-1.1	——		上顎骨に植立しているので重量は1に含まれている。
8	LP ³	30.3	27.9	92.1	81.7	1.6-1.2	——		
9	LP ⁴	26.2	25.5	97.3	86.1	1.6-1.2	——		
10	LM ¹	28.2	27.1	96.1	78.4	1.2-1.0	——		
11	LM ²	26.8	25.8	96.3	88.5	1.4-1.4	——		
12	LM ³	23.8	21.2	89.1	81.4	1.4-1.2	——		
13	RI ¹	20.0	9.0	45.0	60.2	1.2-1.2	——		
14	RI ²	20.0	9.0	45.0	土壤中に半ば埋没	1.0-1.0	——		
15	Rdi ³	11.2	8.1	72.3	28.0	0.8-0.6	1.6	土壤中に半ば埋没したまま保存処理がしてあるため計測出来ない。	
16	RC	——	——	——	——	——	——		
17	RP ²	——	——	——	——	——	——		
18	RP ³	——	——	——	——	——	——		
19	RP ⁴	——	——	——	——	——	——		
20	RM ¹	——	——	——	——	——	——		
21	RM ²	——	——	——	——	——	——		
22	RM ³	——	——	——	——	——	——		
26	LI ₁	18.5	8.9	48.1	61.6	1.2-0.9	25に含まる	切歯部に植立	
27	LI ₂	19.9	9.1	45.7	58.7	1.5- /	9.9		
28	LI ₃	20.0	13.6	68.0	38.6	1.2-1.0	3.9		
29	Ldi ₃	11.2	8.1	72.3	28.0	0.8-0.8	1.6		
30	LC	11.1	9.8	87.5	39.5	1.0- /	1.9		
31	LP ₂	34.2	14.9	43.6	——	1.3-1.0	——	下顎骨に植立しているので重量は23に含まれる。	
32	LP ₃	29.2	15.2	52.1	——	1.4-1.2	——		
33	LP ₄	28.4	14.2	50.0	——	1.3-1.1	——		
34	LM ₁	28.5	13.5	47.4	——	1.3-1.0	——		
35	LM ₂	29.0	12.7	43.8	——	1.3-1.2	——		
36	LM ₃	23.4	9.7	41.5	73.5	1.4-1.2	——		36は歯根露出
37	RI ₁	17.3	8.7	50.3	61.4	1.2-1.0	——	下顎骨に植立しているので37の重量は25に含まれる。	
38	RI ₂	20.0	14.6	73.0	58.4	1.2- /	9.8		

No	獣歯の部位	歯冠長 (EGL)	歯冠幅 (EGB)	幅 率	現全歯高 Buccal TH Palatal TH	エナメル厚 (頬側-舌側)	重 量	摘 要
39	RI ₃	19.3	9.2	47.7	40.7	0.8- /	4.5	下顎骨に植立しているため重量は24に含まれる。
40	Rdi ₃	10.6	8.2	77.4	40.9	0.9-0.8	2.7	
41	R \bar{C}	11.2	10.5	93.8	39.1	—	—	
42	RP ₂	35.3	14.9	42.2	—	1.4-1.1	—	
43	RP ₃	30.1	15.2	50.5	—	1.2-1.2	—	
44	RP ₄	29.4	14.0	47.6	—	1.2-1.1	—	
45	RM ₁	28.2	13.8	48.9	—	1.3-1.1	—	
46	RM ₂	28.8	12.7	44.1	—	1.2-1.1	—	歯槽孔長32.4
47	RM ₃	23.5	11.7	49.8	78.4	1.0-0.7	—	

附表7 出土獣骨の計測値

(注) 獣の種類名の記載のないものは馬骨である。

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	摘 要
1	頭蓋	最大長 (A-P) 498.0	歯列長 (P ₂ -M ₃) 160.0	後頭顆最大幅 71.3	大孔最大幅 30.4				土壌中に半ば埋没したまま保存処理。
1'	前頭骨頬骨突起の一部	長 径 40.5	短 径 18.1	厚 3.9				0.8	
1''	部位不明頭骨の一部	長 径 52.4	短 径 25.7	厚 11.7				3.2	
23	左下顎骨	現最大長 328.1	GOV-Cr 255.2	GOV-Cn 224.2	GOC-M ₃ 122.1	歯列弓 181.4	P ₂ -P ₄ 93.4		
		M ₁ -M ₂ 78.9	P ₂ 高 57.8	M ₁ 高 85.5	M ₃ 高 118.8				
24	右下顎骨	現最大長 361.0	GOC-M ₃ 171.0	GOC-P ₂ 276.8	歯列弓 180.1	M ₁ -M ₃ 82.2	P ₂ -P ₄ 94.7		
		P ₂ 高 53.7	M ₁ 高 88.8	M ₃ 高 128.1					
25	下顎体切歯部	長 径 68.1	短 径 57.8	厚 26.9				32.7	
48	左茎状舌骨	長 さ 150.4	幅 16.9	厚 3.5				5.1	
49	右茎状舌骨	長 さ 128.5	幅 16.4	厚 3.4				4.1	
50	環椎 (第1頸椎)	現関節突起間幅 81.7	現横突起間幅 91.2	体横径 62.7	椎体長 33.5	前椎孔最大幅 41.7	前椎孔高径 29.5	65.2	
51	第2頸椎	現関節突起間幅 77.0	現横突起間幅 52.0	体横径 32.4	椎頭横径 35.3	椎頭高径 86.7	現棘上突起高 24.5	52.1	
		前椎孔最幅 22.6	前椎孔高径 24.3						
52	第3頸椎	現最大長 92.3	体全高 57.9	現前関節突起幅 61.6	現後関節突起幅 49.5	椎体長 79.6	椎頭横径 32.4	50.2	
		現椎頭高 26.4	前椎孔最大幅 22.8	前椎孔高径 21.8					
53	第4頸椎	現最大長 96.7	体全高 57.2	椎体長 68.7	椎頭横径 31.5	椎頭高径 33.4	前椎孔最大幅 26.1	53.9	
		前椎孔高 19.3							
54	第5頸椎	最大長 89.8	体全高 65.4	椎体長 72.3	椎頭横径 31.2	椎頭高径 35.6	前椎孔最大幅 26.8	60.6	
		前椎孔高径 18.8							

第9章 理科学分析

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	摘 要
55	第6頸椎	最大長 86.1	現体全高 62.2	現前関節突起幅 69.3	後関節突起幅 67.0	椎体長 73.3	椎頭横径 31.1	58.7	
		現椎頭高径 25.6	前椎孔最大幅 25.9	前椎孔高径 21.9					
56	第7頸椎	最大長 78.2	現体全高 60.0	前関節突起幅 74.6	後関節突起幅 68.9	現椎体長 62.4	椎頭横径 30.0	55.8	
		椎頭高径 30.4	前椎孔最大幅 27.7	前椎孔高径 23.6					
57	第1胸椎	最大長 64.9	現体全高 68.5	前関節突起幅 77.4	後関節突起幅 61.9	現椎体長 44.5	椎頭横径 29.3	50.1	
		椎頭高径 31.1	前椎孔最大幅 28.8	前椎孔高径 22.2	横突起全幅 93.6				
58	第2胸椎	最大長 40.2	体全高 51.5	後関節突起幅 33.6	椎体長 34.6	椎頭横径 28.2	椎頭高径 31.2	47.8	
		前椎孔最大幅 25.4	前椎孔高径 22.4	現棘上突起高 117.4	前関節突起幅 68.2	横突起全幅 86.1			
59	第3胸椎	最大長 45.5	現体全高 46.9	前関節突起幅 36.9	後関節突起幅 24.8	現棘上突起高 186.5	椎体長 35.5	39.2	
		椎頭横径 29.4	現椎頭高径 27.8	前椎孔高径 18.4	前椎孔最大幅 23.5	横突起全幅 75.9			
60	第4胸椎	最大長 51.7	現体全高 49.4	現横突起全幅 63.9	前関節突起幅 32.9	後関節突起幅 21.9	現棘上突起高 180.8	40.2	
		椎頭横径 28.6	現椎頭高径 23.9	前椎孔高径 27.8	前椎孔最大幅 22.1				
61	第5胸椎	最大長 48.3	現体全高 43.7	現横突起幅 62.1	前関節突起幅 27.6	後関節突起幅 22.7	現棘上突起高 163.4	33.7	
		現椎頭横径 27.1	現椎頭高径 21.9	前椎孔高径 16.2	前椎孔最大幅 21.6				
62	第6胸椎	最大長 51.4	現体全高 42.6	現横突起幅 56.5	前関節突起幅 28.6	後関節突起幅 21.7	現棘上突起高 141.1	36.8	
		椎頭横径 30.3	椎頭高径 26.2	前椎孔高径 15.9	前椎孔最大幅 21.0				
63	第7胸椎	最大長 42.4	現体全高 38.8	現横突起幅 56.8	前関節突起幅 23.6	後関節突起幅 21.2	現棘上突起高 116.4	27.5	
		現椎頭横径 17.2	現椎頭高径 22.8	前椎孔高径 15.9	前椎孔最大幅 20.3				
64	第8胸椎	最大長 42.0	現体全高 41.9	現横突起幅 57.1	前関節突起幅 23.4	後関節突起幅 19.3	現棘上突起高 61.7	19.3	
		現椎頭横径 23.1	現椎頭高径 20.8	前椎孔高径 16.2	前椎孔最大幅 19.8				
65	第9胸椎	最大長 46.1	現体全高 42.4	現横突起幅 51.3	前関節突起幅 23.6	現棘上突起高 37.1	椎頭横径 31.3	19.8	
		現椎頭高 24.1	前椎孔高径 16.2	前椎孔最大幅 20.0					
66	第10胸椎	最大長 48.8	現体全高 47.2	現横突起幅 53.0	前関節突起幅 23.9	後関節突起幅 18.1	現棘上突起高 30.1	20.4	
		椎頭横径 31.8	現椎頭高径 22.4	前椎孔高径 16.8	前椎孔最大幅 19.1				
67	第11胸椎	最大長 45.3	体全高 43.9	現横突起幅 57.1	前関節突起幅 23.3	後関節突起幅 22.2	現棘上突起高 29.7	18.1	
		現椎頭横径 31.8	現椎頭高径 24.3	前椎孔高径 15.7	前椎孔最大幅 18.9				
68	第12胸椎	最大長 48.6	体全高 47.8	現横突起幅 47.1	前関節突起幅 20.3	後関節突起幅 8.9	現棘上突起高 26.8	18.2	
		現椎頭横径 33.2	現椎頭高径 27.8	前椎孔高径 14.4	前椎孔最大幅 18.9				

第2節 動物遺存体

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	摘 要
		現最大長	現体全高	現横突起幅	前関節突起幅	現棘上突起高	椎頭横径		
69	第13胸椎	40.5	39.4	53.2	18.3	21.9	34.3	28.8	
		椎頭高径 25.7	前椎孔高径 13.1	前椎孔最大幅 20.9					
70	第14胸椎	35.0	48.1	42.9	24.3	23.9	30.6	23.4	
		現椎頭高 24.8	前椎孔高径 14.6	前椎孔最大幅 19.0					
71	第15胸椎	46.9	31.8	38.6	27.8	34.7	35.4	23.0	
		椎頭高径 26.1	前椎孔高径 16.0	前椎孔最大幅 19.8					
72	第16胸椎	50.1	44.6	51.5	34.0	31.2	36.5	24.2	
		椎頭高径 26.6	前椎孔高径 16.3	前椎孔最大幅 17.9					
73	第17胸椎	54.4	37.1	43.2	26.8	30.5	34.8	27.0	
		椎頭高径 25.5	前椎孔高径 15.4	前椎孔最大幅 14.6					
74	第18胸椎	46.4	32.6	50.2	24.3	26.3	25.9	28.9	
		椎頭高径 25.9	前椎孔高径 15.9	前椎孔最大幅 18.5					
75	第1腰椎	椎体長 43.4	体全高 44.6	現棘上突起高 29.8	乳頭関節突起幅 33.8	椎頭横径 30.1	椎頭高径 24.9	22.3	
		前椎孔高径 16.4	前椎孔最大幅 18.1						
76	第2腰椎	椎体長 46.7	体全高 43.6	現棘上突起高 24.7	乳頭関節突起幅 33.1	椎頭横径 36.4	椎頭高径 22.3	28.0	
		前椎孔高径 15.4	前椎孔最大幅 18.9						
77	第3腰椎	椎体長 43.8	体全高 38.9	現棘上突起高 30.4	現乳頭関節突起幅 34.8	椎頭横径 39.2	現椎頭高径 19.0	29.2	
		前椎孔高径 15.9	前椎孔最大幅 19.9						
78	第4腰椎	椎体長 43.8	体全高 43.4	現棘上突起高 20.4	現乳頭関節突起幅 33.4	椎頭横径 37.4	現椎頭高径 21.2	28.2	
		前椎孔高径 17.0	前椎孔最大幅 19.4						
79	第5腰椎	椎体長 44.5	体全高 43.8	現棘上突起高 24.2	椎頭横径 37.1	椎頭高径 25.0	前椎孔高径 18.5	25.5	
		前椎孔最大幅 23.6							
80	第6腰椎	椎体長 45.9	体全高 42.1	現横突起幅 95.6	現棘上突起高 17.8	現乳頭関節突起幅 38.0	椎頭横径 40.7	31.2	
		椎頭高径 18.5	前椎孔高径 21.3	前椎孔最大幅 25.6					
81	仙骨	現最大長 190.2	現椎体長 146.6	現横突起間全幅 155.3	椎頭横径 41.9	椎頭高径 18.8	前椎孔高径 22.0	91.5	
		前椎孔最大幅 30.1							
82	左第1肋骨	現最大長 163.8	現頭結節間距離 33.3	体中央幅 17.6	現体最大幅 21.9	現下端部厚 10.6	15.8		
83	左第2肋骨の一部	長 径 37.6	短 径 34.0	厚 18.5			3.9		

第9章 理科学分析

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	備 考
84	左第3肋骨の一部	長 径 30.3	短 径 29.6	厚 16.9				2.3	
85	左第4肋骨頭	長 さ 12.4	幅 20.6	高 23.0				1.5	
86	左第9肋骨の一部	長 さ 62.8	頭部長径 18.3	頭部短径 13.4				3.4	
87	左第10肋骨の一部	長 さ 101.2	頭部長径 17.6	頭部短径 13.6				4.9	
88	左第11肋骨の一部	長 さ 68.2	頭部長径 16.9	頭部短径 13.7				3.8	
89	左第12肋骨の一部	長 さ 40.2	頭部長径 15.8	頭部短径 11.6				1.9	
90	左第13肋骨の一部	長 さ 27.8	頭部長径 16.7	頭部短径 11.8				1.5	
91	左第14肋骨頭	長 さ 11.2	幅 15.6	高 8.5				0.8	
92	左第15肋骨の一部	現最大長 82.1	頭結節間距離 27.6	現体最大幅 9.6	現体下端部厚 9.0			4.2	
93	左第16肋骨頭	長 さ 23.2	幅 13.9	高 9.5				1.2	
94	右第1肋骨	現最大長 109.8	頭結節間距離 35.4	体中央幅 17.4	現体最大幅 17.4	現体下端部厚 9.5		10.1	
95	右第2肋骨	現最大長 150.6	頭結節間距離 38.6	体中央幅 14.2	現体最大幅 15.6	現体下端部厚 5.3		11.2	
96	右第3肋骨	現最大長 133.2	頭結節間距離 38.6	現体最大幅 20.4	現体下端部厚 8.1			10.2	
97	右第4肋骨	現最大長 95.8	頭結節間距離 30.9	現体最大幅 20.9	現体下端部厚 10.2			8.4	
98	右第5肋骨	現最大長 255.0	頭結節間距離 37.9	角結節間距離 59.6	頭関節面長 19.3	結節関節面長 13.4	現体中央幅 22.9		土壌に半ば埋没保存処理。重量計測不能
99	右第6肋骨	現最大長 187.6	現頭結節間距離 32.4	角結節間距離 58.5	頭関節面長 18.6				土壌に半ば埋没保存処理。重量計測不能
100	右第7肋骨	現最大長 218.4	頭結節間距離 37.6	現関節面長 15.7	結節関節面長 12.0				同上
101	右第8肋骨	現最大長 265.6							同上 欠損甚しく各部の計測困難
102	右第9肋骨	現最大長 188.8	現体最大幅 19.5						同上
103	右第10肋骨	現最大長 206.2	現体最大幅 15.5						同上
104	右第11肋骨	現最大長 73.0	頭結節間距離 36.9	現体最大幅 15.8	現体下端部厚 8.8			6.5	
105	右第12肋骨結節	長 さ 13.2	幅 14.5	厚 12.1				0.8	
106	右第13肋骨頭	長 さ 16.6	幅 13.4	厚 18.1				1.1	
107	右第14肋骨頭	長 さ 27.3	頭部長径 14.9	頭部短径 11.1				1.9	
108	右第15肋骨	現最大長 67.9	頭結節間距離 23.0	現体最大幅 14.6	現体下端部厚 8.2			2.2	
109	右第16肋骨の一部	現最大長 54.4	現頭結節間距離 24.7	結節部長径 9.7	結節部短径 9.5			2.3	
110	右第17肋骨	長 さ 56.5	結節部長径 9.1	結節部短径 8.0				2.6	

第2節 動物遺存体

No.	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値					重量	摘 要	
		長 さ	幅	高					
111	部位不明肋骨頭	9.3	15.7	25.7			1.2		
112	部位不明肋骨頭	8.3	10.8	13.6			0.6		
113	部位不明肋骨頭	9.0	12.7	7.4			0.8		
114	部位不明肋骨頭	11.0	10.8	7.0			0.4		
115	左肩甲骨	現最大長 330.5	現最大幅 119.6	頸部最少幅 53.0	関節部最大幅 80.1	関節窩最大幅 51.5	現関節窩最大径 37.9	184.0	
116	右肩甲骨	現最大長 321.5	現最大幅 148.9	頸部最少幅 54.4	関節部最大幅 80.2	関節窩最大幅 48.0	現関節窩最大径 41.6	200.8	
117	左上腕骨	現最大長 271.5	現近位端幅 81.6	現近位端径 91.7	骨体最少幅 36.2	骨体最少径 36.2	遠位端幅 73.4	334.0	
		現遠位端 82.1							
118	右上腕骨	現最大長 269.5	現近位端幅 75.9	現近位端径 89.1	骨体最少幅 31.7	骨体最少径 38.2	遠位端幅 73.0	346.0	
		遠位端径 81.8							
119	左前腕骨	最大長 404.6						342.0	
119'	左橈骨	最大長 334.1	現近位端幅 70.4	近位端径 41.4	体中央部幅 32.9	体中央部径 24.6	現遠位端幅 71.1		重量は119に含まれる。
		遠位端径 47.2							
119''	左尺骨	最大長 232.9	骨体最少径 42.8						同上
120	右前腕骨	最大長 401.4						344.0	
120'	右橈骨	最大長 334.8	近位端幅 77.3	近位端径 41.2	体中央部幅 34.2	体中央部径 24.8	現遠位端幅 67.1		重量は120に含まれる。
		遠位端径 47.0							
120''	右尺骨	最大長 226.1	骨体最少径 42.2						同上
121	左前橈側手根骨(R)	最大長 39.9	最大幅 28.8	最大高 26.7				11.8	
122	左前中間手根骨(I)	最大長 36.5	現最大幅 25.2	現最大高 27.2				8.1	
123	左前尺側手根骨(u)	最大長 24.8	現最大幅 25.8	現最大高 17.2				2.9	
124	左前副手根骨	最大長 39.8	現最大幅 12.7	最大高 30.1				5.8	
125	左前第2手根骨	最大長 25.1	最大幅 13.7	最大高 19.8				3.2	
126	左前第3手根骨	最大長 40.1	最大幅 41.2	最大高 21.9				13.3	
127	左前第4手根骨	現最大長 27.8	現最大幅 13.6	最大高 20.4				3.3	
128	右橈側手根骨(R)	最大長 41.4	最大幅 28.6	最大高 26.8				11.5	
129	右前中間手根骨(I)	現最大長 38.3	現最大幅 27.0	最大高 27.1				8.8	
130	右前第2手根骨	現最大長 22.2	最大幅 14.1	最大高 19.1				2.6	

第9章 理科学分析

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	摘 要
131	右前第3手根骨	現最大長 38.6	最大幅 39.8	最大高 22.3				12.9	
132	左中手骨	最大長 220.4	近位端幅 46.6	近位端径 34.4	体中央部幅 29.3	体中央部径 21.3	遠位端幅 46.9	152.0	
		遠位端径 37.4							
133	左前第2中手骨	最大長 105.4	近位端幅 19.1	近位端径 13.7				6.9	
134	左前第4中手骨	最大長 80.1	近位端幅 18.4	近位端径 15.6				5.2	
135	右中手骨	最大長 220.4	近位端幅 46.8	近位端径 32.6	体中央部幅 28.1	体中央部径 21.2	遠位端幅 48.6	142.0	
		遠位端径 36.6							
136	右前第2中手骨	長 さ 35.3	幅 6.0	厚 4.6				0.3	
137	右前第4中手骨	長 さ 68.4	幅 14.7	厚 11.1				3.2	
138	左前内側種子骨	最大長 27.0	最大幅 20.9	最大径 16.2				5.2	
139	左前外側種子骨	最大長 21.8	最大幅 22.4	最大径 15.4				5.1	
140	右前内側種子骨	最大長 28.4	最大幅 20.2	最大径 17.3				5.4	
141	右前外側種子骨	最大長 27.8	最大幅 21.4	最大径 15.2				5.2	
142	左前基節骨	最大長 83.6	体中央部幅 30.6	体中央部径 19.1	近位端幅 50.4	近位端径 30.9	遠位端幅 41.5	46.1	
		遠位端径 24.8							
143	右前基節骨	最大長 83.7	体中央部幅 31.5	体中央部径 18.6	近位端幅 50.7	近位端径 28.9	遠位端幅 43.2	44.2	
		遠位端径 22.7							
144	左前中節骨	最大長 43.8	近位端幅 47.8	近位端径 31.1	体中央部幅 42.8	体中央部径 22.1	遠位端幅 47.7	22.4	
		遠位端径 25.8							
145	右前中節骨	最大長 40.4	近位端幅 48.9	近位端径 28.9	体中央部幅 42.9	体中央部径 23.6	現遠位端幅 46.8	21.3	
		現遠位端径 22.8							
146	寛骨左側部	現最大長 306.5	現寛骨臼径 65.5	腸骨体幅 21.4	腸骨体高 36.2	閉鎖孔の長 68.8		258.0	
147	寛骨右側部	現最大長 345.9	寛骨臼径 64.8	腸骨体幅 21.5	腸骨体高 36.4	閉鎖孔の長 66.9		258.0	
148	左大腿骨	現頭部からの最大長 GLC 347.5	骨体中央部幅 33.7	骨体中央部径 43.2	現遠位端幅 77.2	現遠位端径 107.8		368.0	
149	右大腿骨	現最大長 371.6	頭部からの最大長 GLC 351.9	現近位端幅 107.7	近位端径 66.1	骨体中央部幅 33.3	骨体中央部径 43.0	439.0	
		遠位端幅 85.8	現遠位端径 112.2						
150	左膝蓋骨	現最大長 46.6	現最大幅 42.0	厚 27.8				12.2	

第2節 動物遺存体

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値						重量	摘 要
151	右膝蓋骨	現最大長 52.1	現最大幅 49.9	現 厚 32.7				21.1	
152	左脛骨	現最大長 341.6	現側面の長 LI 324.1	現近位端幅 78.4	現近位端径 68.7	骨体中央部幅 35.1	骨体中央部径 27.5	309.0	
		遠位端幅 68.3	遠位端径 41.0						
153	右脛骨	現最大長 343.0	現側面の長 LI 318.4	現近位端幅 80.4	近位端径 62.1	骨体中央部幅 35.7	骨体中央部径 26.4	322.0	
		現遠位端幅 65.1	遠位端径 40.8						
154	左踵骨	現最大長 103.4	現最大幅 53.6	現近位端幅 25.3	現近位端径 42.9			52.2	
155	左距骨	現最大幅 58.4	側面の最大長 GLI 57.9	現中側の 最大長 GLm 56.9	現遠位端幅 47.5			56.2	
156	左中心足根骨	最大幅 51.1	短 径 41.9	高 15.4				13.1	
157	左第1+2足根骨	現最大幅 30.4	短 径 15.5	高 16.4				2.3	
158	左第3足根骨	現最大幅 40.7	短 径 41.6	高 14.4				9.9	
159	左第4足根骨	現最大幅 36.1	現短径 17.3	高 23.6				6.2	
160	右踵骨	現最大長 103.4	現最大幅 53.8	現近位端幅 25.9	現近位端径 39.3			45.6	
161	右距骨	最大幅 60.1	側面の最大長 GLI 57.7	中側の最大長 GLm 57.2	遠位端幅 50.4			56.1	
162	右中心足根骨	最大幅 47.4	短 径 41.7	最大高 15.8				13.6	
163	右第1+2足根骨	現最大長 24.8	現最大幅 13.4	最大高 15.0				1.9	
164	右第3足根骨	最大幅 39.4	短 径 41.9	最大高 14.3				10.6	
165	右第4足根骨	現最大幅 33.2	短 径 20.4	最大高 24.7				6.5	
166	左中足骨	最大長 263.1	近位端幅 47.4	近位端径 38.8	体中央部幅 26.1	体中央部径 24.2	遠位端幅 47.6	178.0	
		遠位端径 38.1							
167	右第2中足骨の一部	現最大長 39.0	現近位端幅 12.1	現近位端径 11.7				3.2	
168	右第4中足骨	現最大長 63.5	現近位端幅 20.5	現近位端径 15.0				6.2	
169	右後基節骨種子骨(外側)	現最大長 24.4	最大幅 20.8	厚 15.7				3.9	
170	左後基節骨	最大長 78.8	現近位端幅 46.9	近位端径 34.1	体中央部幅 30.4	体中央部径 23.2	遠位端幅 41.1	39.5	
		遠位端径 25.4							
171	左後中節骨	最大長 43.8	近位端幅 49.7	近位端径 29.7	体中央部幅 40.0	体中央部径 22.5	遠位端幅 42.9	20.2	
		遠位端径 25.7							

第9章 理科学分析

No	部 位	測 定 部 位 と 測 定 値					重量	摘 要
172	左後末節骨	現最大長 29.3	現最大幅 37.9	最大高 23.3			8.2	
173	右後末節骨	現最大長 28.0	現最大幅 45.2	最大高 21.6			9.2	
174	部位不明遠位種子骨	現最大幅 30.0	前後径 13.9	最大厚 12.9			1.8	
175	部位不明小骨片						4.4	
176	部位不明小骨片						28.9	
177	部位不明小骨片						7.1	
178	部位不明骨片	長 径 28.1	短 径 21.1	厚 26.4			2.8	
179	部位不明小骨片	長 径 15.0	短 径 14.9	厚 11.7			0.1	
180	犬左脛骨	全 長 142.7	上端最大矢状径 26.5	上端最大幅 24.0	体中央矢状径 19.1	体中央横径 8.9	下端最大幅 17.0	14.2

才末＝橈骨遠位端、踵骨頭、脛骨近位端、大腿骨遠位端、㊤ 5才末＝尺骨頭、上腕骨近位端、㊦ 6才末＝大腿骨近位端、頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、尾椎、腸骨外角、坐骨、と言うことであるが、この馬は上腕骨、橈骨、中手骨、大腿骨、脛骨、中足骨の近位、遠位関節部の骨端線及び尺骨、踵骨の頭部の骨端線、並びに肩甲骨遠位関節部の骨端線の化骨は完了しているが、頸椎、胸椎、腰椎の椎頭は化骨が完了しているのに椎窩の関節面が骨端線より脱落している。北昂が述べるように頸椎、胸椎、腰椎の関節面は6才で化骨することになっているが、本馬は椎頭の化骨は完了しているにも拘わらず椎窩の化骨が完了していないことにより5才前後と考えられる。しかし、永久歯の萌出状態から見ると乳歯と永久歯が共存しているので歯の年令鑑定を優先して4.5才前後と判断した。

② 犬骨

この脛骨の上・下の関節部の骨端線は完全に化骨しており、また重量もあり、輪郭鮮明で力強ささえ感じ、近代以降を思わせる遺存の質感と、さらに遺存の良さを持っている。この脛骨を有する犬は成犬に属するものと考えられる。

(6) 出土獣歯・獣骨を有する獣の大きさ

① 出土馬歯・馬骨を有する馬の大きさ

① 上野国の馬の大きさ

我が国における在来馬の大きさについては西中川^{註12}等の調査によれば、全国91ヶ所の遺跡出土の在来馬の平均体高 126.39 ± 5.76 cmで、現在の木曾馬(雌 137.3 ± 2.7 西中川)とトカラ馬(雌 116.8 ± 2.4 西中川)の中間程度の大きさの馬であったと言う。上野国の馬の大きさは附表8～9に記載されている西毛、中毛、東毛における9遺跡出土の馬の遺存体339個体の中で年令を判別出来る169個体の平均年令は 9.6 ± 5.9 才で、大きさを判別出来る198個体の平均体高は 127.8 ± 9.4 cmである。この数値を西中川^{註12}等の測定した前期在来馬の平均体高 126.39 ± 5.76 cm (n=69)に比較するとほぼ同じであるので、上野国で飼育されていた馬は全国の馬とほぼ同じ大きさのものであったと考えられる。

江戸時代に上野国で飼育されていた馬については宮崎^{註24}重雄が群馬県藤岡市上栗須遺跡で江戸時代中期の馬

歯・馬骨28個体(最小限で)を調査している。この遺跡のI区北辺にある3号古墳は地元の人達から馬捨場と呼ばれていた所である。3号古墳中央部より多量の馬骨が出土し、古墳上を走る農道脇には馬頭観世音の石造塔が建てられている。石造塔には宝暦元年1751の銘が刻まれており、この石造塔建立前後より馬の埋葬所として使用されていたと考えられる。調査結果によると、その遺跡で発掘され、年令の判定出来る27例のうち、20数才を越える老令馬は10頭、10~15才の壮令馬7頭、幼令馬1頭であり、約70%が老令馬である。また体高については平均体高126.4cm(n=28、最小116.1cm、最大135.1cm)であるということである。このように江戸時代の一般庶民の馬が小さかったことは全国的な傾向であったと見え、江戸時代の馬捨場の馬については、直良信夫が「1地質時代末期の大陸馬と日本の馬」『日本及び東アジア発見の馬歯・馬骨』^{註25}の中で「江戸時代の後年馬捨場などを調査して見ると、繪に表示された軍馬とはおよそ縁遠い矮馬や老廃馬の遺骸がしばしば検出されるのである。一般庶民階級が所有していた役馬がどんなに劣勢な体格で矮性のものであったか窺知されよう」と述べている。

⑩ 中里見原遺跡出土の馬歯・馬骨を有する馬の大きさ

この出土馬骨は遺存状態が良く軀幹骨の大部分が遺存しているとは言え、馬骨の近位端、遠位端関節部の突き出た測定箇所を欠いているものが多く、直接骨の最大長を測定出来たものが15中6(40.0%)に過ぎなかったため、直接最大長を測定出来ないものについては西中川駿等の「骨の幅、径から骨長の推定公式」^{註12}により骨の各部の測定値を用いて骨の最大長を推定し、それによって得た骨の最大長の値を林田重幸の「体高推定公式」^{註26}に当てはめて体高を推定した。その結果、附表10に見られるとおりこの馬の推定体高は 126.5 ± 18.9 cm(n=19)であった。この推定体高は前述の宮崎重雄が上栗須遺跡で調査した28個体の平均体高126.4cm(n=28、最小116.1cm、最大135.1cm)と一致している。

⑪ 出土馬歯・馬骨を有する馬の改良度

㊲ 出土馬歯について

この馬の頭蓋は半ば土中に埋没したまま保存処理がしてあるので右上顎臼歯については詳細な計測が出来ないが、左上顎臼歯6と左・右下顎臼歯12の平均幅率(歯冠幅/歯冠長)を見ると上顎臼歯は 90.8 ± 8.5 (n=6)であって、下顎臼歯は 46.8 ± 3.4 (n=12)である。この数値を「附表11 時代別、遺跡別、出土馬歯の平均幅率」に見られるとおり、上野国の5遺跡、日高遺跡^{註1}、三ツ寺III遺跡^{註2}、下東西遺跡^{註3}、田端遺跡^{註4}、上野国分僧寺・尼寺中間地域から出土した馬歯723のうち幅率の判明している上顎臼歯77、下顎臼歯139、計216の幅率の平均、上顎臼歯 89.3 ± 13.3 (n=77)、下顎臼歯 55.4 ± 10.1 (n=139)と比較するとこの馬の上顎臼歯の幅率はほぼ同じであるが、下顎臼歯の幅率はやや劣っていることがわかる。吉倉真やG.G.SIMPSONが述べているように歯冠幅及び幅率が馬の改良度を現わしているとするならば、この馬は上野国で古代より近代に至るまで飼育されていた馬と比較すると改良度に於いてほぼ同等かまたはやや劣っていた馬であったとすることが出来る。

㊳ 出土馬骨について

この馬の肢骨を見ると細くてきゃしゃで、雄でありながら一見雌のような感じがするのでこの馬の測定値と西中川駿等の現代の在来馬の測定値と比較して果たして細いのかどうか調べて見ることにした。「附表12品種別骨の最大長に対する肢骨各部の幅の比率(長幅指数)」の中で、本馬の橈骨、中手骨、中足骨の最大長に対する近位関節部の幅の比率について見ると、現代の在来馬に対する本馬の比率は夫々橈骨97.0、中手骨94.3、中足骨98.3であり、また最大長に対する遠位関節部の幅の比率については、現代の在来馬に対する本馬の比率は夫々中手骨99.4、中足骨99.3であって、近位関節部及び遠位関節部ともに本馬と現代の在来馬との間に余り大きな差は見られない。しかし最大長に対する中央部の幅の比率については、現代の在来馬に対する本馬の比率は橈

第9章 理科学分析

附表8 時代別、馬歯・骨の出土状況とその年令と大きさ

時代	馬歯	馬骨	計	%	個体数	%	年令判定 個体数	平均年齢(才)	大きさ判定 個体数	平均体高(cm)	摘要
古墳時代	14	7	21	2.3	8	2.4	4	7.5±3.2	4	132.9±1.9	日高遺跡、三ツ寺III遺跡、下東西遺跡、田端遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域、国分境遺跡、三ツ寺II遺跡、小角田前I遺跡、下田中川久保遺跡から出土した馬歯・馬骨
古墳時代～平安時代	3	1	4	0.4	4	1.2	2	8.0, 4.5	1	140.0	
奈良時代	9	0	9	1.0	1	0.3	1	4.0	1	110.0	
奈良時代～平安時代	9	0	9	1.0	9	2.7	3	12.0±6.2	3	128.4±7.1	
平安時代	248	29	277	30.3	106	31.3	70	7.4±5.2	54	129.1±8.7	
平安時代～中世	39	1	40	4.4	5	1.5	3	10.9±9.0	2	135.8, 140.0	
中世	139	156	295	32.3	132	38.9	39	12.2±7.4	85	125.8±9.9	
中世～近世	37	22	59	6.5	2	0.6	2	17.5, 9.3	2	121.0, 140.0	
中世～近代	20	19	39	4.3	21	6.2	6	12.0±6.2	11	127.8±7.6	
近世	12	9	21	2.3	2	0.6	2	15.9, 3.0	2	133.8, 114.8	
近代	4	0	4	0.4	1	0.3	1	5.0	1	135.0	
不明	120	15	135	14.8	48	14.0	37	11.1±4.4	32	129.8±9.9	
計	654	259	913	100.0	339	100.0	170	9.6±5.9	198	127.8±9.4	

附表9 時代別、遺跡別出土馬歯・馬骨数とその馬の年令と大きさ

時代	遺跡名	馬歯	馬骨	計	個体数	年令判定 個体数	平均年齢(才)	大きさ判定 個体数	平均体高(cm)	摘要
古墳時代	中間地域	3	6	9	4	1	5.0	2	130.0, 135.0	
	三ツ寺II	11	1	12	4	3	8.3±3.3	2	132.8, 133.9	
古墳時代～平安時代	中間地域	2	1	3	3	1	8.0	0	0	
	国分境	1	0	1	1	1	4.5	1	140.0	
奈良時代	中間地域	9	0	9	1	1	4.0	1	110.0	
奈良時代～平安時代	下東西	1	0	1	1	1	20.0	1	138.0	
	田端	8	0	8	8	2	5.0, 11.0	2	120.9, 126.2	
平安時代	日高	18	4	22	11	0	0	1	132.0	西中川測定
	下東西	9	0	9	2	2	7.5, 18.5	2	120.0, 135.0	
	小角田前I	5	6	11	4	2	5.5, 8.1	2	124.1, 132.7	
	下田中川久保	41	5	46	6	5	14.6±5.0	4	133.7±3.0	
	中間地域	158	14	172	73	55	6.2±3.4	41	128.7±9.6	
	田端	12	0	12	8	4	10.4±5.2	2	126.1, 133.6	
	三ツ寺II	5	0	5	2	2	17.0, 4.0	2	127.2, 130.0	
平安時代～中世	三ツ寺II	39	1	40	5	3	10.9±9.0	2	135.8, 140.0	
中世	下東西	30	2	32	7	7	8.2±2.9	6	133.3±7.6	
	田端	32	0	32	5	2	20.3, 8.4	5	125.3±7.5	
	中間地域	77	154	231	120	30	13.0±7.9	74	125.2±9.5	
中世～近世	三ツ寺III	33	22	55	1	1	17.5	1	121.0	西中川測定
	中間地域	4	0	4	1	1	9.3	1	140.0	
中世～近代	中間地域	20	19	39	21	6	12.0±6.2	11	127.8±7.6	
近世	中間地域	12	9	21	2	2	15.9, 3.0	2	133.8, 114.8	
近代	中間地域	4	0	4	1	1	5.0	1	135.0	
不明	中間地域	115	15	130	43	34	11.0±3.5	29	129.3±10.2	
	三ツ寺II	5	0	5	5	3	12.7±4.7	3	134.9±3.8	
計	9遺跡	654	259	913	339	170	9.6±5.9	198	127.8±9.4	

▲9遺跡の馬歯・馬骨の特徴○日高遺跡—高崎市日高町 平安時代の11個体出土。中形で大きい。○三ツ寺III遺跡—群馬郡群馬町 中世以降の土壇墓から1個体出土。小形。○下東西遺跡—前橋市青梨子町 奈良時代～中世の10個体出土。中世の個体は、若くて充実。○田端遺跡—高崎市阿久津町 奈良時代～中世の22個体の馬歯・馬骨と12個体の牛歯・牛骨出土。牛は優良。馬は貧弱。○国分境遺跡—群馬郡群馬町 古墳時代～平安時代の1個体の馬歯、1個体の牛歯出土。馬歯は中形馬で大きい。○上野国分僧寺・尼寺中間地域(表中では中間地域と略称)—群馬郡群馬町 古墳時代から近代の269個体の馬歯・馬骨と48個体の牛歯・牛骨が出土。平安時代の73個体の馬の平均年齢は、6.2歳で大変若い。○三ツ寺II遺跡—群馬郡群馬町 古墳時代から中世の16個体の馬歯・馬骨出土(古墳時代は4個体)。○小角田前I遺跡—佐波郡尾島町 平安時代の4個体の馬歯・馬骨と1個体の牛歯・牛骨出土。○下田中川久保遺跡—佐波郡新田町 平安時代の6個体出土。上顎歯の平均幅率は、101.7%で上野国の馬として改良度が極めて高い。

骨91.2、中手骨85.1、中足骨86.9であって、現代の在来馬に比較して本馬が劣っており、特に中手骨、中足骨の幅の細いことが目立っている。要するにこの馬の肢骨は関節部の発達は在来馬としては普通程度であるが、下顎臼歯の幅率も多少劣ることを考慮に入れると、この馬は一般の在来馬に比べると体の幅もやや少なく、骨が細くてきゃしゃな感じがする馬であったと考えられる。性格的にはこの馬は繊細で驚きやすい馬であったと思われるが、反面主人にだけ懐き、また主人も大変可愛がっていた馬であったのかも知れない。またこの馬の右後肢の右中心足根骨(飛節の部分、附図2参照)の溝の一部が泡立てたクリーム状の骨で埋まっていて軽い関節炎を起こしていたものと考えられる。さらにこの馬骨は群馬県で出土した近世～近代に属する数少ない馬骨の中では1個体分として遺存状態極めて良好で、今後の検討に資することが大きいと思われるのでこの馬を「中里見近世・近代馬I」と呼ぶこととする。

② 出土犬骨を有する犬の大きさ

この犬の脛骨の最大長は14.27cmであるので、この犬は小型犬に属する。

考察

(1) 出土馬歯・馬骨を有する馬を飼育していた人々

奈良時代の終わりから平安時代にかけて創建された里見廃寺を中心とする各時代の複合遺跡地を新幹線の工事現場が横切っている。現場は烏川に面した東斜面の地域で、調査者によればかつての里見廃寺の地区内の墓の中に萩原^{註29}一族の墓があり、その中には天文年間の墓石もあったが明治以後改葬され殆ど無くなっていると言うことである。この墓地に隣接して2つの土坑が出土し、東側の土坑は浅く出土品もなかった。西側の5号土坑墓から馬のほぼ完全に近い骨格が出土している。この地点から約150～200m南西に昔から寺畑と呼ばれた馬捨場と考えられる場所があり馬頭観音も存在している。

山藤修一、大熊哲雄は「北関東における皮革を中心とする一仲買商人の活動について」『群馬文化』の中で「^{註30}近世社会の仕組みにおいては斃死牛馬皮の取得流通には強い規制がかけられていた。近世の長史が各地域集団ごととに旦那場と言う独自の縄張りを持ち、相互にその境界を定めていた。特に東日本では江戸浅草新町に居住し、^{註31}役所機構を備えた長史頭弾左衛門を頂点とする、賤民支配体制に組み込まれていた。中略 近世社会においては誰の所有する牛馬であろうとも死ねば附近の定められた捨場に出されそれを取得する権利を有する長史が無償で入手する仕組みになっていた。」一方では幕末、明治初期と言う動乱期・^{註30}支配秩序の混乱期にあって、この売り渡し制度が打破されつつあったと言う峰岸賢太郎の考え方もあるが、これに対して山藤修一、大熊哲雄は「明治4年8月のいわゆる「賤民解放令」が出されるまで弾左衛門支配はその機構と共に存続し、支配下の長史、非人からの貢税を徴収し続けた実態から推量すると依然としてこうした規制は一定の力を保っていたと考えるべきであろう」と述べている。

以上のような斃牛馬の取り扱いについて規制の厳しい時代に、しかも附近に馬捨場が存在するような地域に於いて自己所有の馬を馬捨場以外の、萩原家を中心とした近世墓地もしくは中世以来の墓地に隣接した場所に埋葬することが出来たこの馬の所有者は萩原一族ゆかりの子孫かまたはそれなりの権力を有していた人達であったであろう。

天田川押遺跡^{註22}に見られるように人間の埋葬域の中に埋葬され、中世の重葬の例を示しているような、日本の歴史の中で武士達が最も馬を愛した中世であれば理解出来ることであるが、近世に於いてこのような埋葬状態が見られることは貴重な一例と言わねばならない。

前述のように雄でありながらこの馬は骨も細く、一見きゃしゃな馬で性格としては繊細で驚きやすく、その

第9章 理科学分析

附表10 出土馬骨の測定値による推定体高

部位名	測定箇所	測定値 mm	西中川駿の公式による骨の最大長cm	林田重幸の公式による推定体高 cm
頭蓋	最大長 A-P	493.0	——	128.66
左下顎骨	下顎枝の高 GOV-Cr	255.2	40.74	130.62
左肩甲骨	頸部最少幅 SLC	53.0	20.77	83.95
左肩甲骨	関節部最大幅 GLP	80.1	43.15	161.55
右肩甲骨	頸部最少幅 SLC	54.4	21.17	85.96
右肩甲骨	関節部最大幅 GLP	80.2	43.19	161.63
左上腕骨	骨体最少幅 SD	30.9	27.17	125.4
右上腕骨	骨体最少幅 SD	31.7	27.66	128.19
左橈骨	最大長 GL	334.1	——	133.87
右橈骨	最大長 GL	334.8	——	134.16
左中手骨	最大長 GL	220.4	——	133.7
右中手骨	最大長 GL	220.4	——	133.7
左大腿骨	骨体中央幅 Bm	33.7	34.75	117.94
左大腿骨	骨体中央部径 Dm	43.2	36.41	123.45
右大腿骨	骨体中央部幅 Bm	33.3	34.47	117.02
右大腿骨	骨体中央部径 Dm	43.0	36.31	123.12
左脛骨	骨体中央部幅 Bm	35.1	31.52	117.25
右脛骨	骨体中央部幅 Bm	35.7	31.94	119.59
左中足骨	最大長 GL	263.1	——	143.24
平均		n = 19		126.5 ± 18.9

◀動物の大きさを表す場合に、牛馬のような大動物は習慣として体高を用い、鹿のような動物は通常体重で表される。体高を試算する場合には、頭骨や肢骨各部の測定値が用いられる。理想的に言えば、頭骨や肢骨の最大長によって試算することであるが遺跡出土の動物肢骨は風化によって遠位・近位関節部の一部を欠き、最大長が測定できないことが多いその場合は通常一番遺存の良い肢骨の中央部の幅や関節部の幅、径が用いられる。しかし、骨の幅等は個体の発育状態等で変動が大きく附表に見られるとおり、左肩甲骨の頸部最小幅から試算した体高は、関節部最大幅から試算した体高の約半分であり、筆者の常に悩むところである。従って、本馬のように測定可能な箇所が多いことが望ましいところであるまた、動物の体格を知る上で体の幅は重要であり体高と共に品種の特徴、発育状態、発育中の健康状態及び能力や性質の一端を知る上で貴重なものである現在では、歯・骨から動物の幅を数値で表せるところまで進んでははいない。今後の研究の発展とその効果が期待されることである。

附表11 時代別、遺跡別、出土馬歯の平均幅率

上顎白歯				下顎白歯			
時代	遺跡名	馬歯数	平均幅率	時代	遺跡名	馬歯数	平均幅率
平安	日高	7	94.0 ± 12.2	平安	日高	2	47.5
	下東西	1	107.5		下東西	1	57.2
	中間地域	8	87.3 ± 11.8		中間地域	38	51.4 ± 7.6
	計及平均	16	91.5 ± 12.7		計及平均	41	51.4 ± 7.2
中世	三ツ寺III	12	93.2 ± 16.3	中世	日高	1	55.0
	下東西	8	90.3 ± 13.1		三ツ寺III	12	51.2 ± 9.7
	中間地域	12	87.9 ± 12.7		下東西	14	55.0 ± 8.3
	計及平均	32	90.5 ± 14.5		田端	2	47.3
中世-近世	中間地域	1	83.9	中間地域	25	54.9 ± 7.6	
不明	中間地域	28	87.0 ± 16.7	計及平均	54	53.8 ± 8.3	
合計及平均		77	89.3 ± 13.3	中世-近世	中間地域	11	55.5 ± 7.8
				近世	中間地域	22	61.6 ± 11.0
				不明	中間地域	22	63.4 ± 12.5
				合計及平均		139	55.4 ± 10.1

備考1 上野国分僧寺・尼寺中間地域をここでは中間地域と称した。
備考2 古墳時代の例としては幅率の判明している三ツ寺II遺跡のNo.8 RM³がある。各歯は力強いものであったが幅率は80.3である。M³は元来幅率の少ないものであるし、また1例だけなので除いた。

◀吉倉眞やG.G.Simpsonが述べているように歯冠幅及び幅率が馬の改良度を現しているとするならば、歯冠幅及び幅率の大きい馬は改良度が進んでいて、体の幅もある立派な馬であると言うことが出来る。従って、その馬の改良度を論ずる場合には、馬の体高ばかりでなく、歯の幅率で表わされる、体の幅も併せて論ずる必要がある。中里見原遺跡出土の馬歯の幅率は、上顎白歯90.8 ± 8.5 (n = 6)、下顎白歯46.8 ± 3.4 (n = 12)である。附表に見られる5遺跡の平均幅率は、上顎白歯89.3 ± 13.3 (n = 77)、下顎白歯55.4 ± 10.1 (n = 139)となり、上顎白歯の幅率がほぼ同じであるのに比べ、下顎白歯の幅率は5遺跡の平均幅率の84.4%に過ぎず、やや改良度は低く、体の幅も狭い馬であったということが出来る。なお、下顎白歯の平均幅率は上顎白歯に比べると62%に過ぎず上顎白歯に比べると狭い。

反面一度主人に懐けば主人もその馬を愛し、またその怜利な性質をこよなく愛したであろうことを述べたが、そのような馬と主人との関係があったからこそこのような埋葬状態がとられたのであろうと考えられる。調査者によれば、この墓地の現在の地権者は萩原姓を名乗る2名の人間であるとのことを見ても、この馬を埋葬した人々は萩原一族ゆかりの人達であったことは想像に難くない。^{註29}

この馬の埋葬時期が明治4年3月19日に発せられた「斃牛馬の持主勝手処置令」及び明治4年8月28日に発せられた「賤民解放令」以前であったのか、或いはそれ以後であったのかは出土馬歯・馬骨だけを見る限りでは判断することは出来ない。しかし、いずれにしてもこの馬が小形馬でやや貧弱な体格の馬であったにも拘わ

附表12 品種別肢骨各部の 幅／最大長の比(長幅指数)

骨の部位	測定部位	本 馬			在 来 馬			摘 要
		平均値mm	n	長幅指数	平均値mm	n	長幅指数	
橈骨	最大長 GL	334.8	1	—	316.8±1.7	6	—	1. 在来種の測定値は西中川駿「Table 4 馬の各骨の測定値」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究』(鹿児島大学農部獣医科)1991による。 2. 橈骨は遠位端関節部の一部を欠いているのでこれを除いた。
	中央部幅 Bm	34.2	1	10.22	35.5±0.7	9	11.21	
	近位端幅 Bp	77.3	1	23.09	75.4±0.5	9	23.80	
中手骨	最大長 GL	220.4	2	—	210.4±1.0	7	—	
	中央部幅 Bm	28.7	2	13.02	32.2±0.3	8	15.30	
	近位端幅 Bp	46.7	2	21.19	47.3±0.4	8	22.48	
中足骨	遠位端幅 Bd	47.8	2	21.69	45.9±0.3	9	21.82	
	最大長 GL	263.1	1	—	254.1±1.4	7	—	
	中央部幅 Bm	26.1	1	9.92	29.0±0.3	9	11.41	
	近位端幅 Bp	47.4	1	18.02	46.6±0.4	9	18.34	
	遠位端幅 Bd	47.6	1	18.09	46.3±0.3	9	18.22	

らず墓地に隣接した場所に埋葬され比較的丁寧に葬られていることから考えるとこの馬の埋葬時期の下限は明治27、28年戦役の勃発後馬匹改良の必要性が高まり、本格的に馬匹の改良増殖に歩み出した明治39年5月馬政局が置かれ、馬政第1次計画が樹立された時期であると想像される。

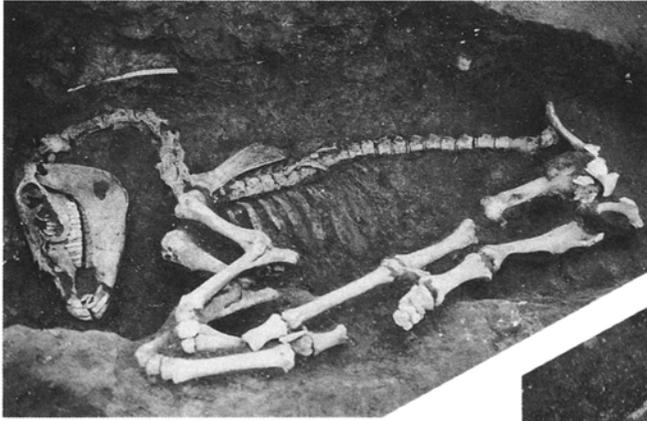
(2) 出土馬歯・馬骨を有する馬の埋葬の仕方について

前述のようにこの馬は大きさ2.1m×0.97m、深さ0.64mの土坑に右側を下にして横臥しており、頭部を南西の方向に向け、また頸をS字状に曲げ、四肢を腹下に組んで埋葬されている。馬の体格に比し土坑の幅が小さいので前肢は腕関節より下を、後肢は飛節から下を土坑の側壁にもたせた状態で埋葬されている。

筆者は昭和21年から昭和23年迄群馬県勢多前橋馬匹組合に、昭和26年から昭和29年迄群馬県中之條家畜保健衛生所に勤務していたが、中里見原遺跡5号土墳墓に見られた馬の埋葬法はその当時群馬県勢多郡及び吾妻郡に於いて普通に行われていた馬の埋葬法と良く似た埋葬法であった。江戸時代～明治時代に中里見原遺跡で行われた馬の埋葬方法と、昭和21年～30年頃群馬県勢多郡及び吾妻郡で行われていた馬の埋葬方法とが大変良く似ていることは驚くばかりである。

現代では^{註33}へい獣を埋葬することは家畜伝染病予防法、^{註34}と畜場法、^{註35}へい獣処理場等に関する法律によって取り締まられているが、直接にへい獣処理場等に関する法律によって、へい獣処理場以外の施設または区域で処理してはならないことになっていて、へい獣処理場以外の施設又は区域で処理する場合は都道府県知事の許可を得なければならないことになっている。従って利用し得るへい獣処理場が近くにない場合は都道府県知事(保健所長)の許可をうけて他の場所で処理することになる。昭和21年～昭和30年頃迄は一般農家でリヤカーを除いては死体運搬方法が無く、へい獣処理場へ搬入することが困難な地域が多かった。(牛馬車は使役牛馬が死んでいるため遠隔地の農家では死体運搬に牛馬車を借りて迄運ぶということは殆ど無かった。)そのため保健所長の許可を得て、人家、井戸、河川等から離れた所へ埋葬することが多かった。牛馬が死ぬと獣医師の診断(生前)又は検案(死後)を済ませた後、畜主と両隣り程度の3～4人が約2×1m、深さ1.5～2mの穴を掘り、死体の両肢(直接又は縄をかけて)と頭又は尾を引き穴の縁まで引きずって行き、今度は穴の向こう側に廻り両肢及び頭又は尾を引いて穴の中へ落としたこの時幅1mと言う狭さは死体を反対側の縁から引くための必要な長さであり、永い間の経験で産み出された幅でもあったのであろう。死体の両肢を反対側から引いているので死体は頭部及び背部から先に落下し、両肢が上になって自然に側壁にもたれかかることになる。当然両肢の方が高くなり地表より1mと言う定められた深さより浅くなるのではないかと筆者はその都度気をもんだものである。

附写真1 馬骨出土状況

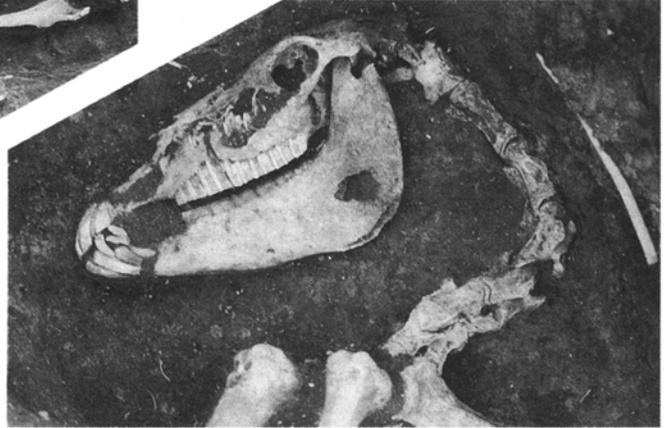


前・後肢を側壁にもたせかけている。未だ肢には死後硬直は現われてはいない。

▲土壇の手前から前・後肢を引いて馬を土壇中に落すので体が先に落下し両肢が側壁にもたれかかるようになる。着地後、前肢を折り曲げ、後肢を前に引いて馬を寝かせている。前肢を折り曲げているのは頭頸部に死後硬直が始まっているが、未だ前肢には及んでいないことを示している。

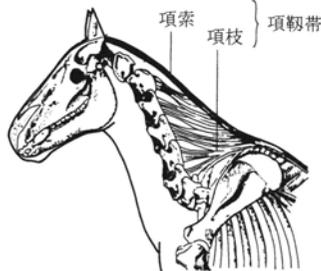
A 出土馬骨全景 南東から

▼第4頸椎と第5頸椎との間が大きく口が開いている。頸椎には骨折の痕がないので、頸椎を取り巻く靭帯が切れていることが考えられる。馬体が落下する際、死後硬直により棒ようになった頭頸部が真先に側壁に当たり、一気に全重量が加わって靭帯の切断が起こったものと考えられる。



B 頭部近接 北東から

附図10 馬の頸における項靭帯の分布状況



▲頸椎を直接連結している靭帯には、頸椎の上側には棘上靭帯、背側縦靭帯があり、下側には腹側縦靭帯があって隣同士の頸椎を連結している。不整地等の疾走時、瞬時に重い頸を上下して体の平衡を保つためには余程強い筋肉と靭帯とが必要であるが、馬の頸椎には頸の上部を埋め尽す程の幅の広い板状の靭帯が分布している。

原図 川田信平・醍醐正之 1974による

この埋葬法が近世末期から現代に至るまで続いて来た理由には農家にとって使役牛馬の死と言う経済上の大きな危機を乗り切るために、必要最小限の労力と、必要最小限の経費とで埋葬しなければならないと言う必要性から産み出され、永く守られてきた埋葬法であったのであろう。従って中里見原遺跡の5号土壇墓に埋葬された馬歯・馬骨を見ると、土坑の西側から東に向かって馬の両肢と頭や尾等を引き、土坑の西側の縁迄来た所で土坑の東側に廻り、馬の両肢を引いて馬を落下させ、その後前肢に力を加えて膝が前にできるように折りたたみ、後肢を前に引いて埋葬したものと考えられる。

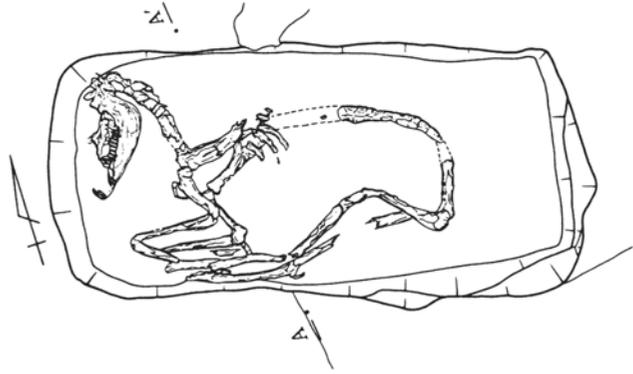
(3) 埋葬された時の馬の死後硬直状態

附写真1 Bに見られるようにこの馬の頸はほぼ直角に湾曲しているが、通常馬の頸は直角に湾曲出来るものではない。この頸椎を見ると第4頸椎と第5頸椎との間が大きく口を開けているのがわかる。頸椎には骨折の痕がないので頸椎をとり巻く靭帯が切れていることが考えられる。前述のとおり馬の前後の肢を引っ張って馬を土坑中に落下させると当然馬の頭頸部及び体部が先に落下して行く。この時、頭頸部は死後硬直状態にあったものと考えられるが、死後硬直により棒ようになった頭頸部が真先に土坑の側壁に当たり、馬の全重量が一気に頭頸部に加わり頸椎を取り囲む靭帯の切断が起こったものと考えられる。

馬の頭頸部は「附図10 馬の頸における項靭帯の分布図」に示すとおり、頭部と胸椎とは項靭帯註37と言う幅の広い靭帯で結ばれている。項靭帯は一番外側を項索と呼ばれる結合組織の束で頭部と胸椎を結んでおり、その内

A 融通寺遺跡4区1号馬墳墓出土の馬骨

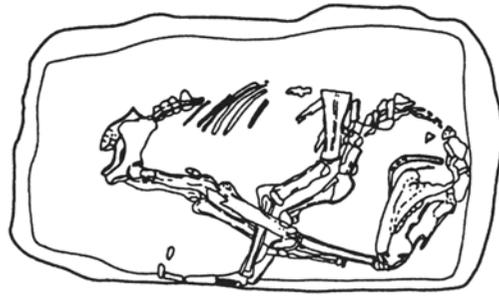
◀融通寺遺跡(所在地高崎市大八木町・下小島町)宮崎重雄によれば、この馬は東西に長い長方形の土墳墓の中に頭を西に向け右側を下にして埋葬されていたと言うことである。馬骨の一部な欠損が著しかったがほぼ全身の骨が残存していたと言うことである。この馬は雌で年齢は11才程度、体高129.0~129.6cmで中型馬の中では小さい馬であると言うことがある。この馬は膝を折り曲げて座るような形で前肢を組み、後肢を前に引いて横臥させている。前肢に死後硬直が現れるのは死後4~11時間とされているので死後半日以内に埋葬されたのであろう。後肢は人の力では曲げ難いので死後硬直の有無にかかわらず前に引いている。



A 融通寺遺跡4区1号馬墳墓出土の馬骨(およそ1:30)

B 中尾遺跡27号土墳墓出土の馬骨

◀中尾遺跡(所在地高崎市中尾町)所見によると土墳は80.0×110.0cm深さ30.0cmの長方形で馬骨は頭を北に向け左側を下にしているを言う。この馬は前肢を後に引き、後肢を前に引いて前・後肢をX状に組んでいて馬の自然の横臥姿勢とは違った異常な姿勢で埋葬されており、死後硬直が前・後肢に及んでいることを示している。死後硬直の状態から死後半日以上経過してから埋葬されたと考えられる。後肢は筋肉が大きく、人の手の力では中々曲げ難いので融通寺遺跡出土の馬骨を見ても死後硬直の有無とは関係なく前に引いている。この両遺跡の土墳墓を見ると後肢は前に引くので土墳墓の幅も少なく一見何気ないうちにもきめの細かさに気付く。



B 中尾遺跡27号土墳墓出土の馬骨(およそ1:28)

附図11 遺跡出土の馬骨の状態

側には一つ一つの頸椎に項板と称する結合組織の帯があり、それが集まって一枚の厚い板状の結合組織の帯を作っている。この「NECK BAND」と呼ばれる項靭帯は絶対に切れるものではないと学生時代から教えられていただけに項靭帯で守られている頸椎を取り巻いている靭帯が切れ、第4頸椎と第5頸椎との間がポツカリと口を開けているのを見たときは息を飲むような気がして声も出なかった。死後硬直と言うものがどんなものであるかと言うことを初めて知らされた思いがした。

死後硬直発現時間その他について伊東信夫先生^{註38}にお願いして科学警察研究所及び日本中央競馬会競走馬総合研究所の及川正明氏^{註39}に問い合わせさせていただいた結果は次のとおりである。

○馬 死後硬直の現れる時間等はその時の環境条件により区々であるが、死後1.5~8.5時間で頭頸部より始まり、10~20時間継続し、18~55時間で緩解する。前肢はそれより2~3時間遅れ、後肢は前肢に引き続いてそれ程変わりなく始まるようである。緩解時間も頭頸部よりやや遅れると言うことである。馬の場合は頭部を拳上していることが多く、確認はしていないが項靭帯、項索、項板共に硬直が強いのではないかと言うことである。前肢、後肢はその時の状態で区々であるが屈筋側の方により強く硬直が現れ、屈曲した状態の方が多いたうことであつた。

○人 死後3~4時間で頭頸部より始まり、24~48時間で緩解する。上肢、下肢ともに死後7~8時間で始まり、24~48時間で緩解する。項靭帯の強直が強く頭部を拳上することが多いと言うことである。

附写真1Aに見られるようにこの馬の前肢は膝を前に出して折りたたむようにして曲げているのでまだ硬直

第9章 理科学分析

が前肢に及んでいないことがわかる。従ってこの馬は死後半日以内に埋葬されたと想像され、夜間は土坑を掘り難いと考えられるのでこの馬の死亡時刻は夜明け前から午後4時頃までと考えられる。

なお、後肢が硬直を起こしていないのに前に引いてあるのは、後肢の下腿及び股の筋肉が大きくて縮めにくいので、附図11A融通寺遺跡(中世、高崎市大八木町・小八木町)、及び附図11B中尾遺跡(中世、高崎市中尾町)に見られるように前肢の硬直状態に関係なく後肢を前に引いているものが多い。

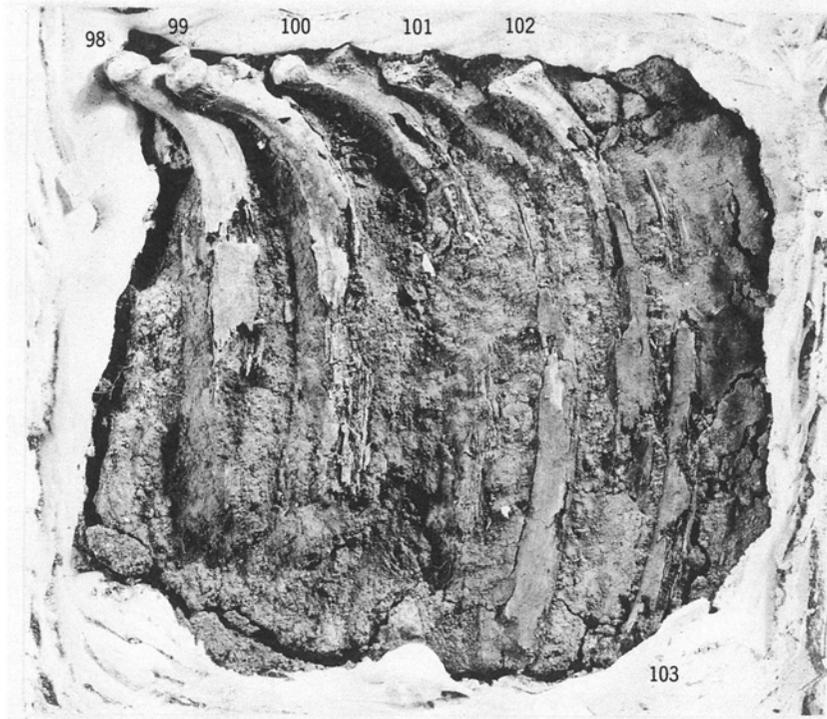
謝辞 馬の死後硬直について御調査をいただき種種御助言を賜った東京大学農学部獣医解剖学教室伊藤信夫先生に深甚なる感謝の意を表すとともに、出土獣歯・獣骨の実測図並びに写真を作成して下さった中里見原遺跡整理班の皆さんに深甚なる感謝の意を表します。

註

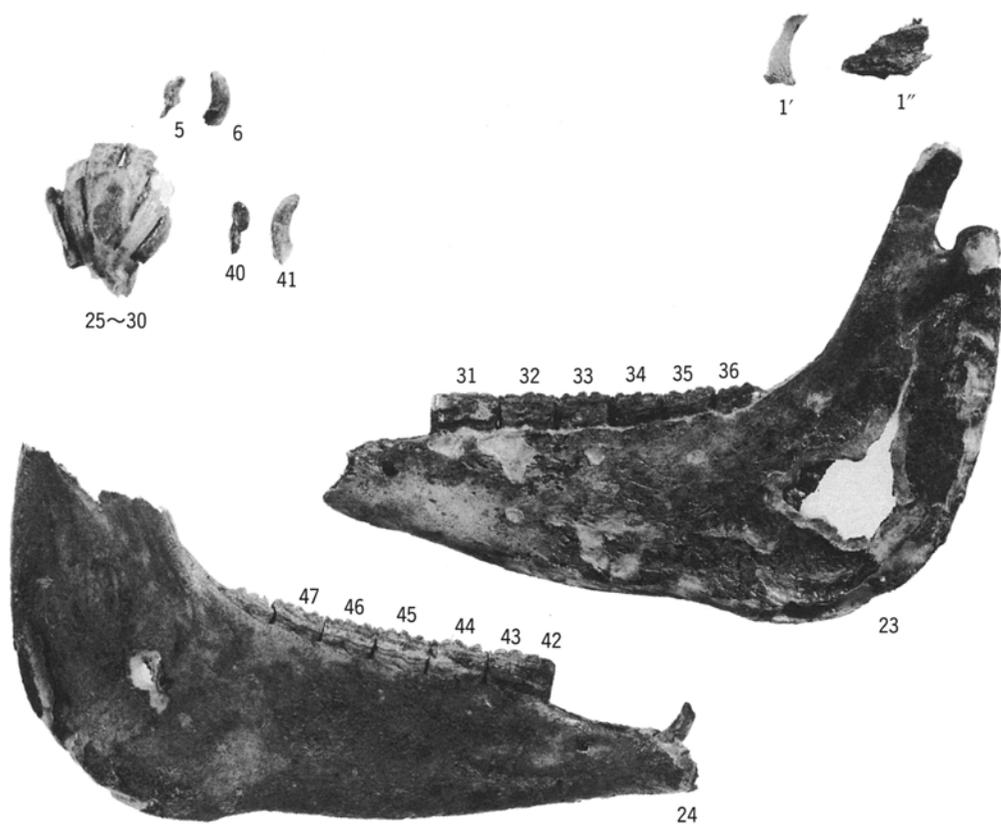
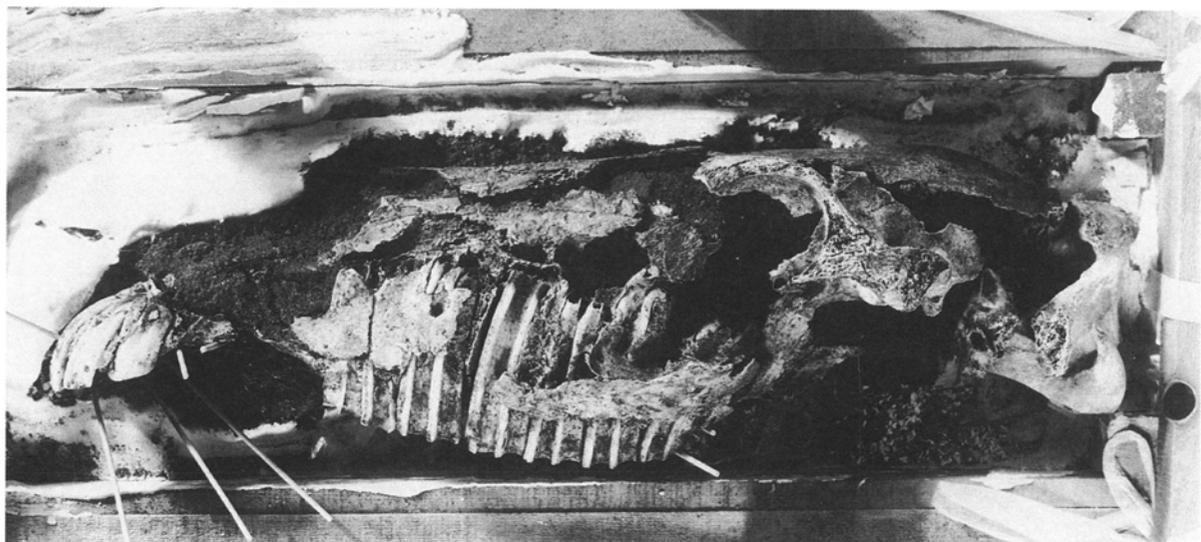
- 1 大江正直 『日高遺跡出土の馬歯・馬骨について』『日高遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1982
- 2 大江正直 『三ツ寺III遺跡2号土壇出土の馬歯・馬骨について』『三ツ寺III遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1985
- 3 大江正直 『下東西遺跡出土の獣歯・獣骨について』『下東西遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1987
- 4 大江正直 『田端遺跡出土の獣歯・獣骨について』『田端遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988
- 5 大江正直 『図分境遺跡出土の馬歯・馬骨について』『国分境遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1990
- 6 大江正直 『上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体』『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1990
- 7 大江正直 『三ツ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について』『三ツ寺II遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1991
- 8 大江正直 『小角田前遺跡出土の獣歯・獣骨について』『小角田前I・II遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1995
- 9 大江正直 『下田中川久保遺跡出土の馬歯・馬骨について』『下田中道遺跡 下田中川久保遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1995
- 10 直良信夫 『IV-4 中世以降の馬歯・馬骨』『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』(日本中央競馬会)1970
- 11 林田重幸 『第1章九州在来馬』『日本在来馬の系統に関する研究』(日本中央競馬会)1978
- 12 西中川駿・松本光春 『V. 遺跡出土骨同定のための基礎的研究』『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期との経路に関する研究』(鹿児島大学農学部獣医科)1991
- 13 直良信夫 『8 古代日本の家犬』『古代遺跡発掘の家畜遺体』(日本中央競馬会弘済会)1973
- 14 茂原信生 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集 犬科動物資料カタログ』(東京大学総合研究資料館)1986
- 15 馬歯の部位、記号、並びに各部の名称 G.G.SIMPSON [HORSES] (OXFORD UNIVERSITY) 1951、直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』(日本中央競馬会)1970、西中川駿策定『馬歯の測定部位』により、和名については原田俊治訳『馬と進化』1979による。
- 16 獣骨の名称 加藤嘉太郎 『家畜比較解剖図説(上巻)改訂増訂』1981、川田信平、醍醐正之『図説家畜解剖学(上巻)新改訂』1974による。
- 17 獣歯・獣骨の測定部位
〔馬歯・馬骨〕ANGELA VON DEN DRIESCH [A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES] (HARVARD UNIVERSITY) 1976により、J.U.DUERST BERN [METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG] 1926、林田重幸『日本在来馬の系統に関する研究』(日本中央競馬会)1978、直良信夫『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』1970を参考とした。
〔犬骨〕齊藤弘吉『犬科動物骨格計測法』1963、茂原信生『イヌの骨格および歯の計測方法』『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集 犬科動物資料カタログ』(東京大学総合資料館)1986による。
- 18 馬の体高区分について林田重幸は『日本在来馬の系統に関する研究』の中で「日本および東アジア地域の在来馬について小形馬群と中形馬群に大別し、体高について小形馬が105.0~122.0cm、中形馬が129.0~138.0cmの範囲にある」ことを述べている。
- 19 日本犬保存会 『日本犬の標準(審査規格)とその解説』『日本犬大観』1953 による小型犬、中型犬の体高区分を用いた。
- 20 馬の年齢区分については市井正次は『第6章年令』『馬学精説』1943の中で「5才以下を幼令、6才以上15~16才迄を壮令、17才以上を老令」としている。
- 21 土坑の深さは現状では64.0cmであるが墓地であるので地形の変化は少ないものと考えられる。墓地部の標高と調査時の遺構の標高から勘案すると深さ90.0cm位の穴が推定される。(踏の部分で深さ68.0cm) (調査所見による)
- 22 加藤嘉太郎 『第2章歯の構造と咀嚼との関係』『家畜の解剖と生理』1976
- 23 北昂 『第1章幼駒の解剖』『装蹄学』(日本装蹄師会)1967
- 24 宮崎重雄 『4 上栗須遺跡の馬骨』『上栗須遺跡、下大塚遺跡、中大塚遺跡』(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1989
- 25 直良信夫 『I-3 日本における馬の史的発達』『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』(日本中央競馬会)1970
- 26 林田重幸 『第4章中世の日本馬』『日本在来馬の系統に関する研究』(日本中央競馬会)1978
- 27 吉倉真は『塚原古墳群出土の馬歯』『塚原』(熊本県教育委員会)1975の中で「咬合面の狭いことは原的な1つの表徴」と述べている28 G.G.SIMPSON 著 原田俊治訳『馬と進化』1979の中で「歯冠の大きさと高さは植物食性と体の大きさに対する進化の現れである」と述べている。
- 29 萩原一族について、調査所見によれば「戦国時代武田氏が上野国へ進出した時武田氏の配下にいた人で、武将か侍か、どの程度の地位の人であったかは不明であるが、それ以来武士として中里見根岸地区を治めていた。現在萩原一族の子孫を名乗り本家と称する家が2軒あり、その本家の一つ、萩原重五郎氏が江戸時代の水帳(ミズチョウ、その地帯の水管理を記す)を所有しており、現在榛名町歴史資料館に保管している。墓地の現在の地権者は萩原平八郎氏と萩原勝次郎氏の2名の名義になっている。また且って墓地付近に住んでいた現在60才位の老人の話では「且って墓地付近に馬を埋葬した記憶はない」と言うことである。
- 30 山藤修一・大熊哲雄 『北関東における皮革を中心とする一仲買商人の活動について』『群馬文化 第207号』1986
- 31 長史頭彈左衛門は単に東日本の斃牛馬皮の取得・流通の頂点であったばかりでなく、永瀬康博は「第三章皮革供給と武器生産」『皮革産業の研究』1992の中で、「御役目相勲候覚」『彈左衛門由緒書』享保10年乙巳10月 一節を引用し、「御陣太鼓御用次第張上候事」とあるように太鼓の革張りも浅草彈左衛門の御役目の一つで、彈左衛門が武器製作の一端をになっていたことを述べている。
- 32 『IV遺構と出土遺物』『天田遺跡(II)』(高崎市教育委員会)1984

第2節 動物遺存体

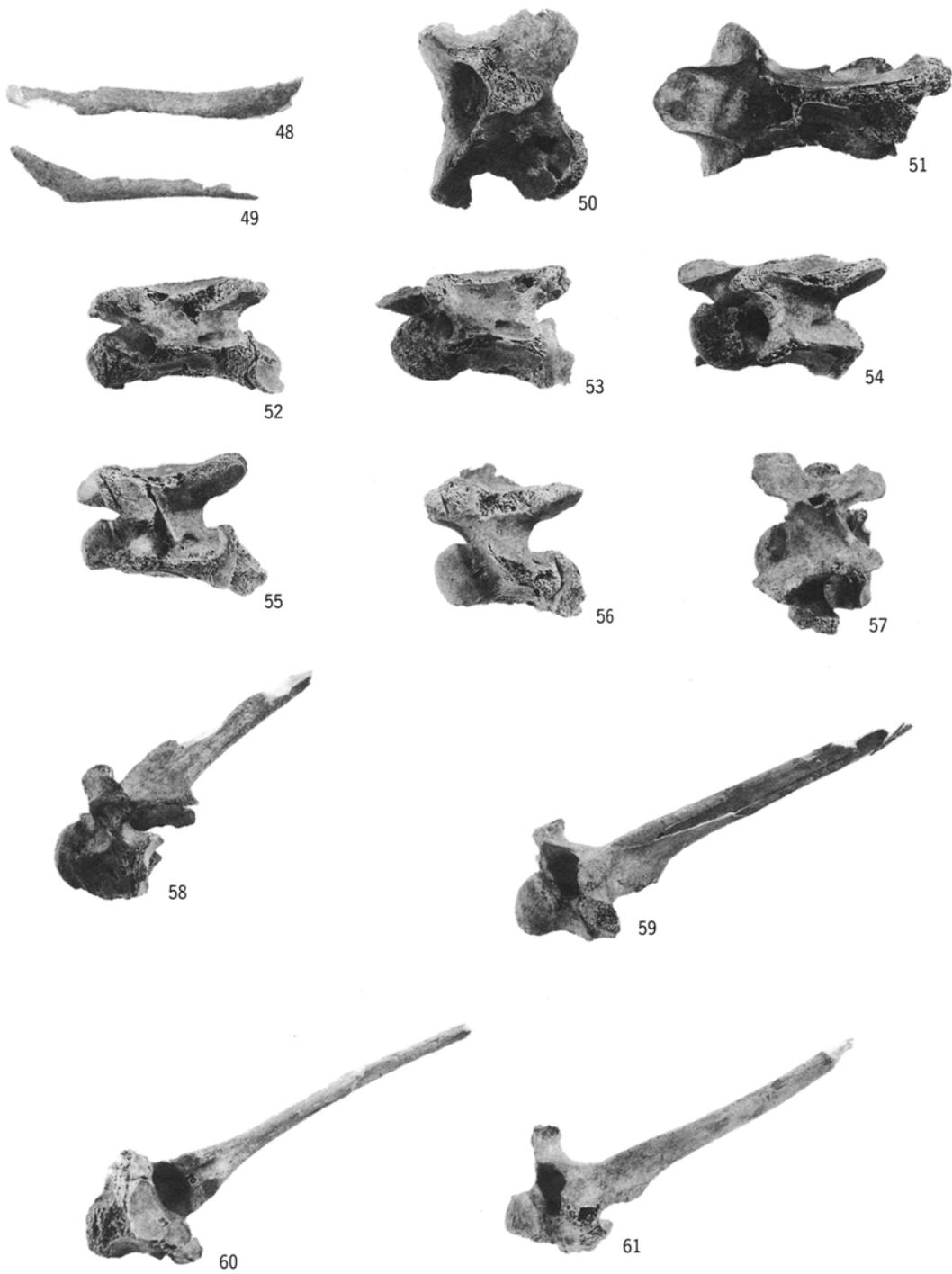
- 33 へい獣とは「へい獣処理場等に関する法律」昭23・7・12 の第1条この法律で「獣畜」とは、牛・馬・豚・めん羊及び山羊をいう。この法律で「へい獣」とは死んだ獣畜をいう。と定められている。
- 34 「家畜伝染病予防法」 昭26・5・31
- 35 「と畜場法」昭28・8・1の第9条何人も、と畜場以外の場所において食用に供する目的で獣畜をと殺してはならない。と定められている。
- 36 「へい獣処理場等に関する法律」 昭23・7・12 の第2条へい獣の解体、埋却若しくは焼却はへい獣取扱場以外の施設又は区域で、これを行ってはならない。但し（中略）都道府県知事の許可を受けた場合はこの限りではない。
- 37 川田信平、醍醐正之 「1-1 背椎 椎骨の一般的形態」『図説 家畜比較解剖学（上巻）新改訂』1974
- 38 東京大学農学部獣医解剖学教室 助教授 伊東信夫
- 39 日本中央競馬会競走馬総合研究所 首席研究役 及川正明



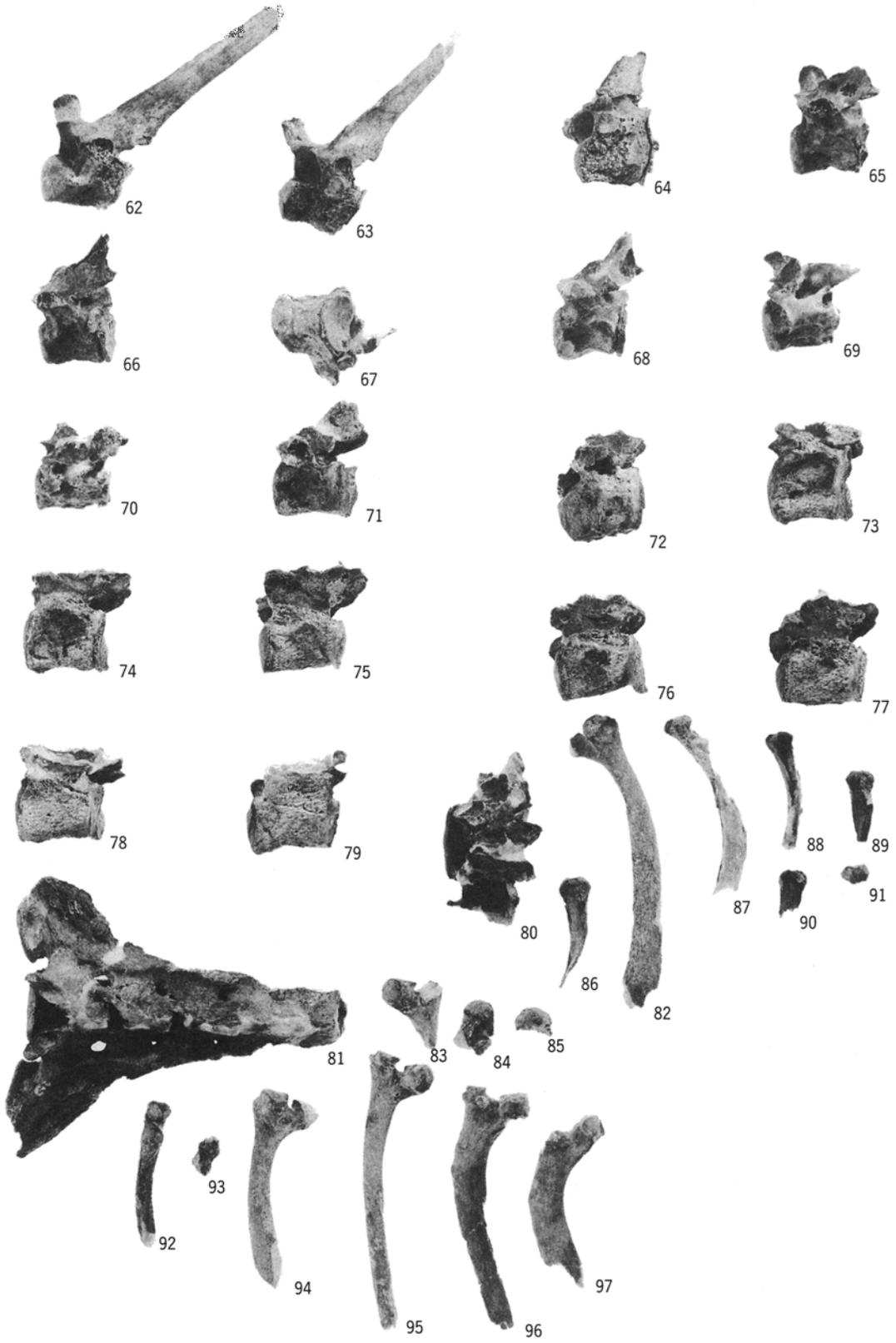
附写真2



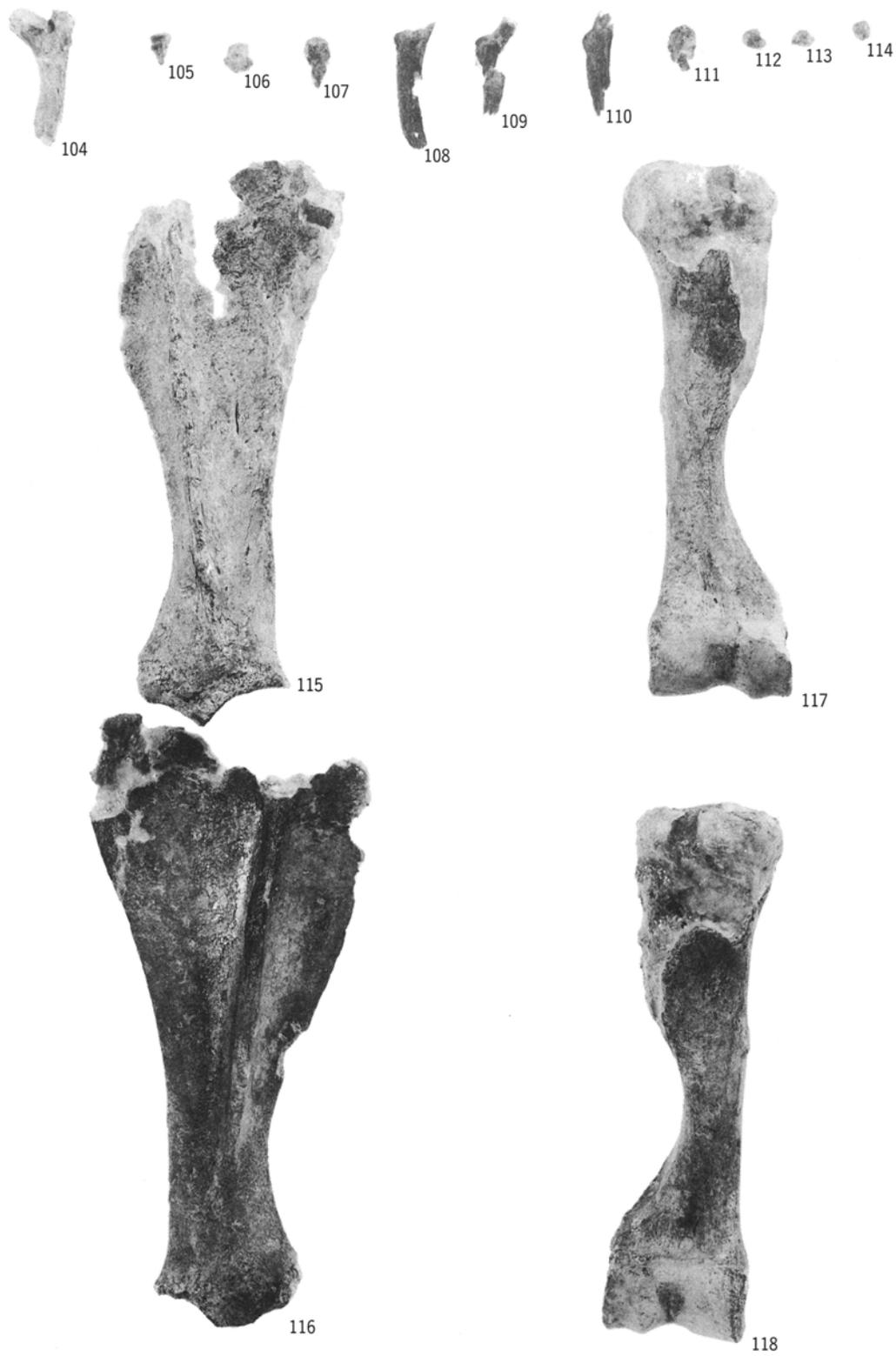
附写真3



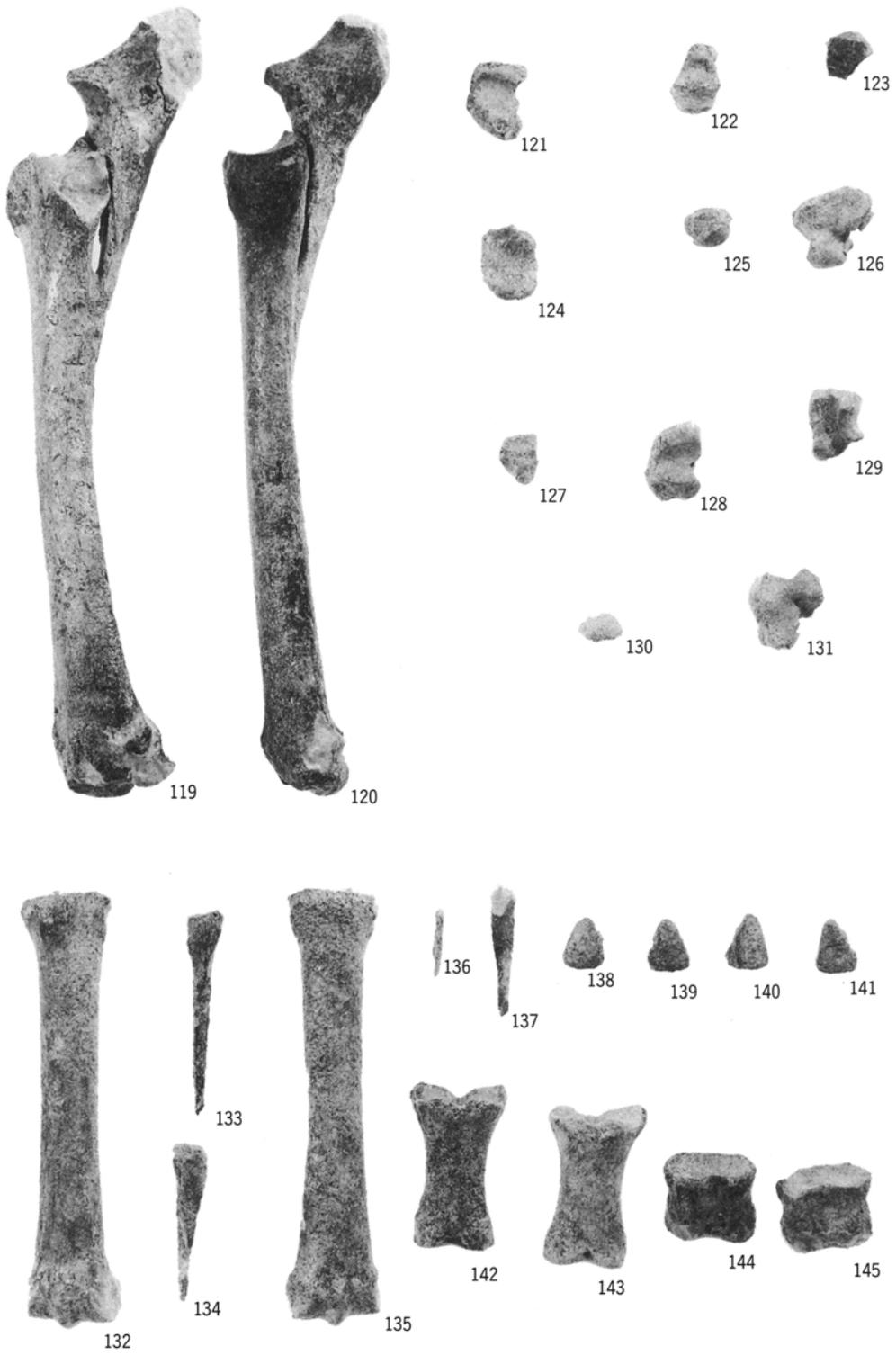
附写真 4



附写真 5



附写真 6



附写真7



附写真 8



附写真 9

第2項 中里見原遺跡・上里見井ノ下遺跡出土人骨

群馬県立自然史博物館学芸課 梶崎 修一郎

はじめに

中里見原遺跡は群馬県群馬郡榛名町大字中里見字原及び同根岸に、また、上里見井ノ下遺跡は同大字中里見字井ノ下及び同大字上里見字猪ノ下と猪ノ毛山に位置する。これらの遺跡は、北陸新幹線（現在の長野行き新幹線）の建設に伴い、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が中里見原遺跡では平成4（1992）年から平成6（1994）年にかけて三次にわたって、また上里見井ノ下遺跡では平成5（1993）年から平成6（1994）年にかけて三次にわたって行われた。

この2つの遺跡の内、中里見原遺跡より4基の土壌墓が、上里見井ノ下遺跡より3基の土壌墓が発見され、それぞれ人骨が出土した。なお、これら合計7基の土壌墓の時代は、出土した遺物より、1603年以降の近世（江戸時代）に属すると考えられている。

以下に、これらの出土人骨について2つの遺跡に分けて報告する。なお、人骨の計測はマルティン[MARTIN]の方法に従い（馬場、1991）、歯の計測は藤田の方法に従った（藤田、1949）。

1. 中里見原遺跡出土人骨

中里見原遺跡では、第1号土壌墓・第2号土壌墓・第3号土壌墓・第4号土壌墓の4基より、人骨が出土している。時代は、副葬品より4基すべてが近世に比定されている。

(1) 第1号土壌墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、全長約1m・幅約75cm・深さ約50cmの楕円形の土壌墓より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の出土部位は、ほぼ、全身に及ぶ。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

被葬者の頭位は、人骨の出土位置より南東である。埋葬状態は、仰臥屈葬である。

④被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないことより、被葬者の個体数は1個体と推定される。



写真1 中里見原遺跡第1号土壌墓出土人骨出土状況（西から撮影）

⑤被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、前頭結節及び後頭結節が認められ、乳様突起も小さい。また、寛骨を観察すると、大座骨切痕の角度が大きく耳状面前溝が認められる。さらに、四肢骨の計測値も小さいため、総合的に被葬者の性別は、女性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

頭蓋骨の主要縫合を観察すると、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ（人字）縫合の3縫合のすべてが、内板及び外板共に開放の状態であり癒合していない。この状態からは、約30歳以下と推定される。一方、蝶後頭軟骨結合は癒合しており、この状態からは21歳以上と推定される。また、切歯縫合は消失しており、約30歳代と推定される。

ところが、歯の咬耗度を観察すると、右側歯列の歯では象牙質が露出して面を形成しているのに対し、左側歯列では象牙質が点状に露出している。そうすると、右側歯列からは約40歳代と、また左側歯列からは約30歳代と推定される。しかしながら、この右側歯列は、異常摩耗であると推測される（別項参照）ので、年齢指標にはなりえない。したがって、左側歯列の歯の咬耗度及び上記の状態から総合し

て、被葬者の死亡年齢は、約30歳代と推定される。

⑦被葬者の生前の身長

出土人骨の四肢骨は破損しているが、かろうじて、右上腕骨及び右脛骨の最大長を計測することができた。右上腕骨の最大長は266mmであり、右脛骨の最大長は307mmであった。この最大長から身長を推定すると、右上腕骨からは約144.6cm・右脛骨からは約145.4cmという結果が得られた。この2つの結果を平均して、被葬者の生前の身長は約145cmであると推定される。

北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm[最大167.2cm、最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm、最小137.6cm]である(平本、1972)。したがって、本個体は江戸時代人女性として、平均的な身長を有していたことになる。

⑧頭蓋骨の特徴

・頭蓋長幅示数

本個体の頭蓋骨は、頭蓋最大長が183mmで、頭蓋最大幅が132mmであり、頭蓋長幅示数は72.1で長頭となる。通常、江戸時代人骨は男性が中頭で、女性が短頭に近い中頭である場合が多く、その意味で本個体は珍しいと言える。

・頭蓋長高示数

本個体の頭蓋骨は、頭蓋最大長が183mmで、バジオン・プレグマ高が119mmであり、頭蓋長高示数は65.0で低頭となる。通常、江戸時代人骨は男性及び女性共に高頭である場合が多く、その意味で本個体は珍しいと言える。

⑨歯の病変とその他の特徴

・歯石

本個体には、ほとんどの歯に歯石の付着が認められた。

・歯の生前喪失

本個体には、歯の生前喪失が認められる。その部位は、下顎左第1大臼歯であり、歯槽部は閉鎖し歯槽退縮が認められる。

・歯の齶触(虫歯)

本個体には、俗に虫歯と呼ばれる齶触が多く認められた。上顎では、左第2切歯の唇側面の歯頸部に、下顎では右第2小臼歯の近心面歯頸部・同第1大臼歯の遠心面歯冠部崩壊・同第3大臼歯の頰側歯冠部崩壊、左第2大臼歯の頰側面から遠心面の歯頸部・同第3大臼歯の頰側面歯頸部である。

・下顎部の根尖膿瘍

本個体の、下顎右第1大臼歯の頰側近心根の尖端部に、根尖膿瘍によると考えられる骨の溶解が認められる。

・歯の異常摩耗

歯の咬耗度を観察すると、右側歯列の歯では象牙質が露出して面を形成しているのに対し、左側歯列では象牙質が点状に露出している。つまり、本個体は、右側の歯を主に使い、左側の歯をあまり使わなかったと推定される。しかしながら、右側の歯特に下顎の右側歯には齶触(虫歯)が多く認められる。これが、逆であれば、齶触で痛む歯をかばって逆側で嚙んだとも推定されるが、本個体の場合は逆であるためにそのような状況は想定されない。

そうすると、本個体の場合は、何らかの理由で右側の歯を使って皮革をなめしたか、樹皮をしごいて繊維にする作業を行ったことが推定される。ちなみに、「咬耗」とは咀嚼・咬合によるものを言い、「摩耗」とは咀嚼以外の器械的作用による硬組織の消耗を言う(鈴木、1964)ので、本個体の場合、歯に異常摩耗が認められるということになる。

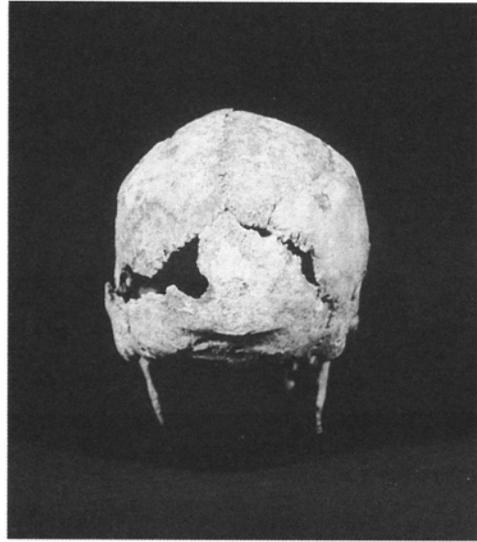
⑩妊娠痕

・耳状面前溝

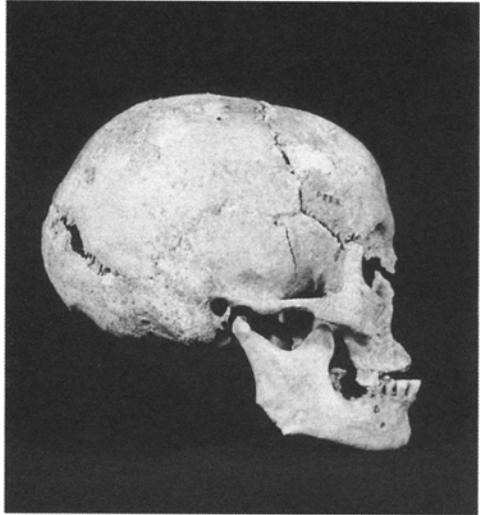
寛骨には、耳状面前溝が認められる。この耳状面前溝は、男性には認められず女性のみ認められ、経産婦であることを示している。本個体の場合、この耳状面前溝には、明瞭な妊娠痕が2ヶ所認められる。このことから、被葬者は、少なくとも2人の子供を妊娠あるいは出産した経産婦であると推定される。



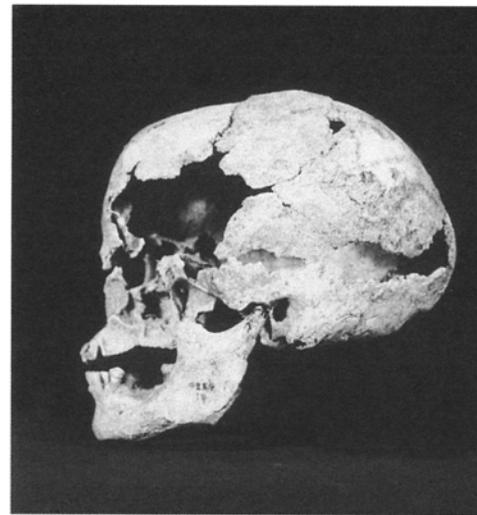
前面観



後面観



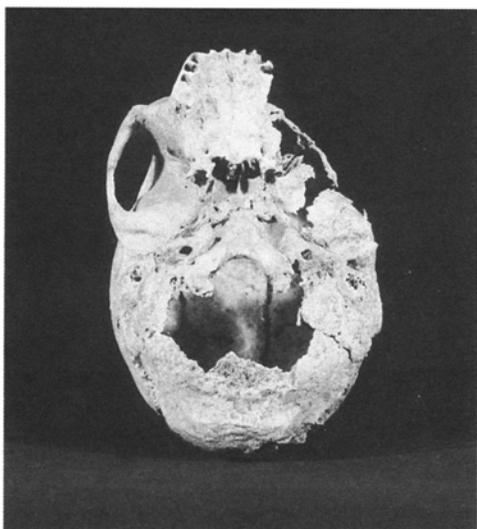
右側面観



左側面観



上面観



下面観

写真2 中里見原遺跡第1号土墳墓出土人骨頭蓋骨

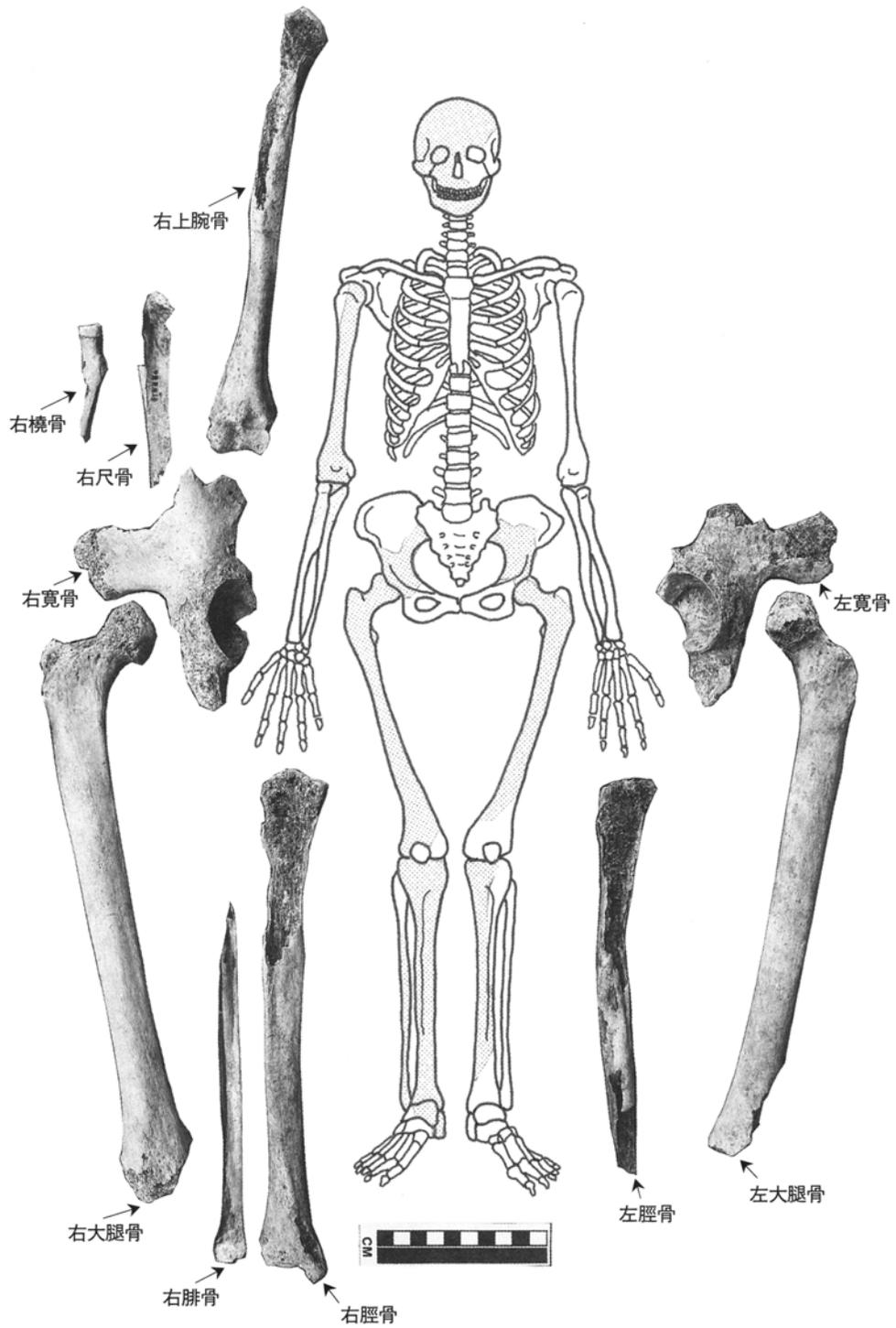


写真3 中里見原遺跡第1号土壙墓出土人骨四肢骨



写真4 中里見原遺跡第1号土壙墓出土人骨寛骨内側面観(左:右寛骨、右:左寛骨)

(2) 第2号土壙墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、幅約85cm～95cmの不整円形の土壙墓より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の出土部位は、ほぼ全身に及ぶ。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

被葬者の頭位は、人骨の出土位置より北である。埋葬状態は、仰臥屈葬である。

④被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないことから、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

頭蓋骨を観察すると、眉弓の発達・眼窩上縁部の円み・乳様突起の発達・側頭線の発達が認められる。また、寛骨の大座骨切痕の角度が小さいため、被葬者の性別は男性と推定される。



写真5 中里見原遺跡第2号土壙墓出土人骨出土状況(東から撮影)

⑥被葬者の死亡年齢

頭骨の主要3縫合である、前頭縫合・矢状縫合・ラムダ(人字)縫合を観察すると、3縫合共、内板はすべて癒合している。また、眼窩内の蝶前頭縫合・頬骨前頭縫合・蝶頬骨縫合の3縫合共、癒合しており痕跡的である。歯は上顎ではすべて生前脱落しており、歯槽が閉鎖している。さらに、口蓋縫合では、切歯縫合は癒合しており、正中口蓋縫合は肉眼で確認でき、横口蓋縫合は痕跡的である。以上を総合して、被葬者の死亡年齢は、約50歳代と推定される。

なお、歯は3本が残存しているが、咬耗度は低い。これは、上顎の歯が先に喪失したために、咀嚼による咬耗がおきずに咬耗が少なかったと推定される。

⑦被葬者の生前の身長

生前の身長は、良く残存している右上腕骨から約151cm・右大腿骨から約152cm・左大腿骨から約150cm・右脛骨から約151cm・左脛骨から約151cmと推定されたので、約150cm～151cmであったと推定される。

北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm[最大167.2cm、最小147.2cm]・同女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm、最小137.6cm]である(平本、1972)。本個体は、江戸時代人男性としては、平均身長よりも約6cmから7cmも下回り、小柄である。

⑧頭蓋骨の特徴

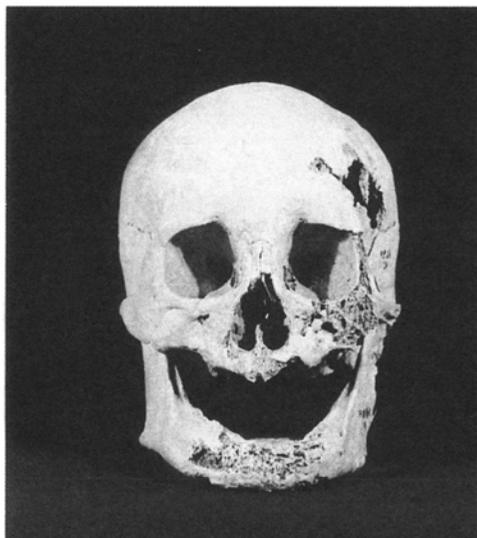
本個体の頭蓋骨は、歯が生前喪失することにより歯槽が吸収されており、ほぼ無歯顎の状態になっている。したがって、その影響により、頭蓋計測値及び示数にまで影響が及んでいる。

・頭蓋長幅示数

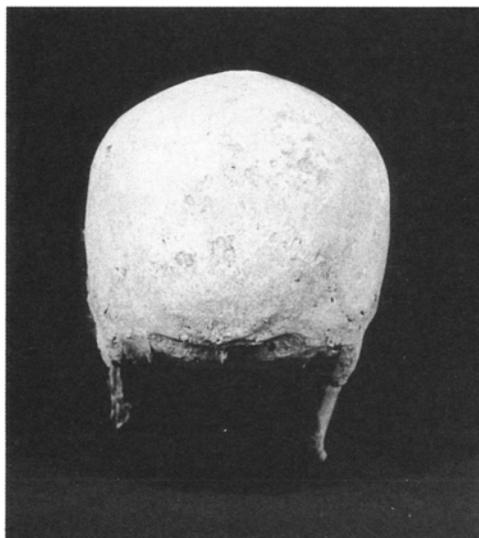
本個体の頭蓋骨は、頭蓋最大長が176mmで、頭蓋最大幅が143mmであり、頭蓋長幅示数は81.3で短頭となる。通常、江戸時代人骨は男性が中頭で、女性が短頭に近い中頭である場合が多く、その意味で本個体は進歩的である。

・頭蓋長高示数と頭蓋幅高示数

本個体の頭蓋骨は、頭蓋長高示数が73.9と中頭である。また、頭蓋幅高示数が90.9と平頭である。



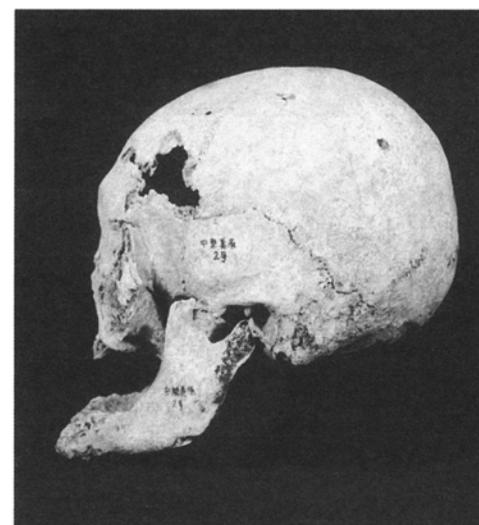
前面観



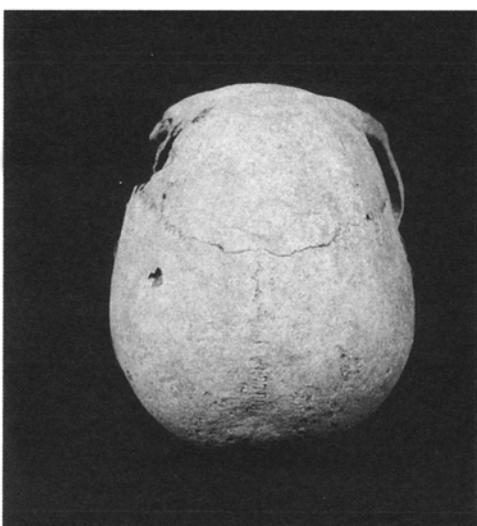
後面観



右側面観



左側面観



上面観



下面観

写真6 中里見原遺跡第2号土墳墓出土人骨頭蓋骨

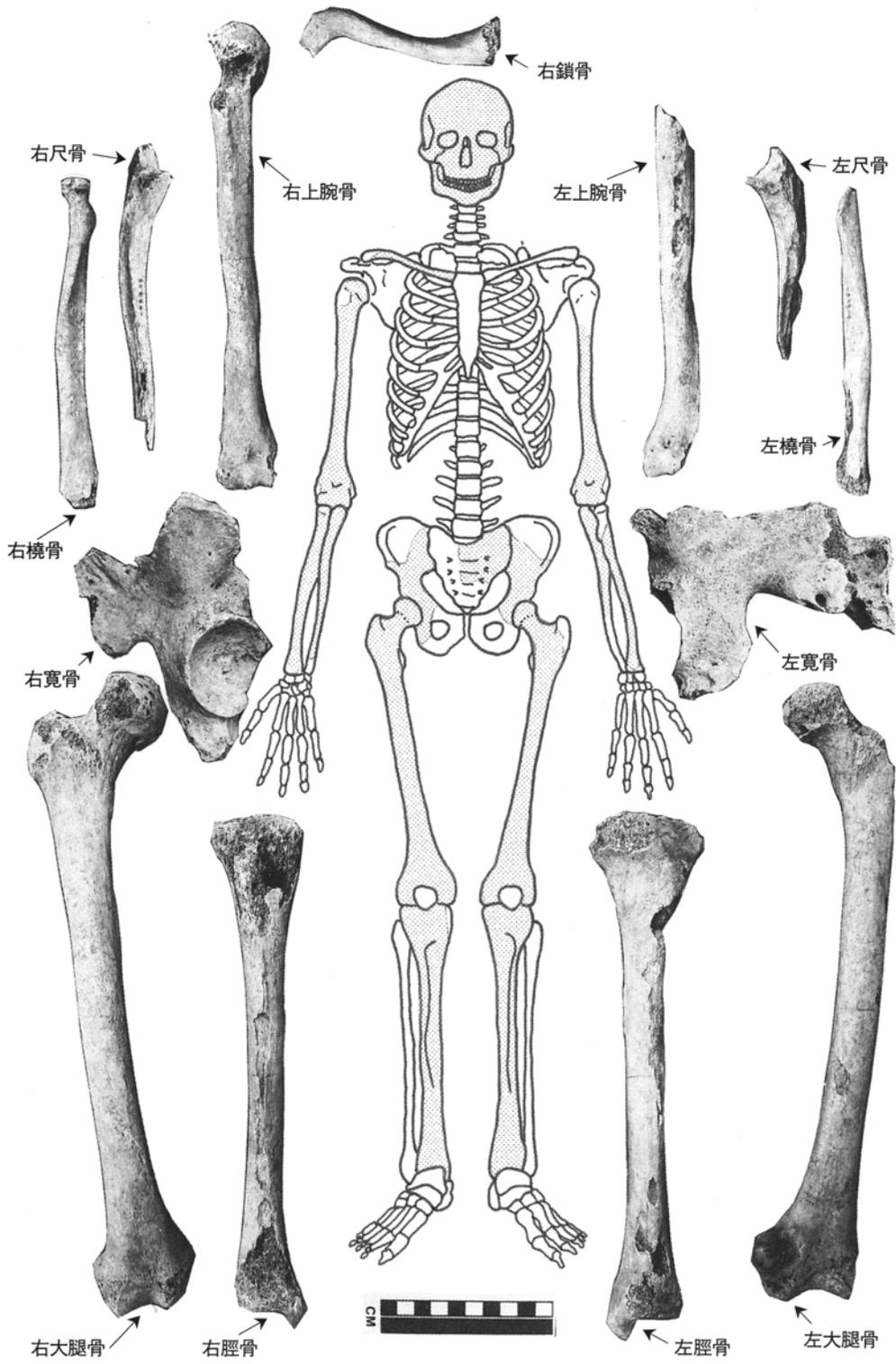


写真3 中里見原遺跡第2号土壙墓出土人骨四肢骨

⑨老年性変化

本個体の仙骨と左寛骨は、老年性変化により癒合している。ただし、右寛骨とは癒合していない。また、脊椎骨にも骨棘が認められた。

(3) 第3号土壌墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、幅約60cm～80cmの隅丸方形の土坑墓より出土している。

②人骨の出土部位

人骨の出土部位は、ほぼ全身に及ぶ。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

被葬者の頭位は、人骨の出土位置より南西である。埋葬状態は、仰臥屈葬である。

④被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないことから、被葬者の個体数は1個体と推定される。



写真8 中里見原遺跡第3号土壌墓出土人骨出土状況
(東から撮影)

⑤被葬者の性別

被葬者の性別は、寛骨の大座骨切痕の角度が大きくその他の特徴より、男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度より、被葬者の死亡年齢は約30歳代と推定される。ちなみに、この個体には上顎と下顎の第3大臼歯4本の内、上顎左第3大臼歯を除く3本が未萌出であるが、X線検査を行ったところ、この3本とも先天性欠如であることが判明した。

⑦被葬者の生前の身長

良く保存されていた左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨の最大長から、藤井の式を用いて被葬者の生前

の身長を推定した(藤井、1960)。右大腿骨から152.7cm・左大腿骨から151.8cm・右脛骨から154.5cm・左脛骨から154.7cm・右腓骨から153.6cm・左腓骨から153.8cmという結果を得た。これは、151.8cm～154.7cmという結果になる。しかしながら、通常、信頼性が高いのは大腿骨であるため、被葬者の生前の身長は、約152cmであると推定される。

北里大学の平本嘉助による右大腿骨を使用した研究では、江戸時代人男性の平均身長は157.1cm[最大167.2cm・最小147.2cm]・女性の平均身長は145.6cm[最大157.1cm、最小137.6cm]である(平本、1972)。本個体は、江戸時代人男性としてはやや身長が低いものの、変異の中に含まれる。

⑧頭蓋骨の特徴

本個体の頭蓋骨は、全体的に華奢で、男性でありながら女性的である。

・頭蓋長幅示数

本個体の頭蓋骨は、頭蓋最大長が182mmで、頭蓋最大幅が140mmであり、頭蓋長幅示数は76.9で中頭となる。通常、江戸時代人骨は男性が中頭で、女性が短頭に近い中頭である場合が多く、その意味で本個体は典型的な江戸時代人骨である。

・顔示数と上顔示数

本個体の頭蓋骨のコルマン顔示数は、91.4と高顔で狭顔である。また、コルマン上顔示数は、51.6と中上顔である。通常、江戸時代人骨の男性の顔示数は、中顔である。また、上顔示数の場合、男女共に中上顔である。

・眼窩示数

本個体の頭蓋骨の眼窩示数は、94.6と高眼窩である。通常、江戸時代人骨は、男女共に中眼窩である。

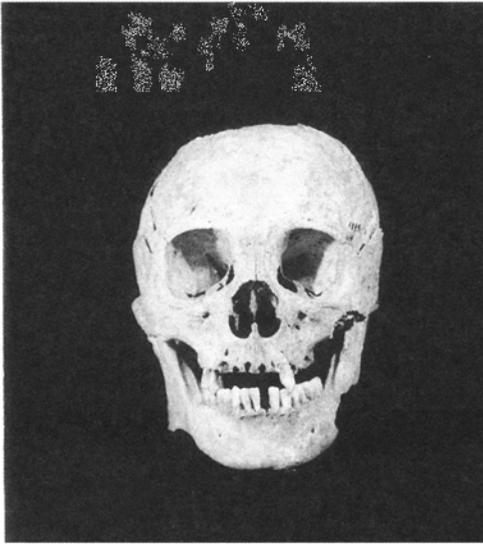
・鼻示数

本個体の頭蓋骨の鼻示数は、58.3と過広鼻である。通常、江戸時代人骨は、男女共に中鼻である。

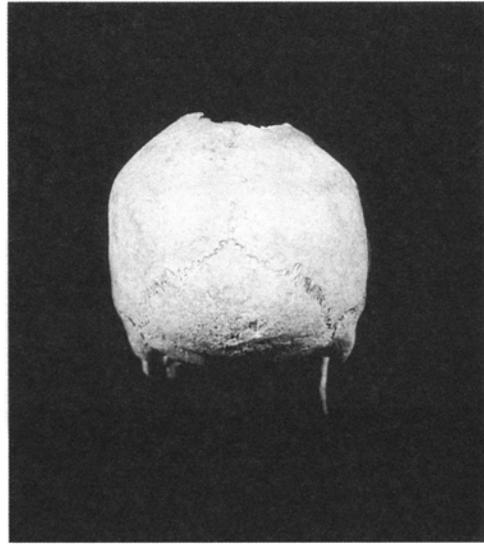
(4) 第4号土壌墓出土人骨

①人骨の出土状況

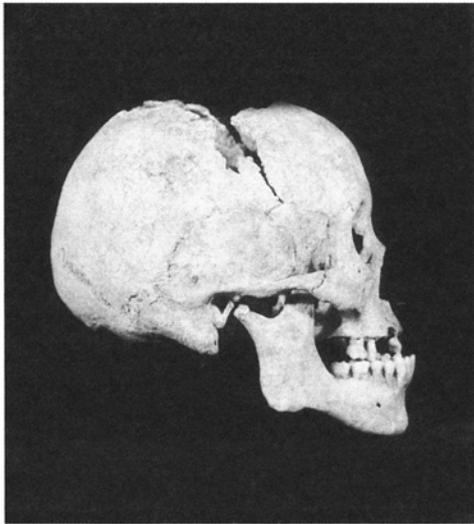
人骨は、幅約70cm～80cmの楕円形の土坑墓より出土している。



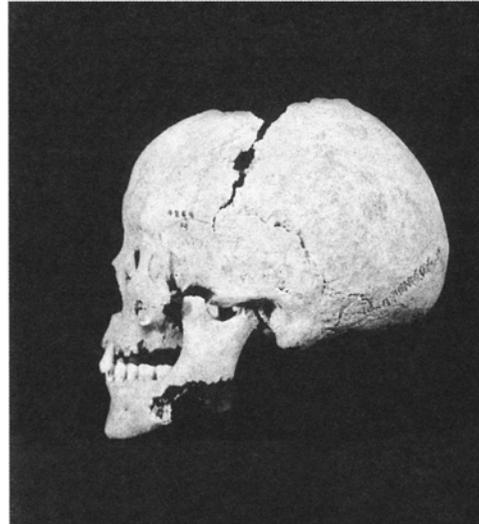
前面観



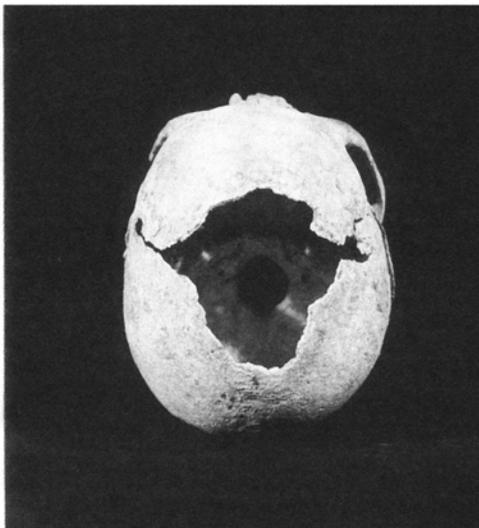
後面観



右側面観



左側面観



上面観



下面観

写真9 中里見原遺跡第3号土墳墓出土人骨頭蓋骨

②人骨の出土部位

人骨の出土部位は非常に少なく、頭蓋骨及び四肢骨の一部が若干残存しているのみである。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

出土した人骨が少なく、確かなことはわからないが、恐らく座葬にして、後に改葬したものと推定される。



写真11 中里見原遺跡第4号土壙墓出土人骨出土状況
(北から撮影)



写真12 中里見原遺跡第4号土壙墓出土人骨頭蓋骨上面観

④被葬者の個体数

出土人骨の残存量は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

被葬者の性別は、頭蓋骨の眉弓の発達や寛骨の大座骨切痕の角度が狭い等の特徴より、男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度より、被葬者の死亡年齢は約30歳代と推定される。この推定は、残存している頭蓋骨の冠

状縫合や矢状縫合が内板及び外板の両方とも閉鎖していないことから支持される。

2. 上里見井ノ下遺跡出土人骨

上里見井ノ下遺跡では、第12号土壙墓・第13号土壙墓・第14号土壙墓の3基より、人骨が出土している。時代は、副葬品より3基すべてが近世に比定されている。

(1) 第12号土壙墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、幅約63cm～69cmの正方形の土壙墓より、木棺に埋葬されて出土している。

②人骨の出土部位

出土人骨は、頭蓋骨片・歯・四肢骨片等が残存している。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

頭位は不明であるが、頭部は西側から出土している。また、埋葬状態は木棺内で座葬であった可能性が高い。出土人骨の残存量が少ないため、埋葬した後に、改葬した可能性がある。

④被葬者の個体数

出土人骨の残存量は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

被葬者の性別は、頭蓋骨は厚さも薄くその形態も女性的であるが、歯が比較的大きく一部残存している脛骨の大きさが大きいので男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

被葬者の死亡年齢は、歯の咬耗度より、約30歳代と推定される。

(2) 第13号土壙墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、幅約78cm～81cmの不整形の土壙墓より出土している。

②人骨の出土部位

出土人骨は、頭蓋骨片・遊離歯・四肢骨片が出土

している。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

被葬者の頭位は不明である。また、埋葬状態は座葬と推定される。出土人骨の残存量が少ないため、埋葬した後に、改葬した可能性がある。

④被葬者の個体数

出土人骨の残存量は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推定される。

⑤被葬者の性別

被葬者の性別は、残存している人骨の大きさが比較的大きいため、男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

残存している頭蓋骨の冠状縫合及び矢状縫合は、内板も外板も閉鎖しておらず、被葬者の死亡年齢は約20歳代から約30歳代と推定される。しかしながら、頭蓋縫合の閉鎖状態は個体差が大きいため、あまり確かではなく目安程度である。

歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出するブローカの2度である。したがって、被葬者の死亡年齢は約30歳代と推定される。

⑦歯の古病理

下顎左第2大臼歯の咬合面には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕が認められた。この齲蝕は、象牙質にまで達している。

(3) 第14号土壙墓出土人骨

①人骨の出土状況

人骨は、長軸約1m・短軸約50cm以上の楕円形の土壙墓より出土している。

②人骨の出土部位

出土人骨は、頭蓋骨片・四肢骨片が出土している。

③被葬者の頭位及び埋葬状態

被葬者の頭位は不明である。また、埋葬状態は屈葬と推定される。出土人骨の残存量が少ないため、埋葬した後に、改葬した可能性がある。

④被葬者の個体数

出土人骨の残存量は少ないが、明らかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体と推

定される。

⑤被葬者の性別

被葬者の性別は、残存している骨の大きさが比較的大きいため、男性と推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

歯の咬耗度より、被葬者の死亡年齢は約40歳代と推定される。

まとめ

中里見原遺跡の4基の土壙墓及び上里見井ノ下遺跡の3基の土壙墓より、それぞれ土葬人骨が1体ずつ合計7体出土した。これらの人骨の概略は表1に一覧化させた。

中里見原遺跡では、4基の土壙墓から土葬人骨が出土した。第1号土壙墓には身長が約145cmで約30歳代の女性が、第2号土壙墓には身長が約150cm～151cmで約50歳代の男性が、第3号土壙墓には身長が約152cmで約30歳代の男性が、第4号土壙墓には約30歳代の男性が埋葬されたと推定された。第1号土壙墓出土女性人骨には、歯に異常摩耗が認められ、皮革をなめしたか樹皮をしごいて繊維にする作業を行ったことが推定された。また、同人骨には耳状面前溝が存在し、妊娠痕も2ヶ所認められたため、少なくとも2人の子供を妊娠あるいは出産した経産婦であると推定された。また、第2号土壙墓出土男性人骨は、ほとんどの歯を生前喪失した無歯顎に近い状態であり、しかも、左寛骨と仙骨が癒合した老年性変化が認められた。第3号土壙墓出土男性人骨は、頭蓋骨が非常に華奢であり、女性的である。

上里見井ノ下遺跡では、3基の土壙墓から土葬人骨が出土した。第12号土壙墓には約30歳代の男性が、第13号土壙墓には約30歳代の男性が、第14号土壙墓には約40歳代の男性が埋葬されたと推定された。

引用文献

- 藤田恒太郎 1949 歯の計測基準について、「人類学雑誌」、61：1-6
権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67：151-163
MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum monographs No.9, National Science Museum

表1 出土人骨概略一覧表

遺跡	番号	個体数	性別	死亡年齢	身長	備考
中里見原	1号墓	1個体	女性	約30歳代	約145cm	妊娠痕あり
	2号墓	1個体	男性	約50歳代	約150~151cm	上顎は無歯顎
	3号墓	1個体	男性	約30歳代	約152cm	華奢で女性的
	4号墓	1個体	男性	約30歳代	不明	
上里見井ノ下	12号墓	1個体	男性	約30歳代	不明	
	13号墓	1個体	男性	約20~30歳代	不明	
	14号墓	1個体	男性	約40歳代	不明	

表3 中里見原・上里見井ノ下遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	中里見原遺跡						上里見井ノ下						江戸時代人*				現代日本人**	
		1号墓		2号墓		3号墓		4号墓		12号墓		13号墓		♂	♀	♂	♀		
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右								
I 1	MD	欠損	欠損	脱落	脱落	7.9	7.9	—	—	—	—	—	—	8.78	8.38	8.67	8.55		
	B/L	欠損	欠損	脱落	脱落	6.6	6.6	—	—	—	—	—	—	7.52	7.06	7.35	7.28		
	B/L	欠損	欠損	脱落	脱落	5.9	4.9	7.9	—	—	—	—	—	7.16	6.97	7.13	7.05		
I 2	MD	欠損	欠損	脱落	脱落	5.5	4.7	—	—	—	—	—	—	6.74	6.33	6.62	6.51		
	B/L	欠損	欠損	脱落	脱落	7.5	7.5	—	—	—	—	—	—	8.01	7.60	7.94	7.71		
	B/L	欠損	欠損	脱落	脱落	7.7	7.7	—	—	—	—	—	—	8.66	8.03	8.52	8.13		
P 1	MD	5.6	7.0	脱落	脱落	7.0	7.1	—	—	—	—	—	—	7.41	7.23	7.38	7.37		
	B/L	9.0	8.9	脱落	脱落	8.4	8.7	—	—	—	—	—	—	9.67	9.33	9.59	9.43		
	B/L	5.7	欠損	脱落	脱落	6.4	6.4	—	—	—	—	—	—	7.00	6.82	7.02	6.94		
P 2	MD	8.7	欠損	脱落	脱落	8.3	8.2	—	—	—	—	—	—	9.55	9.29	9.41	9.23		
	B/L	12.2	欠損	脱落	脱落	10.6	麟蝕	—	—	—	—	—	—	10.61	10.18	10.68	10.47		
	B/L	脱	脱落	脱落	脱落	9.7	9.4	—	—	—	—	—	—	9.88	9.48	9.91	9.74		
M 2	MD	脱落	欠損	脱落	脱落	10.9	10.9	—	—	—	—	—	—	12.5	11.5	12.00	11.85	11.31	
	B/L	脱落	欠損	脱落	脱落	欠如	欠損	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	B/L	脱落	欠損	脱落	脱落	欠如	欠損	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
M 3	MD	5.5	5.5	不明	不明	5.3	5.2	—	—	—	—	—	—	5.45	5.32	5.48	5.47		
	B/L	5.9	5.7	不明	不明	5.5	5.7	—	—	—	—	—	—	5.78	5.65	5.88	5.77		
	B/L	6.4	6.1	不明	不明	6.0	6.0	—	—	—	—	—	—	6.09	5.97	6.20	6.11		
I 2	MD	6.4	6.8	不明	不明	5.8	6.0	—	—	—	—	—	—	6.29	6.11	6.43	6.30		
	B/L	7.0	7.1	不明	不明	6.5	6.6	—	—	—	—	—	—	7.06	6.69	7.07	6.68		
	B/L	7.0	7.4	不明	不明	7.5	7.4	—	—	—	—	—	—	8.04	7.39	8.14	7.50		
P 1	MD	破損	7.1	不明	不明	6.9	6.8	—	—	—	—	—	—	7.32	7.05	7.31	7.19		
	B/L	7.7	7.6	不明	不明	7.3	7.5	—	—	—	—	—	—	8.34	7.89	8.06	7.77		
	B/L	7.0	7.1	欠損	欠損	7.5	7.7	—	—	—	—	—	—	7.45	7.12	7.42	7.29		
P 2	MD	7.0	8.3	欠損	欠損	8.0	8.1	—	—	—	—	—	—	8.0	8.68	8.30	8.53		
	B/L	8.2	8.3	欠損	欠損	10.9	11.0	—	—	—	—	—	—	11.9	11.72	11.14	11.72		
	B/L	麟蝕	脱落	11.1	欠損	10.7	11.0	—	—	—	—	—	—	11.3	11.15	10.62	10.89		
M 1	MD	11.0	脱落	10.0	10.3	10.1	10.0	—	—	—	—	—	—	11.2	11.39	10.78	11.30		
	B/L	欠損	麟蝕	欠損	不明	10.8	10.8	—	—	—	—	—	—	10.8	10.75	10.21	10.53		
	B/L	欠損	10.5	欠損	不明	9.5	9.5	—	—	—	—	—	—	10.8	10.75	10.21	10.53		
M 3	MD	麟蝕	10.9	不明	9.0	欠如	欠如	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	B/L	麟蝕	10.4	不明	8.3	欠如	欠如	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	B/L	麟蝕	10.4	不明	8.3	欠如	欠如	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

註1:計測値の単位は、すべて「mm」である。
 註2:齒種は、I 1(第1切歯)・I 2(第2切歯)・C(犬歯)・P 1(第1小臼歯)・P 2(第2小臼歯)・M 1(第1大臼歯)・M 2(第2大臼歯)・M 3(第3大臼歯)を意味する。
 註3:MD(歯冠近遠心径)・B/L(歯冠管類直径)を意味する。
 註4:「欠損」は、歯が出土していないために計測できなかったことを示す。
 註5:「破損」は、歯冠が破損しているために計測できなかったことを示す。
 註6:「麟蝕」は、歯が生前脱落しているために歯冠が崩壊しており計測できなかったことを示す。
 註7:「脱落」は、歯が生前脱落しているために計測できなかったことを示す。
 註8:「欠如」は、歯が先天的に欠如しているために計測できなかったことを示す。
 註9:「不明」は、上顎骨・下顎骨が破損しており、欠損・脱落の判定ができなかったことを示す。
 註10:「歯石」は、歯石が付着しているために計測できなかったことを示す。
 註11:「*」は、MATSUMURA(1995)より引用。なお、同論文にはM3(第3大臼歯)のデータは無い。
 註12:「**」は、権田(1959)より引用。

表2 中里見原遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

計測項目 (Martin's No.)	中里見原遺跡出土人骨		江戸時代人*		現代人**	
	第1号墓 (女性)	第2号墓 (男性)	♂	♀	♂	♀
1 脳頭蓋最大長	83mm	176mm	175.4mm	175.4mm	178.9mm	170.8mm
8 脳頭蓋最大幅	183mm	143mm	139.8mm	136.8mm	140.3mm	135.9mm
8 : 1 頭蓋長幅示数	71.2 (119mm)	81.3 (80mm)	76.9	78.1	78.5	79.7
17 : 1 頭蓋長幅示数	65.0	73.9	137.5mm	133.3mm	138.1mm	132.5mm
17 : 1 頭蓋長幅示数	90.2	90.9	75.6	97.5	77.3	77.7
9 : 10 横前頭頂頭蓋幅	—	90mm	94.5mm	93.2mm	91.0mm	91.0mm
9 : 8 横前頭頂頭蓋幅	—	—	117.4mm	114.0mm	115.9mm	113.7mm
9 : 10 横前頭頂頭蓋幅	—	—	80.8	80.5	81.5	81.5
9 : 8 横前頭頂頭蓋幅	—	—	67.7	67.0	66.4	66.9
11 頭頂底長	97mm	95mm	101.9mm	97.7mm	100.4mm	95.6mm
11 頭頂底長	126mm	131mm	126.2mm	120.9mm	124.9mm	118.8mm
12 最大後頭頂頭蓋幅	107mm	111mm	109.9mm	105.8mm	108.4mm	104.2mm
12 : 8 頭頂底長幅示数	81.1 (103mm)	77.6 (76.4)	(76.6)	(76.6)	77.3	76.8
13 乳球突起幅	—	35mm	104.0mm	99.2mm	102.4mm	97.6mm
16 大後頭頂頭蓋幅	—	29mm	35.9mm	34.6mm	35.0mm	33.7mm
16 : 7 大後頭頂頭蓋幅	—	82.9	83.4	82.1	85.2	84.4
23 水平周長	450mm	510mm	520.2mm	503.3mm	513.7mm	493.7mm
24 横弧長	282mm	298mm	313.1mm	313.8mm	324.2mm	313.2mm
25 正中矢状弧長	—	360mm	373.4mm	361.1mm	371.7mm	357.6mm
26 正中前頭頂頭蓋幅	105mm	120mm	126.7mm	123.7mm	127.4mm	122.1mm
27 正中前頭頂頭蓋幅	121mm	130mm	127.7mm	123.9mm	125.1mm	121.0mm
28 正中後頭頂頭蓋幅	—	110mm	119.2mm	113.0mm	119.9mm	114.3mm
27 : 26 矢状前頭頂頭蓋幅示数	115.2	108.3	101.1	100.7	98.6	98.9
28 : 26 矢状前頭頂頭蓋幅示数	101mm	108mm	94.2	91.4	93.6	93.9
30 前頭頂底長	108mm	113mm	111.4mm	111.2mm	111.8mm	108.6mm
31 後頭頂底長	—	95mm	99.1mm	96.8mm	100.4mm	97.0mm
40 後長	96mm	(84mm)	99.3mm	96.7mm	97.2mm	94.4mm
40 : 5 額示数	99.0	88.4	97.6	98.6	96.6	99.0
41 側頭頂長(右側)	71mm	73mm	71.3mm	72.7mm	71.3mm	72.7mm
42 下眼窩長	101mm	111mm	98.8mm	95.9mm	96.1mm	99.6mm
43 上眼窩長	—	—	98mm	104.8mm	101.2mm	100.1mm
43 : 1 内眼窩間幅	—	—	92mm	91.2mm	90.8mm	90.8mm
45 額骨弓幅(推定)	(134mm)	(140mm)	135.4mm	126.1mm	132.9mm	124.9mm
47 頭高	108mm	(116mm)	118.0mm	—	123.8mm	115.0mm
48 上頭高	66mm	(68mm)	66.2mm	66.6mm	70.7mm	67.1mm
47 : 45 コルマン示数	(80.6)	(82.9)	88.3	—	93.1	92.2
48 : 45 コルマン示数	(49.3)	(48.6)	51.1	53.0	53.3	53.8
9 : 45 額弓前頭頂示数	101.5	(97.9)	97.2	92.8	69.4	72.4
45 : 8 頭頂幅示数	—	—	18.8mm	18.2mm	18.7mm	20.0mm
48(1) 歯槽突起高	—	—	43.2mm	42.0mm	42.7mm	41.1mm
51 眼窩高(右側)	38.0mm	37.0mm	34.4mm	34.9mm	34.3mm	33.8mm
52 眼窩高(左側)	36.0mm	33.0mm	34.4mm	34.3mm	34.3mm	33.8mm
52 : 51 眼窩示数	94.7	89.2	79.5	83.3	80.4	82.4
54 鼻高	—	26.0mm	26.2mm	25.1mm	25.0mm	24.5mm
55 鼻高	—	(49.0mm)	52.5mm	49.5mm	52.0mm	49.0mm
54 : 55 鼻示数	—	53.1	49.9	50.9	48.4	50.2
60 上顎歯槽長	55.0mm	(45.0mm)	53.3mm	52.4mm	52.4mm	50.3mm
61 上顎歯槽幅	61.0mm	(56.0mm)	66.5mm	64.8mm	65.8mm	61.7mm
61 : 60 上顎歯槽突起示数	—	124.4	110.9	123.1	126.0	123.2
61(2) : 61 上顎歯槽幅	—	—	38.0mm	43.4mm	40.8mm	39.9mm
61(2) : 61 上顎歯槽幅	—	—	62.3	65.1	65.3	63.8
62 口蓋長	50.0mm	(40.0mm)	45.0mm	44.8mm	44.0mm	42.7mm
63 口蓋長	—	—	40.0mm	40.9mm	40.7mm	38.4mm
63 : 62 口蓋示数	—	—	88.9	91.2	90.9	90.4
68 下顎長	—	—	72.0mm	76.5mm	71.4mm	—
65(1) 筋突起幅	45.0mm	(104.0mm)	102.5mm	95.8mm	97.2mm	92.6mm
67 前下顎幅	—	—	47.0mm	47.8mm	44.7mm	—
69 顎高	27.0mm	—	33.0mm	34.5mm	32.5mm	33.2mm
70 顎高	(55.0mm)	—	55.0mm	68.2mm	58.3mm	62.6mm
71 枝幅	37.0mm	35.0mm	33.0mm	35.4mm	31.1mm	33.1mm
71 : 70 下顎枝示数	(67.3)	63.6	60.0	52.0	51.3	54.1
71(2) : 下顎切歯幅	—	—	35.0mm	35.7mm	33.9mm	33.9mm

註1:第2号墓出土人骨の計測値は、無歯顎による人骨の連結の影響を受けていることに留意された。
 註2: * 鈴木(1967)より引用。
 註3: ** 森田(1950)より引用。

表4 中里見原遺跡出土人骨四肢骨計測値及び比較表

計測部位 計測項目 腕骨	中里見原遺跡出土人骨				江戸時代人骨*				現代人**	
	第1号墓 [女性]	第2号墓 [男性]	第3号墓 [男性]	第3号墓 [男性]	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1 上腕骨最大長	266	279	—	—	296.8	269.7	295.9	272.4	—	—
5 中央最大径	19	—	(20)	—	22.7	19.6	22.4	19.7	—	—
6 中央最小径	14	—	(17)	—	17.7	14.9	17.7	14.7	—	—
6・5 体断面示数	73.7	—	(85.0)	—	78.3	76.6	79.6	75.1	—	—
6 b 中央横径	18	—	(18)	—	—	—	—	—	—	—
6 c 中央矢状径	19	—	(21)	—	—	—	—	—	—	—
7 a 中央周	60	—	(62)	—	—	—	—	—	—	—
14 肘頭窩幅	21	—	(22)	—	27.3	24.4	27.0	24.3	—	—
腕骨	右	左	右	左	右平均値	右平均値	右平均値	右平均値	—	—
1 a 骨頭粗面距離	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3 骨体最小周	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4 (1) 骨体横径	—	—	—	—	41.6	34.5	40.5	34.7	—	—
4 (2) 骨体横径	—	—	—	—	17.5	16.6	14.4	14.6	—	—
5 (1) 骨頭矢状径	—	—	—	—	20	21.6	18.5	21.4	—	—
5 (6) 下端幅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6 (1) 上端幅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7 (1) 肘頭鈎状突起距離	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13 骨体上横径	—	—	—	—	23	23.9	—	—	—	—
大 腿 骨	右	左	右	左	右平均値	右平均値	右平均値	右平均値	—	—
1 大腿骨最大長	—	—	—	—	24	21.2	18.5	20.5	17.2	—
7 骨体中央矢状径	24.5	25	30	—	393	386	391	413.8	377.9	381.8
6 骨体中央横径	26.5	24	26	—	26	27	26	27.4	24.1	26.3
6・7 体中央断面示数	92.5	104.2	115.4	—	96.3	96.3	103.9	103.1	105.4	107.3
9 骨体上横径	31	30	32	—	33	31	30.7	26.5	31.0	27.9
10 骨体上矢状径	21	20.5	25	—	21.5	22.5	27.8	25.5	25.6	22.4
10・9 体上断面示数	67.7	68.3	78.1	—	65.2	72.6	91.2	97.3	82.2	80.9
15 頸垂直径	25	—	34	—	30	31	32.5	28.3	33.6	28.1
16 頸矢状径	21	16	27	—	21.5	21	25.8	23.7	27.4	23.1
16・15 頸断面示数	84.0	—	79.4	—	71.7	67.7	79.5	84.1	81.2	82.0
18 頭垂直径	37	—	46	—	—	44	46.5	40.9	46.4	40.2
19 頭横径	—	—	—	—	43	45.9	40.2	46.1	40.1	—
19・18 頭断面示数	—	—	—	—	97.7	98.8	98.9	99.5	99.9	—
脛 骨	右	左	右	左	右平均値	右平均値	右平均値	右平均値	右平均値	右平均値
1 a 脛骨最大長	306	—	312	313	325	327	331.2	301.5	325.3	298.3
3 最大上端幅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4 粗面位最大矢状径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6 最大下端幅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7 下端矢状径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8 中央最大矢状径	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9 中央横径	17.5	—	21.5	22.5	—	—	—	—	—	—
9・8 中央断面示数	64.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8 a 榮葉孔位最大径	—	—	—	—	29	30.5	32.9	28.8	31.8	29.0
9 a 榮葉孔位横径	—	—	—	—	21	22	23.7	21.2	25.1	22.5
9 a・8 a 榮葉孔位断面示数	—	—	—	—	72.4	72.1	72.2	73.6	78.3	77.3

註1. 示数以外の計測値の単位は、すべて「mm」である。
 註2. () は、推定中央部の数値
 * : 速藤・北條・木村 (1967) より引用
 ** : 上腕骨 [西原(1953)]・橈骨 [鹿名(1951)]・尺骨 [鹿名(1951)]・大腿骨 [大場(1950)]・脛骨 [鈴木(1961)]より引用

表5 中里見原遺跡出土人骨頭蓋骨非計測的形質観察表

観察項目	中里見原遺跡出土人骨			
	第1号墓 [女性]	第2号墓 [男性]	第3号墓 [男性]	第3号墓 [男性]
1. 前頭縫合	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
2. 眼窩上神経溝	右 痕跡的に有り	右 有り	右 有り	左 無し
3. 眼窩上神経	右 無し	右 有り	右 有り	左 有り
4. ラムダ小骨	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
5. インカ骨	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
6. 横後頭縫合痕跡	右 無し	右 破損	右 無し	左 無し
7. アステリオン小骨	右 無し	右 破損	右 無し	左 無し
8. 後頭乳突縫合骨	右 無し	右 破損	右 無し	左 無し
9. 頭頂切痕骨	右 無し	右 破損	右 無し	左 無し
10. 頭頂開存	右 破損	右 破損	右 有り	左 有り
11. 前額突起	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
12. 第三後頭額	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
13. 舌下神経管二分	右 棘突起有り	右 無し	右 無し	左 無し
14. 鼓室骨裂開	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
15. 卵円孔棘孔連続	右 無し	右 破損	右 無し	左 無し
16. 内側口蓋管骨橋	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
17. 横顔骨縫合痕跡	右 無し	右 破損	右 破損	左 破損
18. 頸静脈孔二分	右 有り	右 無し	右 無し	左 有り
19. 矢状溝左折	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し
20. 顎舌骨神経管	右 無し	右 無し	右 無し	左 無し

註: 「破損」は、骨が破損しており観察不能であることを示す。

表6 中里見原・上里見井ノ下遺跡出土歯非計測的形質観察表

歯種	中里見原遺跡											
	1号墓		2号墓		3号墓		4号墓		12号墓		13号墓	
非計測的形質	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
I 1	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
上顎	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
I 2	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
P 1	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
M 1	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
下顎	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
M 2	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
4 咬頭	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落
	欠損	欠損	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落	脱落

註1. 歯種は、I 1 (第一切歯)・I 2 (第二切歯)・P 1 (第一小臼歯)・M 1 (第一大臼歯)・M 2 (第二大臼歯)を意味する。
 註2. 「欠損」とは、歯が出土していないことを示す。
 註3. 「脱落」とは、歯が咬頭により観察できなかったことを示す。
 註4. 「脱落」とは、歯が生前脱落しており観察できなかったことを示す。
 註5. 「欠損」とは、歯が齧蝕により歯冠が崩壊しており観察できなかったことを示す。
 註6. 「欠損」とは、歯が矮小変形歯の円錐歯であり、観察できなかったことを示す。

第3節 植物遺存体

第1項 中里見中川遺跡出土の種実同定

株式会社パレオ・ラボ 吉川純子

試料について

試料はすべて現地取り上げ試料として、水洗後、同定を依頼された。試料は、5区の1号溝(平安時代)と4区の2号土坑の縄文時代中期頃の堆積物の上層、中層、下層より採取されている。試料は同定後、ガラス瓶に入れ、50%アルコールで保管、もしくは水で保管されている。

同定結果と若干の考察

植物遺体は分類群別に同定し、個数を産出部位別に数えて、表1に示してある。破片になった遺体に、重要な意味を持つと考えたものについては、破片を別に示してある。

次に層位ごとに産出した分類群を検討する。

① 縄文時代中期の土坑から産出した大型植物遺体

2号土坑の上層からは、オニグルミを多量に産出している。完全な形のもの、げっ歯類による食痕のあるものもあるが、圧倒的に半形に叩いて割ったようなひび割れが見られるものが多い。おそらく、ヒトが石を用いて、叩いた跡と思われ、核の上下に割れた跡があり、内部にも縦に鋭いひびが入っている。ほかに食用にされるものとしては、トチノキ、クリ、モモを産出している。他に産出した分類群は、ノブドウ、ミズキ、クマノミズキ、コナラ、フジ属、アサダ、イヌシデ、サンショウ、カラスザンショウ、ミツバウツギ、サクラ属、ムクノキ、クサギ、クマヤナギ属、ミクリ属、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボク、アカメガシワを産出している。これらはいずれも周辺に生育していたと思われる。ミクリ属は水域に生育する、抽水生の草本である。

2号土坑中層からは、やはりオニグルミを多量に産出している。また、オニグルミの変種である、ヒメグルミも産出している。ここではほかに、トチノキ、コナラ、ホオノキ、ムクノキ、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボク、ミズキ、クマノミズキ、サクラ属、クヌギ、ミツバウツギ、サンショウ、アカメガシワ、フジ属、クマヤナギ属を産出している。

2号土坑下層からは、オニグルミだけが多量に採取されている。ここでも圧倒的に人為的に割ったものと思われる核が大半を占める。

2号土坑では、オニグルミを食用として処理したあとの、廃棄場所と思われる。遺体の保存が良いので、廃棄当時から水が貯っていたようである。このような水の貯る場所になぜ捨てるのかは疑問である。また、他で捨てられたものが、水流によって運ばれ、土坑に貯ったとも考えられるが、土坑の周囲に堆積していないようなので、可能性は少ない。

② 平安時代頃の溝から出土した大型植物遺体

平安時代の1号溝からは、食用にされるものとしては、クリ、モモ、オニグルミ、トチノキ、炭化米を産出した。特に、トチノキの種子の破片は多量に産出している。また、サンショウは僅かに産出している。ほかに、クヌギ、コナラ、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボク、クサギ、ミズキ、クマノミズキ、クマヤナギ属、ムクノキ、カラスザンショウ、カナムグラを産出した。1号溝のW5からは、ヒョウタンの果実を産出した。割れてしまっているが、一方に、刃物で切ったようなまっすぐな切口が認められる。1号溝の上層からはトチノキの種子の破片を多量に産出した。この溝から産出したトチノキの種子破片はすべて比較的大きさ

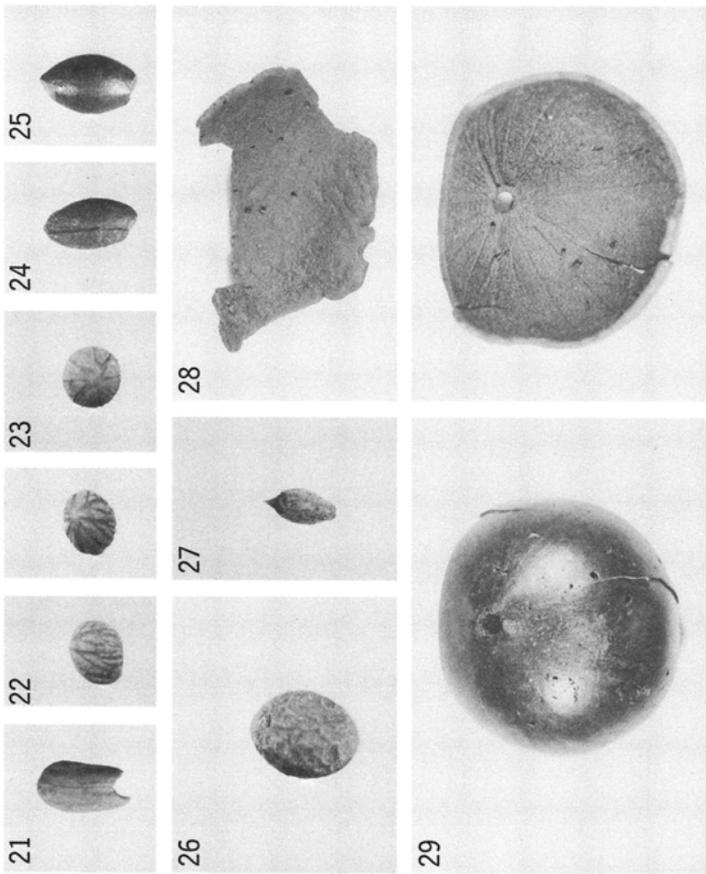
が揃っており、完形の種子のつぶれた跡などが見られないことから、トチノキの皮をむいて捨てた可能性も考えられる。トチノキは、食用とするにはあく抜きが必要で、溝に多量の種皮があったのは、むいてすぐ水さらしをするためであろう。

産出した分類群の記載

- オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核。内部に脂肪の多い、子葉があり、これを食用とする。
- ヒメグルミ *J.ailanthifolia* Carr. var.*cordiformis* (Maxim), Rehder. 核。オニグルミより小さく、心形で偏平、表面の模様はほとんどなく、つるつるしている。オニグルミの変種とも、品種とも言われるが、最近縄文時代にも産出例があり、検討が待たれる。
- イヌシデ *Carpinus tschonoskii* Maxim. 果実。翼を持った三角形の果実で、風で比較的遠くまで運ばれる遺体になっている果実は翼が取れている場合が多い。
- アサダ *Ostrya japonica* Sarg. 果実。イヌシデに比べると縦に長い果実である。
- コナラ *Quercus serrata* Thunb. 殻斗、幼果。殻斗は短い鱗片で覆われている。
- クヌギ *Q.acutissima* Carruth. 幼果。殻斗の鱗片が長い。
- コナラ属 *Quercus* 芽、果実破片。コナラ属の芽は上からみると五角形であるという、特徴がある。
- クリ *Castanea crenata* Sieb, et Zucc. 果実。食用にされ、栽培もされている。縄文時代でも半栽培が論じられている。
- ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. 内果皮。鳥が好んで食べる。
- カナムグラ *Humulus scandens* (Lour.) Merrill 種子。林縁などによく生育している、つる植物である。
- ホオノキ *Magnolia obovata* Thunberg 種子。高木になる、葉が大きい落葉樹である。
- モモ *Prunus persica* (Linn.)Batsch 核。食用とし、古くから栽培されている。
- サクラ属 *Prunus* 核。ここで産出したものは大変小さく、野生のものである。
- フジ属 *Wisteria* 芽。一枚の鱗片に覆われ、基部に一方が著しく膨らむ特徴がある。
- サンショウ *Zanthoxylum piperisum* (Linn.) DC. 核。堅くて黒く、細かい、揃った網目がある。
- カラスザンショウ *Z.ailanthoides* Sieb.e: Zucc. 核。サンショウに似るが、網目が大きく、ごつごつしている。
- アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell.Arg. 種子。球根で、全体に細かい棍棒状の突起がある。
- ミツバウツギ *Staphylea bumalda* (Thunb.)DC. 種子。褐色で光沢があり、一方にへこんだへそがある。
- トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 果実、種子、幼果、幼種子。果実は褐色で3片にわかれ、種子は上半はつやのある黒色、下半は淡褐色でつやがない。
- クマヤナギ属 *Berberchia* 核。褐色で2室になっている。
- ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. 種子。ブドウ属より横に太く、一本の溝は横幅が太い。
- ミズキ *Comus controversa* Hemsley 内果皮。やや深い溝が、縦にまんべんなくはいる。
- クマノミズキ *C.brachypoda* C A Mey. 内果皮。溝は浅く、8本が均等に並ぶ。
- エゴノキ *Sterax japonic* Sieb, et Zucc. 内果皮。3本のやや深い溝が縦にはいる。表面は細かい網目模様がある。やや、ざらつく。
- ハクウンボク *S.obassia* Sieb, et Zucc. 内果皮。エゴノキより太い感じで溝の間に3本の稜が目立つ。網目はエゴノキより細かくつやがある。
- コハクウンボク *S.shiraiana* Maxino 内果皮。大きさはエゴノキと同じで、表面はハクウンボクと同じである。
- クサギ *Clerodendron tichotomum* Thunb. 核。球を4等分した形で内側はへこんでいる。外側だけに、網目模様がある。
- ミクリ属 *Sparganium* 内果皮。宝珠を縦に伸ばした形である。
- イネ *Oryza sativa* L. 炭化胚乳。
- ヒョウタン *Lagenaria leucantha* Rusby var. *Gourda* Makino 果実。大きい破片であるが、一つには、茎が抜けた跡の穴がある。

表1 中里見中川遺跡から産出した大型植物化石一覧表

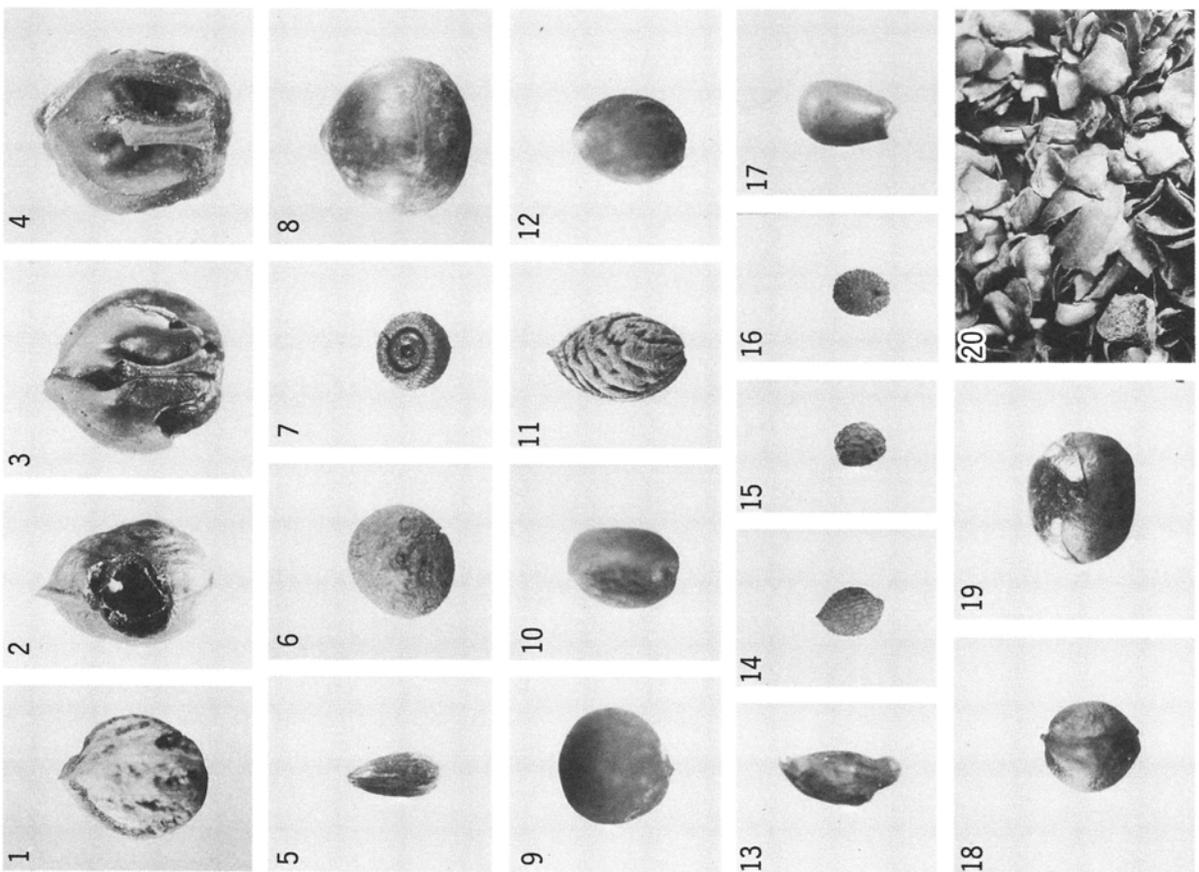
区 名 遺 構 名		4 区			5 区		
		2号土坑			1号溝		
分類群名	産出部位	上層	中層	下層	覆土	上層	W5
オニグルミ	完形核	7	7	3			
	完形食痕	1	1	3			
	半形	3	1		1		
	半形食痕	2	1	10			
	半形割跡	131	81	109	3		
	破片大	102	52	187			
ヒメグルミ	半形割跡		1				
イヌシデ	果実	1				2	
アサダ	果実	2				2	
コナラ	殻斗	90	110			1	
	幼果	620	1045			1	
クヌギ	幼果		2			1	
	芽	10	8				
コナラ属	果実破片	2					
	果実					1	
クリ	果実					1	
	果実破片	3					
ムクノキ	内果皮	2	14			1	
カナムグラ	種子					2	
ホオノキ	種子		1				
モモ	核	1				2	
サクラ属	核	2	30			16	
フジ属	芽	8	13				
サンショウ	内果皮	10	2			6	
カラスザンショウ	内果皮	3				2	
アカメガシワ	種子	1	2				
ミツバウツギ	種子	2	2				
トチノキ	果実破片	5	5			7	
	幼果	22	12			12	
	種子破片	4	5			多	多
	幼種子	6				3	
クマヤナギ属	核	36	66			4	
	種子	1					
ミズキ	内果皮	126	171			28	
クマノミズキ	内果皮		301			194	
エゴノキ	内果皮	94	23			56	
ハクウンボク	内果皮	112	53			35	
コハクウンボク	内果皮	14	5			6	
クサギ	内果皮	8				4	
ミクリ属	内果皮	1					
イネ	炭化胚乳					1	
ヒョウタン	果実破片						3



図版1 中里見中川遺跡の大型植物遺体(1)

二重線は1cm、一重線は1mm 1~4 オニグルミ、核

1. 完形 2. 食痕 3. 割れ跡 4. 食痕 5. アサダ、果実 6. コナラ、殻斗
7. コナラ、幼果 8. クリ、果実 9. ムクノキ、内果皮



図版2 中里見中川遺跡の大型植物遺体(2)

二重線は1cm、一重線は1mm

10. ホオノキ、種子 11. モモ、核 12. サクラ属、核 13. フジ属、芽 14. サン
シヨウ、核 15. カラスザンショウ、核 16. アカメガシワ、種子 17. ミツバウツ
ギ、種子 18. トチノキ、果実 19. トチノキ、種子 20. トチノキ、種子破片
21. クマヤナギ属、核 22. ミズキ、内果皮 23. クマノミズキ、内果皮 24. エゴ
ノキ、内果皮 25. ハクウンボク、内果皮 26. クサギ、内果皮 27. ミクリ属、内
果皮 28. ヒヨウタン、果実 29. ヒヨウタン、果実

第2項 中里見遺跡群出土木材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ 松葉礼子・植田弥生

1 はじめに

群馬県群馬郡榛名町中里見に所在する中里見中川遺跡から出土した木材・炭化材と、上里見井ノ下遺跡から出土した炭化材について樹種を報告する。木材は、曲物、漆椀、鋏の柄、杭、板材等製品と、自然木、流木といった加工痕が見られない木材である。製品には明確な目的意図を持った遺物は少なく、大部分は「加工材」に近い製品である。時代は、出土した遺構との関係等から「縄文時代以前」～「中世以降」に相当すると考えられている。炭化材は、奈良～平安時代の鍛冶遺構から見つかった炭化材と炭焼窯から出土した炭化材である。

これらの遺物の樹種が明らかになることにより、遺物・遺構の性格を明らかにする一端となすことを目的として、樹種を同定した。

2 方法と記載

同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面(木口と同義・写真図版 a)、接線断面(板目と同義・写真図版 b)、放射断面(柁目と同義・写真図版 c)の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表1に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管されている。

3 結果と考察

調べた木材は、上里見井ノ下遺跡の縄文時代以前、縄文時代、弥生時代以前、弥生時代、平安時代、10世紀、中世以降の大まかに7時代に区分される製品と自然木等で、炭化材は、中里見中川遺跡では鍛冶炉と5区1号溝から出土した炭化材、上里見井ノ下遺跡では2, 4, 5, 8号炭焼窯から出土しており、時代はいずれも奈良～平安時代である。ここでは、木材は検出された樹種の変化を捉え、炭化材は鍛冶炉と炭焼窯の間に関連があるのかどうか検討する事とする(表2, 3)。

縄文時代以前、縄文時代、弥生時代以前の木材には、クリ、コナラ節、エノキ属、ヤマグワ、ノリウツギ、ニガキ、カエデ属、エゴノキ属、トネリコ属などの落葉広葉樹林を構成する樹種が確認されている。これらの木材は、立木、自然木、割材で加工痕がない製品もしくは、加工程度が低い製品であり、点数も比較的少ない。弥生時代になると、針葉樹のモミ属やクリ、ケヤキが確認される。モミ属は、針葉樹の中でも標高が低い地点にも分布していることや比重が軽く加工しやすい点から、関東の古墳時代では板材・大型の製品に頻繁に使用されている。しかし、通常は井戸枠材のような大型板状の製品に利用されることが多く、鋏の柄のような農具には、使用されることは少ない。他には、割材と加工材で材質が丈夫なケヤキが利用されている他、流木で河畔に多いヤナギ属が確認されている。

平安時代・10世紀では、製品として板状製品、杭、原木、皿等が出土している。標高の高い地域に生育するカラマツ属が確認されている事や保存性に優れたクリが杭に、挽物に適したケヤキが皿に使用されており、材質を考えた選択が見出だせる事が特徴である。流木には、クリや二次林の指標種とされているクヌギ節・コナラ節、ヤマグワ、ウコギ属が含まれており、伐採の痕跡が伺われるもののカラマツ属を除き落葉広葉樹林の構成樹種であることに変化はない。カラマツ属は、現在の日本では、カラマツのみが自生しており、本州中部の温帯上部から亜高山帯の標高1,000～2,500mに分布する樹種である。近世ではしばしば確認されることがあるが、平安時代に確認される事は少なく、木材の供給範囲が標高の高い部分にまで及んでいた可能性もある。10

表1 中里見中川遺跡出土木材樹種同定結果

整理番号	樹種	W	No	出土位置	種別	時代	整理番号	樹種	W	No	出土位置	種別	時代
実測 1	スギ	杭	23	2区1号杭列	杭	中世以降	参考 98	ケヤキ	W	4	5区1号溝	流木	10世紀
実測 2	ヒノキ	杭	22	2区1号杭列	杭	中世以降	参考 100	クリ	木	36	4区3号溝	流木	平安時代
実測 3	モモ	木	4	2区2号杭列	杭	中世以降	参考 101	コナラ節	木	12	4区3号溝	流木	平安時代
実測 4	ヒノキ	木	5	2区2号杭列	杭	中世以降	参考 102	コナラ節	木	13	4区3号溝	流木	平安時代
実測 5	スギ	木	6	2区2号杭列	杭	中世以降	参考 103	ニシキギ属	木	25	4区3号溝	流木	平安時代
実測 7	クリ	木	2	2区2号杭列	杭	中世以降	参考 104	クスギ節	木	31	4区3号溝	流木	平安時代
実測 8	スギ	杭	24	2区1号杭列	杭	中世以降	参考 105	モミ属	木	16	2区西4面	板状	弥生時代?
実測 9	クスギ	木	4	4区3号溝	流木	平安時代	参考 106	ウコギ属	木	15	4区3号溝	流木	平安時代
実測10-1	クリ	杭	8	4区1号溝	杭	平安時代	参考 107	ケヤキ	W	12	5区1号溝	板状	10世紀
実測10-2	クリ	杭	8	4区1号溝	杭	平安時代	参考 123	トチノキ	サンプル		中里見中川	不明	不明
実測 15	クリ	杭	5	4区1号溝	杭?	平安時代	参考 124	クリ	サンプル		中里見中川	不明(自然木?)	不明
実測 16	モモ	杭	9	4区1号溝	杭	平安時代	参考 125	トネリコ属 根	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
実測 17	クリ	杭	2	4区1号溝	杭	平安時代	参考 126	イヌエンジュ	サンプル		中里見中川	自然木	不明
実測 18	クリ	杭	2	4区1号溝	杭	平安時代	参考 127	コナラ節	サンプル		中里見中川	不明(板状?)	不明
実測 20	クリ	木	5	4区1号立木跡	自然木	不明(平安か)	参考 128	イヌエンジュ	サンプル		中里見中川	自然木	不明
実測 21	アサダ			4区3号溝	原木	平安時代	参考 129	コナラ節	サンプル		中里見中川	不明(板状?)	不明
実測 22	カマツ属	木	1	4区3号溝	板状	平安時代	参考 130	クリ	サンプル		中里見中川	不明(板状?)	不明
実測 23	クリ	杭	4	4区1号溝	割材	平安時代	参考 131	トネリコ属	サンプル	53	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
実測 25	クリ	木	33	4区3号溝	流木	平安時代	参考 132	ヤナギ属	サンプル	2	2区1号流木	流木	弥生時代?
実測 32	クリ	杭	6	4区1号溝	割材	平安時代	参考 133	モミ属	木	2	2区西4面	板状	弥生時代?
実測 33	クリ	杭	7	4区1号溝	杭	平安時代	参考 134	ヤマグワ	サンプル		中里見中川	不明	不明
実測 43	ケヤキ	木	48	4区3号溝	皿	平安時代	参考 135	不明	サンプル		中里見中川	不明	不明
実測 44	クリ	木	4	4区3号溝	流木	平安時代	参考 137	カエデ属	サンプル	55	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
実測 45	ヤマグワ	木	29	4区3号溝	原木?	平安時代	参考 138	ヤナギ属 枝?	サンプル		中里見中川	不明(自然木?)	不明
実測 54	クリ	杭	3	4区1号溝	杭	平安時代	参考 139	ヤナギ属	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
実測 56	クリ	サンプル		中里見中川	杭	不明	参考 140	トチノキ	サンプル		中里見中川	自然木	不明
実測 57	ヒノキ	サンプル		中里見中川	杭	不明	参考 141	コナラ節	サンプル		中里見中川	不明(自然木?)	不明
実測 69	ヒノキ属	杭	21	2区1号杭列	杭	中世以降	参考 142	トネリコ属?	サンプル	14	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
実測 72	モミ属	W	1	5区1号溝	曲物	10世紀	参考 143	ヤナギ属	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
実測 74	スギ?	杭	20	2区1号杭列	杭	中世以降	参考 144	トネリコ属	サンプル		6区1号立木跡?	立木?	縄文時代以前?
実測 75	クリ	杭 B		2区西3面	杭	弥生時代?	参考 145	トネリコ属	木	4	4区1号立木跡	流木?	不明(平安?)
実測 92	キリ	木	3	2区2号杭列	杭	中世以降	参考 146	ウコギ属	木	32	4区3号溝	流木	平安時代
実測 94	ケヤキ	木	14	4区3号溝	杭?	平安時代	参考 147	ケヤキ	W	10	5区1号溝	不明	10世紀
実測 121	サクラ属	木	1	2区1号土坑	漆椀	中世以降?	参考 148	トネリコ属	木	4	4区1号立木跡	流木?	不明(平安?)
実測 122	モミ属	木	17	2区4面	鎌の柄	弥生時代?	参考 149	トネリコ属	木	4	4区1号立木跡	流木?	不明(平安?)
参考 11	ヤマウルシ	木	6	4区1号立木跡	自然木	不明(平安?)	参考 150	トネリコ属	木	4	4区1号立木跡	流木?	不明(平安?)
参考 12	クスギ節	木	40	4区3号溝	流木	平安時代	参考 151	ノリウツギ	サンプル		6区1号立木跡?	立木?	縄文時代以前?
参考 13	クスギ節	木	5	4区3号溝	流木	平安時代	参考 152	ノリウツギ	サンプル	68	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
参考 14	クリ	木	2	2区1号土坑	杭?	中世以降	参考 153	クリ	木	19	4区3号溝	流木	平安時代
参考 19	ヤマグワ	木	4	4区2号土坑	自然木	縄文時代?	参考 154	モモ	木	7	4区3号溝	流木	縄文時代
参考 24	クスギ節	木	1	4区3号溝	流木	平安時代	参考 155	クリ	サンプル		4区1号土坑	不明(加工材?)	平安時代
参考 26	根材	木	18	4区3号溝	流木	平安時代	参考 156	クリ	サンプル		中里見中川	自然木?	平安時代
参考 27	フジ	木	3	4区1号立木跡	自然木	不明(平安?)	参考 157	クリ	サンプル		中里見中川	自然木	縄文時代?
参考 28	ヤマグワ	木	20	4区3号溝	流木	平安時代	参考 158	クリ	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 29	クスギ節	木	34	4区3号溝	流木	平安時代	参考 159	クリ	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 30	クスギ節	木	28	4区3号溝	流木	平安時代	参考 162	トネリコ属 根	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 31	モモ	木	1	4区1号土坑	自然木	縄文時代?	参考 164	トチノキ	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 34	コナラ節	木	2	4区2号土坑	自然木	縄文時代?	参考 165	コナラ節	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 35	エノキ属	木	3	5区C黒下	割材	弥生時代以前	参考 166	クリ	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 36	コナラ節	木	22	4区3号溝	流木	平安時代	参考 167	コナラ節	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 37	クスギ節	木	9	4区3号溝	流木	平安時代	参考 168	エゴノキ属	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 38	コナラ属	木	17	4区3号溝	流木	平安時代	参考 169	エゴノキ属	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 39	クスギ節	木	23	4区3号溝	流木	平安時代	参考 170	コナラ節	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 40	クスギ節	木	2	4区3号溝	流木	平安時代	参考 171	コナラ節	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 42	ヤマウルシ	木	6	4区3号溝	流木	平安時代	参考 172	ニガキ	サンプル	42	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
参考 46	エノキ属	木	1	4区2号土坑	自然木	縄文時代?	参考 173	クリ	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 47	ヤマグワ	木	30	4区3号溝	流木	平安時代	参考 177	ノリウツギ	サンプル	43	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
参考 48	クリ	木 A		4区1号溝	流木	平安時代	参考 178	コナラ節	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 49	散孔材A	木 B		4区1号溝	流木	平安時代	参考 186	コナラ節	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 50	クスギ節	木	45	4区3号溝	流木	平安時代	参考 187	ノリウツギ	サンプル	62	6区1号立木跡	立木	縄文時代以前
参考 51	ヤマグワ	木	26	4区3号溝	流木	平安時代	参考 188	トネリコ属 根	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 52	クスギ節	木	47	4区3号溝	流木	平安時代	参考 189	フジ	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 53	クスギ節	木	41	4区3号溝	流木	平安時代	参考 190	フジ	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 55	カマツ属			4区灰白色粘土中	自然木?	平安時代	参考 191	マツ属	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 65	不明	木	24	4区3号溝	流木	平安時代	参考 192	コナラ節	サンプル		中里見中川	自然木?	不明
参考 66	ヌルデ	木	21	4区3号溝	流木	平安時代	参考 193	クリ	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 67	カエデ属	木 A		4区2号溝	自然木	平安時代	参考 194	コナラ節	サンプル		中里見中川	自然木	不明
参考 68	ケヤキ	木	12	2区西4面	割材	弥生時代	参考 195	コナラ節	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 70	クスギ節	木	46	4区3号溝	流木	平安時代	参考 196	クリ	サンプル		4区1号土坑	自然木	縄文時代?
参考 73	カエデ属			5区1号溝	自然木?	10世紀	参考 197	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 76	ヤマグワ	W	14	5区1号溝	流木	10世紀	参考 198	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 77	ケヤキ	W	11	5区1号溝	流木	10世紀	参考 199	ヤナギ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 82	ニシキギ属?	W	3	5区1号溝	自然木?	10世紀	参考 200	ブナ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 84	ケヤキ	W	23	5区1号溝	自然木	10世紀	参考 201	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 87	モミ属	木	15	2区西4面	板状?	弥生時代?	参考 202	トチノキ	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 88	クスギ節	木	35	4区3号溝	流木	平安時代	参考 203	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 89	モモ	W	24	5区1号溝	流木	10世紀	参考 204	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 90	ケヤキ	W	22	5区1号溝	流木	10世紀	参考 205	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 91	アカガシ亜属	W	2	5区1号溝	流木	10世紀	参考 206	トネリコ属 根	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 93	ケヤキ	W	19	5区1号溝	流木	10世紀	参考 207	トネリコ属	サンプル		中里見中川	不明	不明
参考 95	ケヤキ	木	13	2区西4面	加工材?	弥生時代?	参考 208	不明 根	サンプル		中里見中川	不明	不明

第9章 理科学分析

◎ 同定根拠

○モミ属 *Abies* sp. PINACEAE

写真図版 1 a ~ 1 c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1~4個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも、常緑高木の針葉樹である。

○カラマツ属 *Larix* sp. PINACEAE

写真図版 2 a ~ 2 c

水平・垂直両樹脂道を共に持つ針葉樹材。樹脂道の周囲には8~9個のエピセリウム細胞があるがつぶれていて見えにくい。早材から晩材への移行は急で、年輪界は明瞭。早材部仮道管は、薄壁で大きい。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列のものと紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、放射柔細胞の垂直壁には単穿孔が数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型のトウヒ型で、1分野に2~4個。放射仮道管の内壁は通常平滑で断面形は丸い。

以上の形質より、マツ科のカラマツ属の材と同定した。日本に自生するカラマツ属は、カラマツのみである。カラマツは、落葉高木の針葉樹である。

○マツ属 *Pinus* sp. PINACEAE

写真図版 3 a ~ 3 c

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、腐抜のため、水平壁の肥厚の有無が確認できない。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1~2個。

以上の形質から、マツ科のマツ属の材と同定した。

○スギ *Cryptomeria japonica* (L.fil.) D.Don TAXODIACEAE

写真図版 4 a ~ 4 c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、晩材部が厚く、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の間に接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常1分野あたり2個存在する。

以上の形質より、スギ科のスギの材と同定した。スギは常緑の針葉樹で、本州~屋久島の温帯~暖帯、太平洋側に多く存在している。

○ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. CUPRESSACEAE

写真図版 5 a ~ 5 c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は、放射柔細胞のみからなり、単列。分野壁孔は中型のトウヒ~ヒノキ型で、1分野に1~3個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは常緑高木の針葉樹で、福島県~屋久島の温帯に分布する。分野壁孔が不明瞭でヒノキ、サワラ両者の区別が曖昧なものについてはヒノキ属と同定した。

○ヤナギ属 *Salix* sp. SALICACEAE

写真図版 6 a ~ 6 c

中型で丸い管孔が、単独あるいは2~3個放射方向に複合して多数存在する散孔材。道管の直径は年輪界に向け徐々に減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列の異性で、道管との壁孔は蜂の巣状を呈し密である。

以上の形質より、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定した。日本に産するヤナギ属には、34種が含まれる。

○アサダ *Ostrya japonica* Sargent ; *O. virginica* Wild. var. *japonica* Maxim. ex Sargent BETULACEAE

写真図版 7 a ~ 7 c · 32 a ~ 32 c

中~小型の壁の厚い道管が放射方向に複数複合し、散在する散孔材。道管の内壁には、微細な螺旋肥厚があり、道管の穿孔は単一。木部柔組織は短接線状。放射組織は1~3細胞幅、時に結晶を持つ。

以上の形質より、カバノキ科のアサダと同定した。アサダは、国内は北海道~九州の温帯から暖帯に分布する落葉高木である。

○クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. FAGACEAE

写真図版 8 a ~ 8 c · 36 a

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道~九州までの温帯~暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木である。

○ブナ属 *Fagus* sp. FAGACEAE

写真図版 9 a ~ 9 c

小型で丸い管孔が年輪界に向けて徐々に径を減じながら散在する散孔材。道管の穿孔は単一、もしくは横棒の少ない階段状。放射組織は巾の広い複合状と単列のものがあり同性。

以上の形質より、ブナ科のブナ属の材と同定された。ブナ属には、北海道~九州の温帯に分布するブナと本州(岩手県以南)~九州の中間温帯に分布するイヌブナとが含まれる。

○コナラ属クヌギ節 *Quercus* Sect. *Cerris* FAGACEAE

写真図版 10 a ~ 10 c · 34 a ~ 34 c

年輪のはじめに丸い大管孔が一列に並び、晩材部では徐々に径を減じた厚壁の丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は、複合放射組織と単列同性のものからなり、道管との壁孔は柵状。木部柔組織が、接線方向にほぼ帯状に分布する。

以上の形質より、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定した。クヌギ節は、いずれも落葉高木のクヌギ(岩手県以南~琉球)とアベマキ(山形県以西~九州)が含まれる。

○コナラ属コナラ節 *Quercus* Sect. *Prinus* FAGACEAE

写真図版 11 a ~ 11 c · 35 a ~ 35 c

大型で丸い道管が単独、時に複合して年輪界に一列に並ぶ環孔材。晩材部では急激に径を減じた多角で薄壁の道管が散在し火炎状を呈し、木部柔組織は接線状に配列する。放射組織は単列と大型の複合放射組織からなり同性。道管放射組織間壁孔は楕円形の対列状~柵状。

以上の形質より、ブナ科のコナラ節の材と同定した。コナラ節には、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワ等が含まれ、いずれも落葉高木である。

○アカガシ亜属 Subgen. *Cyclobalanopsis* sp. FAGACEAE

写真図版 12 a ~ 12 c · 33 a ~ 33 c

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は1~3細胞幅程度の接線方向の帯状を呈す。放射組織は、単列同性で、時に複合状となる。放射組織道管間の壁孔は柵状を呈す。

以上の形質より、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には8種が含まれ、いずれも常緑高木である。

○エノキ属 *Celtis* sp. ULMACEAE

写真図版 13 a ~ 13 c

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向~斜め接線方向に配列する。道管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状~連合翼状を呈し、放射組織は1~8列程度の異性で、その周囲には鞘細胞を持つ。

以上の形質より、ニレ科のエノキ属の材と同定した。日本のエノキ属には、エゾエノキ、エノキ、コバノチョウセンエノキ(近畿以西)、クワハノエノキ(山口県等一部)がある。いずれも、落葉高木で、適潤な谷あいなど緩斜面などを好む。

○ゲヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ULMACEAE

写真図版 14 a ~ 14 c · 37 a ~ 37 c

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部で、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向~斜め接線方向に配列する。道管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状~連合翼状を呈し、放射組織は1~8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

第3節 植物遺存体

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帯～温帯の谷あい、斜面などの適潤な肥沃地に広く分布する。材は、木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性が高い。

○ヤマグワ *Morus australis* Poir. MORACEAE 写真図版15 a～15 c

年輪の始めに、大血管がならび、そこから順次径を減じた小血管が接線状～斜め接線状に配列する傾向を持つ環孔材。血管の穿孔は単一で、時にチロースを含む。小血管は螺旋肥厚をもち、木部柔組織は周囲状。放射組織は異性で、1～4細胞幅程度である。

以上の形質により、クワ科のヤマグワの材と同定した。ヤマグワは、高さ3～10mほどになる落葉低木で、分布は北海道～琉球で、温帯～亜熱帯の低山地の林内に生える。

○クスノキ科A LAURACEAE 写真図版38 a～38 c

やや小型の管孔が、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する散孔材。年輪界で管孔の径は小さくなる。血管の穿孔は、重荷単一穿孔のみの試料と、単一穿孔と階段状穿孔を持つ試料があった。放射組織は異性で、主に3細胞幅、放射組織の上下端に大きく膨らんだ油細胞がある。

○クスノキ科B LAURACEAE 写真図版39 a～39 c

小型の管孔が単独または主に2個が放射方向に複合して散在する散孔材。血管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、主に2細胞幅で細胞高は高く、上下端に大きな油細胞が見られる。管孔が大きく油細胞の出現頻度も高いクスノキ以外の樹種であるが、これ以上の識別はできなかった。

クスノキ科は、暖帯に生育し、多くは常緑の高木又は低木である。葉や幹に油細胞がある。

○ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. SAXIFRAGACEAE 写真図版16 a～16 b

小型で角張った血管が、ほぼ単独で散在する散孔材。血管の穿孔は横棒の数が多し階段状。放射組織は、2列の異性で、その上下端には背の高い直立細胞からなる単列の翼が付く。

以上の形質から、ユキノシタ科のアジサイ属のノリウツギの材と同定した。ノリウツギは、北海道～屋久島の暖帯～温帯に分布する落葉小高木～低木である。

○モモ *Prunus persica* Batsch ; *Persica vulgaris* Miller 写真図版17 a～17 c (炭化材サクラ属40 a～40 c)

年輪のはじめに中型で丸い血管が独立して数列並び、そこからやや径を減じた血管が数個放射方向に複合して散在する半環孔材である。血管の穿孔は単一で、内壁に螺旋肥厚をもつ。血管内部には、茶褐色の着色物質が見られる事が多い。放射組織は同性に近い異性、6細胞幅くらい。

以上の形質から、バラ科のモモの材と同定した。モモは、中国北部原産の落葉広葉樹であるが縄文時代からすでに種子が確認される等渡来は古い。鑑賞用、食用として広く栽培されている。年輪の初めに血管の並ばない木材構造を持つものをサクラ属と同定した。

○イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. Subsp. *buengeri* (Maxim.) Kitamura ; *M.amurensis* var. *buengeri* (Maxim.) C. K. Schn. LEGUMINOSAE 写真図版18 a～18 c

大型で丸い血管が単独、あるいは2個程度複合して年輪のはじめに1～3列程度配列し、年輪界付近では小型で薄壁の角張った血管が、多数複合して接線方向～斜め接線方向に伸びる帯状に配列する環孔材。木部柔組織は、周囲状で晩材部では小血管とともに階層状に配列する。放射組織は、同性で1～6細胞幅。

以上の形質により、マメ科のイヌエンジュの木材と同定した。イヌエンジュは、北海道～中部以北の温帯～暖帯に生え、山地の林縁や河岸に生えている。

○フジ *Wisteria floribunda* (Wild.) DC. LEGUMINOSAE 写真図版19 a～19 c

大型で丸い血管が年輪の始めに配列し、晩材部では小血管と木繊維が塊状に配列する環孔材。血管の穿孔は単一、小血管内部に螺旋肥厚があり木部柔組織は階層状に配列する。放射組織は1～6細胞幅程度の同性。

以上の形質からマメ科のフジの材と同定された。フジはつる性の落葉木で本州～九州の暖温帯の低山地や平地の林縁、林中等に生える。

○コクサギ *Orixa japonica* Thunb. RUTACEAE 写真図版41 a～41 c

非常に小型の管孔が雲紋状に配列する紋様孔材。血管の管孔は、交互状、穿孔は単一、内腔には螺旋肥厚質がある。放射組織は、方形細胞を含む異性、単列である。

コクサギは、暖帯～温帯の山野に普通の落葉低木でやや湿ったところに生育し、葉には強い臭気がある。

○ニガキ *Picrasma quassioides* (D.Don) Benn. SIMAROUBACEAE 写真図版20 a～20 c

丸い中型の血管が年輪のはじめに1(～2)列並び、晩材部では、厚壁で内腔が丸い小血管が複合して散在する環孔材。血管の穿孔は、単穿孔。木部柔組織は、早材部では周囲状、晩材部では翼状～帯状を呈し、層階状。放射組織は、同性で1～5細胞幅程度、外形はいびつである場合が多い。

以上の形質から、ニガキ科のニガキの材と同定した。ニガキは、北海道～九州の温帯～暖帯に生える落葉高木。

○ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ANACARDIACEAE 写真図版21 a～21 c

中型で丸い血管が、数列年輪のはじめに並び、年輪界に向って徐々に径を減じた血管が単独もしくは数個複合して散在する環孔材。血管穿孔は単穿孔、内壁には時に螺旋肥厚が見られる。木部柔組織は周囲状。放射組織は1～2細胞幅程度の外形のいびつな異性である。血管放射組織間壁孔は階段状である。

以上の形質から、ウルシ科のヤマウルシの木材と同定した。ヤマウルシは北海道～九州の暖帯～温帯に分布する落葉高木。

○ヌルデ *Rhus javanica* L.var.*roxburghii* (DC.) Rheder et Wils. ANACARDIACEAE 写真図版22 a～22 c

年輪のはじめに大血管が並び、そこから徐々に径を減じた小血管が早材部では斜め接線状に集合する環孔材。血管の穿孔は単一、小血管の内壁には螺旋肥厚がある。放射組織は異性3細胞幅、時に結晶を持つ。

以上の形質から、ウルシ科のヌルデの材と同定した。ヌルデは、北海道～九州の平地の2次林に生える落葉高木である。

○カエデ属 *Acer* sp. ACERACEAE 写真図版23 a～23 c・42 a～42 c

中型の丸い血管が単独もしくは複合して年輪内に均一に散在する散孔材。血管の穿孔は単一で、内壁には微細な螺旋肥厚が見受けられる。放射組織は単列同性で、1～4細胞幅。木部柔組織はしばしば年輪界付近で、軸方向に連なる結晶細胞を持つ。

以上の形質により、カエデ科のカエデ属の材と同定された。カエデ属は、日本に28種自生する。亜熱帯性のものを除けば落葉広葉樹である。

○トチノキ *Aesculus turbinata* Blume HIPPOCASTANACEAE 写真図版24 a～24 c

小形で丸い管孔が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。血管の穿孔は単一で、血管内壁に螺旋肥厚が有る。放射組織は単列同性で、しばしば層階状に配列する。血管との壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はない。

以上の形質より、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道～九州の主に低山地に分布する落葉高木である。

○ニシキギ属 *Euonymus* sp. CELASTRACEAE 写真図版25 a～25 c

小型で丸い血管がほぼ単独で、均一に散在する散孔材。血管の穿孔は単一で、内壁には螺旋肥厚が有る。管孔の直径は年輪界付近でやや径を減じる。放射組織は、単列で同性。

以上の形質により、ニシキギ科のニシキギ属の材と同定した。日本に自生するニシキギ属には、18種が含まれる。

○ウコギ属 *Acanthopanax* sp. ARALIACEAE 写真図版26 a～26 c

小型で薄壁の血管が、接線から斜め接線方向に連なる散孔材。放射組織は、構成細胞が粗雑な異性、5～7細胞幅、背は高さや状を呈する。

以上の形質からウコギ科のウコギ属の木材と同定した。日本に自生するウコギ属8種が含まれているが、いずれも落葉低木～高木である。○ミズキ *Cornus*

第9章 理科学分析

controversa Hensly CORNACEAE

写真図版43 a ~ 43 c

単独又は2~3個が複合する小型で壁が厚く外形が丸い道管が散在する散孔材。年輪界に向け道管径が減少する。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒が30本前後の階段穿孔である。放射組織は異性、主に4細胞幅で上下端の単列部は直立細胞からなる。

以上の形質より、ミズキ科のミズキ類の材と同定した。ミズキは、北海道~九州の温帯~暖帯に広く分布する落葉高木である。

○エゴノキ属 *Styrax* sp. STYRACACEAE

写真図版27 a ~ 27 c

小型で丸い道管が年輪界に向けて徐々に径を減じながら、単独もしくは放射方向に3個ほど複合して散在する散孔材。道管の穿孔は横棒の少ない階段状。木部柔組織は晩材部で接線状を呈し、放射組織は異性で、1~4細胞幅程度。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定した。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボク、コハクウンボクが含まれ、いずれも落葉小高木。

○ハイノキ属 *Symplocos* sp. SYMPLOCACEAE

写真図版44 a ~ 44 c

単独または2~数個複合して、多角形で非常に小型の管孔が散在し、年輪の初めはやや密に分布し晩材部では径を減じ分布数も減少する散孔材。道管の穿孔は、横棒の数が20~30本の階段穿孔である。放射組織は、1~2細胞幅である。

ハイノキ属は落葉または常緑性の低木または高木である。サワフタギ、ハイノキなど21種が含まれる。

○トネリコ属 *Fraxinus* sp. OLEACEAE

写真図版28 a ~ 28 c

大型の道管が、年輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小型の管孔が単独あるいは放射方向に複合して散在する。木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状に分布し、道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、1~3細胞幅。根材は、構成細胞が全体的に薄壁で大きく、道管配列が幹材と比較し粗雑で、放射組織は外形のいびつな1~3細胞幅程度である。

以上の形質より、モクセイ科のトネリコ属の材と同定された。トネリコ属には、9種が含まれ、琉球に分布するシマトネリコを除けば落葉高木~小高木である。

○キリ *Paulownia tomentosa* (Thunb.) Steud. SCROPHULARIACEAE

写真図版29 a ~ 29 c

大型で丸い道管が年輪の始めに並び、徐々に径を減じた丸い小径管が単独あるいは数個複合して放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部で周囲状~連合翼状を呈し著しい。放射組織は同性で4細胞幅程度。

以上の形質より、ゴマノハグサ科のキリの材と同定した。キリは、落葉高木で、本州~九州の暖帯~温帯にかけて自生状態をなすが、植栽される事が非常に多い。

○散孔材A (木材)

写真図版31 a ~ 31 c

小型で薄壁の細胞が単独もしくは放射方向に接合して散在する散孔材。放射組織は5~7細胞幅程度の同性で、木部柔組織には軸方向に連なる結晶を含んだ細胞が見られる。道管穿孔は10本程度。

○広葉樹A (炭化材)

写真図版45 a ~ 45 c

直径1cm2年生の小枝で、2年目の年輪界に中型の管孔が並び、1年目の晩材部では単独もしくは複合した小型の道管が散在しており、直径は年輪界に向かって減少している。道管穿孔は、単一。放射組織は、2細胞幅の同性。

世紀の出土遺物はケヤキに偏っているが、製品も混じっているため、ある時期に極端にケヤキの植生が増えたわけではなく、材質による選択と考えられる。中世以降では、他の遺跡同様にマツ属やスギ、ヒノキが増加している。

表2 炭化材の樹種同定結果集計表

遺構名	鍛冶遺構		炭焼窯跡			
	中里見中川遺跡		上里見井ノ下遺跡			
樹種	鍛冶炉	1号溝	2号炭焼窯	4号炭焼窯	5号炭焼窯	8号炭焼窯
アサダ?			1		2	
アカガシ亜属			33	33	37	1
クヌギ節	118	1				
コナラ節		1				4
クリ						5
ケヤキ	4	1				
クスノキ科		1	5	9		
サクラ属			1		3	
コクサギ				1		
カエデ属			1			
ミズキ属					5	
ハイノキ属						1
広葉樹A						1
樹皮		1				
合計	122	5	41	43	47	12

の急激な増加)と花粉分析で確認されているマツ属の植生の増加が、この結果に影響しているものと考えられる。

炭化材では、比較的近接地にある中里見中川遺跡の鍛冶遺構から出土した炭化材と、上里見井ノ下遺跡の炭

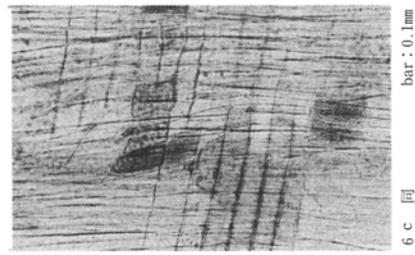
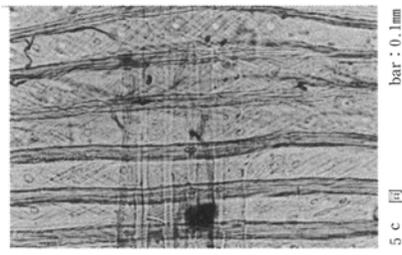
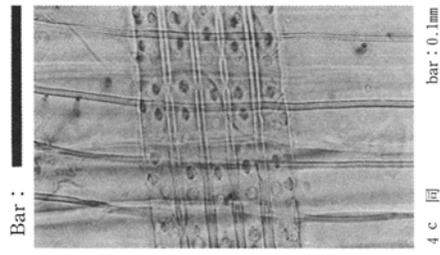
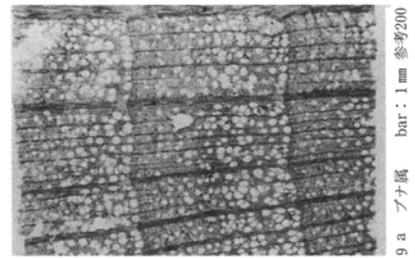
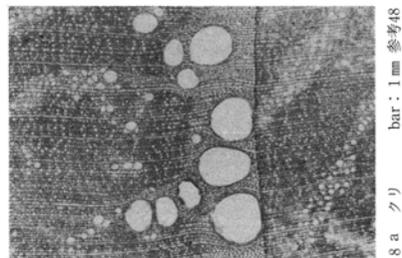
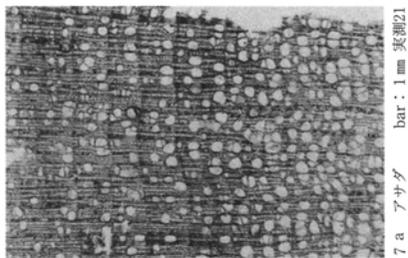
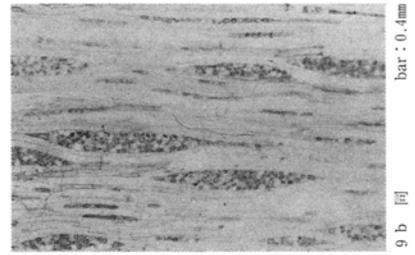
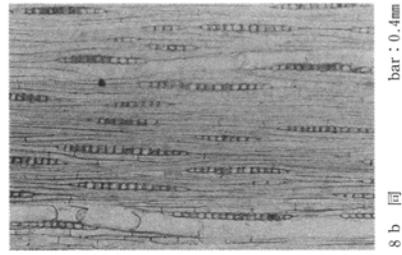
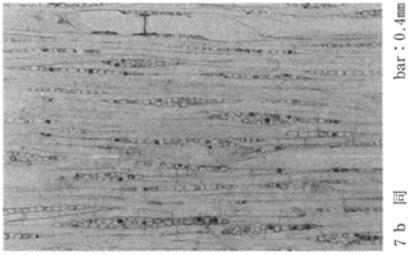
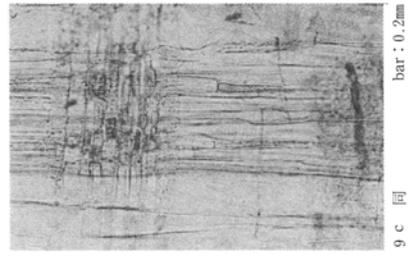
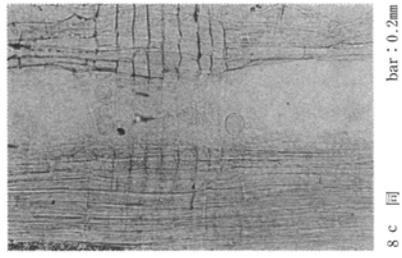
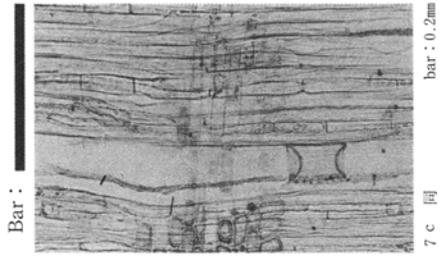
木材では、縄文時代以前から平安時代まで検出された樹種に変化は見上げられるものの、一貫して落葉広葉樹林を供給源とした木材を使用している。群馬県内に多く確認される古墳時代のクヌギ節の多さは、古墳時代を欠いた本遺跡では平安時代に見出せる。このことから、本遺跡も周辺の日高遺跡、新保遺跡、新保田中前遺跡等の結果から考えられる木材利用とおおまかには、一致しているといえる。中世以降で針葉樹材が急激に増えるが、木製品の変化(刳物、挽物の減少、曲物、桶

焼窯から出土した炭化材に関連の有無について検討するために樹種を調査したが、結果からは関連性が薄いことが判明した(表3)。鍛冶炭には、クヌギ節の炭が多く、ケヤキ、コナラ節、クスノキ科が使用されているが、炭焼窯のほうは、アカガシ亜属を中心として、アサダ、コナラ節、クリ、クスノキ科、サクラ属、コクサギ、カエデ属、ミズキ属、ハイノキ属が確認され、重複するのはコナラ節のみである。炭化材は、壊れやすいため、炭化材の点数が、そのまま木材の量の大小につながらないが、炭焼窯からは鍛冶遺構で最も多いクヌギ節がまったく検出されていないことを考えれば、関連は薄いと考えられる。

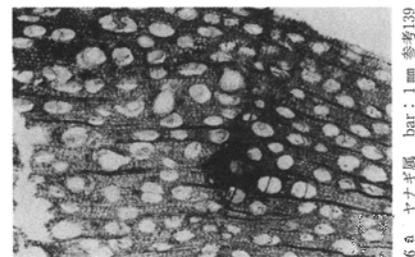
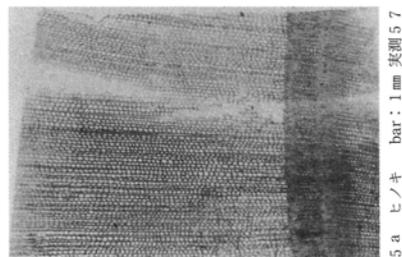
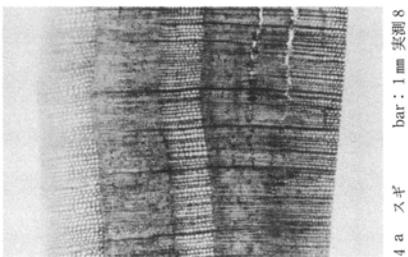
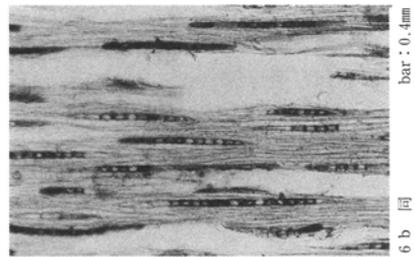
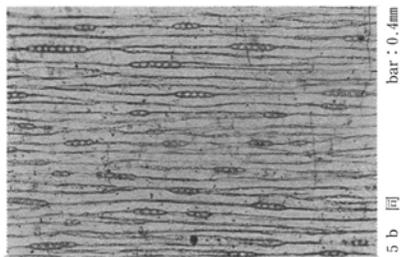
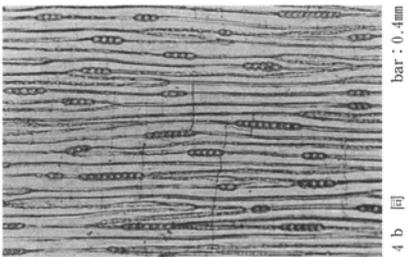
表3 中里見中川遺跡・井ノ下遺跡出土炭化材樹種同定結果

遺跡名	炭 化 材				
	樹種	破片数	出土位置	形状・大きさ等	時代
中里見中川遺跡	クヌギ節	118	5区 鍛冶炉1	r:1.0cm破片多数	平安時代
中里見中川遺跡	ケヤキ	4	5区 鍛冶炉1	r:1.0cm細枝破片	平安時代
中里見中川遺跡	クヌギ節	1	5区 1号溝 W9 No85	r:2.0cm	10世紀
中里見中川遺跡	クスノキ科	1	5区 1号溝 W17 No71	φ:5.0cm	10世紀
中里見中川遺跡	樹皮	1	5区 1号溝 W21 No80	薄い破片	10世紀
中里見中川遺跡	ケヤキ	1	5区 1号溝 炭1 No83	φ:2.0cm細枝破片	10世紀
中里見中川遺跡	コナラ節	1	5区 1号溝 木20 No97	r:6cm	10世紀
上里見井ノ下遺跡	アカガシ亜属	33	1区 2号炭焼窯 植04	r:1.0~3.5cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	アサダ?	1	1区 2号炭焼窯 植04	r:1.3cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	クスノキ科	5	1区 2号炭焼窯 植04	r:0.5~3.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	サクラ属	1	1区 2号炭焼窯 植04	φ:2.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	カエデ属	2	1区 2号炭焼窯 植04	φ:2.8cm, r:4.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	アカガシ亜属	33	1区 4号炭焼窯 植-09	r:0.5~2.5cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	クスノキ科	9	1区 4号炭焼窯 植-09	r:0.8~2.5cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	コクサギ	1	1区 4号炭焼窯 植-09	r:1.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	アカガシ亜属	37	1区 5号炭焼窯 木炭 植-13	φ:0.5~3.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	アサダ?	2	1区 5号炭焼窯 木炭 植-13	r:1.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	サクラ属	3	1区 5号炭焼窯 木炭 植-13	r:2.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	ミズキ属	5	1区 5号炭焼窯 木炭 植-13	r:2.0cm	奈良~平安
上里見井ノ下遺跡	アカガシ亜属	1	3区 8号炭焼窯 覆土 植-25	φ:1.5cm	近世以降
上里見井ノ下遺跡	コナラ節	4	3区 8号炭焼窯 覆土 植-25	φ:0.8~1.8cm	近世以降
上里見井ノ下遺跡	クリ	5	3区 8号炭焼窯 覆土 植-25	φ:0.8~1.5cm	近世以降
上里見井ノ下遺跡	ハイノキ属	1	3区 8号炭焼窯 覆土 植-25	φ:1.0cm	近世以降
上里見井ノ下遺跡	広葉樹A	b	3区 8号炭焼窯 覆土 植-25	φ:1.0cm	近世以降

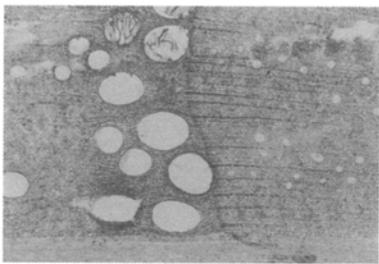
図版3 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



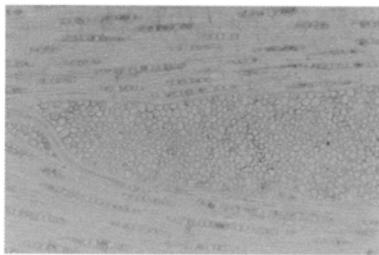
図版2 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



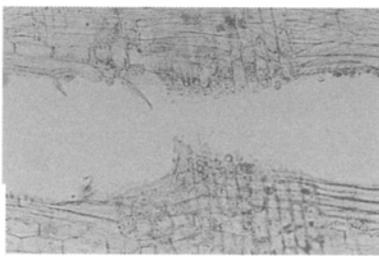
図版4 中里中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



10a クヌギ節 bar: 1 mm 参考36

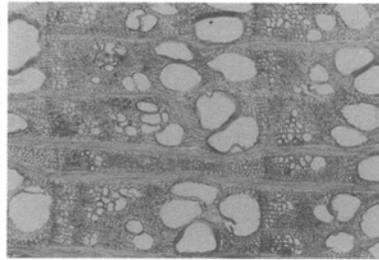


10b 同 bar: 0.4 mm

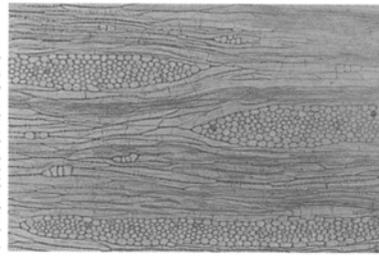


10c 同 bar: 0.2 mm

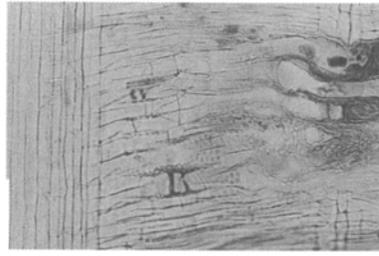
図版5 中里中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



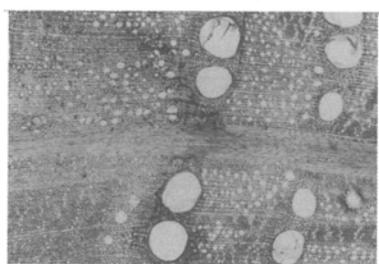
13a エノキ属 bar: 1 mm 参考35



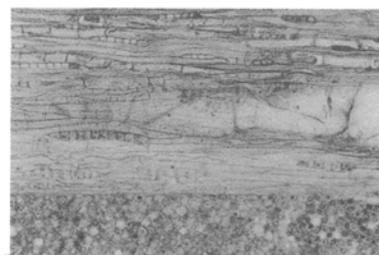
13b 同 bar: 0.4 mm



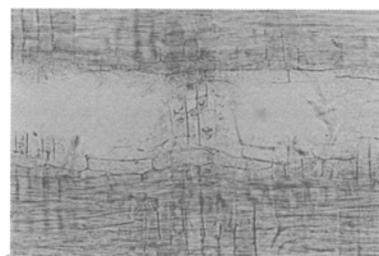
13c 同 bar: 0.2 mm



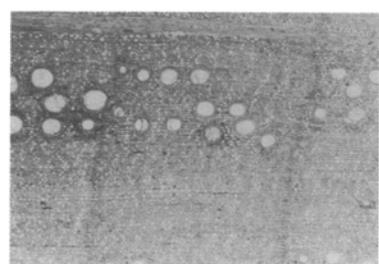
11a モミ属 bar: 1 mm 参考36



11b 同 bar: 0.4 mm



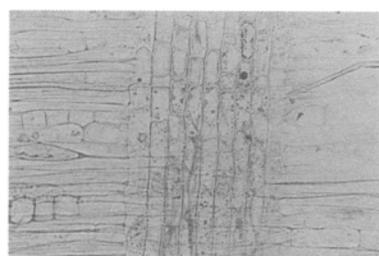
11c 同 bar: 0.2 mm



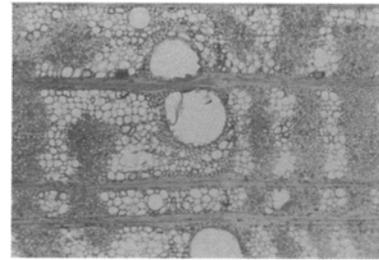
12a モミ属 bar: 1 mm 参考91



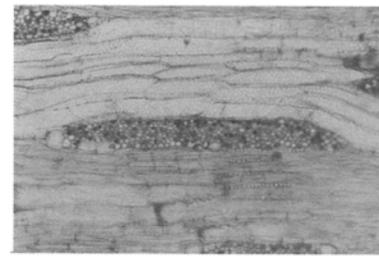
12b 同 bar: 0.4 mm



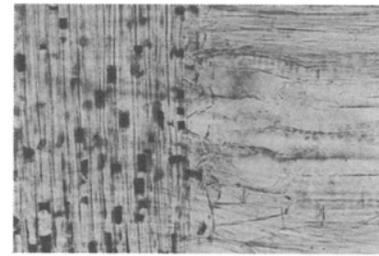
12c 同 bar: 0.2 mm



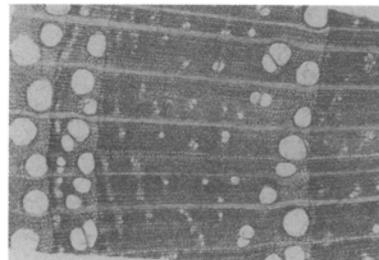
14a ケヤキ bar: 1 mm 参考43



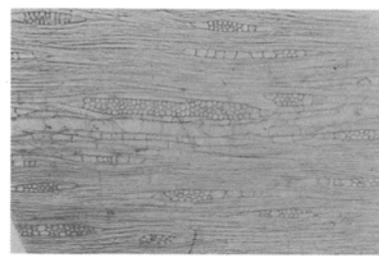
14b 同 bar: 0.4 mm



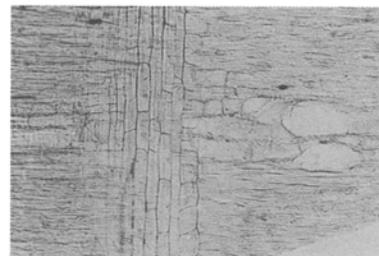
14c 同 bar: 0.2 mm



15a ヤマグワ bar: 1 mm 参考45



15b 同 bar: 0.4 mm



15c 同 bar: 0.2 mm

Bar:



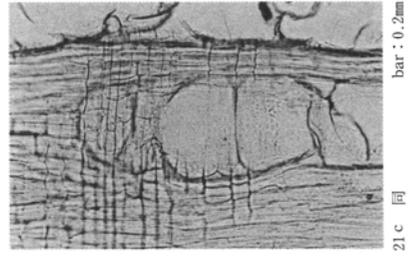
図版7 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



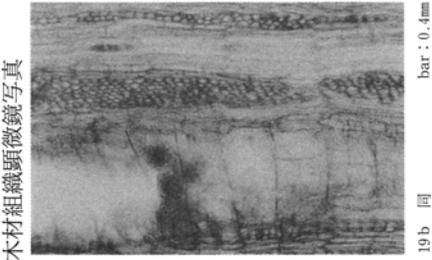
19 a フジ bar : 1 mm 参考189



19 b 同



19 c 同



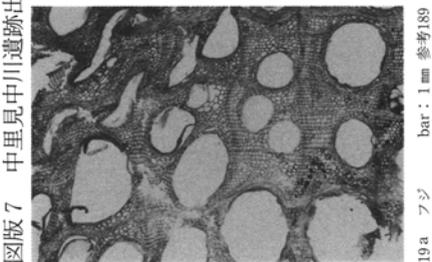
20 a ニガキ bar : 1 mm 参考172



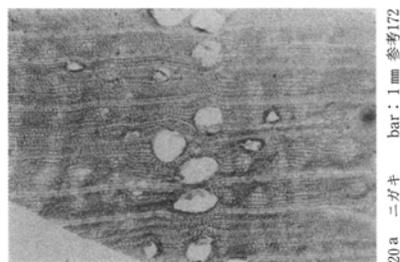
20 b 同



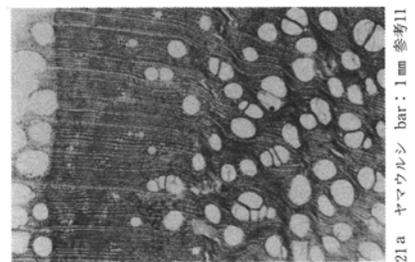
20 c 同



21 a ヤマウルシ bar : 1 mm 参考11



21 b 同

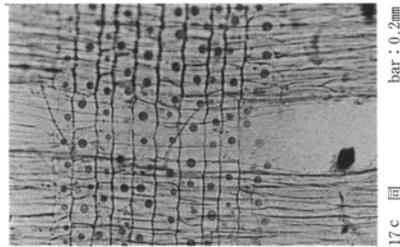


21 c 同

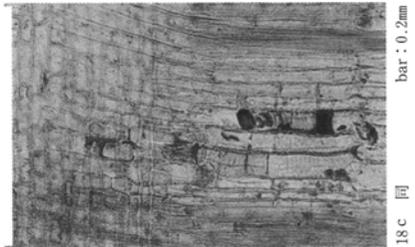
図版6 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



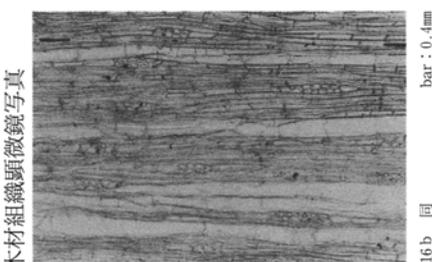
16 a ノリウツギ bar : 1 mm 参考187



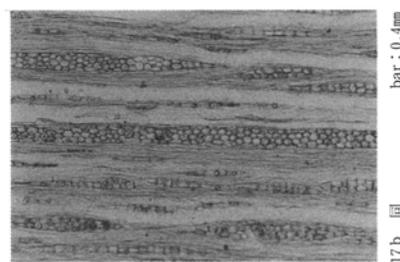
16 b 同



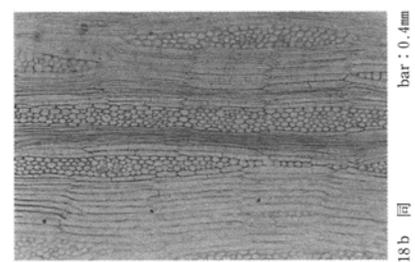
16 c 同



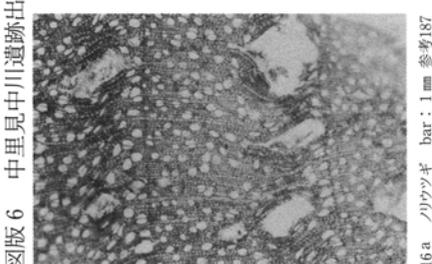
17 a モモ bar : 1 mm 参考31



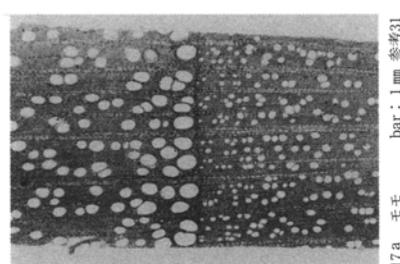
17 b 同



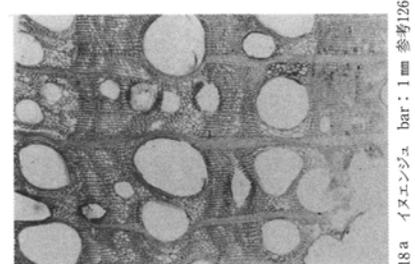
17 c 同



18 a イヌエンジュ bar : 1 mm 参考126

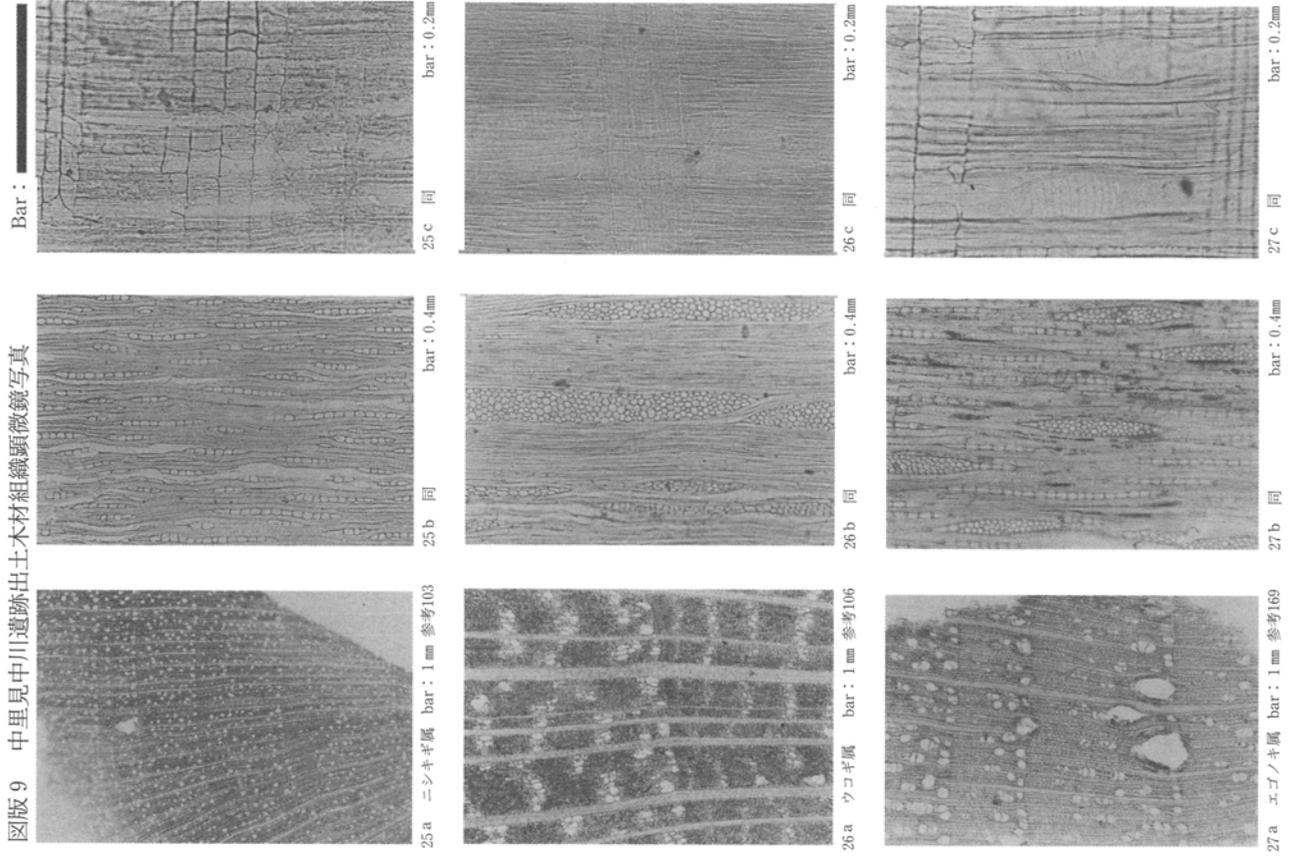


18 b 同

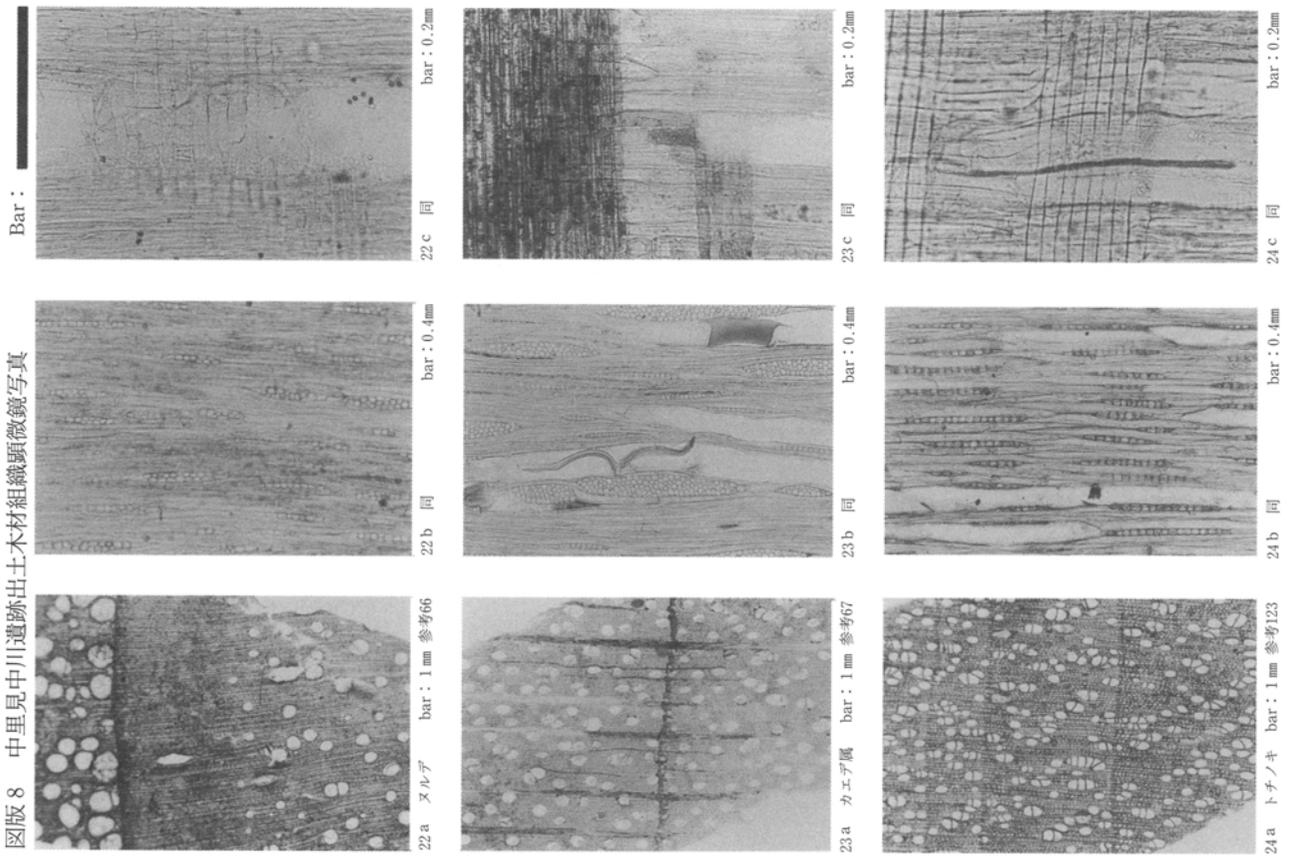


18 c 同

図版9 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

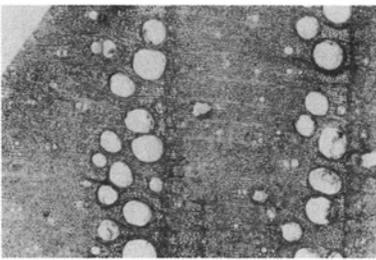


図版8 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

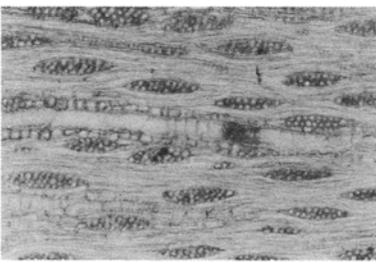


図版10 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

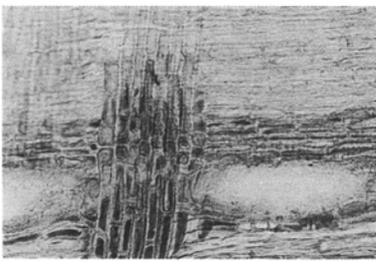
Bar: 



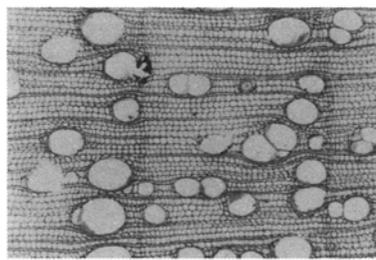
28 a トネリコ属 bar: 1mm 参考204



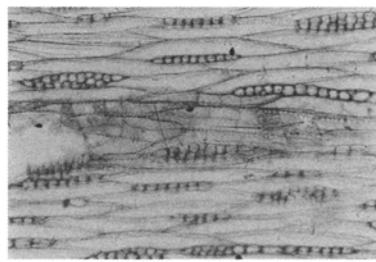
28 b 同 bar: 0.4mm



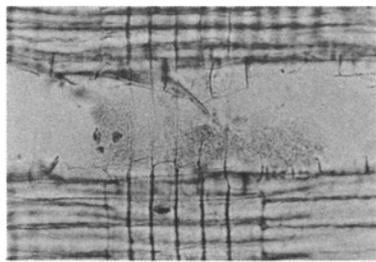
28 c 同 bar: 0.2mm



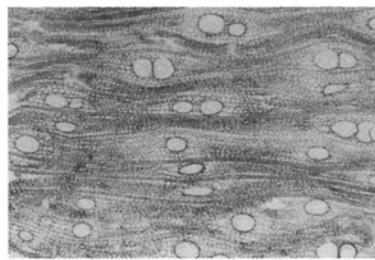
29 a トネリコ属 bar: 1mm 参考125



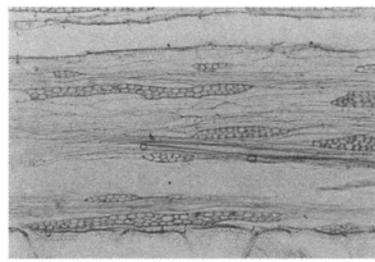
29 b 同 bar: 0.4mm



29 c 同 bar: 0.2mm



30 a キリ bar: 1mm 実測92



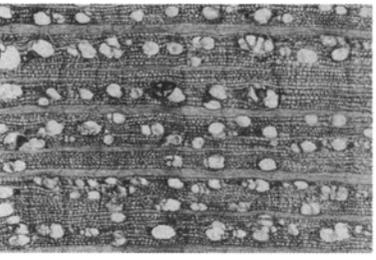
30 b 同 bar: 0.4mm



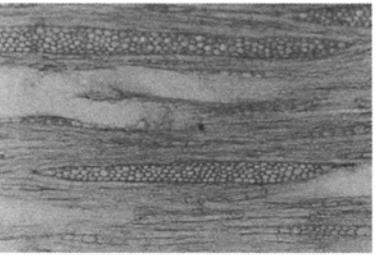
30 c 同 bar: 0.2mm

図版11 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

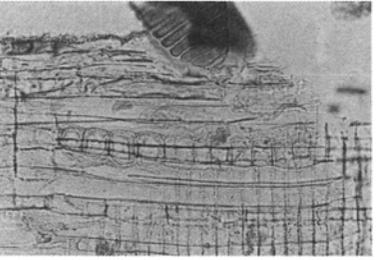
Bar: 



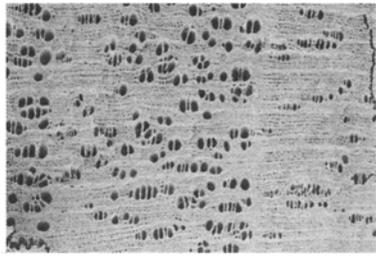
31 a 散孔材A bar: 1mm 参考49



31 b 同 bar: 0.4mm



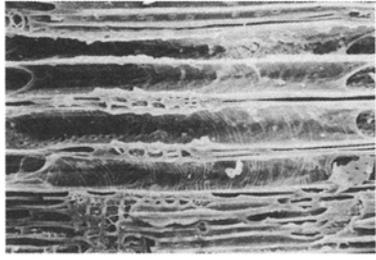
31 c 同 bar: 0.2mm



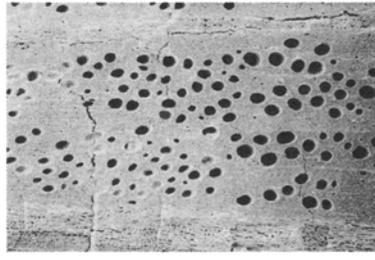
32 a 炭化材アサダ? bar: 0.84mm



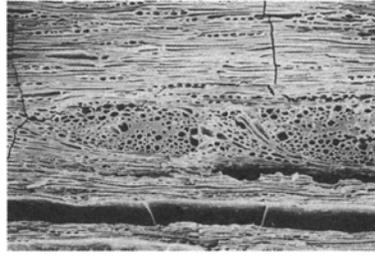
32 b 同 bar: 0.21mm



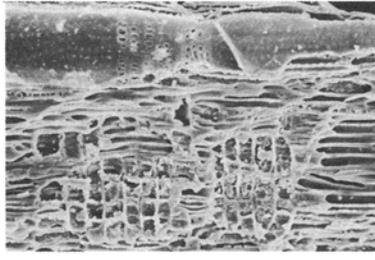
32 c 同 bar: 0.13mm



33 a 炭化材アサダ? bar: 0.84mm

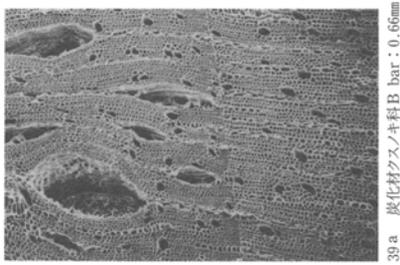
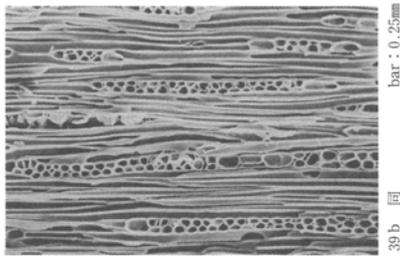
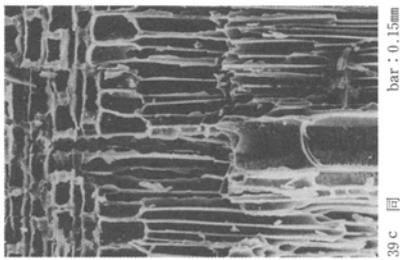
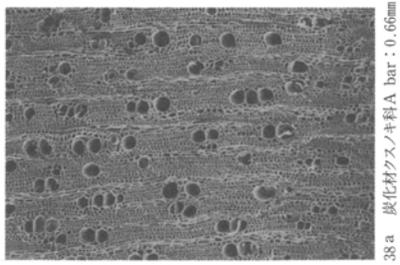
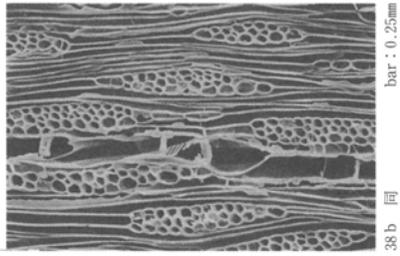
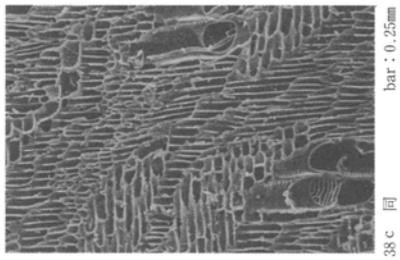
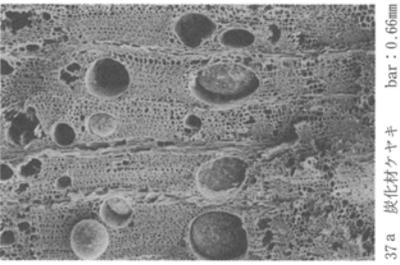
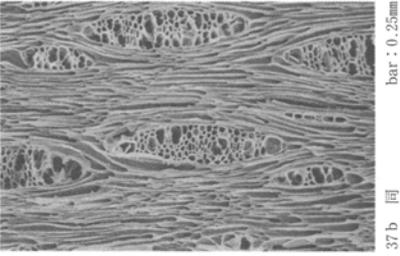
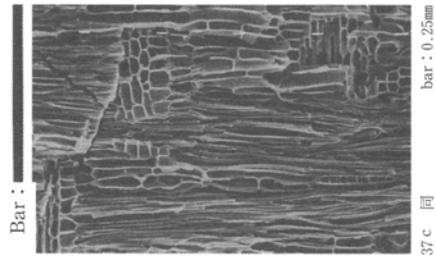


33 b 同 bar: 0.29mm

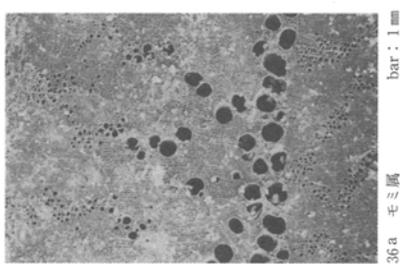
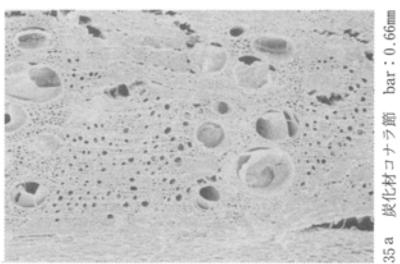
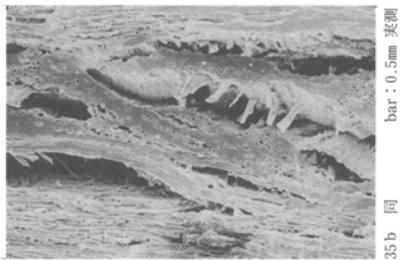
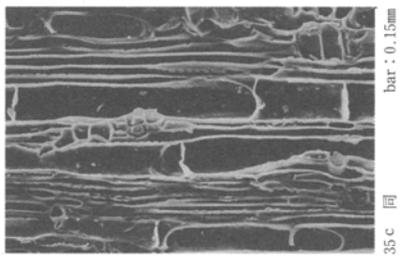
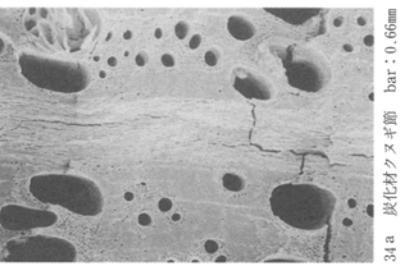
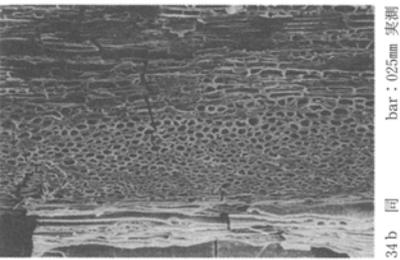
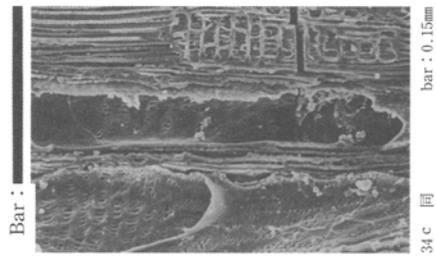


33 c 同 bar: 0.13mm

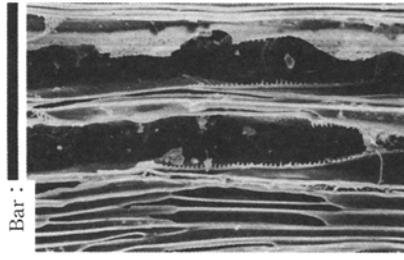
図版13 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真



図版12 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

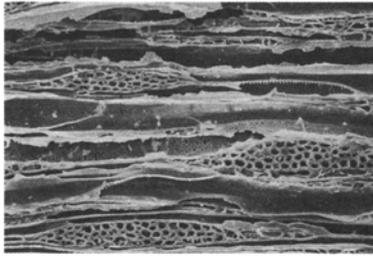


図版15 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

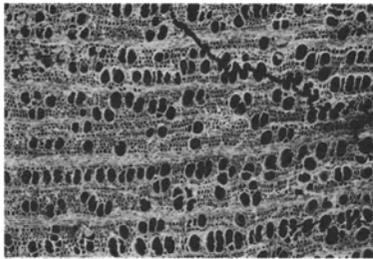


Bar :

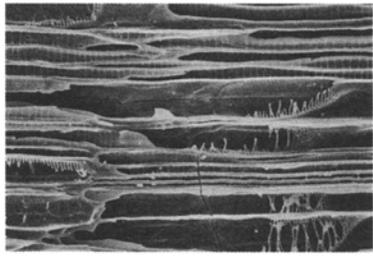
43 c 同 bar : 0.15mm



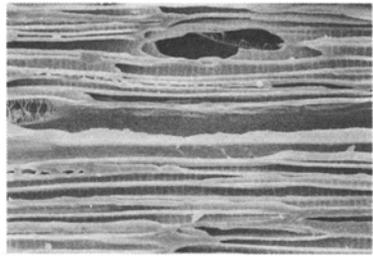
43 b 同 bar : 0.25mm



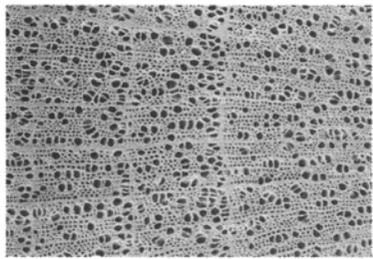
43 a 炭化材ミズスキ属 bar : 0.66mm



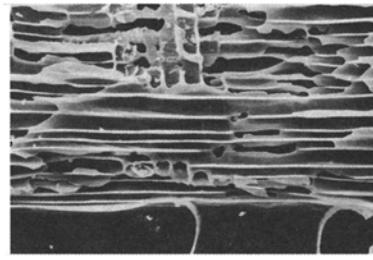
44 c 同 bar : 0.15mm



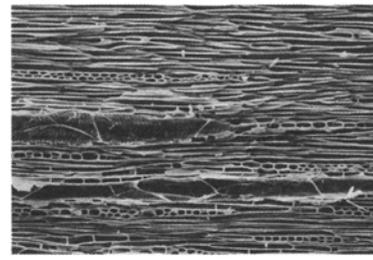
44 b 同 bar : 0.25mm



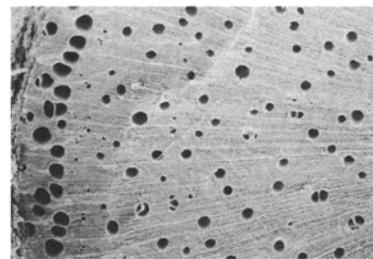
44 a 炭化材ハイノキ属 bar : 0.66mm



45 c 同 bar : 0.15mm

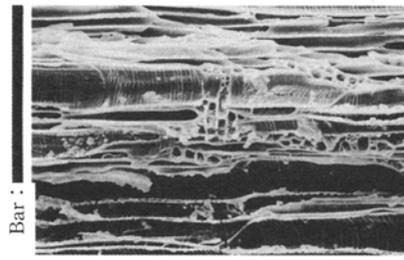


45 b 同 bar : 0.25mm



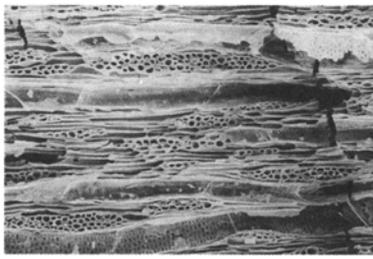
45 a 炭化材広葉樹A属 bar : 1mm

図版14 中里見中川遺跡出土木材組織顕微鏡写真

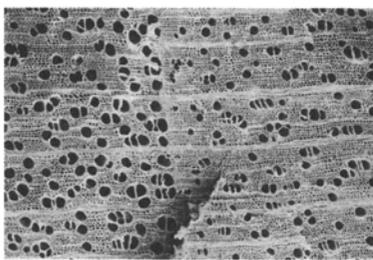


Bar :

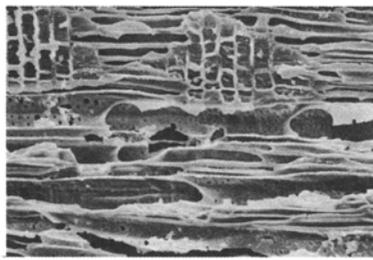
40 c 同 bar : 0.15mm



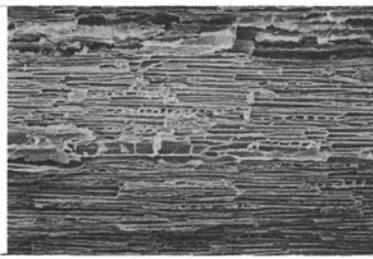
40 b 同 bar : 0.25mm



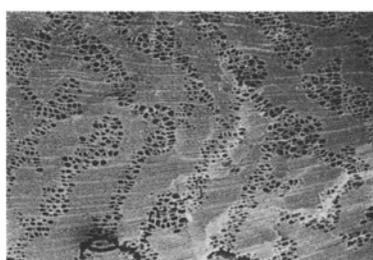
40 a 炭化材サクラ属 bar : 0.66mm



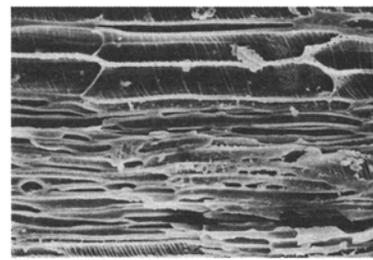
41 c 同 bar : 0.15mm



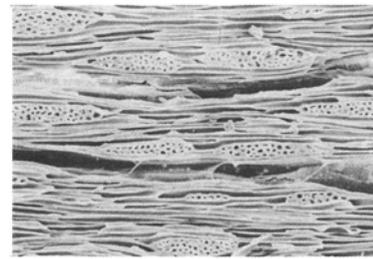
41 b 同 bar : 0.25mm



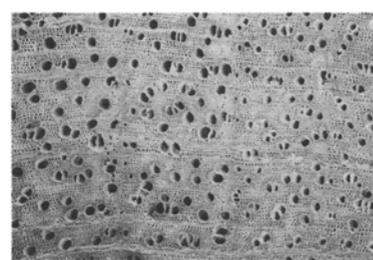
41 a 炭化材コクサギ属 bar : 0.66mm



42 c 同 bar : 0.15mm



42 b 同 bar : 0.25mm



42 a 炭化材カエデ属 bar : 0.66mm

第3項 中里見遺跡群における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

株式会社 古環境研究所

はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO₂）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

試料

分析試料は、中里見中川遺跡の1区第1地点（第4トレンチ）、第2地点（第4トレンチ）、2区北西壁、4区北西壁、5区南壁、5区北壁、6区南壁、中里見根岸遺跡の22区S-14グリッド、第1トレンチ、および上里見井ノ下遺跡1区第1トレンチの10地点から採取された合計45点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- (2) 試料約1gに対して直径約40 μ mのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- (3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- (4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- (5) 沈底法による20 μ m以下の微粒子除去
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- (7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、キビ族（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ウシクサ族（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 および図 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。なお、中里見中川遺跡1区第1地点・第2地点・2区北西壁については、水田跡の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。

〔イネ科〕 イネ、キビ族（ヒエ属など）、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大

型)、くさび型、Aタイプ
 [イネ科-タケ亜科] メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、未分類等
 [イネ科-その他] 表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、地下茎部起源、未分類等
 [カヤツリグサ科]
 [シダ類]
 [樹木] ブナ科(アカガシ亜属?)、モクレン科、はめ絵パズル状(ブナ科ブナ属など)、多角形板状(ブナ科コナラ属など)、その他

考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(プラント・オパール)が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、関東周辺では、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。次表に各地点・各層準におけるイネの検出状況を示す。

表1 中里見遺跡群におけるイネの植物珪酸体(プラント・オパール)の検出状況

層準	中川					根岸 22区S-14	井の下	備考
	2区北西	同西側	4区	5区南	5区北			
As-B直下層	—	—	◎	◎	◎	△	△	1108年
As-B直下層	◎	△	—	◎	—	—	—	4世紀中葉
As-B直下層の下位層	△	◎	—	—	—	—	—	

①第1地点

3枚の洪水堆積物層直下の腐植質土壌(Na.2, Na.3, Na.4)について分析を行った。その結果、Na.3とNa.4からイネのプラント・オパールが検出された。密度は、600個/gおよび2,100個/gと比較的低い値であるが、それぞれ厚い洪水堆積層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、これらの層準の時期に調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

②As-B直下層

中里見中川遺跡の4区北西壁、5区南壁、5区北壁、中里見根岸遺跡の22区S-14グリッド、および上里見井ノ下遺跡の5地点について分析を行った。その結果、これらのすべての地点からイネが検出された。このうち、中里見中川遺跡の4区北西壁、5区南壁、5区北壁では、密度が5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

中里見根岸遺跡22区S-14グリッドと上里見井ノ下遺跡では、密度が1,000個/g前後と低い値である。ただし、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

③As-C直下層

中里見中川遺跡1区第2地点では、As-C直下層(Na.5)について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールが3,600個/gと比較的高い密度で検出された。また、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高い

と考えられる。

中里見中川遺跡の2区北西壁、2区北西壁西側、5区南壁の3地点について分析を行った。その結果、これらのすべての地点からイネが検出された。このうち、2区北西壁と5区南壁では、密度が5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの地点では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。2区北西壁の西側では、密度が1,000個/g未満と低い値である。ただし、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

④ As-C 直下層の下位層

中里見中川遺跡の2区北西壁では、As-C直下層の下位層について分析を行った。その結果、イネが5,000個/g以上と高密度で検出された。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

中里見中川遺跡の2区北西壁西側では、As-C直下層(1面)より下位層の2面、3面、4面について分析を行った。その結果、3面の試料からイネが検出された。密度は1,000個/g前後と低い値であるが、同層は直上を砂層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、キビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、トウモロコシ属、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族とジュズダマ属が検出された。

① キビ族

キビ族は、中里見中川遺跡5区南壁のAs-B直下層およびAs-C直下層から検出された。同族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っていない(杉山ほか, 1988)。また、密度も1,000個/g未満と微量であることから、ここでヒエやアワなどが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

② ジュズダマ属

ジュズダマ属は、中里見中川遺跡4区北西壁のAs-B直下層および5区南壁のAs-C直下層から検出された。同属には栽培種のハトムギが含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態から野草のジュズダマと識別するのは困難である。また、密度も1,000個/g未満と微量であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は低いと考えられる。

③ その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

① As-Sj 直下層～上部泥流堆積物直下層

中里見中川遺跡6区南壁および中里見根岸遺跡第1トレンチでは、As-Sj直下層から上部泥流堆積物直下層までの層準について分析を行った。その結果、As-Sj直下層では、ヨシ属やクマザサ属型(おもにクマザサ属)、カヤツリグサ科などが検出され、モクレン科やブナ科などの樹木(落葉樹)に由来する植物珪酸体も検出された。樹木は葉身中で形成される珪酸体密度が低いことから、給源植物の量を推定する際には他の植物と比較し

てかなり過大に評価する必要がある。As-Sjの上層ではヨシ属が大幅に増加しており、上部泥流堆積物直下層では密度が10万個/g以上にも達している。また、ヨシ属の茎部や地下茎部に由来すると考えられる植物珪酸体も多量に検出され、ヌマガヤ属と見られる植物珪酸体も部分的に多く検出された。

以上の結果から、As-Sj直下層の堆積当時はヨシ属やカヤツリグサ科などが生育する湿地的な環境であり、周辺部などではクマザサ属なども生育していたものと推定される。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったものと考えられる。また、遺跡周辺にはモクレン科やブナ科（ブナ属やコナラ属）などの落葉樹林が分布していたものと推定される。

As-Sjの上層から上部泥流堆積物直下層にかけても、ヨシ属などが生育する湿地の環境が継続されたと考えられ、とくに上部泥流堆積物直下層ではヨシ属が繁茂する状況であったものと推定される。また、上部泥流堆積物直下層の時期には、ススキ属などが生育する比較的乾燥したところも見られるようになったものと考えられる。これらの植物は森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

前橋市総社町の前橋泥炭層(杉山, 1993)でも、今回とおおむね同様の結果であるが、As-Sj直下層でヨシ属が比較的多いことなどの点で異なっており、当時の植生環境の地域的な変遷を考える上で注目される。

② As-Cの下層～As-B直下層

中里見中川遺跡の2区北西壁、4区北西壁、5区南壁、5区北壁、中里見根岸遺跡の22区S-14グリッド、および上里見井ノ下遺跡1区第1トレンチでは、As-Cの下層からAs-B直下層までの層準について分析を行った。その結果、全体的にヨシ属が多く検出され、ウシクサ族(ススキ属など)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(おもにクマザサ属)、カヤツリグサ科なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にヨシ属が優勢であり、とくに中里見中川遺跡のAs-Cの下層やAs-B直下層ではヨシ属が圧倒的に卓越していることが分かる。なお、中里見根岸遺跡および上里見井ノ下遺跡のAs-B直下層ではウシクサ族(ススキ属など)が優勢となっている。

以上の結果から、As-Cの下層からAs-B直下層にかけては、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、とくに中里見中川遺跡のAs-Cの下層やAs-B直下層ではヨシ属が繁茂する状況であったものと推定される。また、このような湿地を利用して、As-Cの下層の時期に水田稲作が開始されたものと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことも考えられる。As-B直下層の堆積当時は、ススキ属やネザサ節などが生育する比較的乾燥したところも見られるようになり、遺跡周辺にはブナ科(ブナ属やコナラ属)などの落葉樹林が分布していたものと推定される。

まとめ

浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前)直下層の堆積当時は、ヨシ属やカヤツリグサ科などが生育する湿地的な環境であり、周辺部などではクマザサ属も生育していたものと推定される。As-Sjの上層から上部泥流堆積物直下層にかけても、ヨシ属などが生育する湿地の環境が継続されていたと考えられ、とくに上部泥流堆積物直下層ではヨシ属が繁茂する状況であったものと推定される。

浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下層や浅間C軽石(As-C, 4世紀中葉)直下層からは、イネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、As-Cの下層(3面)やAs-Cの上層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。当時の遺跡周辺は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用してAs-Cの下層の時期に水田稲作が開始されたものと推定される。

第9章 理科学分析

文献

- 近藤鎮三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) —双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について—, 帯広畜産大学研究報, 12 : p.217-229.
- 杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点, 植生史研究, 第2号 : p.27-37
- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体, 富士竹類植物園報告, 第31号 : p.70-83.
- 杉山真二 (1993) 前橋泥炭層の植物珪酸体群集, 植生史研究, 第2巻第2号 : p.71-72.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—, 考古学と自然科学, 9 : p.15-29.
- 藤原宏志 (1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡 (夜臼式) 水田および群馬・日高遺跡 (弥生時代) 水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—, 考古学と自然科学, 12 : p.29-41.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17 : p.73-85.

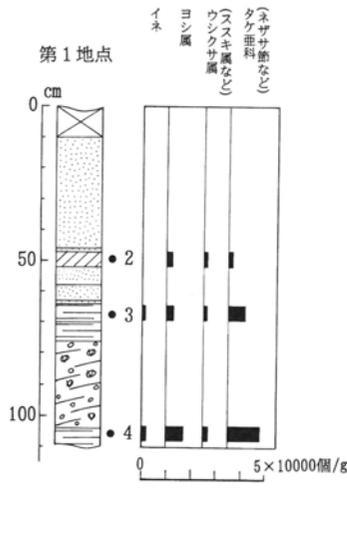


図1 中里見中川遺跡におけるプラント・オパール分析結果

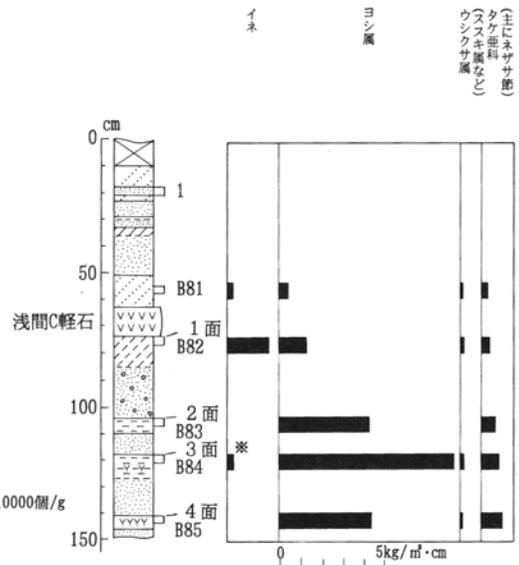


図2-1 中里見中川遺跡2区北西壁における主な分類群の推定生産量(1)
※近辺5箇所の平均値

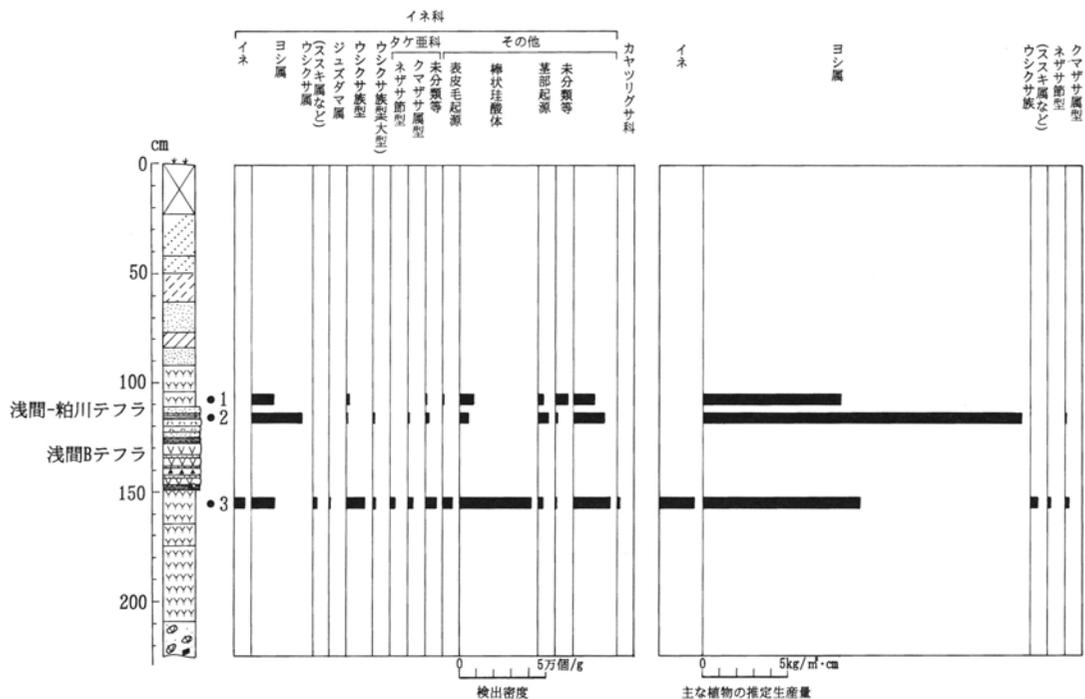


図2-2 中里見中川遺跡2区北西壁における主な分類群の推定生産量(2)

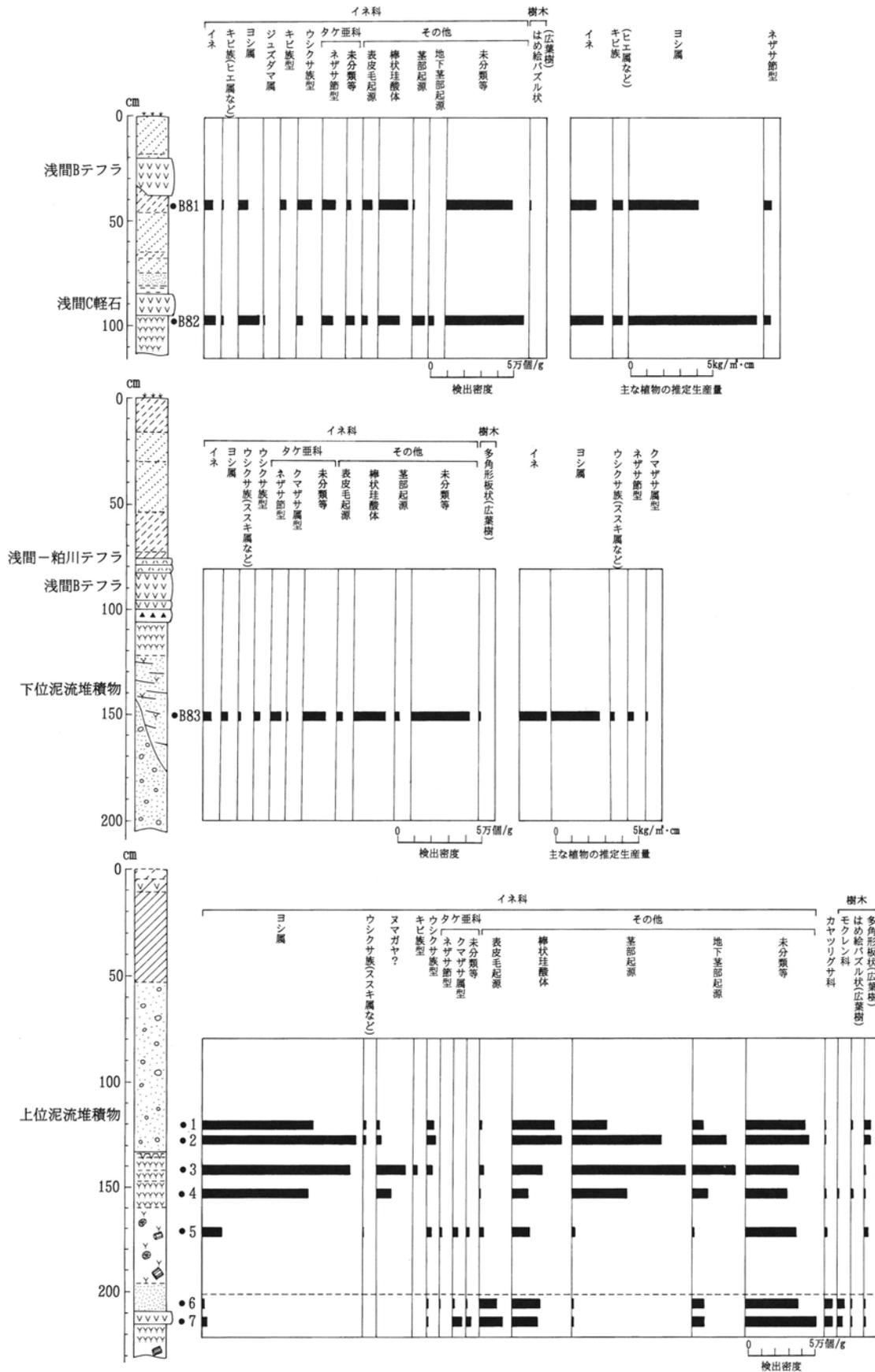


図3 中里見中川遺跡5区北壁における植物珪酸体分析結果

表1 中里見中川遺跡第1地点・第2地点におけるプラント・オパール分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)				
	2	3	4	5	
イネ	6	21	36		
ヨシ属	20	26	78	12	
ウシクサ族(ススキ属など)	6	6	21	24	
タケ亜科	13	67	142	24	

表2-1 中里見中川遺跡第1地点・第2地点におけるおもな植物の推定生産量

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)				
	2	3	4	5	
イネ	0.18	0.62	1.26		
ヨシ属	1.66	2.01	5.47	0.97	
ウシクサ族(ススキ属など)	0.09	0.07	0.26	0.35	
タケ亜科	0.07	0.37	0.69	0.13	

表2-2 中里見中川遺跡4区北西壁の植物珪酸体分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)		
	1	2	3
イネ科			
イネ		69	
ヨシ属	129	295	145
ウシクサ族(ススキ属など)			38
ジュズタマ属			6
ウシクサ族型	20	6	107
ウシクサ族型(大型)		6	13
タケ亜科			
ネザサ節型			31
ネザサ節型		6	31
未分類等	7	23	69
その他のイネ科			
表皮毛起源	7		63
棒状珪酸体	81	52	416
基部起源	34	69	38
地下基部起源	74	17	13
未分類等	129	179	220
カヤツリグサ科			19
植物珪酸体総数	480	653	1279

表2-3 主な分類群の推定生産量

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)		
	1	2	3
イネ科			
イネ			2.04
ヨシ属	8.11	18.58	9.14
ウシクサ族(ススキ属など)			0.47
タケ亜科			
ネザサ節型			0.15
ネザサ節型		0.04	0.24

※表2-1の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出。

表1-1 中里見中川遺跡2区北西壁における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)												
	B81 As-c上	B82 1面	B83 2面	B84 3面	B4 3面	B5 3面	B6 3面	B7 3面	B85 4面	B3 5面	B8 As-c下	B9	B10
イネ	7	51			9	14	8	14			7	41	55
ヨシ属	7	14	52	114	101	36	56	58	66	87	7	57	79
ウシクサ族(ススキ属など)	7	7		7	18	7	7	23	7	23	7	16	23
タケ亜科(おもにネザサ節)	54	44	90	160	138	43	112	43	191	276	83	90	142

表1-2 植物体生産量の推定値

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)												
	B81 As-c上	B82 1面	B83 2面	B84 3面	B4 3面	B5 3面	B6 3面	B7 3面	B85 4面	B3 5面	B8 As-c下	B9	B10
イネ	0.21	2.05			0.28	0.48	0.25	0.52			0.24	1.34	1.62
ヨシ属	0.45	1.21	4.23	8.20	6.69	2.66	3.78	4.61	4.37	4.34	0.52	3.99	4.98
ウシクサ族(ススキ属など)	0.09	0.12		0.10	0.23	0.10		0.11	0.09	0.23	0.10	0.22	0.29
タケ亜科(おもにネザサ節)	0.26	0.29	0.56	0.88	0.70	0.24	0.58	0.26	0.96	1.05	0.47	0.48	0.68

表3 中里見中川遺跡(5・6区)の植物珪酸体分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)											
	5区			6区			南壁			北壁		
	B81	B82	B83	B84	B85	B86	B87	B88	B89	B90	B91	B92
イネ科												
イネ												
ヨシ属	51	68	55	48	831	1150	1116	802	150	22	38	
ウシクサ族(ススキ属など)	7	8	14	28	28	22	238	126	7			
ジュズタマ属												
ヌマガヤ?												
ネザサ節型												
ネザサ節型												
未分類等	37	38	34	88	63	74	46	45	15	7	85	46
ウシクサ族型												
ウシクサ族型(大型)												
タケ亜科												
ネザサ節型	88	76	75	7					15	7	7	
ネザサ節型									45	15	7	
未分類等	29	53	130						30	7		
その他のイネ科												
表皮毛起源	66	45	34	21	21	386	46	7	45	148	185	
棒状珪酸体	176	129	218	331	331	275	238	126	135	222	200	
基部起源	7	83	27	275	275	675	869	416	22	15	8	
地下基部起源		30		85	267	338	338	126	15	15		
未分類等	403	477	355	451	482	402	402	319	390	408	538	
カヤツリグサ科									22	59	62	
樹木起源												
モクレン科												
はめ給バズル状(広葉樹)	7			7	7	67	9	7	37	67	46	
多角形板状(広葉樹)				7	63	67	7	15	7	7	8	
植物珪酸体総数	1026	1143	1002	2191	3175	3338	1960	959	1001	1253		

表6 上里見井ノ下遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群	(単位: ×100個/g)					
	第1トレンチ		南壁		北壁	
	1	P71	4	5	6	P73
イネ科						
イネ		7				15
ヨシ属	33	7				7
ウシクサ族(ススキ属など)	112	214	50.60	9.46	1.40	2.43
キビ族型	13			0.09		
ウシクサ族型	159	192				28
ウシクサ族型(大型)	7					7
タケ亜科						132
ネササ草型	126	111		0.07	0.04	
クマザサ属型	26	30		0.34	0.11	
未分類等	106	52				0.63
その他のイネ科						
表皮毛起源		15				22
棒状珪酸体	311	317	1201			592
茎部起源			15			88
地下茎部起源			75			7
未分類等	390	502				431
樹木起源						
コナラ属(アカガシ亜属?)	7					7
はめ絵バスル(広葉樹)						7
多角形板状(広葉樹)	13					7
その他		7				7
植物珪酸体総数	1302	1454	4558	1892	1464	1513

表7 上里見井ノ下遺跡主な分類群の植物体量の推定値

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)					
	第1トレンチ		南壁		北壁	
	1	P71	4	5	6	P73
イネ科						
イネ		0.22				0.43
ヨシ属	2.09	0.47				0.46
ウシクサ族(ススキ属など)	1.39	2.65				0.18
タケ亜科						
ネササ草型	0.60	0.53				0.39
クマザサ属	0.20	0.22				0.33
植物珪酸体総数	1302	1454	4558	1892	1464	1513

※表1の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各種物の換算係数をかけて算出。

表4 中里見中川遺跡における主な分類群の推定生産量

分類群	(単位: kg/m ² ・cm)					
	5区		6区		区	
	B81	B82	B83	1	2	3
イネ科						
イネ	1.51	2.00	1.60			
キビ族(ヒエ属など)	0.62	0.64	3.01	52.46	72.55	70.40
ヨシ属	4.16	8.12	0.17	0.35	0.28	
ウシクサ族(ススキ属など)						
タケ亜科						
ネササ草型	0.42	0.36	0.36	0.07	0.04	
クマザサ属型			0.05	0.34	0.11	

※表1の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各種物の換算係数をかけて算出。

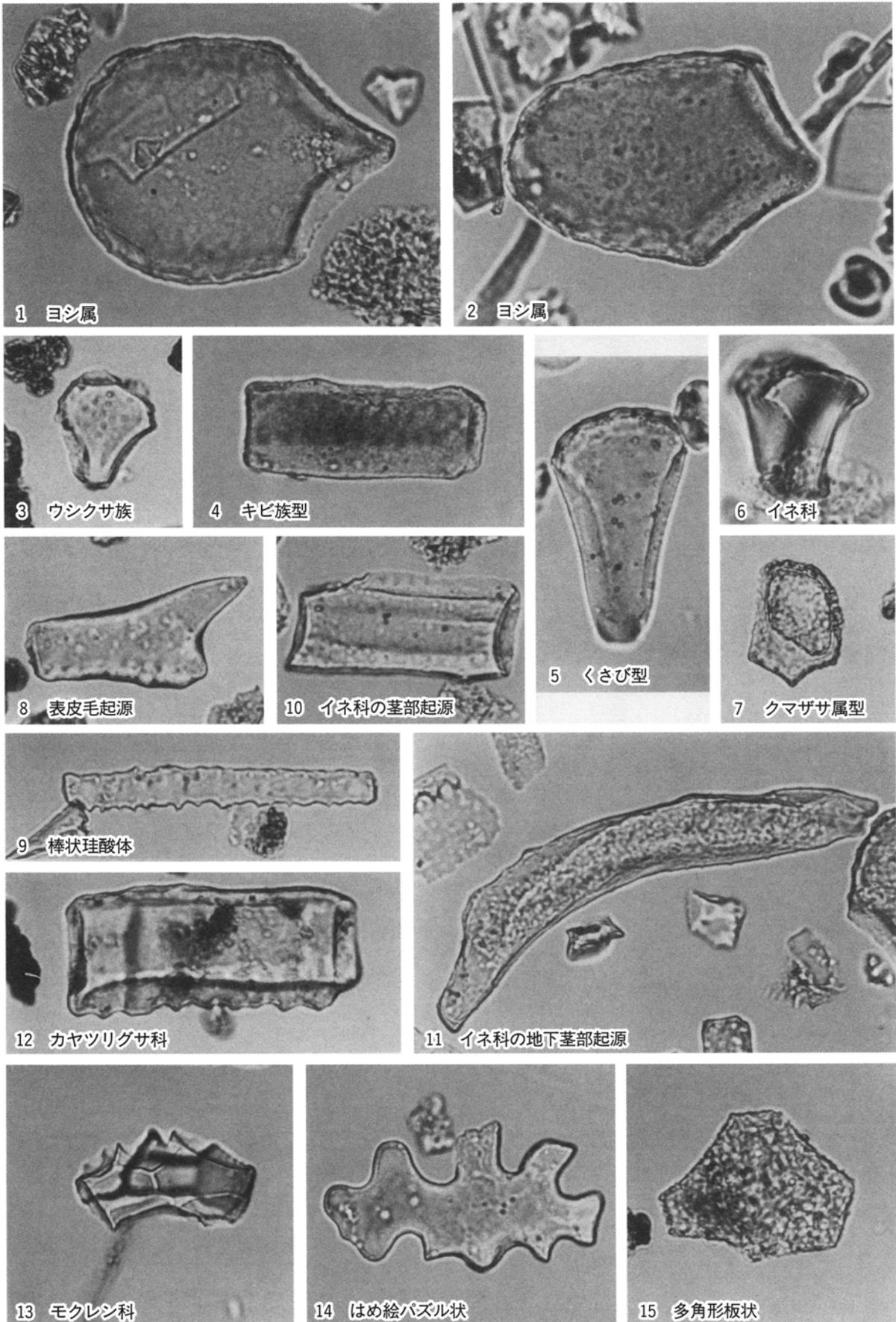
表5 中里見根岸遺跡の植物珪酸体分析結果

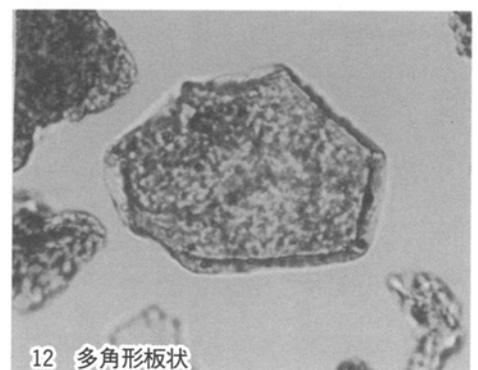
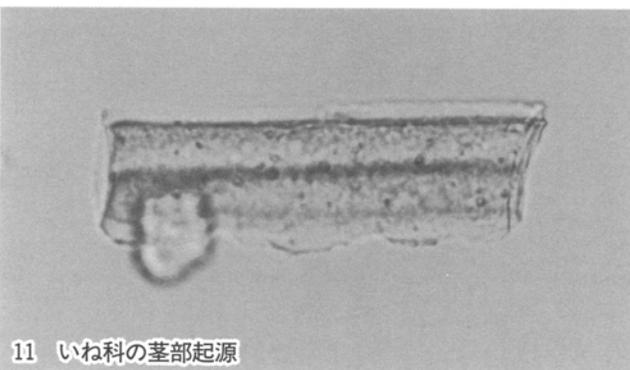
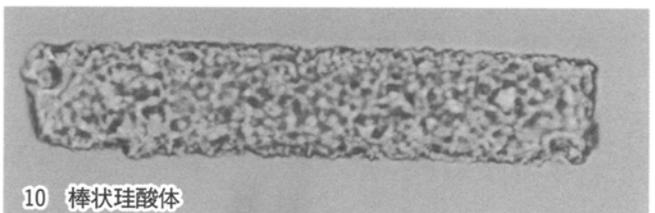
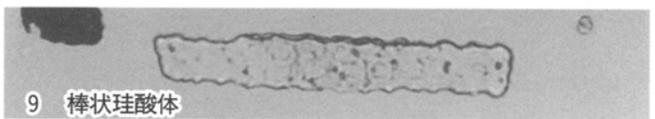
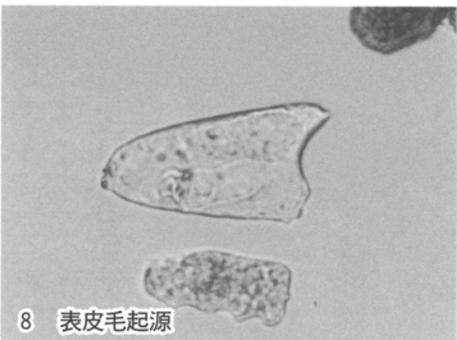
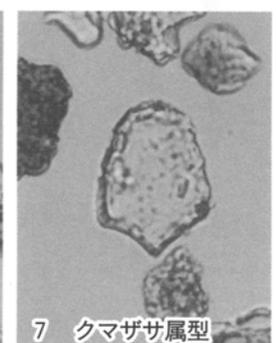
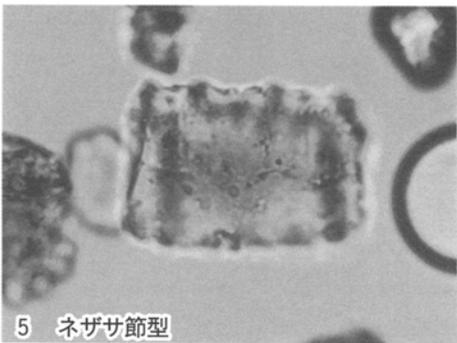
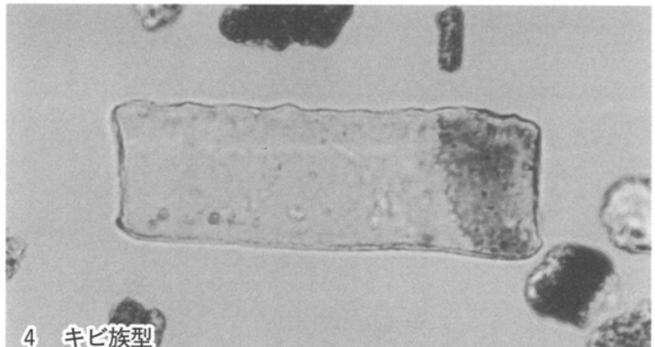
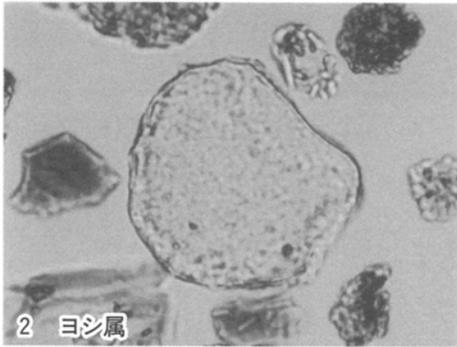
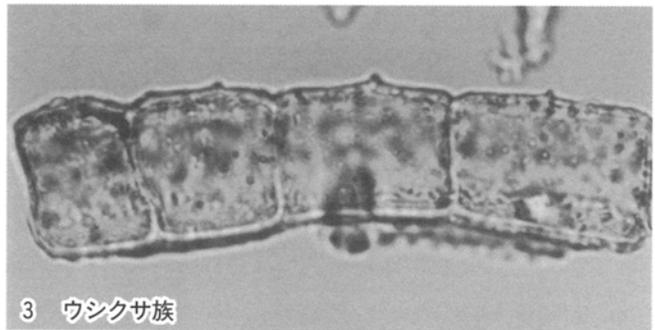
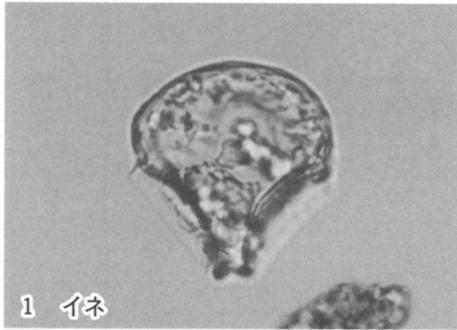
分類群	検出密度 (単位: ×100個/g)					
	S-14		第1トレンチ		南壁	
	1	2	3	4	5	6
イネ科						
イネ	16					
ヨシ属	16					
ウシクサ族(ススキ属など)	71	1197	1364	1201	194	
キビ族型	24	15		15		
ウシクサ族型	267	23	166	75	24	8
ウシクサ族型(大型)	8	215	213		8	62
くさび型						
Aタイプ		15		45		8
タケ亜科						
ネササ草型	133					
クマザサ属型	39					
メダケ節型	8					
未分類等	196					
その他のイネ科						
表皮毛起源						
棒状珪酸体		23				
茎部起源	785	8				
地下茎部起源						
未分類等	769	8				
カヤツリグサ科						
樹木起源						
モクレン科						
はめ絵バスル状(ブナ属など)						
多角形板状(コナラ属など)	8	23				
その他						
植物珪酸体総数	2340	4236	3517	4558	1892	3270

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	0.46					
ヨシ属	0.99					
ウシクサ族(ススキ属など)	0.88	75.55	46.97	75.78	12.24	
ネササ草型	0.64	0.38	0.19			
クマザサ属型	0.29		0.17	0.06		

※仮比重を1.0と仮定して算出。





第4項 中里見遺跡群における花粉分析

株式会社 古環境研究所

試料

分析試料は、中里見中川遺跡6区南壁、中里見根岸遺跡22区S-14グリッド、および上里見井ノ下遺跡1区第1トレンチなどから採取された計16点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

方法

花粉粒の分離抽出は、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- (1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- (2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- (3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- (4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- (5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- (6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm 2分間の遠心分離を行った後上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本と対比して行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類され、その際学名は属名までで表した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（—）で結んで示した。

結果

検出された花粉・胞子は、樹木花粉26、草本花粉11、樹木と草本を含む分類群3、シダ植物胞子2形態である。花粉遺体一覧を表に示し、花粉総数を基本数とする百分率を求めて花粉組成図に示した。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。

- 〔樹木花粉〕 トウヒ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリーシイ属—マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、トチノキ、キハダ属、カエデ属、サンショウ属、シナノキ属、トネリコ属、ニフトコ属—ガマズミ属
- 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 マメ科、クワ科—イラクサ科、バラ科
- 〔草本花粉〕 ガマ属—ミクリ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、キンボウゲ属、カラマツソウ属、ツリフネソウ属、セリ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属
- 〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、三条溝胞子

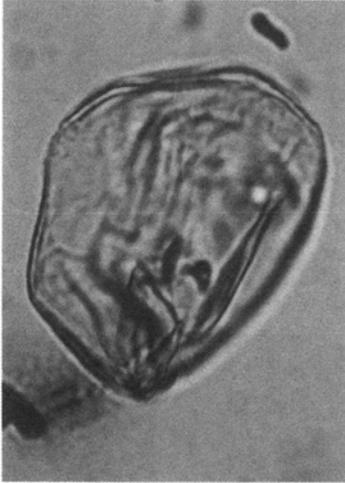
(1) 中里見中川遺跡6区南壁

As-Sj 直下層では、樹木花粉が花粉・胞子総数の約65~80%を占める。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が約35~40%で優占し、ハンノキ属も約20~30%の出現率を示す。他に単維管束亜属（ゴヨウマツ類）を含むマツ属やトウヒ属などが出現する。草本花粉ではヨモギ属が優占する。As-Sj の上層では、樹木花粉の占める割合は変化しないが、ハンノキ属が約70%と著しく増加する一方、コナラ属コナラ亜属は約15%に減少する。その他の層準からは、花粉はほとんど検出されなかった。

(2) 中里見根岸遺跡第1トレンチ

As-Sj 直下層では、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属とハンノキ属が優占する。草本花粉ではヨモギ属が優占し、イネ科・カヤツリグサ科が伴われる。As-Sj 直上層にかけてもほぼ同様の傾向を示すが、樹木花粉のハンノキ属が上位に向かって減少し、草本花粉のイネ科が増加する。

中里見原遺跡の花粉分布



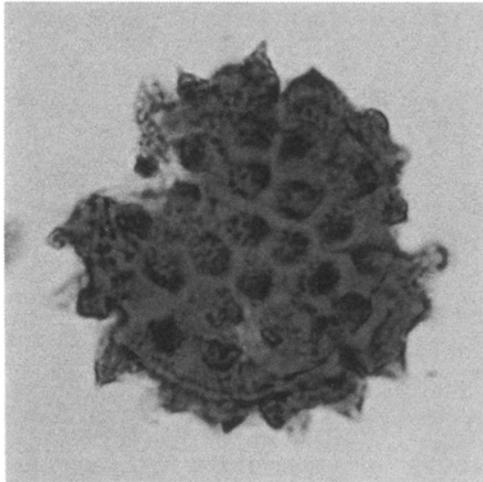
1. イネ科



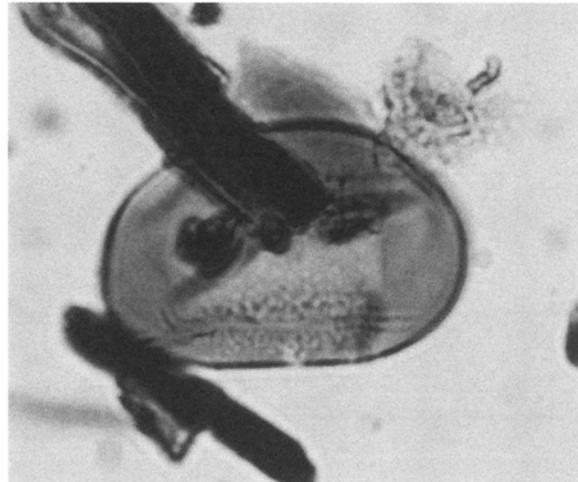
2. ヨモギ属



3. ヨモギ属

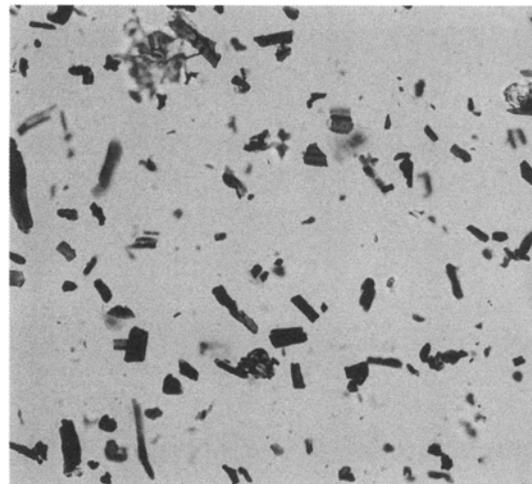


4. キク亜科

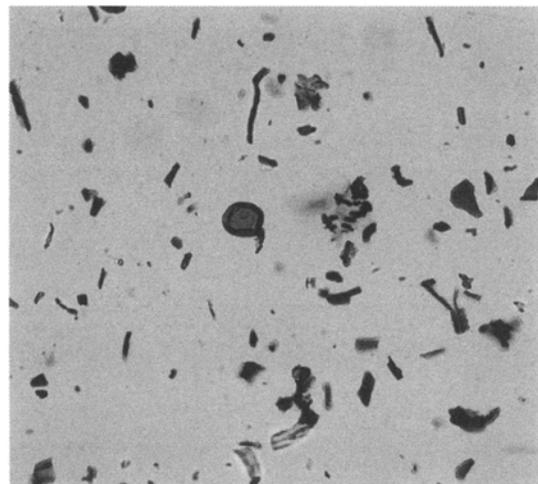


5. シダ植物単条溝胞子

30 μ m



6.

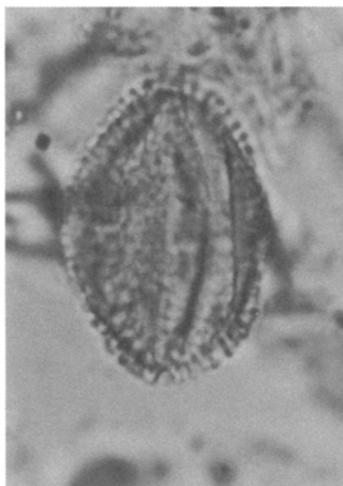


7. 試料

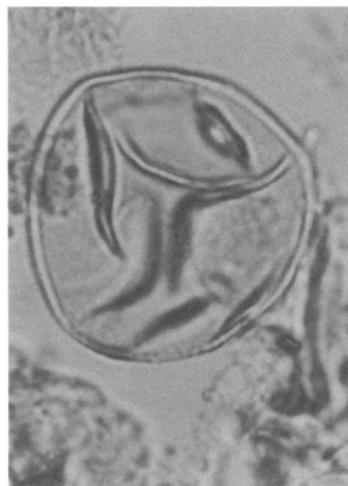
200 μ m



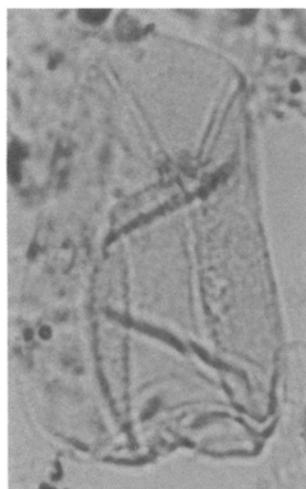
1. コナラ属コナラ亜属



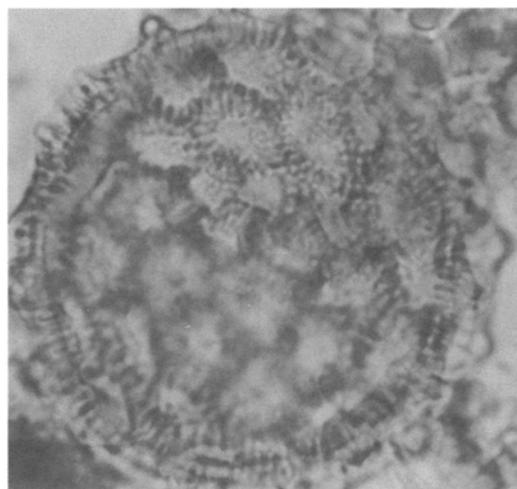
2. キハダ属



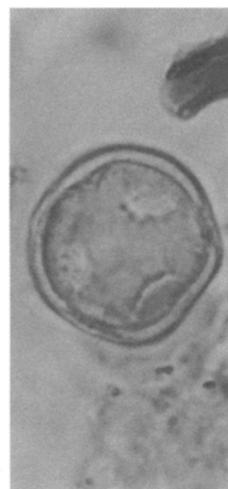
3. イネ科



4. カヤツリグサ科



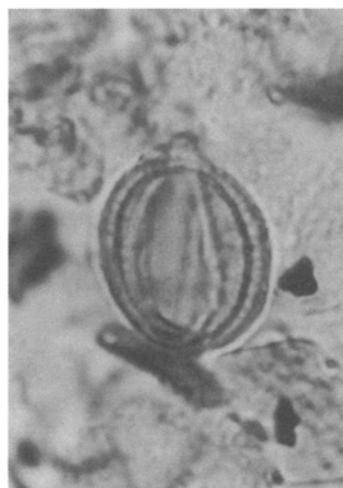
5. タテ属サナエタデ節



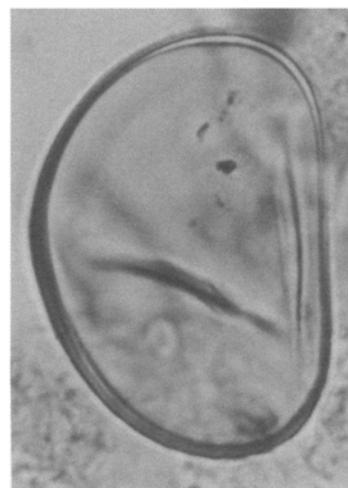
6. カラマツソウ属



7. セリ科



8. ヨモギ属



9. シダ植物単条溝孢子

30μm

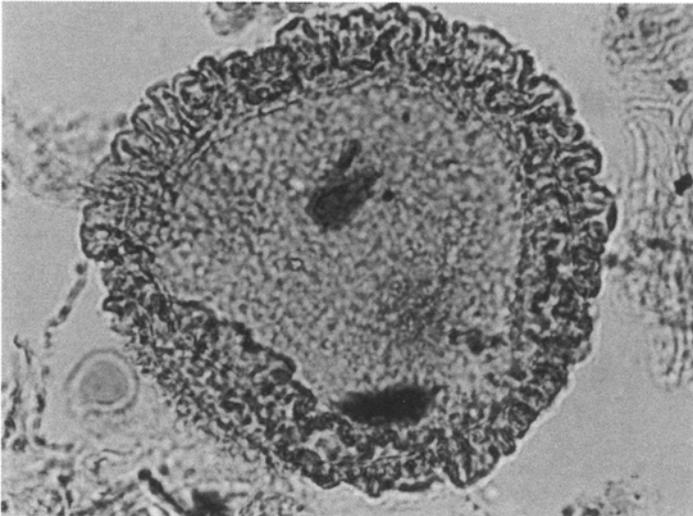
泉福寺遺跡の花粉・胞子 I



1. マツ属単維管束亜属

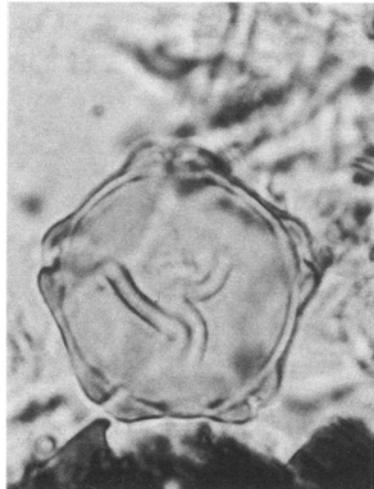


2. クルミ属

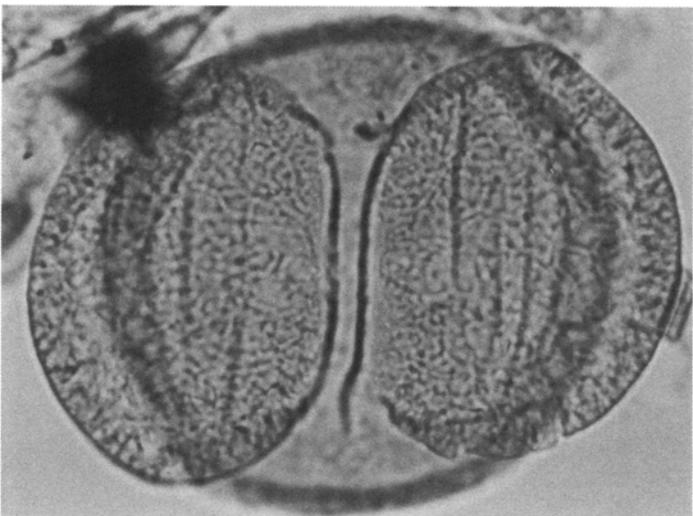


3. ツガ属

3・5 ——— 45μm



4. ハンノキ属



5. モミ属



6. カバノキ属 ——— 30μm

第9章 理科学分析

中里見中川遺跡花粉遺体一覧

学 分 名	類 和 名	試 料						
		Po1	Po2	Po3	Po4	Po5	Po6	Po7
Arboreal pollen	樹木花粉							
Picea	トウヒ属						1	1
Abies	モミ属					1	2	
Tsuga	ツガ属					1	10	1
Pinus	マツ属	1		2	1	5	17	9
Cryptomeria	スギ						4	1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressacea	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1					3	3
Pterocarya	サワグルミ属					3	1	3
Alnus	ハンノキ属			2	1	234	119	68
Betula	カバノキ属	1		1		2	4	3
Carpinus-Ostrya	クマシデ属-アサダ						4	
Castanea-Castanopsis-Pasania	クリ-シイ属-マテバシイ属	3	2				9	21
Fagus	ブナ属						1	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	2	1	8		60	157	124
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属					2	1	1
Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ	1				1		1
Celtis-Aphananthe	エノキ属-ムクノキ							3
Zanthoxylum	サンショウ属						1	1
Tilia	シナノキ属					1	1	
Fraxinus	トネリコ属							1
Arboreal. Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							
Leguminosae	マメ科							1
Nonarboreal pollen	草本花粉							
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属					2		
Gramineae	イネ科		1	1				7
Cyperaceae	カヤツリグサ科					2		
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1					
Thalictrum	カラマツソウ属						3	5
Umbelliferae	セリ科					2	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科							2
Asteroidae	キク亜科	5	6	4		3	3	2
Artemisia	ヨモギ属	2	5	8		22	42	84
Fern spore	シダ植物胞子							
Monolate type spore	単条溝胞子	3	3	55	76	37	22	18
Trilate type spore	三条溝胞子	4		1		3	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	9	3	13	2	310	335	240
Arboreal. Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉							1
Nonarboreal pollen	草本花粉	7	13	13		31	49	100
Total pollen	花粉総数	16	16	26	2	341	384	341
Unknown pollen	未同定花粉					3	3	5
Fern spore	シダ植物胞子	7	3	56	76	40	23	18

中里見中川遺跡花粉遺体一覧

学 分 名	類 和 名	22区S-14G		第1トレンチ						
		1	2	1	2	3	4	5	6	
Arboreal pollen	樹木花粉									
Abies	モミ属	1					3	10	4	
Picea	トウヒ属						1	1		
Tsuga	ツガ属							1	4	
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複雑管束亜属	1				2	11	2	12	
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単管束亜属							2	4	
Cryptomeria	スギ						3	1	5	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressacea	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2					1			
Juglans	クルミ属						3	3	1	
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ						1		1	
Alnus	ハンノキ属						36	68	104	
Betula	カバノキ属						6	10	4	
Corylus	ハシバミ属							1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ					1	2		4	
Castanea crenata-Castanopsis	クリ-シイ属						2			
Fagus	ブナ属							2		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1				1	103	88	93	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ						1	1	2	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ								1	
Aesculus tubinista	トチノキ						1			
Acer	カエデ属					1		2	2	
Phellodendron	キハダ属						3	4		
Fraxinus	トネリコ属								1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガズミ属								2	
Arboreal. Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉									
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科						3	1		
Rosaceae	バラ科								1	
Nonarboreal pollen	草本花粉									
Gramineae	イネ科	7			1	6	86	38	15	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2					1	8	17	
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節					3		1	1	
Ranunculus	キンボウグ属								1	
Thalictrum	カラマツソウ属						2	13	5	
Impatiens	ツリフネソウ属							5		
Umbelliferae	セリ科							2	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科					1		1	1	
Asteroidae	キク亜科								3	
Artemisia	ヨモギ属	1				2	64	35	65	
Fern spore	シダ植物胞子									
Monolate type spore	単条溝胞子	3	2		5	80	625	38	85	
Trilate type spore	三条溝胞子	1				1	5	1		
Arboreal pollen	樹木花粉	5	0	0	0	6	177	196	244	
Arboreal. Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	3	1	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉	10	0	0	1	12	153	103	109	
Total pollen	花粉総数	15	0	0	1	18	333	300	354	
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	6	9	8	
Fern spore	シダ植物胞子	4	2	0	5	81	630	39	85	
Helminth eggs	寄生虫卵	0	0	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	